
アウトサイダー (an outsider)

桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アウトサイダー (an outsider)

【Nコード】

N6264A

【作者名】

桜

【あらすじ】

差別の対象とされた、特別な能力者達、アウトサイダー (an outsider) (局外者) AU能力者と言われる、存在する世界。その能力者達だけの学校。そこに突然現れた不思議な存在、白髪白眼の男、敦盛和也^{あつもりかずや}今、能力者達の戦いが始まる。ドタバタ学園シリアスコメディアウトサイダー以後おもしろおきを！！

プロローグ？（前書き）

はいこんちは、嫌、前書きと緊張しますな
まあ、何書けばいいかわかんないし・・・
よろしく願います！！（これだけ）

次回は第1話 純白の男

ブローグ？

なんで

こんな事になった？

俺は

俺はただ

『あの子』と

『あの子』と手を

手を握りたかった

だけなのに

もう

手を握ることはできない

俺の手は

濃い赤で染まったから

『あの子』の為に

染めた

手なのに

プロローグ？（後書き）

プロローグ？とハテナの部分は、よくわからないんでこんなになりましたが、まあ、この話の一人一人に繋がっていきますので、とりあえずは、若輩ですがお願い致します。
次話から本編とさせて頂きます。

第1話 純白の男（前書き）

祝！第1話！純白の男！！

最初なので何も言えませんが温かい目で見守ってください。

第1話 純白の男

第1話 純白の男

ジリリリリリリ！！！！

小さな個室に目覚まし時計の音が響く。

時計は7時を指している。

「・・・・・・・・」

時計の大きな音と共にむくつと無言で起き上がる女性。

少女は顔に掛かった長い、赤い髪をかき上げた。

カーテンの隙間から朝日がもれている。

ジリリリリリリ！！と今も耳障りな音が響く。

少女は無言で時計を止め、身支度を始めた。

15歳程のまだ幼さの残る少女の髪は無造作にはねている。

少女は眠そうに目を擦すった後、濃い青色のブレザーにか細い腕を通し、ボタンを留め、黒いスカートを上げる。

黒に赤が少し入った髪を頭の両脇に止めて、最後に顔を洗う。

パンパンと濡れた手で顔を叩き、女性は鏡を見た。

その顔は綺麗な顔立ちを照らす様に、澄んだ綺麗な黒に近い赤色の目を真つ直ぐに見ていた。

赤髪の女性は、顔を拭いた後、居間に足を向けた。

居間には少し長いテーブルの上に一人分の朝食があった。

目玉焼きと暖かいミルクに少し焦げ目の付いたトースト。

女性は朝食に目を向け寂しそうに小言を漏らした。

「お兄ちゃん・・・もういったんだ」

もう一度朝食を確認し、椅子に腰掛け食べ始めた。

朝食を食べ終えて鞆を取り玄関に向かう。

ドアに手を掛けてゆっくりと力を入れる。

ガチャ・・・

外れる音と共にドアが開き新鮮な春のあたたかい空気が入ってきた。

「いつてきます」

後ろを振りむいて、小さな声で反射的に出る言葉はだれもない寮にこだまする。

女性は少し悲しそうな顔をしてから、寮を出た。

15歳の女性の朝にしてはあまりにも静かな朝で、静かな寮であった。

その時は7時10分になっていた。

今日1日が始まる。

同じ濃い青の制服を着た学生がちらほらと歩いている。

その中の一人の赤髪の少女は学生達の歩く中、1人逆走している少女を見つけた。

その中にブンブンと手を振っているショートカットのかわいらしい女性が見えた。

「水音……！！！」

遠くからでも、分かる様な、ニコヤかな笑いを浮かべ、女性は近づいて来た。

水音と呼ばれた少女は少し驚いた様な顔を浮かべた。

その声を発した少女の方を向く。

「美奈！」

慌てた様に水音が美奈と呼んだ少女に駆け寄る。

「迎えに来なくても私から行くのに」

美奈の寮は水音から見ると学校から逆走しているのだ。

「なーにいつてんのよ！！気にしない気にしない！」

美奈という少女はニコニコとしていて、人懐っこい感じを思わせた。

「それで？風間さんは？」

美奈はキョロキョロと周りを見渡した。

「お兄ちゃんならもういったよ、どーせお兄ちゃん目的で来てんでしょ」

水音が疑うように、美奈に視線を投げつけた

「あ……あはは」

美奈は、誤魔化すような笑みを浮かべた。

「ふう……」

水音は小さくため息をついた。

「じゃあ行こっか」

「おーっし！今日もがんばろー！」

美奈が元気に青い空に拳を上げて叫んだ。

場所は水音の寮から大分離れた信号の所

「でねえ……」

「へえ……それで？」

楽しそうに談笑しながら信号の青を待っていた。
水音が話しながらチラっと同じように待っている人達を見た。

待っている人は水音と美奈を合わせて5人。

2人は小さな男の子を連れているお母さんっぽい人がやさしそうに笑っている。

（春から入ってくる小学等の子かな？）

水音は、はしゃいでいる男の子を見てほがらかに笑みを浮かべる。

もう一人は、春にしては暑苦しい長袖を着ていて、服に付いているフードを目までスッポリと被っている。

長い布を被っている棒を背中に背負っている。

ズボンも長袖で、かなり暑そうに見えた。

身長是水音よりも少し高い程度で、微動だにせず立ちつくしている。
制服を着ていないので多分新入生ではないだろう。

（変わった人がいるなあ）

そう思った瞬間、フードから見えるか見えないかの目が合った。
「……！！！」

水音はビクッと小さく体を揺らした。

（え？なに？今の？変な違和感が……？）

男はすぐに目を伏せたのでよくは見えなかったが、
なぜか少し動揺している自分を不思議に思った。

「ん？どうしたの？」

美奈が驚いた顔で固まっている水音に話しかけた。

「え？なんでもないよ」

水音が慌てて笑う。

「ふっん？」

心配そうに美奈は顔をしかめた。

目の片隅で先程の男の子が飛び出したのが見えた。

「あ！ほら！青になったよ！いこ！」

水音が男の子が飛び出したのを見て反射的に青だと認識した。

「ん、そだね え？」

美奈が顔を前に向けて困惑した声を上げた。

（何で『え？』っていったんだろ？）

そう思つて水音は前を見た。

（・・・青じゃない？）

水音は一瞬、頭が混乱した。

（じゃあなんで男の子が飛び出したの？）

思つたと同時に走つていった男の子を見た。

男の子は道路の真ん中で止まってしゃがみ込んでいた。

母親が誤つて手を離れたのだろう。

それは水音にもわかった。

だが、男の子が道路に出た『何か』を不思議に思つて出たところまでは、見ていなかった。

男の子が何かを追つて出た瞬間、赤い車が大きな音を上げながら、走り出してきた。

「！」

水音はすぐに状況を理解すると男の子のもとへ走り出した。

「！」

美奈も少し遅れて分かった様だ。

「イヤアア！！」

美奈よりも更に遅れて助けようと悲鳴を上げながら子供の母親が走り出した。

水音はもう一人の暑苦しい男までは見ることができなかった。

小さな鈴の音が、何故か水音の耳に届いた。

だが、そんなことに時間をかけている暇は今の水音にはない。道路の真ん中に男の子はいる。

「ダメ……間に合わない！！」

水音が叫ぶ。

車が男の子の目の前に来た瞬間、スローモーションの用に見えた。

大きな物が当たる音と共に道路外に弾き飛ばされる。

「!？」

慌てて弾き飛ばされた男の子を確認しようと飛ばされた方に走る。

男の子を抱かかえている男が居た。

先程の暑苦しい男だった。

男はフードが取れて頭から血を流しながら、男の子に話しかけていた。

長めの布で覆われた棒はまだ持っている。

水音達より早く男の子に駆けつたのだ。

男の子をかばって傷を付けたのだろう頭から大量の血しぶきが上がっている。

（え？さっきの人・・・？）

水音が目を見開いて驚いた。

（嫌…てか大丈夫なのこの人！？）

今もドクドクと黙々と、血が流れている。

「大丈夫か？」

そんな血も気にせず男は少し低い声で男の子に呼びかけた。

「・・・！」

呆然としていた男の子は震えながらうなずいていた。

「そうか…今度から気をつけろよ」

男はやさしく男の子の頭をくしゃくしゃと撫でた。

「ごめんなさい」

震えが収まったのか男の子が口を開いた。

「お…おにいちゃんはだいじょうぶなの？」

申し訳なさそうに、男に話しかけた。

「ああ大丈夫だ、気にするな」

男は頭を触って今血が出ている事に気づいたようだ。

「直太！！！」

母親が驚愕の声を上げる。

「馬鹿！！なんて危ないことするの！」

母親は直太という少年をギュッと抱きしめた。

それを確認した様に見ると、男は無言で立ち去ろうとした。
まだ頭から血を出している。

「待つてください！」

母親が男を止める。

「何かお礼を・・・」

そういつた瞬間男は顔を少し、しかめてボソツと言った。

「別に・・・」

先ほどのまでの男の子に優しく話していたのとは違い、冷たくそう言う
うと逃げるように立ち去っていった。

水音は呆然と立ち尽くしていた。

突然の交通事故未遂、男の子が追いかけた何か、そして1番驚いた
のは、

その男の髪と目が真っ白な純白の色をしていたことにであった。

「水音・・・大丈夫？」

美奈が呆然と立っている水音に心配そうに話しかけた。

「え？ああ、うん」

そこは野次馬になっていた。

母親と男の子もなにやら警察らしき人達に事情徴収を受けている。

「いこっか」

水音がぽつりといった。

「うん、そだね」

美奈はまた元気に水音の先を歩き出した。

水音はまだ男の事が気がかりだった。

あの時感じた奇妙な感覚は一瞬だけ見た白い目だということだけはわかった。

あのときの鈴の音も男がいつ飛び出したのかも、水音にはわからなかった。

キンコンカーンコン

学校まで残り少しという所でチャイムが鳴った。

（遅刻決定か・・・あの事故がなかったら間に合ってたのになあ）
チラツと高等の学校の大きな時計を見る。

今は8時30分を示していた。

場所は変わり、職員室のような所で青年が怒られていた。

「敦盛^{あつもり}和也^{かずや}君・・・私はチャイムが鳴る前に来なさいと言ったはずだが？」

偉そうな男が椅子に座って少し怒った用に声を荒げている。
かなり若い男だ。

「すみません・・・」

全くすまなそうに無表情で怒られている敦盛和也といわれた青年は、真っ白な純白の頭からドロドロと血を流している。

整った顔立ちにも、所々血が付いていた。

「それに何なんだ！その血は！職員室の床がよごれるじゃないか！」
学校の先生らしい人は青筋を浮かべて怒鳴っている。

「ああ・・・これは、さっき撥ねられました」

和也は血をばたばたと落としながら、あつさりと言った。

「ふざけるな！それになんだ！その白い髪と目は！何故染めている！」

教師の男の青筋が増える。

和也が少し眉を上げてからゆっくりと言った。

「この髪も、目も、自毛自眼です。」

「そ・・・そうか・・・」

男は少し後ずさりをしたように、うつと詰まっていた。

自分よりも遙かに若い目の前の少年に教師の男は蹴落とされた。

その純白の目には妙に圧力が掛っている。

「で・・・ではこの学校について説明する」

慌てて教師は話題を変えた。

「もう知っているとは思うが、まずは『能力』から説明しなくてはならんな」

「・・・」

和也は黙って目を瞑った。

「異常気象か、新たなウィルスか、まだわかっていない人間の潜在能力の1つが現代に存在する、能力と呼ばれるもの、その者達がアウトサイダーと呼ばれる者達、能力は様々で全てが『ありえない能力』だ、いつその力が開花するかも分からないが、

殆どの人間はこの能力が出ることは無い」

「だからこそ an アウトサイダー outsider（局外者、外れ物）と呼ばれるているのだ。別名で オイ O能力者、0（何も無い）から生まれる事から0（ZERO）能力者と様々な言われ方をしている。

この者たちは当然学校でもさげすまれ、中退になるものも多い、だからこそ我が高校が出来たのだ！この学校内に存在する校舎は様々だが、この校舎が素晴らしい所だと私は自負している」

自慢げにえらく早口で教師は言った。

「・・・」

和也はまだ目を瞑っている。

「・・・？おい」

教師はまだ目を瞑っている和也を呼んだ。

和也は目を開けない。

頭から流れていた血は今も流れている。

座っている和也の椅子の周りも血で埋め尽くされていた。

「・・・おい！」

それを見た教師が焦った様に大きな声を出した。

「・・・んあ？」

和也は眠そうな声を出しながら片目を開けた。

「すんません・・・寝てました」

頭を掻きながら眠そうな目を細めていた。

「・・・ま、まあいい・・・」

眉間に更に青筋が増えた。

教師は机から小さな紙を出しながら続けた。

「この学校は小学等、中学等、高等等と三つに分類されている」

丸い円の様な地図の真ん中の周りに小学等、中学等、高等等と分類されている。

その中の円には『寮』と描いてあるのがわかる。

それは真中に一つ一つ大量の寮を集め、それを少し距離を置いて学校が囲むように設置されていた。

通いやすくする設計なのだろう。

これならば小学等、中学等、高等等も関係無く、寮の配分も同じ年でなくとも成立し、解り易くなる

だが、それはまるで学校が寮を逃がさない様に囲んでいるようにも見えた。

「随分、寮がおおいな・・・」

和也が地図の、学校が囲う様に位置する寮の所をジッと見て言った。
この大きな学校もそうだが、それに合わせた様な大きさに描かれた円は、その寮の数を現わしていた。

「ああ、当然だ、この学校は、ゆうに2000以上は寮が存在するのだ」

教師がまた自慢気に言った。

「200・・・」

和也が無表情のまま、小さな声を出した。

「凄いだろう！だが、この寮の決め方は適当だからな、好きな人間同士になることはないらしい」

教師は、また早口で言った。

「ふーん・・・」

和也はめんどくさそうに言った後、続けた。

「この真ん中のは？」

地図の真ん中の所、寮を示す円の更に真中に薄い円が書かれていた。

「そこは町だ」

「なんで真ん中に町が・・・？」

ここはたしかに大きいが学校であって市ではない。

「そこはな、生徒たちの教育を重んじ商店街を作っているのだ、ゲームセンターもあるし買い物も出来るし何でも揃っている」

「・・・」

和也が地図から目を離してチラッと教師を見た。

「つまり・・・俺達、能力者をこの学校から出さない為か？」

和也が鋭く、小さく言葉を出した。

中に町があるのなら、学校の『外』へ行く必要は無い。

「・・・」

「・・・」

2人の間に冷たい沈黙が流れた。

先に沈黙を破ったのは教師の方だった。

「ふん、次の説明は別の先生の担当だ」

その教師は遠くに居る他の教師を指さした。

「わかりました・・・」

和也が椅子から立ち上がり、

刺された教師の所に向かって歩こうと背中を見せた。

後ろから舌打ちと睨むような視線が和也の背に刺さった。

指差された先生の所に無言で近づき、
その先生の目の前で和也は止まった。
まだ後ろから視線を感じた。

「ごめんなさいね」

高い声でその女の先生はゆっくりと言った。

かなり綺麗な人でとても若い。24、5歳位だろうか。

「あの人、本来はいい人なんだけど、〇能力者が…嫌いなものよ」

女の先生は少し悲しそうに顔を曇らせた。

「根はいい人だからゆるしてあげてね」

優しく女の先生は和也に言った。

「別に気にしてないですから」

どうでもよさそうに和也はつづけた。

「なれてますから」

和也は冷たく言った。

「そうね、じゃあ説明を始めるわ」

和也の言ったことを気にしなかったのは、〇能力者が差別的扱いを受けているのを、知っているからだろう。

「その前に、申し送れたけど私は笹村 清子きよこっていうの。気軽にきよ先生って呼んでね」

さつきとは裏腹になれた感じで和也に紹介する。

「あなたが入るクラスの担任よ」

「よろしく」

にこやかに和也に笑いかけ手を伸ばした。

「あ……よろしく……」

和也は一瞬戸惑ったように見せたが、すぐに手をとって握手の形を作った。

「それじゃあ説明を開始するわ」

すぐに手を離し、きよ先生は話し始める。

「まずこの学校の生徒は90%以上が寮暮らしなの」

さつきの地図の真ん中を囲むように、大きな学校が寮を囲む様に外側にあつたのだからその程度はわかる。

その学校に登校する生徒達がその寮に住んでいる様だ。生徒があまりにも多いため、いくつかの学校に分けられており、この学校は3番目に出来た学校だと、きよ先生は説明した。

「なぜ？」

和也が無愛想な顔と鋭い純白の目を向ける。

和也は一つ疑問に思った。

寮があまりにも多すぎる気がした。

その疑問にはすぐ、きよ先生が答えてくれた。

「殆どの親はね・・・子供が〇能力者になると避けたがるのよ」
小さく肩をすくませ、きよ先生は悲しそうにいった。

その言葉だけで、和也には察しが付いた。
子を恐れてこの学校に預ける親が多いのだ。
悪く言えば捨てていく親が多いのだ。

「・・・」

「・・・」

小さな無言の後に和也は付け足すように言った。

「残りの10%は？」

「残りの10%は家を持っている人やそれでも大切にしてくれている親ぐらいね」

と、きよ先生はやさしく答えた。

「じゃあ次の説明に入るわよ」

元気にきよ先生はにこやかに笑う。

（何でこの人こんなに元気なんだ？・・・）

和也の思索を無視してきよ先生は話を続ける。

「この学校はお金が大分かかるの、大きいからね
そこまで手かをかける親はあまりいないのよ」

「だ・か・ら」

少し間を置いてニコツと笑った。

「自分で働くのよ」

「・・・」

和也は少し眉を上げた。

「あら？驚かないわね」

驚くことを期待していたのか、拍子を突かれた顔になっている。

「そうですか？」

あくまで丁寧口調を寄り添っているように無表情で言った。

「うん、これ聞いて驚かなかったのは珍しいかな」

「そうですか」

どうでもよさそうに話を返す。

「でね、仕事はちゃんと決まっ

ていて」
「うけあいにん請負人！」

ビジッと親指を和也に向けて笑い掛ける。

「はあ・・・」

和也がだるそうに返事を返す。

「んも」本当にノリの悪い子ね」

口を尖らせてきよ先生がぶーぶーと不満をたれた。

（子供ですか・・・あんたは・・・）

和也が小さくため息をついた。

「つま、絶対ってわけじゃないけどね」

きよ先生の付け足した言葉に和也は再び眉を上げた。

そんな和也を無視してきよ先生は話を進めた。

「でね！請負人の仕事で貰えるお金の4割を学校に入れるの」

和也は無言で聞いている。

「はい、これが請負人用の携帯」

きよ先生はそういうと、和也の手に携帯の形をした物を渡した。

請負人様の携帯。それはいつ、いかなる時でも現在存在する請負、つまり依頼が見れるようになっていたり、依頼料や、依頼の難易度

等様々な事が見れる高性能な機械だ、当然電話もメールもできる。

「生徒手帳も兼ねてるから、無くさないでね」

和也はジッと携帯を見ている。

「メンバーですか？個人ですか？」

和也が携帯からきよ先生に目を向ける。

「メンバー？個人？」

きよ先生は少し首を傾げて頭の上に？を浮かべた。

「知らないんですか？？依頼人にはチームで動くタイプと、個人、つまりフリーで働く依頼人というんです」

和也は、めんどくさそうに、ゆっくりと言った。

「あー！そういえばそんなのあったわね、ごーめんね、私完璧に忘れてた」

きよ先生は少し小さく舌を出して悪戯っぽく笑った後、続けて言った。

「メンバーよ」

「請負人のメンバーは基本的に寮のメンバーでやるからね」

「寮のメンバー？」

和也が疑問を投げかける。

「うん！その事は後で嫌でも顔を合わせるからいいや」

（適当だな・・・おい）

和也が頭の中だけで突っ込む。

「それじゃあ依頼人になるんだから武器選ばなきゃね」

何故か楽しそうに和也に笑いかける。

「武器ならあります」

和也がきよ先生を止める。

「え？そっなの？そっか・・・」

きよ先生があからさまにしょんぼりと顔を曇らせた。

「・・・」

「・・・」

しょんぼりとしたきよ先生と少し困った顔をした和也の2人が沈黙

を続けた。

先程の先生の時との沈黙とは違い、気まずい感覚が流れた。

「武器・・・好きなんですか？」

和也がいたたまれなくなり、きよ先生に話を振る。

「！、そおなのよぉ」 部屋にも飾ってるし、何より武器を使った時の快感がいいのよねえ」

突然きよ先生の機嫌が良くなった。

和也はこの時心に決めた。

（この人に逆らうのだけはやめよう・・・）

きよ先生が話を戻す。

「武器を持ってるって事はもう依頼人なの？」

少し驚いた顔で和也を見る。

「いえ、昔少しやった程度です」

「じゃあ武器確認書はある？」

きよ先生が和也の目を見る。

和也が黙ってポケットから車の免許書のようなカードを取り出して見せた。

そこには、和也の名前と武器確認 認定：日本刀と描いてある。

「・・・うん、これで大丈夫みたいね」

キンコンカンコン

学校のチャイムが響き渡った。

「あら、鳴ったわね、じゃあもう今日は遅いから明日もう一回きてね」

そう言うのと一枚の紙を和也に押し付けた。

「じゃあ寮の地図はこれね」

なにかちゃっちゃと終わらそうとしている気配がある。

この先生、かなりのめんどくさがりというのは後にわかる。

「・・・」

和也は黙ってうなずき、渡された地図を手に取り職員室から出て行った。

血はもう止まっているようだ。

場所は変わりざわざわとした教室の中。

1年1組

「おい！隣のクラス転入生来るらしいぜ」

「まじかよ！女の子だといいよなあ」

一見普通の高校生達が高校生らしい会話をしている。

本来、教室にいる全ての少女が摩訶不思議な能力を持っている。そんな教室の中に一人、窓側の真ん中に考え込んでいる女性が座っていた。

女性は少し赤の入った髪をツインテールにして、窓から入ってくる風で髪がなびいている。

（何で事故が起こったのに誰もその事について話ていないんだろう・
・そもそもなんで私や美奈は事情徴収を受けてないんだろ、あの親子は聞かれてたけど、私たちには先に行っていていい、って言われたし・・・）

「ミーズナー！！」

ショートカットの女性が後ろから話し掛けている。

（大体あの白い男の人は・・・）

水音は気づいていない。

「ミズナー」

もう1度女性が話しかける。

（そもそも・・・）

水音はまだ気づいていない。

「ミズナー！！」

女性が思いつき水音の耳元で叫ぶ
どったん

水音が思いつき椅子からこける。

「え？え？なに？なに？」

水音は驚愕の色を顔に浮かべていた。

「やっと気づいたか」

そこに立っていたのはショートカットの元気な少女、美奈だった。

「もー！驚かさないでよ」

水音がむっと顔をしかめる。

「あゝごめんごめん何回言っても気づかないんだもん」

美奈も同じ用にむっとした顔をする。

「え？そうだった？」

水音がこけた椅子からはいあがりながら答える。

「ま！それはそうと！聞いた！？隣から転入生来るんだって！！」

目を輝かせながら美奈は水音に言った。

「んーこの時期だと珍しくないかもね」

水音が椅子を立てながら美奈に感想を述べる。

「見に行こうよ！」

唐突に言った、そして美奈の目はランランと輝いていた。

水音が呆れたように、小さくため息まじりに美奈を見る。

「見てどーすんの？」

「えー？かつこいい人だったらどうすんのー」

美奈がめちゃくちゃ行きたそうに水音を見ている。

「どうもしないよ……」

突っ込みも無視して瞳は更に輝く。

美奈の目から『いつしよにいこう！いつしよにいこう！いつしよにいこう！』と語りかけている。

水音がまた呆れた様に顔をしかめると、諦めて肩を竦めた。

「じゃ……いこつか」

目を輝かせる美奈を見て、改めて水音は諦めたように、もう一度肩をすくめた。

「えー！？明日になったー！？」

美奈が驚愕の声を上げる、美奈の隣には水音がいた。

「おう、きよちゃん（笹村 清子）きよ先生（きよちゃん）が明日になるって青竜刀振り回しながらいつてたぜ」

どこにでもいそうな男性が1部おかしい所も気にせず美奈に言った。

「そんな〜・・・」

美奈が残念そうに俯いた。

「残念だったね。ほら、また明日こようよ」

水音はぶーぶー言っている美奈を引きずりながらドアに向かおうとする。

「おう！そうだ！その転校生を見かけた奴がいつてたぜ？」

美奈と、つられてその男性の方を向く水音。

「何でも頭から大量の血を流していたそうだ」

ニヤッと笑った男性は怖い話を言うかの様に言った。

「うつわー！すごいねー！」

何も気にせず美奈はランランと瞳と輝かせた。

それとは別に水音には妙にその言葉が引っ掛かった。

（頭から血？どつかで聞いたことあるような、ないような・・・）

水音は思い出そうとするが何故か思い出せない。

（まあいつか）

あっさりと水音は考えることをやめた。

何故かどうでも良いような気もした。

「ほら行くよ！」

まだぶーぶー言っている美奈を引っ張ていく。

「じゃあね！多寡君^{たかくん}ありがとう！」

水音が元気に男性に礼を言った。

「お・・・おう」

やっと名前の出た男性は脇役である。

学校のチャイムを聞きながら美奈と水音が学校の校門に向かって歩

いている。

「あゝあゝ転校生見たかったなゝ」

少し夕焼けに包まれた空を仰ぎながら美奈は言った。

「明日になったら見れるよ」

水音がぶーぶー言っている美奈に笑っていった。

「・・・」

水音が少し黙って悩むような仕草を見せる。

「どったの？」

美奈があっけらかんと笑いながら水音の顔を覗き込む。

少し声を潜めて水音は注意深く言った。

「ねえ・・・朝の交通事故・・・どう思う？」

水音はまだ朝の交通事故を気にしているようだ。

少し顔を曇らせている。

「え？交通事故？」

「・・・え？」

学校のグラウンドから野球部のカキンという綺麗な音が夕日の中、
微かに聞こえた。

水音が驚いた声を上げた。

小さなそよ風が驚いた眼差して固まっている水音の顔に当たりツイ
ンテールの髪の毛がそよいだ。

「だって・・・朝に小さな男の子が・・・」

水音は驚きを隠せない震えた声で美奈に問いかけた。

「またまたゝ水音が冗談言うのひっさしぶりだねゝ」

美奈の目は嘘をついていない。

いつもの純粹なきれいな青い目だ。

どういう事？

そんな言葉が頭を過った。

「ん・・・そうだよね！あはは、勘違いしてたみたい」

水音は美奈に笑い掛ける。

戸惑ったような表情の上から。

「じゃあね〜！」

美奈がブンブン手を振っている。

「うん！またね！」

水音も小さく手を上げて言った。

水音は美奈が見えなくなるまで見送っていた。

（おかしい・・・絶対におかしい・・・何で美奈は忘れているの？）
水音は帰宅道をもくもくと歩きながら考えていた。

（美奈は嘘を付くような子じゃないし・・・それとも私が勘違いしてるだけなのかな？）

いや、そんなことはない！証拠に私はあの鈴の音を聞いたし！て、あれ？

何で鈴の音が証拠になるの？

（・・・）

水音の頭から煙が上がっている。

「あーーーーー！もお！意味わかんないよーーーー！！」

水音が思いつきり手を伸ばす。

ドカツ

「ドカ？」

水音が手に当たった何かを見る為、不思議そうに後ろを振り向いた。

「いてえなねえちゃん・・・」

そこには大きな男がいた。

その男のうしろにいたのか舎弟らしき男が大声で水音に言った。

「このお方を誰と心得る！このお方は請負人！ランケEの悪魔の

機関車といわれ：（中略）」

その舎弟の後ろにはメガネを掛けた体の細い男がいる。

「あ・・・えつと・・・す・・・すいません！！」

あまりにも突然の出来事で水音は一瞬たじろいだ。

「あやまつてすむと思つたのか！？くらあ！」

男が大声を上げる。

「まあ・・・俺と一緒に来るつて言うなら考えてもやるが、」

大男がニヤツと嫌な笑みを浮かべ水音に詰め寄る。

後ろは壁まで誘導され、逃げる事が出来ない。

ヒヒつと後ろで不気味に細い男が笑う。

水音が肩を小さく震わせながら顔を男の顔から逸らす

「や・・・やめてください・・・」

水音が、か弱い声を上げる。

（もゝなんでこおなつちゃうのよあ・・・許可もなしに、力（0能力）使つたら退学になるのにいゝ）

か弱い水音の姿とは裏腹に、考え方は違つた。

水音自身には軽くひねつた後脳味噌を勝ち割つて東京湾に沈めるぐらゐの力くらいは有るの　で余計にこの男は水音にとって苛立つ存在であつた。

（いつそ、証拠隠滅で消そうかな）

水音がオロオロとしている時、男の後ろの方から低い声が上がつた。

「おい、」

怒っているわけでもなく驚いているわけでもない低い無機質な声の水音の耳に届く。

「ああん！？」

男達がギョつと声の方を睨んだ。

「なんか文句あんのか？こら、あゝん？」

見下すように最初に出てきた舎弟らしい男が声の主につめよっている。

（え？誰？どつかで聞いたような声なんだけど……だれだろ……）

水音には大男が邪魔で見えない。

（も、もしかして助けてくれるのかな……？）

ツフ…と、男は鼻で笑った後あっさりと言った。

「いや、お前らのやってる事はどうでもいいんだが道がわからんだ。」

そういうと男はポケットから地図を出した。

「ここらへんだと思うんだが…」

凍りついた空気も気にせず地図を指差している。

「ええ！？」

水音が驚愕の声を上げる。

「助けてくれるんじゃないの！？」

水音は大男を押しつけて、声のした男に詰め寄った。

「あ……」

水音がしまった、という顔をしてからゆっくりと後ろを振り向く。

水音が後ろを振り向くと男達はニヤニヤと嫌な笑みを再び浮かべて言った。

「ヒヒ、助けを求める相手を間違えたなあ」

「そんなヒョロ男が俺に勝てると思ったか！」

「そうだ！この方を誰と心得る！この方は…（中略）」

3人が次々としゃべり出す。

（あゝもお逃げるしかない…）

そう思っただけ通りすがりの男に改めて向き直る。

「！？」

水音が目を丸くして驚いた。

（え？）

（なんでこの人こんな目の前にいんだろ・・・）
お互いの顔の距離約10cm程度だろう。

「・・・」

純白の目がまじまじと水音の顔を見ていた。

（あれ？この人もしかして朝の時の人？）

水音が純白の目を見て朝のことについて気づく。

（つていつか気づくの遅いなあわたし・・・）

男について気づくまでに3分は経っただろう。

「な・・・何でしょう・・・？つていつか今の状況分かってます？」

水音が白い

男は黙っている。男に声を掛けた。

「・・・」

（あゝもおなんなのかなゝ後ろからちよつとアレ的な3人組がいるし前には全く意味の分からない変な人がいるし・・・）

水音が頭を抱えている時に純白の男が話かけてきた。

「おい・・・」

「はい、なんでしょうか？」

なかばやけくそ気味に水音が対応する。

「名前は？」

男が無表情に真っ直ぐに純白の目を向けている。

「え？」

「碇草 さきぐさ 水音 みずね だけど？」

（?????なんで今そんなこと聞くの？）

意味が解らない、この男の第一人称はこの言葉で片付いた。

「そうか・・・水音か・・・」

「俺は敦盛^{あつもり} 和也^{かずや}だ、よろしく」

和也がスツと右手を出して握手を求めている。

「え？」

水音はこの男の一つ一つの行動がさっぱりわからなかった。

「あ・・・よ・・・よろしく・・・」

慌てて和也の手を取る。

（うわ・・・この人の手・・・あたかい）

氷のように溶けない無表情の顔とは裏腹に和也の手はとても温かかった。

「おいおいおいおいおい！！」

「いつまで無視してくれちゃってんのお！？」

「何分たったと思ってんだあ！？」

「俺等の存在まじで消すきか！？」

「あゝん！？」

またしても3人がしゃべり出す。

「あ・・・ああすいません」

慌てて水音は3人組に振り向いた。

「えゝと・・・かえっていいかな？」

水音はあくまで冷静に言った。

「駄目にきまつてんだろが！くるああ！！」

1番大きな男が青筋を浮かべている。

「おい、こいつは見逃してやってくれないか？」

和也がいきなり水音をかばう様に前に出てきた。

「へ？」

「は？」

「は？」

「はあ？」

4人がはあ？という顔で和也の顔を見ていた。

（え？さつき『どうでもいい』って言ってなかったっけ？）

「ああ！？」

「さつきどうでもいいっていったらどうがあー！」

大男が和也に対して怒声を浴びせた。

（やつぱ言ったよね？じゃあなんでいきなり？）

和也の目はさつきまでのだるそうな目から野犬のような目で男達を睨んでいる。

「さあな、今はそういう気分と改める」

和也は簡単に言った。

（うわゝ勝手だなゝこの人・・・）

水音は、『もうなんなの・・・』といったげな顔で頭を抱えている。

「駄目か？」

和也が話を戻した。

「駄目に決まってるだろうがあー！」

大男がまた叫ぶ。

「まあ待って下さいよ」

慌てて舎弟らしき男が大男をたしなめる。

舎弟はたしなめた後ニヤツと嫌な笑顔を和也と水音に向けた。

「そうだな・・・」

少し思案した後舎弟はしゃべり出した。

「指1本置いてくならゆるしてやろう」

ニヤニヤと笑いながら舎弟は言った。

「そりゃあいい！」

「やれるもんならやってみろや！」

舎弟の後ろからヒヒツと言う笑い声とげらげらと笑う声が嫌に水音の耳に響いた。

明らかに楽しんでいる、水音は更に男達に対して苛々（いらいら）が増した。
知り合いでも無い者が人を馬鹿にして笑う人種はあまり好まなかった。

何か言おうとした瞬間、純白の男が水音を庇う様に前に出た。

（やっぱり消してやろうかしら…）

水音が一步前に出ようとした。

しかしそれを遮って和也が前に出た。

（え？）

和也は少し間を空けると小さくため息を付いた。

「どいてろ」

「あ…あの」

水音の声を無視して和也は更に前に出る。

水音はジッと心配そうに和也の顔を見る。

「そうか・・・しかたない・・・」

そう言うと和也は白い棒を掴み布を剥ぎ取った。

「あ・・・」

水音が見たものは綺麗な純白な日本刀だった。

夕日に重なる白い剣は水音にはとても綺麗に見えた。

和也はゆっくりと刀のさやを抜き取ると水音に振り返った。

「持っててくれ」

和也は優しく水音に言うとさやを水音の手の上に置いた。

「あ・・・うん」

純白のさやを渡されてから水音はもう1度日本刀を見る。

刀の先から柄（刀を持つところ）まで綺麗な純白で覆われており、柄の後ろの先には鈴が3つ付いていた。

「き・・・貴様おれ様と戦うきか？」

大男が日本刀を見てたじろぐ。

「勝てると思っっているのか？この方は…（中略）」

舎弟とメガネを掛けた男も少し後ずさっているようだ。

「戦う？そんなことするわけないだろう？」

和也の無表情が崩れ、一瞬、不気味な笑みに変わった。

「・・・！」

男達は和也の不気味な笑顔にたじろいだ。

「指・・・一本だったか？」

そう言っていると和也は刀の刃を人差し指に当てた。

指からゆっくりと赤い液体がコンクリートの地面に落ちる。

「・・・」

和也は無言で男達を見ているが男達は真っ青になりながら、男の指から出る液体を見ていた。

「！！」

水音も男達と同じ様に顔が青ざめた。

「ひい！」

「こいつ頭おかしいぞ！」

「狂ってる！」

次々と男達は叫びながら逃げていった。

「だ・・・大丈夫！？」

水音は逃げていく男達を尻目にさやを両手で持ちながら和也に駆け寄った。

「ああ・・・脅しに使っただけだからすぐ止まるだろ」

そう言いながらも指からはまだばたと血が出ている。

「ちょ・・・ちょっと待っててね！」

それを見て何を思ったのか自分の鞆の中をまさぐりだした。

「あ！あつた！」

鞆の中から小さな医療バツクのような物から包帯やら何やらを出して和也の指を治療し始めた。

「ジツとして！」

動こうとした和也を水音はキツと睨んだ。

「あ・・・その・・・ごめん」

さつきとは裏腹にしどろもどろして和也は言った。

くるくると包帯を指に巻きながら水音は小さな声で言った。

「ねえ、なんであんなことしたの？私はあなたの事知らないし、あなたも私を知らないと思う・・・なんで知りもしない私を助けたの・・・？」

水音はすまなそうに和也を上目遣いで見てから小さな声で続けた。

「指まで怪我して・・・」

付け足す様に更に声が小さくなる。

「ごめんね・・・」

水音はしゅんと小さくなり、つぶやく様に言った。

和也はその顔をジツと見つめていた。

なつかしそうに・・・少し悲しそうに・・・

「昔に似たような奴がいてな、そいつと、似てるなって思ったただけだ気にする事は無い」

和也は無愛想な顔のまま、水音を見た。

まだしゅんとしている。

和也の無表情が困った様に崩れる。

「それに、」

和也は少し慌てた様に言った。

「こういう場合は謝られるよりも、礼を言われた方が俺的にはうれしく思う」

水音は変に、不思議な気持ちになった。

まだ遭ってばかりのこの男は赤の他人であるはずの水音を助けた、無表情で心の読み取れない男の第一人称は変な人、しかし、何となく、何となくだが水音はこの男は良い人だ、と核心を思った。

（そつか・・・そうだよね）

水音はパツと顔を上げた。

その顔はもう悲しそうな顔はしていなかった。

「そだね！和也！」

じつと純白の目を見て水音はやさしく嬉しそうに言った。

「ありがとう」

「おつとそうだ・・・俺は寮に行かねばなんのだ」

慌てた様にポケットから地図を出して水音に渡した。

少し顔が赤くなっている。

「わかるか？」

和也は心配そうな目で水音を見る。

無表情な顔は相変わらず変わらない。

ジツと地図を見た後、水音は声を上げた。

「え？」

「どうした？」

和也が不思議そうに水音を見た。

「ここね・・・」

水音は苦笑した顔を和也に向けた。

「私の寮と同じ」

「...」

「...」

少し暗くなった夕焼けに2人の微妙な沈黙が流れる。

「・・・なに？」

和也は驚いたよう言った。

「あはは、偶然ってあるんだねえ」

水音も少し驚きながら言った。

2人が同時にふうと息をつく。

「偶然ってあるもんだねえ・・・」

水音がもう1度言って和也に笑いかける。

「ほんとだな」

和也は少し暗くなつた空を見上げる。

「じゃ！行こつか！」

そう言くと水音は先に歩き出した。

「ん、」

和也も少しうなづいてから後につづいた。

「ねえさっきの刀もう一回見せてくれないかな？」

水音が興味津々の目をして言った。

「ああ・・・かまわんが・・・」

和也はそう言くと布を解いて刀を水音に渡した。

「ひゃ！」

水音は少し体制を崩した。

「結構重いね、これ」

水音がゆっくりと剣を両手で持つ。

「日本刀は結局は鉄の塊だ、見かけよりは重い」

和也は歩きながら答えた。

「へえ」

水音がもう1度刀をまじまじと見る。

純白でつかの後ろに3つの鈴が付いている。

「この鈴が交通事故の時になった音かな？」

「？」

和也が何を言っている？と言うような顔で水音を見た。

「どしたの？」

水音が和也の視線に気づく。

「この鈴は鳴らないんだ、聞き間違いじゃないのか？」

和也が？と言う顔をしている。

「ええ？和也は朝の交通事故の時、子供を助けた人だよな？」

水音が和也に慌てた様に聞く。

「・・・ああ、あんたいたのか確かにそうだが、」

つまらなそうに言う、自慢する分けでも無く、照れる分けでも無く、唯、当たり前をした、という感じの言い方であった。

「だよな・・・」

（あれ？じゃあ、あたしの聞き間違いかあ・・・おつかしいなあ・・・

・あんなはつきり聞こえたのに・・・）

試しに鈴を振ってみる、鳴らない。

中に玉のようなものはあるが小さくカタカタとなるだけだ。

（うゝん・・・って、あれ？）

「ねえ！」

水音が嬉しそうに和也の方を見向いた。

「今日の交通事故覚えてるのかな？」

「え？あ・・・ああ」

和也はいきなり水音に迫られ、驚く表情を見せる、だがすぐに戻る。

（なんだ・・・じゃあ美奈のド忘れかあなんか妙な気がしたけど気のせいかな、よかった）

水音は胸をなでおろした。

水音は思索した後もう1度刀を見た。

「本当に・・・綺麗な刀だね」

水音が夕日に照らして見ている。

「ああ手入れはしてるからな」

和也も刀を見ながら答えた。

「ねえこの刀の名前は？」

「名前？別に無いな」

和也は首を少しかしげた。

「ないの？おかしいなあ、武器って証明証見たいなんの代わりに名前を付けるんでしょ？」

水音も首をかしげた。

請負人は武器を使う人間が多く、盗まれない防止の為に請負人の会社の方で、『名前と共に』武器を登録する。

だが、和也がきよ先生に見せた武器確認証に『名前は無かった』少し和也が考える顔をしてから和也の方を向いた。

「つけるか？名前」

和也が水音と刀を交互に見てから言った。

「え？いいの？」

水音がキョトンとした顔で和也を見た。

「お前と俺が会ったのもなにかの縁だ、名前を付けるぐらいどうってことはないだろ。」

和也が坂を上りながら言った。

「んー・・・」

水音は何度も刀を振ったり上から下まで見てから言った。

「うん！決まった！」

ツグと拳を握り水音は、はっきり言った

「『氷鈴刀』なんてどうかな？」

水音が刀を和也に返しながら言った。

「ひょうりんとう？」

和也が聞き返す。

「うん！純白の氷のひょうに鈴のりん、そんでかたな（刀）」
少し心配そうに水音は続けた。

「どうかな？」

和也が目を閉じて少し考える仕草をしてから言った。

「氷鈴刀・・・か・・・」

「いいな、それ」

和也が片目だけ開けてチラッと水音を見た。

「そう？」

水音は嬉しそうに笑った。

少し前を歩いていた水音が和也の方に振り向いて言った。

「ねえ、やっぱり和也が今日来るはずだった転校生？」

水音が後ろ歩きで和也を見ながら言った。

「ああ・・・多分そうなんじゃないか？」

和也は無表情のまま言った。

水音はすぐ前を向いて走り出した。

和也も慌てて追いかける。

水音は建物の前で止まるとくるっと回って振り向いた。

「ようこそ！私達の学校へ！そして私達の寮へ！」

和也には沈みかける夕日と水音の風に揺れる赤い髪が重なりとても美しく見えた。

（綺麗だ・・・）

（こんな事思うのはあいつ以来だな・・・）

和也は呆然とした後水音には聞こえない様小さな声で言った。

「沙羅・・・」

第1話 純白の男（後書き）

主人公登場、

全く主人公らしくないですね、ええ

っていうか、ヒロインが最初と性格が違う気も…

ちなみにヒロインの友達的美奈ちゃんはまた出ます。

それでは、また、第2話 トモダチで逢いましょう

第2話 トモダチ（前書き）

前回のあらすじ

突如、転校してきた謎の男。

まだ二人しか住んでない水音の寮に住むことに。

交通事故、記憶違い、様々な物が不思議を呼び続ける。

第2話 トモダチ

第2話 トモダチ

第二話 トモダチ

あなたは

いつも

遠いところを見てる

私の知らないことを知って

何も言わずに傷付いて

いつもどこかで血を流している

それでもがむしゃらに

走っているあなたは

私には

教えを聞かない

無邪気な子供に見える

（ここは・・・）

和也は廃れた古い工場の中にいた。

そこには数十人の、ガラの悪い男達が真っ青な顔で『何か』を囲む様に立っていた。

その中には逃げようとしている物もいる。

そんな中でその『何か』は動きを見せた。

「ゲエエエエエエエアアアアア！！！」

『何か』は3メートルはある体をよじって身の毛のよだつような叫び声を轟かせた。

「ひい！」

がらの悪い男達が逃げる様に足をばたつかせた。

その『何か』は体中に純白の体毛を生やし、足と手には長い爪が生えている。

顔は狼のように尖っていて耳が上にピンと立っていた。

獰猛な鋭く尖った純白の目を光らせていた。

まるで東洋の本に出てくる狼男の様だ。

その足元には赤い髪の毛の少女が居た。

真っ直ぐに伸ばした長い髪はバラバラにコンクリートに散っていた。

その場に合わない少女が倒れていた。

「！」

和也がその少女に気づき駆け寄ろうとした、その瞬間『何か』が再び動きだした。

「うわああ!!!」

「ひいいい!!!」

その『何か』が男達に爪を立てる。

「やめてくれえ!」

「助けてエ」

「ぎゃああ!」

男達が叫ぶ。

悲鳴と共に次々と血を流して倒れていく。

和也は呆然と立ち尽くした。

目の前の光景に、逃げ惑う者を容赦無しに八つ裂きにしていく。
長い爪を振るたびに『人が簡単に壊れた』。

その上から更に爪を奮い、巨大な足で踏み潰す。

その度にグチャツという生々しい音がし、肉が飛んだ。

『人』は次々と唯の肉塊の『物』へと変わり、その末路は人間と呼ぶにはあまりにも遠すぎた。

「やめ・・・ろ」

和也が震える声を出す。

知らない男達が死のうがどうでもいい、和也にはそんな考えがあった。

だが、それでも目の前で真つ二つになったり、ゴミのようになる人間はいくらなんでも放っておけなかった。

「ぐぎゃあ!」

「ぐげえ」

『何か』が爪を振る度に男達が血を流しながら飛ぶ。

和也の足元に一つの『物』が転がっていた、『物』はまだ息がある

のか、唇を何度も繰り返して動かしていた。

「タスケテ、タスケテ、タスケテ・・・」

和也は目を背けた、しかし、『物』は壊れたレコードの様に繰り返す。

「やめてくれ・・・！」

和也がもう一度震えながら言う。

その顔はいつもの無表情から恐怖と絶句の色に変わっていた。

「タス・・・ケ・・・テ」

壊れたレコードは完全に停止した、辛うじて人間だった存在は動かない『物』へと完全に変換された。

次々と工場が血の海と化していく。

同時に真っ白なはずだった『何か』は返り血で赤く染まっていく。

地獄だ・・・！

和也の脳裏にはつきりと浮かぶ言葉。

ここは地獄だ・・・

和也は唇だけ動かして確認する様に言った。

「！」

いつ気づいたのか赤髪の少女が男達を守る様に『何か』に立ちはだかっていた。

和也の背筋に寒気が走る、

「何してる！早く逃げろ！」

和也が慌てて駆け寄ろうとする。

その少女が『物』になるのを和也は拒んだ。

心から拒んだ、やめてくれと何度も頭に響く自分の声。

和也の願いも知らず少女は逃げなかった。

ジツと目の前の『何か』を見ていた。

少女の背中には不思議と美しかった。

『何か』に怒る分けても無く

『何か』に恐怖する分けても無く

『何か』絶望する分けてもなく無く

唯々見据えていた。

グサッ

嫌な音と共に爪が赤髪の少女の腹に貫通し、突き刺さった。

「グゲエエアアア！！！」

『何か』は何も気にせず遠吠えを上げながら爪を引き抜いた。

その瞬間、和也は時間が止まった様に見えた。

真っ赤な血が噴き出し、少女の体に穴が開いた。

『絶望が、恐怖が、怒りが』

和也の体の底から何かが走り抜ける。

少女が『物』へと変わる瞬間、

「うわああああああああああ！！！」

和也が大声で叫ぶが誰も和也に気づかない。

女性はゆっくりとひざから落ち、血を流しながら『何か』の足にしがみついた。

そして優しく、小さく、ニコツと笑うと薄い、綺麗な声を上げた。

「駄目だよ・・・かず・・・や」

そう言つと赤い髪をゆらして少女は血の海に倒れていった。

「な・・・」

和也が震える声を上げ呆然としながら言った。

「お・・・れ・・・!？」

信じられないと言つ風に眼を見開き、和也は立ち尽くしていた

（そんな！そんな馬鹿な！俺があの子を傷つけた！？そんな！そんな！）

恐怖と絶望が和也の体の中でのた打ち回る。

『あの子』は確かに自分の名を呼んだ。

『あの子』の唇であの子の声で、はつきりと言った。

その声を聞き間違える事は無い、何度も聞いたかった『あの子』の
声。

『何か』がこちらを見ていた。

寧猛な殺気を込めた眼、嫌、むしろ殺気でも生ぬるい、狂気の眼を
していた。

『何か』と自分がだぶって見えた。

「ぐげげげがががiiiiiiiiああああああああああああ
!!--!」

『何か』が叫ぶ

「うわああああああああああああああああああ!!--!」

和也もそれと同時に叫んだ、

和也が、ガバツと布団から起き上がった。

和也はキョロキョロと周りを見渡す。

四角い部屋に夕方に送られて来た荷物が無造作に置かれている。体はビツシヨリと汗だくになっていた。

安心した様に胸を撫で下ろし、歯を食い縛った。

「くそ．．．！」

和也がぎりつと唇を噛む。

「あれが．．．夢だと．．．よかつたのに．．．」
嫌な感触の残る手をジツと見てから和也は言った。

「沙羅．．．！」

和也は布団の上で目蓋まぶたと手のひらを強く握った。

夕に切った指の傷が開き、爪に食い込んだ手の平から血がにじみ、赤い液体は吸い付く様に真つ白なシーツにゆっくりと、ゆっくりと落ち、白いシーツの一部が赤く染まった。

ジリリリリリリリリリッ！！

大きな目覚まし時計が四角い部屋に鳴り響いた。

「んんん？」

顔に掛かった綺麗な赤髪をのけながら目覚まし時計に向けて手を伸ばす。

少し暗い部屋から騒音が消える。

フラフラと立ち上がりながらゆっくりとカーテンと窓を開けた。

朝日とチュンチュンとかわいらしい音を上げるスズメが数羽、目の前を飛んで行った。

「ふぁぁぁぁぁん！」

水音はあくびと伸びをしながら朝日を浴びた。

「んっいい天気っ」

昨日とは大違いの元気な姿勢を見せていた。

チュン

かわいらしいスズメが水音のすぐ前の窓の溝に止まった。

「おはよう」

水音がスズメに向かって優しく元気な声を出す。

スズメは少し首をかしげて、飛んでいった。

水音はそれを見送った後、ツツと小さく笑ってからポツリと言った。

「もう・・・この寮で1人じゃないんだ」

水音はそう言った後、学校の支度を始めた。

きゅっとな脇に髪を止めてリビングに向かった。

水音がリビングのドアを開けると、香しい匂いがリビングをつつんでいた。

そこには、朝食の玉子焼きとトースト、ミルク、昨日と同じ食卓が一人分、机の上に置いてあった。

「あ、そっか、お兄ちゃんまだ和也のこと知らないんだ」

一人分の食事に気づいて、ポンツと水音は手をたたいた。

「和也？和也ー」

リビングを出て和也を呼んでみる。

返事はない。

不思議に思い、和也の部屋のドアの手を掛ける。

ガチャ・・・

鍵はかかっていなかった。

ガランとした部屋には無造作な荷物のみ、誰もいなかった、窓だけが開いていて、カーテンが風でそよいでいた。

「？…先に行ったのかな？」

水音は独り言を呟いてから少し顔が曇った。

（折角一緒の寮なのに…一緒に朝ご飯位食べてくれてもいいじゃん）
少しほおを膨らませた。

水音にとって、寮で誰かと一緒に寝泊りするという事は殆ど無かった。

それは、この広い寮にいつも一人で居たからだ。
リビングに戻って朝食を食べて玄関のドアに手を掛けた。
いつもより早い出発である。

寮を出て坂を歩いていると、前の方に見覚えのあるショートカットの女性がこちらに歩いてきていた。

女性はこっちに気づくと、駆け足で水音に近づいてきた。

「やつほー！水音！どしたの？いつもより早いじゃん！」

美奈は早口で水音に言くと、首をかしげた

「うん、今日はちょっと早めに出てみようかなって」

水音は美奈にニコッと笑ってから言った。

「ええ？風間さん見れないじゃん！」

美奈がブーッと頬を膨らませて冗談っぽく言う。

「あはは、ごめんね」

水音が美奈にまた笑いかける。

「？」

美奈がじつと水音を見る。

「ん？何か付いてる？」

水音が顔に？（クエスチョン）を浮かべる。

「何か今日・・・水音、元気じゃない？」

不信そうにじとつと水音を見る。

「え？そう？」

どうだろ？というような表情をして右手をほおに当てる。

「そだよ、水音って朝は結構暗いよ？」

眼を細めて更に不信そうに見る。

「さてわぁ・・・」

美奈は、いたずらっぽい笑みを浮かべて少し間を空けた。

「彼氏でもできたかあ？」

いたずらっぽい表情のまま言った。

「！！！！」

「そ・・・そんなわけないじゃん！」

少し顔を赤らめて手をぶんぶんと、美奈の目の前で振る。

「あつはつは！そうだよね、水音にできるわけないかあ！」

美奈は歩きながら高らかに笑った。

「ちよつと、それということかなあ！」

水音がむつとした顔で美奈にくいかかる。

「あつはつは！冗談だよ！じょーだん！」

美奈がニコニコと笑いながら水音に言った。

「本当、新鮮な反応するなあ！今時そんな純情はレアだよ？少女漫画の青春ヒロインか！ての」

男っぽい感じで美奈は言う、その後さらに思いっきりけらけらと笑う。

「そうそう！絶対転校生見に行こうね！」

そろそろ怒りそうなので、美奈は話を変えた。

それを聞いて水音は、思い出したかのように言った。

「あ、そうそう！転校生だけど・・・」

水音はそこまで言った後言うのを止めた。

（本人楽しみにしてるし・・・後で言おっかな）

「え？転校生がなに？」

美奈は昨日のキラキラとした目で水音を見た。

「やっぱ秘密」

水音がニコツと、さっきのお返しとばかりに悪戯っぽく笑った。

「ええ〜何〜それ〜」

美奈がブーブーと文句を言った。

清々しい朝、変わらない毎日、いつもの様に友達（美奈）と笑い合う日。

水音にとって汚したくない一番好きな日常。

キンコンカンコン

その時学校のチャイムが鳴った。

どうやら話込んでいる間に学校に着いたようだ。

学校の前には赤い車が止まっていた。

「あ！遅刻になっちゃうよ！」

水音が先に走り出した。

「待つてよ〜」

美奈も後を追う。

赤い車の中にいた運転手がその二人の後ろをジッと見ている事に水音は気づかなかった。

その車が昨日の交通事故未遂の車だということも、

車の運転手がゆっくりと、そして不気味に笑ったことにも気づかなかった・・・

平穏がいつか崩れることを、今の水音は知らなかった。

和也は早く来るようにと言われた通り、速めにを出た。

「あら？今日は遅れずに来たようね」

きよ先生が目の前の和也に笑い掛ける。

「ええ・・・まあ」

無愛想な顔で私服姿の和也がきよ先生の前に立っている。

「ところで・・・何でまた血を流しているのかしら？」

きよ先生は苦笑した顔で和也のだからと出ている血を見た。

「転びました」

和也は血を流しながら無愛想なまま言った。

「転んでそうなると思う？」

きよ先生は冷静に和也に突っ込む。

「・・・」

和也は少し黙った後めんどくさそうに言った。

「正確には、転んだ所に偶然、車が走ってきて、それにはねられてぶつ飛んだ時に電柱に当たり、落下した時頭から落ちただけです」

和也は早口で言った。

「ふうん・・・落ちた・・・だけねえ・・・」

きよ先生は和也の体を見た。

頭から血が落ち、職員室の床を汚している。

服は血とはねられた様な後を残して無残なことになっている。

「ま、いいわ」

なにがいいのかわからないが、悟った様に立ち上がると、きよ先生は武器やら書類やらが乗っている机をまさぐりだした。

ゴトッ

何かが落ちた音がし、反射的に和也は落ちた物を見た。

「・・・」

そこにはよく戦争映画で見る手榴弾がおちていた。

通称パイナップルと呼ばれている爆弾で、ピンという鉄を抜くと数秒で爆発するあれである。

「先生・・・それ・・・」

和也が冷静さを保とうとしながら言った。

「ん？ああ、ごめんごめん」

そう言うときよ先生は手榴弾を拾った。

「先生・・・それ・・・おもちゃですよね・・・？」

和也が恐々と聞いた。

「ん？私がそんな中途半端な物欲しがると思う？」

きよ先生はあっさりとしてニコツと笑って言った。

和也はこの瞬間心に決めた。

（絶対に、この先生には逆らわないでおこう・・・）

「ほら！タオルで血拭いて制服！これ着たら教室行くよ！」

ごちゃごちゃの机から真新しい制服と白いタオルを取り出し和也に渡した。

その後、和也ときよ先生は教室に向かった。

和也はきよ先生に外で待つ様に言われ、一人、広い廊下で立っていた。

「えーと、皆さん今日は転校生を紹介します」

きよ先生が教壇の上で声を上げて生徒達に話している。

「先生！」

優等生らしきメガネを掛けた男性が真っ直ぐに手を伸ばし言った。

「転校生は昨日来るはずだったのに、なぜ今日になったのですか！？」

大声で背筋を伸ばしてメガネ男は言った。

「あゝそれね・・・何かめんどくさかったから・・・あたしが」

きよ先生はめんどくさそうに小指を右耳に突っ込みながら言った。

「な！？それでも先生ですか！だいたい・・・」

クツクツと笑いながらそれを見ている男が前の男に言っていた。

「あいかわらずやなくきよちゃんも委員長も」

委員長と呼ばれた優等生っぽい男はまだきよ先生と色々言っていた。

「全くだな、でもよ、そろそろ『アレ』が来るんじゃない？」

前の男も笑いながら後ろの男に言った。

「あー今日あたりかー転校生も、大変やなく」

2人の男はケラケラと笑いながら言った。

「はいー！今はおしゃべりの時間じゃないですよー！」

散々喋りまくっていたくせにパンパンと手を叩きながらきよ先生は言った。

「それじゃあ入ってきてくれる？」

きよ先生はドアに向かって言った。

ガラッ

ドアの開く音と共に和也は無愛想な顔で入って来た。

全員が黙って見守る中、黙々と教壇に歩いていった。

「うわぁ……」

「白？」

「ちよつとかつこいいじゃん」

「そお？なんか白くて変じゃない？」

周りが色々言っている中、和也はジッとしていた。

「この子が、前に言っていた『敦盛 和也』君です、皆仲良くしてあげてね」

きよ先生が教壇に手を付けて前に体重をかける状態でクラスの生徒達に言った。

「それじゃあ質問は？」

きよ先生が教室内に声を上げて言う。

「はいはい！何の能力？」

元気に青年が質問する。

「火……だが普通に出すのなら、ライター程度しか出ない」

和也が答える。

「はい！なんで髪と眼が白いの？」

また一人元気に言う。

「よくはしらんが遺伝だとか・・・」

和也がまた答える。

「依頼人なの？」

また一人

「ああ、まだ始めたばかりだが」

趣味は？特技は？技は？和也って呼んでいい？好きなタイプは？寮どこ？

次々と生徒達が質問を投げ掛ける。

和也も動揺しながら質問に答えていく。

和也はやつと質問の嵐から抜け出した。

隣にはきよ先生がいた。

ふうつと小さくため息を漏らす。

「どお？私のクラスは」

きよ先生がニコニコと笑いながら言った。

「髪が白いのに・・・冷たい眼で見られない」

和也は少し動揺気味に言った。

和也はその特有の体質で行く所では比較的、注目を浴びる。

眼と髪が真っ白な青年というのは珍しい様だ。

ある目は同情で、ある目は決別に、それが人と遭うのとはほ当然と思えた。

「驚いた？皆、あなたと同じ境遇の子たちなの、だから皆お互いの気持ちが分かるのよ」

きよ先生は、ふつと笑うと言葉を続けた。

「まあこんな立派な子達は、能力者の中でもこのクラスは珍しいけ

どね・・・」

そう言うときよ先生はまた小さく嬉そうに笑った。

『生徒』ではなく『子達』と言ったのに和也は不思議に思った。

この先生にとつて、このクラスの人間は赤の他人よりも子供の様な意識が強いのだろうか。

だとすればこれほど素晴らしい先生も居ない。

この先生も、また能力者の差別の対象になった人なのだろうか、このやさしそうな先生にも悲しい過去があるのだろうか。

和也は優しく笑う先生を見てそう思った。

サブマシンガン持ってなきやかっこいいんだけど、とも和也は思った
きよ先生は笑う顔をやめてなかばやけくそ気味の様な顔になって言
った。

「ただ・・・」

「ただ？」

和也はきよ先生の顔色の変わり方を奇妙に思う。

「一人問題児を除いては・・・ね」

「一人？」

和也がそう言った瞬間、和也の後ろの壁に妙な音がした。

ピシッ

「？」

和也が壁の方を向いた瞬間、

ドゴオオオオオンン！！と、すざまじい音と共に壁が割れ、壁が
和也事、一気に吹っ飛ばされた。

「ぐほぁ」

壁の破片というよりもはや岩と言つべきか、と言つ位の大きな破片が見事に和也の顔面にクリーンヒットした。

「て・・・転校生いいいいいいいい！！！！」

生徒の一人が驚いた声を上げた。

弧を描いて瓦礫事吹っ飛ぶ和也を見て叫ばずに居られなかった。

瓦礫の山から一人の男が出てくる。

「ここはどこだぁー！！」

そう叫ぶと周りを見回した。どうやら壁を壊した本人のようだ。

「やったぜ！とうとう学校についたんだぁぁー！！」

体中を傷だらけにしている男がとびはねながら言った。

キャッホウと笑いながら男は瓦礫の山から下りてきた。

きよ先生がため息を付く。

「今日も1週間ピツタリのご到着よ、全く・・・その筋金入りの方向音痴はいつまでも変わらないわね」

「よう！きよちゃん！相変わらずベツピンさんだねえ！」

元気に男は笑いながら言った。

あらためて見ると、180cmはある大きな体をしていた、この学校の指定の制服を着ているのを見ると同じ生徒なのだろう。

ツンツン頭のせいで、不良っぽく見えなくも無い。

背中に長い棒を布で包んだ物を持っている。

「せ・・・先生イ！！転校生がいろんなところから血を流して倒れています！」

先ほど叫んだ男が先生に駆け寄る。

「あら、忘れてたわ」

きよ先生は簡単に言ってから和也のところに言った。

「忘れてたって・・・」

叫んでいた男が疲れた様に肩をすくませる。

どうやらこの男も委員長と同じ、このクラスの疲れ役のようだ。

「今井、転校生って？」

大男が叫んでいた男に話しかける。

「ああ・・・^{レイジ}怜次あんたいなかったっけ」

今井、と呼ばれた男が怜次に説明した。

「へえ…強いのかな…」

怜次がニイつと不気味に笑った。

「お大事に…」

今井は、肩をすくめ、和也の方に同情の目を向けた。

「よいしょ・・・つと」

きよ先生が瓦礫に埋もれた和也の手を、引っ張り出している。

頭や頬やら顔やら耳やら鼻やら

いたるところから血が出ている。

流石に明るいクラスも少し青ざめていた。

「おい…血だらけだぞ…」

「死んだかな…？」

「縁起でもないこと言っなよ…」

ざわざわと生徒達が目の前の光景にたじろいでいた。

「・・・」

和也が無言で立ち上がる。

立ち上がる際に血が床に飛び散った。

「うお!？」

「起きたぞ!？」

和也の目の前には怜次がいた。

ニツと笑うと怜次は血だらけの和也に言った。

「悪いな!大丈夫か？」

怜次は元気に言うのと、

悪気のなさそうに、また笑った。

「ああ・・・大丈夫だ・・・というより貴様は誰だ・・・？」

さすがに血を流しすぎたのか、

和也はフラフラと体を揺らしながら言った。

「俺か?俺は怜次!桜木^{さくらぎ} 怜次^{れいじ}だ!よろしく!」

怜次が手を伸ばす。

「ん?ああ・・・よろし」

和也が怜次の手を握ろうとした瞬間、

怜次が思いつきり顔面ににぎり拳を叩き込んだ。

風船が破裂した様な音が教室中に響き渡る。

和也が顔面ギリギリで右手の手のひらを顔の前に出して拳を止めた。
騒いでいたクラスの人間は静かになり、ジツと見守っている。

「なんのつもりだ・・・？」

和也が純白の眼をとがらせながら言った。

「へえ・・・反応できるとは」

怜次がまたニツと笑って続けた。

「今日の放課後、学校裏に来いよ!白髪!」

そう言うのと破壊した壁から出て行った。

(・・・白髪・・・?)

和也は無表情の顔でジツと、

怜次の出て行った壁があった所を見ていた。

「いや、転校生君！災難だったなあ」

一人の男が呆れた同情に似た目で和也に向かって言った。

「そうそう、あいつ、ああいう奴なんや」

なにか妙になまった声とその隣から出てきた。

「どういうことだ？」

和也が2人に問いかける。

「あいつなあ、クラスの奴全員（女子以外）にアレやったんや」
なまり声の幼めの顔の男が言った。

「そーそー俺も最初はびびったな、でもあいつ止められなかった
奴は、ギリギリで止めてくれるんだ（殴るのを）」

男は苦笑を見せながら続けた。

「申し遅れた。俺は、今井」

二ツと男が笑った。

第一人称はのんびりした、という感覚がある青年であった。

静かな立ち並みには大人っぽさを見せ、女性の言うカッコイイより
男の言うカッコイイという感覚がある。

青年は何処か疲れた様に見えたが、いつもどおりなのか、定着した
感もあった。

「俺なあ！さなぎ言うねん！」

背の低い訛り声も続けた。

訛りは関西弁に聞こえたが、それを更に訛らした様な感覚がある。
今井とは対象的に何処か幼さを見せる青年はとても楽しそうに笑っ
ていた。

遠くから見れば女の子と間違われても可笑しくないというかわいら
しさが有った。

後ろで少し長い髪をちょこんとちょんまげの様に止めているのが更
に幼く見せた。

「ああ・・・それはいいが・・・あれはなんだ？」

和也がスルーして言った。

「わーお、名前言ったのにスルーか・・・やるな」

今井が、なにか意味の分からないことを、ぼやいた。

「あー！アレなあ、ああやって強い奴探しとんねん。」

さなぎが今井をスルーして言った。

今井が『お前もか！？』

という顔でさなぎを見ている。

「あいつなあ、ああやって強い奴調べとんねん、あいつ強い奴と戦うん好きなんや」

さなぎが和也に笑いながら言った。

「ふーん・・・」

和也がめんどくさそうに眼を細めた。

「言つとくけど、あいつほんまに強いから気をつけや」

さなぎがまた嬉しそうに言った。

和也が片方の眉を少しだけ上げた。

「そ！まあ戦ってみたらわかるわ！がんばりや」

そう言つとさなぎはさつさと、どこかに行ってしまった。

残ったさなぎも、少し付け足すように。

「まあ、根はいい奴だから気にしないでくれよな」

そう言つと、今井もさなぎについて行った。

怜次のことを言っているのだろう。

「怜次・・・ね」

和也がボソツと小さな声で言った。

時間は過ぎ放課後、

「遅い・・・」

和也が学校の裏に来て10分が経過していた。

「まあまあ、あいつのことだから迷ってんだろ？」

今井が何処から持って来たのか携帯用の折りたたみ椅子に腰掛けている

「そーそー！あいつ呼ぶくせに遅いねんなあゝ」

さなぎも今井の隣で同じ様な物に座り、片手で持つポップコーンを口に入れながら言った。

「・・・」

和也がジッと2人を見る。

「ん？どうした？」

「どつたの？」

2人が声をそろえていった。

「いや・・・なんでお前らいるんだ・・・？」

和也が疑問を投げかける。

「いや・・・」

「いや・・・」

「ひまだし」

「ひまだし」

2人がまた声をそろえていった。

（なんだそれは・・・）

和也がフウッと息を吐いた。

「ふははははははは！！」

アホっぽい笑い声が響く。

「待たせたな！」

ボロボロな格好を、よりボロボロにした姿で、
怜次が現れた。

「遅い・・・」

和也が顔を少し向けてからだるそうに言った。

「へん！ヒーローは遅れてくるもんなんだよ！」

怜次はあわててそう言った。

「体中ボロボロで半泣きのヒーローなんていないよなあ」

今井がさなぎに聞く。

「いまいーそりやいつちやあかんわー、どーせ道に迷ってたんやろ」
さなぎは子供っぽく今井に答える。

「う・・・うるさいな！っていうかなんでおまえら、いんだよ！」

「暇つぶし」

「暇つぶし」

ぱりぱりとポップコーンを食いながら、また声をそろえて言った。

「ま・・・まあいいや！そんじゃあ勝負といこうか！白髪君！」

怜次はそう言うと言い布に覆われた長い棒を手を取った。

布をとる音と共に、長い槍が姿を見せた。

槍はどちらかと言えば、なぎなたに近い形をしていた。

茶色い、丸い木の部分の先に鋭く尖った、長い刃が日の光で輝いた。

「へへ！どうだ！かっこいいだろ！」

自慢げに怜次は笑った。

「いや、それはどうでもいいが、俺には名前がある、白髪と呼ぶな」

和也はすまし顔で、怜次の言葉をスルーする。

「おおい！今は名前じゃなくて武器に注目しろよ！」

怜次が驚いた様に目を丸くする。

「ちきしょう・・・調子が狂う野郎だ・・・、じゃあ俺に勝ったら
名前でよんでやるよ！」

そう言う怜次は思いつきり地面を蹴った。

戦闘スタート

「うらああ！」

怜次が雄叫びと共に、和也に刃を振るう。

「ツチ！」

和也が舌打ちした後、慌てて後ろに下がり避けようとしたが、

「！？」

和也がつまづいて後ろにこけた。

「は？」

怜次が一瞬、和也の行動に戸惑いを見せるがすぐに和也に向けて槍の先端を振り下ろす。

和也が地面の砂を握り締め、一直線に槍の刃を向ける怜次に目掛けて投げつけた。

「うわ！？」

怜次の顔面に、モロに砂が掛かる。

その間に和也が転げながら立ち上がった。

「てめえ！白髪！卑怯だぞ！！」

怜次が怒涛の声を上げながら眼の砂を取ろうと目を擦る。

「卑怯もくそもあるか、これは兵法つつうんだ、それに、エモノ（武器）を持ってないのに攻撃してくるのはどうなんだよ、ツンツン頭」

和也が体の砂をはたいた後、刀を包んでいる布を取りながら冷静に言った。

「ぐう！」

怜次が言葉に詰まる。

「いまいーどう思うー？」

さなぎがすっかり鑑賞気分で、今井に言った。

「いやー今のは怜次が悪いだろ、でも、転校生も、いきなり砂投げるとはねえ」

今井はポップコーンをバリバリと食べながら言った。

和也が刀を構えてジッと怜次を見ている。

（さて、どうするか・・・あいつの武器は槍、中距離型の武器だ、それに比べて俺の武器は近距離型、ふところに入れば勝てるか？）

怜次はジリジリと和也に寄ってきている。

（へ！身長差は俺の方が高い！力勝負になれば間違いなく俺の勝ちだ！小細工を考えさせる暇はあたえねえ！！）

和也の身長165cm 怜次の身長178cm

「うらああ！」

怜次が和也に向かって一直線に刃を突く。

（早い…な）

和也がギリギリで体をずらし突きを避ける。

（良い突きだが動きに無駄が多い、当たる直前を払いのければ、ふところに入れるな）

和也は冷静に怜次の動きを読む。

「らああ！」

怜次がさっきの倍の速さで和也を突こうとする。

（ここだ・・・！）

和也が当たる直前で、槍の切先を刀で地面に払いのけた、金属音が響き渡ると同時に、

地面を蹴りふところに入り込む。

入りこんだと同時に和也は刀の刃の無い部分で腹に向けて横に振る。

「くう！」

怜次が瞬時に気づくと、槍を思いっきり横に振った。

「な！？」

和也が驚いた声を上げると、

何も考えていないのか考えての事なのかは解らないが怜次は近距離で刃が使えない為、今一番和也に近い棒の部分で和也の横っ腹を殴ろうとしていた。

和也は同時に刀を止めて、迫ってくる槍の棒の部分に刀をかすめさせながら、

槍の棒の部分が体にめり込むと同時に蹴りを怜次の腹に入れる。

2つの擬音が重なった。

ツゴ！

「ぐぁ！」

「げほ！」

お互いが同時に後ろに下がる。

（ツチイ、俺が槍を振った瞬間、刀で槍の棒の部分の起動をずらして威力を下げやがった！！

しかも棒が食い込む瞬間に俺の腹に蹴り入れやがるたぁ…）

怜次が片手で腹を抑えながら、槍を立てた。

（くっ、槍の棒の部分で、俺の刀より早く横腹を叩くとは……！しかも反射的に俺の蹴りを体をずらして威力を減らしている）
和也が地面にひざを付けて横腹を抑える。

（この野郎……！！）

（こいつ……）

2人が同時に思った。

（喧嘩慣れしてやがらぁ！）

（戦い慣れしている……）

「おーーーー！結構激しい戦いしとんなぁ！」

さなぎが嬉しそうに言った。

「うんうん、互角ぐらいかねえ？」

今井もポップコーンの残りカスをチマチマと食べながら言った。

一方、水音は学校裏で激しい戦いを繰り広げている事など知らず、机の上で教科書を鞆に入れていた。

「そんじゃ！帰ろっか！」

美奈が水音に笑いかけながら言った。

「あゝごめん！今日、放課後先生に呼ばれてるんだ！」

水音が手を合わせて困ったような顔をした。

「んー、そっかー・・・じゃあしかたないっか！また明日ね！」

美奈は手を振りながら教室を出て行った。

「ふう・・・でも何だろ？」

水音は美奈を見送った後、サッサと教室を出て職員室へと向かった。

もちろんそんな水音の行動も知らない和也は緊張の解けない戦いを繰り広げていた。

「おい、お前名前なんつったけ？」

怜次が少し離れた所で構えている和也に言った。

「？、和也だ」

和也が不思議そうに答えた。

「そうか・・・和也か・・・」

怜次はぼそつと小さく言った後続けた。

「さっきは悪かったな！お前みたいな強い奴、久々だったからよ！」

怜次は和也に向かって叫んだ後、キョロキョロと周りを見だした。

怜次は周りを見た後、さなぎと今井の方を向いた。

「なんだ？」

今井は新しいポップコーンの袋を開けながら言った。

「今井、さなぎ・・・絶対に言うなよ？」

怜次はそう言った後、和也の方に向き直り、槍を和也に真っ直ぐ向けた。

怜次はニイッと笑うと嬉しそうに言った。

「これが俺の能力だ！」

怜次の槍の先端が光出した。

「おい！怜次！」

今井がポップコーンの袋を投げ出して叫んだ。

「何やってんだ！！退学食らうぞ！！」

さなぎは相変わらず楽しそうに笑っている。

（何だ・・・？）

和也は不思議そうにジッと光出した槍の先端を見ている。

バチッ

光から突然、弾ける様な音が鳴り出し、その音は連鎖の様に音を増やしていく。

「食らえ！！」

怜次が和也に向かって叫ぶ。

『雷光！！』

怜次が叫んだ瞬間、ビームの様に和也に向かって光が走った。

（これは・・・まずい！）

和也がそう思った瞬間、横に飛んだ。

和也から外れた光は、ドン！という音と共に学校の壁に当たり、見事に丸い円状に亀裂が走っていた。

和也の頭に壁の小さな破片が降ってきた。

和也は、頭に乗った破片を落としながら、立ち上がった。

「何考えてんだ！！お前は・・・」

今井が怒って怜次に歩み寄ろうとした瞬間、和也が微かに口を動かした。

「いいね・・・」

「!？」

今井が、和也の方を驚いて振り向いた。

和也は刀を構えながらニツと怜次に向かって笑った。

怜次もそれを見て、ニツと笑った。

「ふう・・・」

今井が諦めた様にさなぎの隣に戻って座った。

「ええんか？」

今井がニヤニヤしながら言った。

「ああ・・・お互い楽しそうだな」

今井はそう言っているとポップコーンを口に放り込んだ。

「行くぞ！」

怜次が槍を構えながら和也に向かって走り出した。

（奴との実力は、互角とみていい、ならば近距離戦でやれば勝負はつかない、だが、離れればあの光の攻撃が来る、さて、どうするか）

考えている間に怜次の槍が和也に向けて振られていた。

和也は怜次の刃の部分を瞬時に刀で受け止めた。

和也の刀と怜次の槍の刃が当たり金属音と火花が飛び散る。

（よし！！力技に持ち込んだ！！俺の勝ちだ！！）

怜次がそう思った瞬間、和也が後ろに飛んだ。

「次は、俺の番な」

和也が刀を怜次に向けた。

刀の切先が赤く、うっすらと光り始めた。

『炎尾』

和也が叫んだ瞬間、切先から弧を描きながら炎が怜次に向かって走った。

「な！？クソ！間に合え！」

怜次が慌てて和也に槍を向ける。

槍の切先がさつきよりも早く光りだす。

先ほどと同じバチバチという弾ける音が飛ぶ。

『雷光！！』

さつきと同じ様に光が一直線に和也に向かう。

和也の炎と怜次の雷が爆弾の爆発の様な音と同時に激しくぶつかり、衝撃で風が吹く。

「くう！」

「ぐう！！」

和也と怜次が切先を向けた状態で技を出しながら、苦しそうに唸る。

「おいおいおいおい」

今井が目を真ん丸にしながら両手を顔の前で交差して風を防いでいる。

「すごい衝撃やね〜」

楽しそうに、もろに顔に風を当てながらさなぎは言った。

その瞬間であった、正に水を指すという言葉がぴったりの綺麗な声を荒げた言葉が飛んだ。

「こおらああ！」

水音が物陰から突然現れた。

「和也！怜次君！何してるの！！」

もの凄い形相で、怜次と和也に問いかける。

「ぐうう・・・」

「くあああ！」

和也と怜次はお互いの技に集中して気付いていない。

「あれ？水音ちゃん」

今井が驚いた様な顔で水音を見る。

「碇草さん？？何でここに？」

さなぎも今井につられて水音を見た。

「やめなさーい！！」

水音は叫びながら両手を怜次と和也の技が衝突している部分に向け

た。

『水の柱!!』

水音がそう叫んだ瞬間、水音の両手から、もの凄い勢いで水が噴出した。

音と共に破裂した様に和也・怜次・水音の技が消えた。

「つく!」

和也が衝撃で後ろに飛ぶ。

「ぬお!？」

怜次も同時に吹っ飛ぶ。

「あちゃ〜…」

今井が頭を抑えながら小さくため息を付く。

その隣で楽しそうにクツクツクとさなぎは笑いを堪えている。

「いつてえ〜何が起こったんだ？」

怜次が尻を抑えながら言った。

「れ〜い〜じ〜く〜ん？」

水音が上半身だけ起こしている怜次の真上に立って恐ろしい微笑を浮かべていた。

「ツヒイ!？み…水音ちゃん!？」

怜次はビクツと体を揺らして震えた。

「む?…水音？」

和也も少し驚きながら立ち上がった。

「和也!」

水音がキツと和也の方を見ると、ズカズカと寄ってきた。

「この学校の校則知ってる!？許可も無しに能力使ったら、退学だよ!？た!い!が!く!」

水音は和也を恐ろしい眼力で見据えた。

「う…すまない…」

和也は水音の、あまりにも恐ろしい眼力にたじろぎながら小さく言った。

水音は悲しそうに顔を下に向けながら、少し声の質を落として、小さな声で言った。

「それに、また一人ぼっちになっちゃうよ・・・馬鹿」
「？」

声が小さくて和也には聞き取れなかったようだ。

「なんでもない！」

水音はまたキッと和也を見据えた。

「う・・・」

和也がまた後ずさる。

「まあまあ水音ちゃん、和也は怜次に無理矢理戦わされたんだよ、な！さなぎ」

今井は目配せしながらさなぎに言った。

「そうやなあ、和也はなあ、んも悪ないなあ、」

さなぎはまだ少しおかしそうちにしながら言う。

「ええ！？オイ！お前ら！」

怜次が驚いた様に叫んだ。

「そうそう！だから許してやってくれよ」

今井が怜次を無視しながら言った。

「え？そうなの？」

水音は驚いたように言った後いつもの調子に戻って和也に言った。

「そっか、ごめんね、和也」

水音はすまなそうに上目遣いで和也を見た。

「え、あ、いや・・・」

和也は顔を少し赤らめて下を向いた。

そのときの水音の顔を見て、不覚にも可愛いと思った自分が居た。和也は怜次の電磁波に思考回路がやられたのか、と考えていた。

「んで、何で笹草さん、ここに？」

今井が、不思議そうに水音に尋ねる。

「うん、何か、先生がね」

水音は自分の力で濡れた手を拭きながら説明を始めた。

〔回想〕

真剣な面持ちできよ先生が水音の目の前に座っていた。

「先生、何ですか？」

水音はきよ先生の真剣な顔を不思議に思いながら言った。

きよ先生は少し悩んだ素振りをした後、水音に言った。

「和也君、昨日どうだった・・・？」

「え？昨日は、和也は寮に付いたら部屋に入ってすぐに寝ちゃいましたけど・・・」

水音は少し困惑して言った後、続けて言った。

「何で、そんなこと聞くんですか？」

水音はまた不思議そうにきよ先生を見た。

きよ先生は少し考えるような仕草をしてから答えた。

「教師として、新しく入った子の事を聞くのは変かな？」

「いえ、変じゃないですけど・・・」

水音は言葉を抑えて言った。

（そんな感じには、見えなかったけどな）

水音は普通の人よりも感覚が鋭いのできよ先生の様子が妙に見えた。

「ま！それはいいとして！水音ちゃんには二つ用事があるの！」

きよ先生は、さつきとは、裏腹に元気に水音に言った。

「二つですか？」

水音はその明るそうな素振りを少し不振に思いながら、きよ先生に言った。

回想終了

「で、その一つが怜次君をうちの寮に入らないか、ってことなの」

一瞬、その場に沈黙が流れた。

「はぁ~~~~！！？」

沈黙を破ったのは、怜次であった。

「何！？どゆこと！？俺にはちゃんと寮はあるけど！？」

和也がもの凄く困惑しながら、起き上がった。

「うん、何かね、怜次君もの凄く方向音痴だから寮に帰ること殆ど無いでしょ？」

だから、怜次君の部屋、もう別の人が使ってるんだって」

水音は怜次の気持ちも知らずにあっけらかんと言った。

「そ・・・そんな・・・」

怜次はへなへなと崩れる様に、その場に座り込んだ。

「そこで！今、がら空き中のうちの寮に来ないか！ってこと」

水音は暗い顔で座りこんでいる怜次に、向かって、人差し指をビシツと向けて言った。

「何だよそれえ・・・きょちゃん意味わかんねえよあ・・・」

怜次は泣きそうになりながら言った。

「おい貴様！そんな嫌なのか？」

和也は少し首を傾げ、今にも泣き出しそうな怜次に言った。

「嫌にきまつてんだろあ・・・俺の（元）部屋には、大事なもんが滅茶苦茶あつたんだぞあ・・・」

怜次はまた悲しそうに言った。

「あ！そこは大丈夫！もう全部、こっちの部屋に移したから」

水音が人差し指を顔の横でクルクル回しながら言った。

「え！？ほんと！？」

怜次は、水音の言葉を聞いた瞬間、顔を輝かせた。

「ただし、教育に悪い雑誌や本は処分したそうです」

水音はもう1度人差し指を顔の横で回して、悪戯っぽく笑った。

「そんなあああ！！」

怜次が愕然とした顔で両手を頬に当てながら叫んだ。

泣き顔から喜んだ顔に、そして一瞬で愕然とした顔になる、

そんな怜次の動作は騒がしい奴という印象が和也に残ったが、喧嘩を売ってきたにしてはむかつく奴という印象は持てなかった。

「お・・・俺の・・・巨乳天国増刊号が」

怜次はそう言いうと、地面にゆつくりと倒れていった。

「あちゃ〜」

「馬鹿だな……」

さなぎと今井が面白そうに怜次を見ていた。

「それじゃ！和也、怜次君、寮まで連れて行ってくれるかな？」

水音がニコツと笑いかけながら和也に言った。

「ああ、別にかまわんが……水音は帰らんのか？」

和也は刀を鞘に収めながら、無表情のまま言った。

「うん！もう一つの用事があるからね！後、今日はお兄ちゃん帰らないから、罰として、2人で晩御飯の準備しておくこと！いいね！」

水音は軽くウインクして笑いながら言った。

「それじゃ！」

水音は手を振りながら、きびすを返して早足で行った。

「さあ〜て、そんじゃ、俺達も面白いもん見れたし行くかあ、さなぎ！」

さなぎが伸びをしなげら立ち上がると今井に言った。

「ん〜そやな！そんじゃ！また明日な〜和也〜」

今井が持つてきた椅子をたたみながら和也に言った。

「お、おい……」

和也が少し困惑した顔で2人を見た。

「じゃ〜な、和也！怜次ちゃんと、運んでやれよ！」

さなぎは後ろ向きで手を振りながらさなぎとサツサと帰って行った。

「……」

「……」

その場には困惑した顔で立っている和也と、燃え尽きた様な顔で、倒れている怜次の2人だけになった。

和也は小さな声で独り言を呟いた。

「わけがわからん……」

「あゝあ、俺の巨乳天国が・・・」

怜次は肩を落として、顔を伏せたまま、とぼとぼ和也の隣を歩いていた。

「・・・」

和也はジッと前を向いたまま、無言で歩いている。

「おっぱい増刊号、女体の神秘、セクハラスメント・・・」

怜次がぶつぶつとエロ本の名前らしき物を連呼している。

和也はそんな怜次を一瞬だけチラッと見て呆れた様なため息を漏らした。

「なあ・・・和也」

怜次が無言で歩いている和也をチラッと見て言った。

「・・・なんだ？」

和也が少し間を空けた後、純白の目だけを向けた。

「まさるとに聞いたけどよ、お前、能力めちゃうくちや弱いんじゃないかなったのかよ？」

「なんだよあの火は」

まさると、とは和也に最初に能力を聞いたクラスメートだ。

和也の脳裏に何故か女の子のような力チューシエを付けて髪をオールバックにしている男の姿が浮かんだ。

和也は少し怜次の方を向いてゆっくりと説明した。

「能力は、鍛錬を繰り返すことで、ある程度の力までなら上げることができる、」

だが当然本来の能力以上のことをすれば、体力は消耗、走る時にスピードを上げれば上げる程体力が減るのと一緒に、まあ基の力が強ければ体力が減らずとも能力は使い続けれる、

簡単に言えば、元から『体力の有る人間』と『無い人間』の様な物だ、俺は『体力の無い側の人間』だかな」

和也は1度口を閉めた後、付け足すように、もう1度口を開けた。

「それに、水音が止めなければ、俺の力の負けだった、貴様はまだ

『体力の有る側の人間だ』」

和也は言い終わると、また前を向いた。

「・・・ぶっちゃけ言ってる事の8割はわかんなかったけどよ要するにあれか？練習すりゃ能力は上がるわけ？んじゃ、俺もまだ初期段階だからもつと力を上げれるって事か」

「ああ、だろうな・・・」

和也はゆっくりと言った。

「じゃあ、俺はまだ強く・・・」

怜次は嬉しそうに自分の目の前に持ってきた握りこぶし見た、嫌、それは見たというより睨んだという感じであった。

和也は、少し間を空けて迷った様な素振りを見せた後、和也はさりげなく（のつもりの要だが明らかに怜次には不信に見える）

怜次に言った

「俺も・・・一つ聞いていいか？」

「あんだよ？」

怜次はめんどくさいと言った感じに和也に顔を向ける。

「『あの子』…嫌、水音は何者だ…？」

怜次はポカンと口を空けて驚いた。

「はあ？」

「水音ちゃんは、水音ちゃんだろ？」

怜次は不思議そうに和也を見た。

「すまない、何でもない」

和也は困った様な顔をしたがすぐに無表情に戻った。

「なんだあ？さては…」

水音ちゃんのが気に何のかあ？」

怜次はいやらしい笑いを浮かべて和也の顔色を窺った

「そんなんじゃない、ただ・・・」

和也の顔に明らかに嫌そうな顔が浮かぶ、何をアホな事を言っている、という言葉が顔に書かれている。

「ただ？」

怜次は嫌そうな顔をしている和也の顔を窺いながら言った。

その瞬間、和也の顔は嫌そうな顔からいつもの無愛想で無表情の顔へと変わる。

まっすぐに道を見ているが様に見えるが、何処か別の物を見ている様な顔にも見えた。

「あれ程、基の能力の高い人間は珍しいかったのでな、少し気になった」

和也の目は変わらない、ずっとずっと寮へと繋がる道を見ていた、本当にその道を見ていただけなのは怜次にはわからない。

「水音は良い子だと思う、誰から見てもそうだろう、だが良い子だからこそ何か辛い物が見える、水音の過去や今の状況がどうなのかも知るわけも無い、だが、あの良い子の笑顔がいつか消えるのは見たくない、何でもいいから力になりたい・・・てな」

何故そう思う？怜次はそう言った。

怜次も水音の過去も状況も知らない、だが、転校してきてすぐにこんな事を思える和也が不思議だった。

和也は俯いて、顔を曇らせた。同じ様なのを知っているから、和也は小さな声で、怜次に聞こえるか聞こえないかの本当にぎりぎりの声で

水音は普通の人間よりも基礎の力、和也が先ほど言った『体力の有

る側の人間』を大幅に上回る、かなり珍しい能力者だ。
だが、この珍しい能力者は普通の能力者以上に偏見を受けることを
和也は知っていた。

ジツと怜次は和也の話を聞いてた。

和也は押し黙った怜次を見て、慌てて付け足すように言った。

「いや、悪い、何でもないんだ、忘れてくれ・・・」

怜次は突然、和也の肩に手を回し、和也に向かって満面の笑みを向
けた。

「何だ」

和也が嬉しそうに笑ってる怜次に無愛想な顔を向けた。

「俺、お前のこと嫌いじゃねえわ！」

怜次は楽しそうに、和也の肩に手を回しながら歩き出した。

「おい、重いだろが・・・」

和也は迷惑そうに怜次を払いのけようとした。

「んだよ！恥ずかしがんなって！俺たち『トモダチ』だろ！」

怜次がそういった瞬間、和也の脳裏に女性の言葉が浮かんだ。

『私達

トモダチだもんね！

』

和也は、払いのけようとした手を離し、迷惑そうに小さな声で、し
かし、少し嬉しそうに言った。

「まったく…変な奴だな…」

第二話 トモダチ - 完 -

第2話 トモダチ（後書き）

怜次君ですねえ…

俺的には1番好きなキャラで、これからも活躍してくれるでしょう！
初めての戦闘はいかがでしたか？

本来はもっと長いので、今回は戦闘とは呼べないかもしれませんが。
さなぎ君と今井君、脇役キャラですが、和也と怜次の後に親友になります。

今井君とさなぎ君の二人はくされ縁の関係

それでは、次回は第3話 苦手と懐です、以後お見知りおきを、それでは

あまた会いましょう

第3話 和也と水音（前書き）

水音と裏庭で別れた後の話、水音の用事はもう一つあった、今回はあの子の水音のもう一つの用事の話、

第3話 和也と水音

第3話 和也と水音

親父は悪魔

御袋は鬼

最初は何処にでもいる親だった

ある日

あの力を手に入れてから

兄貴と姉貴は俺を守ってくれた

兄貴に聞いた

『何でそんなにやさしい？』

兄貴は困った様に笑って

何も答えなかった

姉貴に聞いた

『何でそんなに強いんだ？』

姉貴は無表情で槍を構えながら言った

『強くなればわかる』

俺にはさっぱり解らなかった

だから

俺は

この答えを知る為に

強さを求む

「ん〜でも誰だろ？」

水音は高学等の1年1組に通じる廊下を歩きながら、きよ先生の言葉を思い返していた。

『もう一つの用事はね、水音ちゃんにある人から伝えてって言われたの』

『ある人って誰ですか…？』

『それは行ったらわかるわよ』

「わかんないなあ…」

水音はグルグルと頭の中を回転させて呼びそうな人を考えていた。

「美奈かなあ？」

ゆっくりと教室のドアに手を掛けて、少しだけ力を入れた。
ガラッ

夕日が射した赤色に染まる教室の中に居たのは、美奈ではなく、男性用の制服を着た青年だった。

（え？）

水音は少し困惑した面持ちで、言葉を探していた。

「さ・・・碇草さん」

青年は動揺した様に水音に話掛けた。

「えと…滝口…君？」

水音は不思議そうに、クラスメートでもあまり話したことの無い青年に言った。

「あ・・・あの・・・お・・・おお覚えてますか？」

滝口と呼ばれた青年は緊張した様に震えながら言った。

「え？覚えてるって？」

水音は震えている滝口を不思議そうに見ながら言った。

「だ...だから...あの...た...助けてくれた時の...」

俯きながら滝口はモジモジと震えながらしゃべった。

水音は小さく頭を傾けて、？を頭上に浮かべた。

滝口は残念そうに顔を歪め、続けて言った、

「ほら、あの時の...」

水音は思い出したようにポンスと手を叩いた。

「あゝあの時の！あの後、傷は大丈夫だった？」

「うー！うん！それは大丈夫！」

滝口が嬉しそうに言った後続けて言った。

「そ...それで今日は話したいことが...」

「話たいこと？」

水音はもう1度顔を少し傾けた。

「そ・・・それは・・・」

顔を真っ赤に染めて意を決したように、水音を見た。

「す！」

（巢？）

水音はまた頭を少し傾けた。

「す！」

（酢？）

「す...！」

（素？）

水音はオロオロしている滝口に優しくそうに言った

「ねえ、深呼吸して！ほら、何が言いたいかわかんないけど、そんなに慌てなくていいよ」

「うー！うん！」

滝口は顔を真っ赤にした状態で、胸を上下に揺らした。深呼吸をした後、もう1度、意を決した様に、叫んだ。

「ぼーぼくは！」

「き！君のことが！」

「好きだあー！！！」

滝口が叫ぶ一瞬に教室のドアが開いた。

ガラッ

「水音！探したぞー？」

そこには和也がめんどくさそうに突っ立っていた。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

3人の沈黙が夕日を照らす教室中に広がった。

今から15分前、寮内の台所にて

「だー！ー！！だから！それは砂糖！塩はこっちー！」

怜次がおたまを振り回しながら、和也に向かって叫んでいた。

「む？そうなのか？」

和也は不思議そうに手に持っている砂糖ビンを見た。

「もういい！！お前野菜切つとけ！！」

怜次はあおすじを浮かべながら叫んだ。

「ふむ、より火を通りやすくする為に小さく分割するのだな？これでも日本刀を使うものとして失敗は許されぬな、うむ任せておけ」
和也はグツと親指を立てて見せる。

「御託はいいからさつさとやれ！」

怜次は和也の説明口調にいらいらとお玉を振り回す。

（つたく、何で料理が一つも出来ねエンだよ！まあ、日本刀使いだし、包丁で切る位出来るだろ、あれ？醤油どこだ？）

怜次は小さくため息を付くと、和也に背中を向けた。

ツザツザツザツザ

（お？結構出来てるんじゃないか？）

そう思うと、怜次はゆつくりと和也の方を振り向いた。

「ぎゃああああああああ！！！！！！！！」

怜次が現状を見た瞬間、飛びのきながら叫んだ。

「む？どうした？」

和也が少し驚いたように、体を揺らし、作業を止めた。

「何やってんだよ！っていうか！野菜が真っ赤になってんじゃ…っ
ていうかお前、自分の手を見るおおお！！」

怜次は雄叫びを上げながら和也の手を凝視した。

「む？」

和也は不思議そうに、自分の手を見た。

そこには、包丁の切った後が数十箇所も見て取れた。

濃い赤が野菜やら、服やら、に不気味にこびり付いていた。

「ああ、少し失敗したが、野菜は上手く切れたぞ？」

あっけらかんと怜次に言くと、また作業に戻ろうとした。

「少しじゃねえよ！っていうか、そんな鮮血な野菜、食いたくねえし！しかも、切れてねえ！」

さっきからの音は手を切ってたのか！ああゝ！もう止める！」

怜次は慌てて和也を止めてから、あきれたように続けて言った。

「お前、もう、皿出しとけ！」

「ふむ・・・変な奴だな・・・さつきから作業を代えてばかりではないか・・・」

和也は小さくため息を付くと、腕を組んで言った。

「お・ま・え・の・で・き・る・作業がないんじゃああ！！！！」

怜次はさらにあおすじを浮かべ叫んだ。

「仕方ない」

和也はやれやれといった風に大げさに手を振りながら、怜次に背を向けた。

手を振るたびに血がそこらじゅうに飛んだ。

（何が仕方ないんだよ！！）

怜次は心の中で突っ込んだ。

「これを持っていけばいいのか？」

和也は台所に置いてある、数枚重なった皿を持とうとした。

「ゆっくり持ってけよ！」

怜次は後ろから、ふらふらと皿を持っている和也に言った。

「む？」

和也が皿を持ちながら後ろを振り向いた瞬間、自分の足にもつれた。

「わ！わ！」

怜次が助けようとしたが、遅かった。

和也は無様にこけ、皿は宙を舞った。

ガシャーン！！！！

皿の割れた音が寮内に響いた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

割れた破片を見ながら、二人が沈黙を続けた。

沈黙を先に破ったのは怜次だった

「こおんのお！！！！クソ白髪ああああああああ！！！！」

「もういい！お前は、水音ちゃんに醤油が何処にあるのか聞いて来い！！」

・
・
・
・
・
・

そして、水音を呼びにきた和也が、現在に至る。

夕暮れの照る教室に3人の影が無言で立っていた。

（な、何で！？い、今のつて…こ、こここ告白！？

それで何で和也がここに！？）

水音は自分の髪のように顔を薄赤く染め、驚いていた。

先に沈黙を破ったのは和也だった。

「あ？あゝ・・・悪い・・・邪魔したな」

そう言うのと和也は引き返そうとドアに手を掛けた。

「ま！待って！！」

水音は慌てて、和也の腕を取り、教室の隅まで引張っていった。

「どうしてここににいるのかな」

水音は小声で和也に問い掛けた。

「うむ、醤油の場所を聞きに来たが、邪魔だったようだな」

和也も水音に揃えて声を落とした。

「邪魔とかじゃなくてえゝ！」

水音は顔をさらに赤く染めて、言葉を搜していた。

「もう！外で待ってて！！」

少し声が上がり気味で、和也に言った。

「？変な奴だな」

和也は、いつものペースで、ドアに歩き出した。

ドアに行く途中、俯いていた滝口と目が合った。

気まずそうに、すぐに滝口は、和也から目を離れた。

和也が出て行く音と共に、滝口は水音をチラッと見た。

二人共まだ顔が赤い。

「そ・・・それで・・・返事は・・・」

おずおずと滝口は言葉を出した。

「えと、ご、ごめんなさい！」

水音はちょこんと頭を下げて言った。

「な・・・」

言葉にならない様に呆然と、滝口は目を丸くした。

「何で！好きな人でもいるの！？」

滝口はさつきとは裏腹に、必死の形相で水音を見た。

「い、いないけど」

滝口の変わりように、水音は驚いた。

「じゃあ何で！僕は頭もいいし！運動だって出来る！顔も悪くない

し、お金だっていっぱいある！！」

滝口は大声で叫びながら、水音に1歩近づいた。

「僕に悪いところは無いじゃないか！！」

水音は動揺しながら後ずさった。

ドンッ！！

滝口が水音を押し倒した。

水音の華奢な体が、地面に叩き付けられた音が、教室中に響いた。

「キヤア！」

小さな声と共に、衝撃で、ツインテールにしていた両端の髪止めが取れ、

赤い、長い髪が床に散りばった。

水音は小さく震えていた

「答えるよ!!!!」

滝口は馬乗りになり、怒鳴った。

ガラツとドアの開く音が再びした。

「どうした？」

音を聞いた和也が、ワンテンポ遅れて入ってきた。

声は冷静だが、少し驚いた様に見える。

「和也あ！」

水音が和也に救いの目を向けた。

「！」

血走った目で滝口は和也を見た。

和也は、二人を見た後。現状を把握し、水音の姿を見た。

水音は髪を散らばせ、泣きそうな顔になっていた。

「!!!!!!」

和也の背中に戦慄が走った。

「な・・・なんだよ・・・」

滝口は警戒する様に、和也を見た。

「・・・れる」

和也はうつすらと、唇を動かし、小さな声を出したが、

水音と滝口には聞こえなかった。

「何だつて？」

滝口は、まだ馬乗りの状態で和也に言った。

「離れる!!!!」

和也の声は暗く、恐ろしいまでに、ドスが聞いていた。

和也の純白のいつも半開きの目は釣り上がり、恐ろしい気配を漂わ

せている。

誰にでもわかった、和也は怒っていた。

滝口と和也の目が合った

その時、滝口の背中に薄寒い感覚が走った。

「ひい！」

滝口はすぐに、水音の上から飛びのいた。

（何？これ？）

皮膚に刺さる様な、どす黒い殺気を水音も感じた。

滝口は動けなかった、蛇に睨まれた蛙の様に足を震わせていた。

（何だ！？こいつは！？）

滝口の人間の残り少ない本能が語りかけていた。

『こいつは危ない、殺される』

滝口の頭の中で何度も何度も声が響く。

『殺される、殺される、殺される、逃げろ、逃げろ、逃げろ、逃げろ』

和也が睨みながら1歩滝口に近づく、同時に滝口が1歩後ろに退く。

和也がまた近づく、また1歩退く。

「う、うわあああああああああ！！！」

滝口が間髪入れずに、ドアに向かって走り出した。

「ううわあ！？」

足がもつれたのか、バランスを崩し、見事に頭から落下した。
ガン！！という嫌な音が教室中に響く。

運悪く机の角に頭をぶつけて滝口は意識を失った。

「大丈夫か？」

和也は気絶した滝口を無視し、水音に手を貸した。

「え？あ・・・ありがと」

水音は和也の手を取って起き上がった。

散らばった、赤い髪が少し水音の顔に掛かる。

和也は目を合わせない様にそっぽを向いている。

水音は不思議に思いながらも、和也の顔を覗こうとする。和也が慌てた様にまたそつぽを向く。

和也の一瞬見えた顔が耳まで真っ赤になっていた。

水音は困惑した様に、問い掛けた。

「どうしたの？」

「なんでもな・・・いいから髪を止める・・・」

まだそつぽを向きながら和也は言った。

「・・・うん？」

不思議に思いながらも、散らばった髪を両方で手でぐくつた。

それと同時に、さっきの真っ赤な顔はどこへやら、

いつものめんどくさそうなアホ面が水音を直視していた。

「・・・」

水音が変な顔で和也の顔を見た。

「・・・どうした？」

和也が少し頭を傾けた。

水音が手でぐくつた髪を放した。

水音の赤い髪がまた、はらりと落ちた。

それと同時に和也の顔が真っ赤になり、横を向いた。

「・・・」

水音がまたジッと和也を見た。

水音がまた手で髪を両方にくくる。

和也の顔がまたすぐにいつもの無表情に戻る。

水音がぐくつている手を放す、

和也がまた顔を赤くしてそつぽを向く。

（お・・・面白い・・・）

水音はこの時はっきりとそう思った。

「さて、冗談はこの位にして・・・どうしよう・・・」

水音は髪を止めながら不安そうに気絶している滝口を見た。

「水音、お前は先に外で待ってる」

いつもの無表情に戻った和也は、無機質な声で言った。

「でも・・・」

水音はまだ不安そうにしながら抗議する様な目を和也に向けた。

「お前がいれば余計ややこしくなる・・・違うか？」

和也は倒れている滝口に近づきながら言った。

「う・・・わかった・・・」

水音は少しむくれてからドアに向かった。

開く音と閉まる音が連続で聞こえた。

和也は水音が部屋を出るのを確認してから、滝口の所でしゃがみこんだ。

「おい大丈夫か？」

和也は滝口のほっぺを摘みながら少し心配そうに言った。

「う・・・ん？」

滝口が小さな声を出した。

「お、起きたか？」

和也が滝口の顔を覗きこんだ。

「！！！！！！」

突然、滝口はガバツと跳ね起きた。

丁度、顔を覗き込んでいた和也の顔面に滝口の頭が食い込んだ。

「ごほあ！？」

和也は妙な声を上げ、鼻血を出しながら吹っ飛んだ。

和也は「ぐぬおお・・・」と嗚咽を出しながら顔を抑え、痛みに耐えていた。

「う、うううごめんよー」

滝口が慌てて和也に謝る。

和也は、顔を抑えるのを止め、

真剣な面持ちで滝口を直視した、まだ鼻血は出ている。

滝口は、和也の純白の視線から目を逸らした。

和也が何を言いたいのかわかったのだ。

「僕はとても酷いことをしたね・・・」

滝口は誰に言うでも無く、悲しそうに、うつむいた。

「……………」

和也はジッと滝口を見ていた。

「僕は、僕は、何て酷いことを……！！！」

滝口は唇を強く、噛み締めながら、とても悲しそうに言った。

和也はスツと立ち上がると、俯いている滝口に背を向けて言った。

「俺から水音には言っておこう、大丈夫さ、

あいつは優しいからきつと許してくれるんじゃないか？」

本当にどうでも良さそうという風にブツキラボウに言った。

滝口は顔を上げ、不思議そうに和也の背中を見た。

「君は……？怒っていたんじゃないのかい？何故、僕を助ける様な行動を？」

僕は赤の他人なんだよ？」

滝口は本当に和也の行動がわからなかった、

さっきまで、あんなに怒っていたのに、今は怒っているようには見えない。

「さあーな、」

和也はめんどくさそうにドアに向かって歩いた。

和也は歩きながら小さな声でポツリと言った。

「本当に必死なアンタを、自分に被せて見たのかもナア……」

懐かしそうに何処を見るでもない空中に目を向けていた。

「え？」

滝口にはよく聞き取れなかった。

ドアの開く音が教室に響く。

「じゃーな、ま、水音とは頑張れよ」

和也は顔だけ振り返りながら、ほんの少しだけ笑って見せた。

「待つ……………」

ピシャッ

滝口が止め様としたが、その時には和也はドアを閉めていた。
「……………」

滝口はその場で呆然と立ち尽くしていた。

（あの人は・・・何だったんだ？）

滝口には、和也の最後に見せた、小さな微笑みがとても悲しそうに見えた。

（あの人は・・・怒っていたんじゃない、悲しんでいたのか？でも・・・なにを・・・？）

夕日の射す教室の中、滝口は和也が出て行ったドアをジッと見つめていた。

「・・・待たしたな」

和也が無表情で水音の後ろに立っていた。

「うわぁ!？」

水音は慌てて飛びのいた。

「む・・・どうした？」

和也が少し眉を上げる。

「い・・・いきなり、後ろに立たないでくれるかな、心臓に悪いなあ・・・」

水音は胸を撫で下ろした。

「悪い」

特に悪かったとは思ってない様な口ぶりだ。

「もういいよ」

水音はフウツと小さくため息を流した。

「ほんつつつとに昨日といい、良い事無いナア・・・」

水音は昨日の朝から今日までの事を思い出していた。

「っていうか何で鼻血出てるの？拭きなよ」

水音はそう言うと、ハンカチを出した。

「本当に、良い事無かったのか？」

和也は鼻血を拭きながら言った。

「無かったよ、和也はあったの？」

水音は和也の不振な質問に頭を傾けた。

「ああ……」

その時、一陣の風が吹いた。

水音の髪がフアツと少しだけ浮いた。

「俺は水音と出会えた」

優しく和也の目を見つめ、それは何かを思わすような……

水音は一瞬だけ和也の純白の目が優しく光ったように見えた。

「和也……」

「嫌、くさいよ」

水音は呆れた顔で、和也に言った。

（あゝ、コイツは鈍感なんだな……）

和也の顔がすぐに元に戻る。

試しに言ってみた言葉はあっさりと返されてしまった。

「ほら、怜次君待ってるよ」

告白をされた後とは思えない様なのんびりとした口調で先に歩き始めた。

（大丈夫だと思うが……まあ一応言っとくか）

「アイツのこと許してやってくれよ」

和也の無機質な言葉が水音の心を揺らした。

『アイツ』、滝口の事を理解したのか、足を止めた。

「うん、わかってるよ」

少しだけ振り返ってニツと笑った。

（……？わかってる？）

水音の言った言葉を和也は理解できなかった。

水音は歩き始めながら、淡々と話始めた。

「滝口君はあんな事する人じゃないもん、きつと魔がさしたただけだよ」

水音はあの時の事を簡単に言った。

和也は予想外の言葉に驚いた。

その時、言葉の意味がわかった。

（ああ・・・そうか、水音は優しいんだ）

「ほら！行こう！！」

水音は走り出した。

水音の赤いツインテールがかわいらしく小さく揺れた。

和也は水音の髪がストレートになった時を思い出していた。

「ったく・・・似すぎだろ・・・」

呟いた独り言が、妙に心に響いた。

あの時の笑顔があ那时的悲しそうな顔があ那时的怒った顔が和也の中である人をおぼろす

「沙羅・・・」

和也は水音の後を追いつけた、

水音の後姿に。を見たから

おまけ

帰宅した寮内にて

醤油が見つからないので、怜次が困っていたが、

水音が、自分が作ると言ったので、怜次は水音に甘えさせてもらった。

青い顔をした二人、もとい、和也と怜次がテーブルに座っていた。

「おい、なんだこれは……」

「嫌……俺に聞かれても……ナア」

そのテーブルの隣りで、嬉しそうにエプロン姿の水音が立っていた。大皿に如何わしい食卓がテーブルに置いてある。

「おい……これは何だ」

和也が今度は水音に同じ質問を出した。

「何って？スープだよ？」

水音はそう言うのと黄色い汁が垂れながら、何かウネウネと動いている、茶色い物体を指差した。

聞き間違いか、「殺してくれ……」という不気味な声がする。

（おいおいおいおいおい、これ、料理って言っちゃ駄目だろお）

（同感だな、っというよりどうやって作ったんだ？

しかも液体が何故、固体（水音の料理）になっっているんだ？）

小声でボソボソと二人が話し合っている。

「前よりも上手く出来ただけど……」

（前にこれ以上の核兵器を作り出したのか？）

二人は心の中で同時に突っ込んだ。

「どうしたの？食べないの？」

キラキラと期待と希望に満ちた目がジッと二人を見ていた。

「……」

「……」

この時程、二人が同調したことはなかったであろう。

（うわぁ……どうしよう……）

二人共同時にさらに顔を青ざめた。

その後、

二人分の叫び声が寮内に響きわたった。

第3話 和也と水音 - 完 -

第3話 和也と水音（後書き）

更新遅かったー！

えー：ごめんなさい、小説を見ている人は少ないだろうけど、今回は、水音と和也のちよつとした関係が少しだけ出たと思います、和也だけの不思議な感情世界、怒ったり、悲しんだり、感情があるようで無い、悲しい存在だと私は思っています、これからわかっていくと思いますので、どうかこれからもよろしく願います！！
それでは 第4話 初依頼と黒猫 で会いましょう

第4話 初依頼と黒猫と、（前書き）

水音の寮に和也、怜次が来て一週間が経った。

そこで初めての依頼が突然来た、その依頼とは…？

第4話 初依頼と黒猫

第4話 初依頼と黒猫と、

天気の良い昼頃、学校の庭にある木陰の下でさなぎ、今井、怜次の3人が食卓を広げていた。

「和也は？」

さなぎが弁当に箸を付けながら二人に聞いた。

「ああ、何でも放送委員の仕事があるんだと、」

さなぎのすぐ隣りで今井がのんびりパンを食べながら言った。

「何だ？アイツもう委員会に入ったのか？」

イチゴ牛乳のパックを持ちながらかたわらに長い白い布で覆われた棒を置いている男、怜次が少し驚いた表情を作った。

「和也が来てもう1週間もたつんやしねー」

さなぎがコロコロと笑った。

「それもそうかあ……」

ジューと音を立ててイチゴ牛乳を吸い込む音がした。

「そろそろじゃないか？」

今井がそう言った瞬間、学校内のスピーカーに音が響いた。

ガッ、ガーピー

妙なノイズを響かせながら、スピーカーのスイッチが入った事がわかった。

『あーあーこれでいいのか？』

聞き覚えのある無機質な声が3人にも届いた。

『はい、大丈夫です』

女の子の幼い、可愛い声、和也の声の後ろから聞こえた。

「あ？中学生か？」

怜次がボウツとしながら、幼い声を耳に入れた。

「まーこの学校は高等部と中等部が一緒の建物にあるしな、委員も合同でやってんだろ」

フーンと、怜次が今井の言葉をどうでもよさそうに聞きながらイチ

ゴ牛乳をさらに吸った。

『あーあー、うん』

またしても、和也の無機質な声が響いた。

『お前の子は預かった』

ブボア！！

怜次は口からイチゴ牛乳を噴出した。

さなぎは一瞬ポカーンと口を空け、

今井も大きく目を見開いた。

「ゲツホゲツホ！あの馬鹿、何やってんだあ！？」

怜次はむせながらスピーカーを見た。

『わ！わ！先輩違います！それは警察同好会の資料です！』

可愛らしい小さな声がスピーカーから響いた。

『む？じゃあこれか？』

『えー、あなたは神を信じますかー？』

間の抜けた声がまた響く、

『先輩！それはキリスト新同好教会の資料です！』

「何やってんだ・・・？あの馬鹿は」

何か妙なコントを聞きながら、口から垂れていたイチゴ牛乳を拭いた。

「楽しそうやねー」

さなぎが面白そうに目を輝かせる。

「・・・」

今井はアホらしそうに、ふたたびパンに噛り付いた。

『ぬお？』

『ドターーンガシャアアンー！！』

何かが倒れたような音と割れる様な音がスピーカーから聞こえる。

『きゃあああ！！先輩！ガラスが！頭に刺さってます！！』

女の子の悲鳴な様な声が学校中にこだました。

『む・・・心配するな』

『頭から血がボタボタ出てるのに心配しない人がいますかあ！！』

（大変そうだな・・・）

いつもなら女の子の立場にいる怜次は後輩の女の子に同情した。

『それよりスイッチ入れっぱなしじゃないのか？』

『わわ！！ええっと、お・・・お昼の放送は終わります』

ツプツン・・・

スピーカーの電源が切れた音が少しだけ響いた。

放課後、校門前

「あつはつはつはつはつはつは！！！！」

美奈は可笑しそうにケラケラと笑っていた。

「おい、笑いすぎだろ」

和也がムツと顔をしかめる。

「だ！だって！普通カーペットにひっかかって扱ける人いないよ」

美奈はまだ腹を抱えている。

「てか頭の血止めるよ」

怜次がいぶかしそうに頭にガラスの刺さったままボタボタ血を流しながらの和也を見た。

「後輩の子・・・可哀想に・・・」

怜次が悲惨そうに涙を拭う。

「そつえば詩織の奴何かえらく疲れた顔してたな」

和也は歩きながら手を顎に当てながら、少しだけ顔を傾けた。

「詩織？」

怜次が和也の口から女の子の名前が出たのを不信に思った。

「ああ、同じ放送委員の後輩だ、今日一緒に放送をした子だ」

「ふーん・・・ってやっぱ女の子かよ！！可愛い！？可愛い！？」

怜次が目を輝かせながら和也を見た。

「可愛い」

和也是無表情で特に感情もこもっていない言葉を吐いた。

「・・・」

「・・・」

（即答するか普通・・・）

怜次と美奈は同時に思った。

「そ・・・そういえば水音は？」

怜次が話を代える。

「さあ？何か電話してたけど」

美奈が簡単に答える。

「あ！ほら来た」

美奈はそう言つて校門を指さした。

そこに携帯電話（生徒手帳兼）を握り締めながら慌てて走ってくる水音がいた。

「ねえねえ聞いて！聞いて！」

水音が嬉しそうに3人に近づいてきた。

「うわ！和也まだ血出てるの！？早く止めなよ！！」

水音は怜次と同じ様に即効で突っ込む。

「まあ、それは置いといて、どうした？」

「いや、置いとくのかよ！！」

怜次が和也に連続で突っ込みを入れた。

「それで？」

美奈が催促した。

「あ、うん！請負人の仕事だよ！！」

「へー、でも何で？」

「「何で？」」

美奈の言葉に怜次と和也が疑問をぶつけた。

「仕事だから当然来るもんじゃないのか？」

和也が不思議そうに眉を少し上げた。

「あー水音の所はね、元々二人だけだった寮だから殆ど依頼は来ないんだ」

「じゃあ学校とかの金は？」

怜次も少し眉を上げる。

「風間さんがフリーで請負人やってるからね」

「風間？」

和也が疑問を寄せる。

「あー水音ちゃんの兄貴だ、請負人界では結構有名な人なんだよ」

怜次が白い布で包んだ槍を肩から下ろしながら言った。

「ふーん」

和也が目細めた。

「じゃー依頼、頑張んなよー!!」

美奈はそう言うのと、ブンブンと手を振りながら校門に向かって走っていった。

「うん！また明日ー！」

水音もブンブンと手を振った。

「さて話は戻るけど」

「依頼だって、さっき電話来たんだ、

しかも特別にある人が手伝ってくれるって！」

水音がそう言った瞬間、水音の携帯から着メロが流れた。

探し物はなんですかー 鞆の中も 机の中も

ツピ、

水音が携帯のスイッチを入れる。

「はいもしもし？」

（井上揚水・・・）

（古ー!!）

二人が水音の着メロに違和感を感じているのを無視して水音は1言、2言、話していた。

「はい、」

水音は会話の状態で和也に携帯を渡した。

「？何だ、」

和也は腕組みを外して水音の手のひらに置いてある携帯を見る

「さっき言った特別に手伝ってくれる人！和也と話したいって」

「・・・」

和也が不信そうに携帯をもう一度見てから手に取った。

「何だ・・・」

和也が聞くほうを口の近くに当て、声を出す方を耳に当てた。

「和也・・・それ携帯、逆」

水音は和也が携帯を持っている手を指差した。

「む？そうなのか？」

和也が無表情で不思議そうに携帯を見て首を傾げた。

『アツハツハツハツハツハ！』

携帯から楽しそうな男の声が響いた。

「お前・・・」

和也の声に嫌そうな声が混ざった。

『相変わらず機械にはうといな！和也！』

また楽しそうな声が携帯から聞こえた。

「己宮内か？^{みくない}」

和也が嫌そうに声を荒げた。

「あれ？和也、己宮内さんと知り合いなの？」

水音が驚いた様に言った。

「己宮内・・・ってあの請負人本部、機械・科学特別支部部長の！？」

怜次も目を見開いて驚いた。

「何だ・・・？それ」

和也が怜次の言葉に疑問を投げ掛けた。

「お前、己宮内さんと知り合いなのにそんな事も知らないのか！？
現在の請負人の武器や道具は全部この人が作ってるんだぞ！！本来
ならもつと凄い人なのに請負人界に留まっている変わり者とも言わ
れてる人だぞ！」

『変わり者って・・・そんな風に呼ばれてたのか』

携帯から何か悲しそうな声が漏れた。

「何だお前そんな凄い奴だったのか？」

『オイ、色々手伝ってやってたのにそりやないだろコラ』

「でも和也が己宮内さんと知り合いだったのはびっくりだね」

「そーだぞ！お前超有名人だぞ！」

怜次も奮闘気味に声を荒げる。

「で、その有名人が何でいきなり手伝ってくれるんだ・・・？」

和也の声に射すような冷たい声が混じった。

「そういえば・・・水音ちゃん依頼ランクは？」

「Fだよ、確かにFランクでそんな有名人が手伝ってくれるのは変
かも・・・」

『あー・・・』

さつきまでの楽しそうな声が突然困った様に小さくなった。

『相変わらず勘がいいな・・・だがこれは機密事項だ、黙って従っ
てもらう、いいな？』

己宮内の声に少しだけドスの聞いたような声が入った。

「・・・ああ、分かった」

また和也の声が無機質に戻る。

『分かったならいい、じゃあ今後の行動はメールで送る』
一瞬間が空いた。

『和也・・・』

「何だ」

『沙羅さんの事だけどさ』

その瞬間、和也の目が大きく見開かれ気持ち悪いまでの殺気が漂っ

た。

「!？」

水音が和也の豹変に驚いた。

(これは・・・あの時の射す様な・・・殺気・・・)

水音は夕日のクラスでの告白の時の事を思い出していた。

「ちょ、水音ちゃん!？」

怜次が気分が悪そうに顔を顰めた水音の肩に手を置いた。

「己宮内・・・」

いつもの無機質な声とは違うどすぐろくかすれた、低い声が水音の耳に入った。

(やだ・・・!また!何・・・これ!)

水音がひざを地面につけた。

普通の人よりも感覚が鋭い水音はもろに和也の殺気を浴びていた。

それは丸裸で矢を全て受け止める事と同じ様な意味を持つ。

「水音ちゃん!？水音ちゃん!!」

怜次が水音を何度も呼ぶ。

それを無視し和也はまた重苦しい口を開ける。

「今・・・その話をする必要はない」

『・・・!嫌、そうだな・・・悪い、じゃな』

携帯が切れた音だけが和也の耳に残った。

「何やってんだ？」

携帯を切って振り向いた所に気分が悪そうにしている水音と心配そうにしている怜次が居た。

いつもの無愛想で眠そうな顔

「え?・・・うん何でもないよ」

水音が慌てて笑った。

「水音ちゃん・・・今のは・・・」

怜次が心配そうに水音を見た。

「大丈夫・・・うん、大丈夫」

水音はゆっくりと言って、もう1度言い聞かせるように言った。
「で？どうだった？」

水音が話を戻した。

「ああ・・・今後のことはメールで教えるってさ」

和也は携帯を水音に返しながら言った。

「ん・・・わかった」

水音はジッと和也を見た。

「なんだ？」

「・・・なんでもない」

和也はさっきまでの恐ろしい殺気からいつものめんどくさそうな顔付きに戻っていた。

「それじゃあ行くか」

和也はサッサと先を歩き出した。

「和也・・・お前は・・・一体・・・」

怜次がジッと和也の背中を見つめた。

30分後、寮内にて、

「それじゃあ己宮内から来たメールをまとめるか、」

「『赤い首輪の黒猫を探せ』」

「・・・は？」

怜次が眉をしかめる。

「うん、これだけ・・・だね」

水音も困ったように笑う。

「嫌々嫌々嫌々和也さん？どゆことよ？」

ブンブン顔の前で手を振りながら突然礼儀正しい言葉で聞いた。

「だから『黒猫探せ』って事だろ」

腕組みをしながら和也は言った。

「フツザケンナアアアア！！！！請負人のフランクでもこんなの
ねーよ！！請負人は何でも屋じゃねーよ！！」

怜次は体を小刻みに揺らしながら叫んだ。

「まあ何でも屋みたいなもんだろ」

「そうかもしれないけどさー!」

怜次はぶつくさと頬を膨らませた。

「まあいい、そんなじゃ行くか初依頼だ」

和也は立てかけていた刀を手に取った。

「あれ？武器いらねーだろ？猫探しだぜ？」

「嫌、持って行ったほうが良い、何かわからんがー・・・嫌な予感がする」

「フーン・・・じゃあ俺も持つてくか、」

そう言うと、怜次は同じように立てかけていた槍を手にした。

「それじゃ行こっか」

水音が先に玄関に向かった。

賑やかな商店街、歩いている人達の殆どが能力者であり学校の生徒であるのが制服を着ている事で分かる。

「探すつつつても学校内の町何だな」

和也がジッと地図を見ながら言った。

「まあ、学校から外に出る依頼も結構あるけどFランク内は大体、学校内だ」

和也の右を歩いている、制服姿の重そうな槍を背中に背負った怜次が淡々と答える。

「外に出る場合や、依頼で能力を使う場合はちゃんと許可を取るんだよ？」

和也の左を歩いている、同じく制服姿の水音が言った。

「フーン・・・」

和也はどうでもよさそうにまた地図を見る。

「つかお前ずつと地図見てるけど何かあんのか？」

怜次が和也の持っている地図を覗き込む。

「ああ、猫がいそうな所に目星を付けている、今判ったのは三つこの真ん中の大きな池、そして次はこの町、唯一のスーパー、最後はこの商店街だな」

和也は地図に赤ペンで丸を付けた所を次々と指した。

「まースーパーと商店街は食いものの倉庫だしな、解るんだけどよ、池つてのは何でだ？」

怜次が覗き込みながら地図の池の部分を指さした。

「動物つてのは人間より敏感でな、空気の状態等で水の位置がわかる事があるそうだが、食物もいいが水も欲しいだろうしな、ここは絶好の場所だ」

「ほお、よく知ってるなあ」

怜次が関心したように腕を組む。

和也はピタッと2つの分かれ道のところで止まった。

「どうした？」

「？」

怜次と水音が不思議そうに和也えを見た。

「ここで一旦別れる、片方の道はスーパー、俺はスーパーの方に行く、お前ら二人は広い商店街に行ってくれ、」

そう言うのとサッサと先を歩き始めた。

「あ！おい」

怜次が慌てて止めようとしたが、和也は後ろ向きで軽く手を振っただけだった。

「和也・・・」

水音はジッと和也の後ろ姿を見つめた。

商店街のベンチで一休みしている二人。

「ったくよーアイツもわがままだよなー」

怜次が怒った様に頬を膨らませる。

「・・・うん」

水音は一瞬だけ見えた和也の悲しそうな顔が気かりだった。

午前2時 踏み切りーで

怜次の携帯から着メロが流れた。

「はい、もしもし」

怜次が携帯をとった。

（BUMP・・・なんてマニアックな・・・）

水音が心の中で突っ込む。

『や、怜次だったっけ？』

お気楽な声が携帯から漏れた。

「己宮内さん！？てか何で俺の携帯番号しってんすか」

怜次が驚いた様に目を丸くする。

『まーそれは置いといて、どうよ？依頼の方は』

「まだ探してる途中つすよ」

『そうか・・・和也は？』

少しだけ声色が変わる。

「？、今は俺と水音ちゃんだけつすよ」

怜次は不思議に思いながらも答えた。

『そうか、じゃあ2人に言いたいことあるからスピーカーにしてくれ』

怜次が言われるがままにスピーカーボタンを押した。

『や、水音』

己宮内の声が水音に届く。

「こんにちは、己宮内さん」

水音が軽く会釈する。

『君達を和也の友達と見て、聞きたいことがある』

少し深刻そうに声色がまた変わる。

『君達は和也の事をどう思う？』

「え？」

「は？」

二人が同時に首をかしげた。

（もっと大事な事、聞くと聞いたのに）

「親友だ！」

怜次はグツと携帯に向かって親指を立てて即答した。

（単刀直入だね・・・）

水音が苦笑した。

『水音、君にとつては何だい？』

「へ？私・・・ですか？」

水音は何も考えていなかった。

（私にとつて・・・和也は・・・）

（何だろう？）

一瞬だけ水音の中で妙な間が出来た

「友達・・・です」

その言葉は何故か少し重く感じた。

『そうか、だったら二人にお願いがある

あの馬鹿を支えてやってくれないか？』

「？」

「？」

二人がまた同時に首を傾げた。

『あいつは・・・不安定なんだよ』

「不安定？」

水音が不思議そうに言った。

『ああ・・・あいつは不安定なんだ・・・君達は突然和也が変わったのを見たことはないかい？』

「・・・」

水音は夕焼けの教室の中の出来事を思い出していた。

「・・・・・・・・」

怜次もまた、先ほどの和也を思い出していた。

『あるんだね・・・・・・・・』

二人の沈黙を無視して己宮内は話を進めた。

『あいつは不安定なんだよ・・・・・・・・』

己宮内はまた同じ事を言った。

『泣いたり笑ったり怒ったり、・・・・あいつにはその感情全てが不安定なんだ・・・・、いつも冷静に見せるのは、弱点を見せない為だ、それとも、もつと別に理由があんのかね』

己宮内の言葉は感傷に浸っていた、優しく、悲しく、複雑な感情が見え隠れしていた。

『だから、君達で支えてやってくれるかい・・・・・・・・？』

「当然っすよ！！」

怜次はニツと笑った、

「な！水音ちゃん！！」

怜次がそう言っただけで水音を見た。

「え？あ・・・・・・・・うん」

水音が一瞬戸惑った様に頷いた。

『頼んだぜ』

嬉しそうな声が電話から響いた。

それだけ言っただけで、電話が切れた。

少し不信に思ってから怜次が携帯をポケットに戻した。

「それじゃあ猫探しの続きと行きますか！」

怜次がツスとベンチから立ち上がった。

「・・・・・・・・」

水音はまだ座っていた。

「どうした？」

「和也は・・・・・・・・何なんだろうね・・・・・・・・」

水音は俯きながら重苦しい声を出した。

「・・・俺はアイツが何だろうと友達だと思ってる」
ツスと水音が顔を上げた。

「あいつは俺の親友！それ以上でも以下でもない、」
怜次は一息空けるとニツ笑った。

「だろ？」

水音もベンチから立ち上がった。

「そうだね、行こう！」

（怜次君の言うとおりだ、和也は私の友達だ）

「お、和也！おーい！」

和也が商店街の入り口から歩いて来ていた。

怜次がブンブンと手を振った。

和也も気付いたのか軽く手を上げた。

「こっちは駄目だ、そっちはどうだった？」

和也は腕組みしながら2人に言った。

「まあ今の所、目撃はせんな」

「うん、黒猫は見てな...」

水音が1部の部分を直視しながら固まった。

「...？」

二人が不思議に思いながらも水音が直視していた部分を同時に振り返った。

赤い首輪をした黒猫が路地の所でこっちを見ていた。

「いたーーーーー！！」

怜次が叫ぶと同時に3人が猫に向かって一斉に走り出した
黒猫も走り出した。

怜次は重い槍を持ちながらも、ずばぬけた運動能力でぎりぎり三人の最後尾に付いていた。

それでもかなり速いスピードで走った。

一番前を和也が、そのすぐ後ろに一生懸命和也に付いて行こうとする水音がいる。

「ツクツソー！！あの猫早エーな！！」

怜次が走りながら言った。

猫が音と共に塀に飛んだ。

「ツク…」

和也も慌てて塀に飛び乗った。

「わ！わ！」

水音も慌てて飛び乗る。

「フベエ！？」

怜次がタイミングを逃してモロに顔面から壁に当たる。

「あんのお！ク！ソ！ネ！コオ！！」

鼻血を出しながらすぐに塀に飛び乗った。

（確かに早いな・・・）

和也がそう思った瞬間、猫が立ち止まった。

「ぬお！」

和也も慌てて止まった。

「つとつとつと！」

塀の上で何とかバランスを取った瞬間、水音が後ろから飛び込んできた。

「キヤア！急に止まれちゃ…」

二人は仲良く塀から落ちた。

ドオン！

「痛い…」

水音が尻を摩りながら涙目で言った。

「水音・・・重い・・・」

水音は和也の上に乗っていた。

「ひゃ！ごめん！」

水音が慌てて飛びのく。

「何だお前『以外に重いんだな』」

和也の言葉に水音が敏感に動いた。

「ねえ！それ、どういう事！？私太ってないよ！？むしろやせたよ！？やせたんだもん！！」

水音が和也の胸倉を掴んでグワングワンと揺らした。

「おい！何してんだよ！早く追いかけんぞ！！」

追いついた怜次が塀の上から叫んだ。

「！、怜次後ろだ！！」

和也が叫んだ時には一瞬、遅かった。

「え？」

怜次が振り向いた先にはとてもいい笑みを広げている黒猫が座っていた。（怜次にはそう見えた）

黒猫が自分の肉球で怜次のふくらはぎを軽く押した。

「うわあ！」

怜次がバランスを崩し、水音と和也が倒れている所に落ちて言った。

「ぎゃああああああああああ！！！！」

怜次の叫び声が響いた。

「やばいな」

和也ものんきな声を出した。

「ふえ？」

水音は今気付いたようだ。

ドオン！！

音に驚いた小鳥が何羽か鳴きながら飛んで行った。

「イツテエエ……」

水音に乗っかっている怜次が苦しそうな声を上げた。

「重い」

更に和也の上に乗っている水音も苦しそうな声を上げた。

「お……重……早……ど……け」

1番下になっている和也が死にそうな声を出した。

「あんの猫」

怜次はワナワナと震えていた。

「お尻まだ痛い・・・」

水音も悲しそうな声を出した。

「確かに頭の良い猫だな」

和也は体に付いた砂を落としながら、立ち上がる。

「次こそは！！」

怜次は走り出そうとした。

「待て」

和也が怜次の首根っこを引っ張った。

「グエ」

怜次の首が綺麗に絞まり、嗚咽が漏れた。

「何度やっても同じだろうな・・・こちらも唯追いかけるだけじゃ駄目だ」

「ちよつと・・・和也、怜次君聞いてないよ・・・？」

青い顔をして倒れている怜次を水音は心配そうに見ていた。

「手筈通り、怜次ぜつつつつたいに！！猫を見逃すなよ」

和也が腕組みをしながら怜次に言った。

「おうよ！！安心しな！！」

怜次がビシッと和也に親指を立てて見せた。

（こいつの場合、途中で見逃したら迷いそうだしな・・・）

「それじゃ一旦ここで別れるぞ！」

「うん！」

「おう！」

水音と怜次が同時に頷いた。

黒猫はせまい路地裏で走る足を止めた。
クルツと首を少し回し振り向いた、さっきの追いかけてきた3人組
はいない。

疲れたように腰を下ろした、

その時、もの凄い音と共に後ろからうつすらと影が浮かんだ。
音が大きくなるにつれて影が濃くなっていく。

影は長い棒を持った先ほどのアホっぽい顔をした青年だった。

何か青年が叫んでいる。

「待て待て待て待て待て待て待て待てエー!!」

もの凄い勢いで怜次は走っていた。

そこまで連続に言わなくても妙なスタントなぞ出ないが怜次はとり
あえず叫んだ。

黒猫は俊敏に気付くと立ち上がり、走り出した。

「待ててて!!」

怜次と黒猫の追いかけてこが始まった。

黒猫との距離は約2mと少し、差は縮まらない。

黒猫が左に曲がろうとすればすぐに怜次が左に回り行かせない、
右に行こうとしても同じ事を繰り返した。

路地裏からゆっくりと森林に近い背景になって来ていた。

約10分は経ったか、怜次にうつすらと汗が滲み、息も絶え絶えで
ある。

猫が振り向いた。

怜次には猫がいやらしく笑った様に見えた。

「あんのお・・・ツゼエ、クソ・・・ハア・・・ネコオ・・・」

苦しそうに独り言を漏らし、死ぬ気でスピードを上げた。

路地裏の出口が見え太陽の光で光っている様に見えた、黒猫がそこ
に向かって飛び込んだ。

「!？」

黒猫が飛び出した先に地面は無く、あつたのは水、水、水、あたり1面の水だった、空中を足がバタついただけであった。
ドッボン!!

黒猫は池の中に落ちた。

一つの水柱ができて、水の粉が回りに舞う

「ギアアアア!!!」

黒猫に釣られて出口でスピードを上げたバカも一緒に池に落ちた。
もう一回り大きな水柱が同じ様に出来た。

「何やってんだ？お前…」

和也が池に浸かっている怜次を見下ろしていた。

「いや……まあ……」

照れたように怜次は水に浸かったまま頭を掻いた。

黒猫はバツシャバツシャと水の中で暴れていた。

「水音、助けてやれ」

「うん」

水音はそう言うと言のひらを池に付けた。

その瞬間、水が噴出し、生き物の様に猫を救い上げた。

猫はゆつくりとコンクリートに降ろされる。

「水音ちゃん俺も優しく掬い上げて…ていうか救って……寒い」
ブルブルと震えながら、池を囲っているプールにしがみついた。

「あゝそいつは別にいいぞ」

和也が冷たく言った。

「ンだ!どういう事だコラー!」

怜次は怒りながらプールにしがみつき池から上がった。

「アハハ」

水音は二人の会話を面白そうに聞いていた。

「大体!公園まで誘導すんのはお前がすればよかったじゃねーか!お前の作戦なんだからよ!」

「これは猫を池にはめる為の作戦だ、炎使いが水に浸かるなんざ洒落にならん」

「池に落ちるかもしれないって知ってたのかよ!!」

「あ!逃げちゃ駄目だよ」

水音は2人の会話を無視して、逃げようとした猫を抱き抱えた。その時黒猫の赤い首輪が目に入った。

「G・W 00210?、何これ?」

それを見た瞬間の事であった。

「!ツキヤ!」

黒猫が鋭い爪を水音の腕に向けた。

3本の爪痕が腕からとめどなく血を流した。

「水音」

「水音ちゃん!」

水音の声に気付いた二人が慌てて駆け寄った。

「っ痛・・・」

水音は痛そうに右腕をおさえた。

怜次と和也が覗き込む様に水音の腕を見た。

「大丈夫か?」

和也が少し心配そうに顔を曇らせる。

「うん、大丈夫、それよりあの猫ちゃんを・・・」

水音の言葉に、怜次と和也が同時に顔を上げた。

黒猫は真っ直ぐに3人を睨みながら毛を逆立てッフー!!!黒猫特有の警戒態勢を見せていた。

・・・クナイ

「?、怜次、何か言ったか?」

和也の耳に不思議な声が聞こえた。

「・・・いや?」

怜次が何を言っている?という顔で和也を見た。

死ニタクナイ!!!

今度は怜次にもハッキリ聞こえた。

聞こえた瞬間、黒猫の口が顎が外れた様に大きく開いた。

「な・・・何だこりやあ!？」

怜次が驚いた声を上げた。

「これは・・・」

和也の背中に戦慄が流れた、怜次の雷光が来る瞬間を思い出す様な戦慄であった。

「まずい!! 怜次、飛べ!」

和也が慌ててうずくまっている水音を抱き抱えて横に飛んだ。

黒猫の口から円形の鉄柱が飛び出した、鉄柱は尻から火を噴出し、こちらに向かった。

「ミ…ミサイルウ!？」

ゴオオオ!! という音と共に真っ直ぐに飛んだ。

「うわあ!？」

怜次も慌てて飛びのいた。

和也達が居た所を通り過ぎ、さっきまで浸かっていた池に突っ込んだ。

爆音が響く

響く音を連鎖の様に先ほどよりも大きな大きな水柱が出来る。

池で爆発した水は、呆然とする和也達に降りかかった。

第4話 初依頼と黒猫と、 完

第4話 初依頼と黒猫と、（後書き）

第4話・・・短い、ですがここで一旦止まります、次がまたこの話の続きになりますので

どうか読んでいる方は見捨てないで下さい、嫌マジで・・・
ちなみに、後に修正して話を付け加える可能性有り

それでは次の題名が思いついたら編集してあとがきにかきますんで、
それで、また会いましょう

第5話 機械の心（前書き）

初の依頼で黒猫搜索の依頼を受けた、

後一步まで追い詰めたが、唯の黒猫のはずがミサイルを吐き出した・

・ 呆然とする3人に黒猫が襲い掛かる

第5話 機械の心

第5話 機械の心

第5話 機械の心

「えーと・・・和也さん？」

怜次がビシヨビシヨの状態で急に礼儀正しい言葉で和也に話しかけた。

「・・・なんだ・・・」

和也は腕組みをしながら、全く濡れている自分を気にしていない。

「最近の猫は凄いな・・・毛玉だけじゃなくミサイルも吐くのか」

「ああ・・・最近の猫は凄いな・・・」

和也が無表情で答える。

「ってんなわけねーだろ！！何だよありや！！」

黒猫がさっきのように大きく口を開けた。

「そんな事してる場合じゃないよ！！次来るよ！！」

水音の声と共に怜次がすぐに体制を作った。

黒猫の口から鉄柱が覗き始めた。

「来るぞ！飛べ！！」

和也は2人に叫んだ。

黒猫の口からミサイルが発射された。

音と共に飛ぶミサイルは間違いなく兵器で、毛玉でも何でもない本物の抹消兵器。

ミサイルが3人に向かって一直線に飛んだ。
3人が同時に地を蹴る。

さっきまで3人が居た所でまた爆音が響く。

着地すると同時に和也が刀を抜いた。

「行くぞ！怜次！水音！」

「おう！」

怜次も布を取ると槍を構えた。

その時、また不思議な声が響いた。

シニタクナイ…

（え？）

今度は水音にしか聞こえなかった。

「待って！！」

水音が慌てて二人を止めようとした。

だが、水音が叫んだ時には二人は黒猫に向かって走っていた。

「怜次！2手に分かれて挟み撃ちにするぞ！」

和也が走りながら言った。

「おうよ！」

黒猫の一步手前で2手に分かれた。

和也が猫の右から刀を振り下ろす、

怜次も左から槍を一直線に向けながら走る。

黒猫は2人が当たる直前で宙を飛んだ。

（飛んだ！？あんな直前で！？）

確実に自滅を狙った行動は見事に和也達にはまった。

目標を失った二人はぶつかり、お互いが仰向けになった。

「痛ッテエ…」

怜次が痛そうに漏らす黒猫はそんな姿を逃さない。

空中で黒猫が下に口を向けて大きく開けた、

下には怜次と和也が立ち上がるうとしている所だった。

「うわぁ！！」

怜次が仰向けの状態で空中の黒猫を見た瞬間、驚愕の声を上げた。

「ツク・・・間に合え！」

怜次よりも早く起き上がった和也は、怜次を守る様に立つと覚悟を決めた。

刀を飛んでくるミサイルに向かって振った。
二人が居た所にミサイルが直撃した。

深い煙が立ち上がり、2人の姿は見えない。

「和也ー！ 怜次君ー！」

水音がもうとうと煙立つ部分に向かって走った。

「和也！ 怜次君！」

水音は爆煙の残る二人が居た部分に向かってもう1度叫んだ。
煙がゆっくりと晴れていく。

そこには倒れている怜次を守る様に仁王立ちで立っている和也が居た。

怜次がそこで目にしたのは燃え盛る赤い炎を纏う刀だった。
刀に纏っている炎は刀を更に大きな刀に見える様な、大きな刀の形状をしていた。

まるで全てを飲み込むような赤い赤い炎は危ない魅力を感じさせた。

「すごい……」

怜次が呆然と炎の刀に魅入った。

水音は駆け寄りながら、和也の刀に目を見張った。

水音には解った、感覚の鋭い水音にはこの力がどれほど危険なのかを、そして基の力の弱い和也が使えば生死に関わる力だと。

（この力は凄い！！でも、凄すぎる！和也には危ない！）

「……くう……」

和也が苦しそうに顔を歪め、膝を付いたと同時に刀に纏っていた炎が消えた。

和也の体には小さな焼け焦げと頭から少量の血が垂れていた。

「おい！ 和也！」

「和也！」

怜次と水音が慌てて和也に駆け寄る。

黒猫は休ませまいと、もう1度大きく口を開けた。

「くそ！ 一時退却だ！ 水音ちゃん！」

怜次は和也を抱えて走り出した。

「うん！」

水音もその後を追う。

黒猫は追いかけてようとせず、
静かにその場に座り込み、走っていく後姿をジッと見つめていた。

公園の近くの小さな林の中、

怜次がソツと和也を木の御木に下ろした。

水音が慌ててポケットからハンカチを出した。

「ジツとしてて」

水音が和也の頭の血をハンカチで拭いた。

「和也・・・すまねえ・・・」

怜次が申し訳無さそうに和也に頭を下げた。

「借り・・・1だな・・・」

和也は力無くうつすらと笑った。

「あ・・・ああ」

怜次も釣られて笑った。

「和也・・・さっきの刀は何？」

水音は先ほどの炎の刀の事を言っている様だ。

「あれは、『炎斬』つー技だ・・・俺の最大の切り札だ」

まだ苦しそうに息が荒い。

「和也、あの力相当辛いでしょ」

水音は和也の目を一直線に見据えた。

驚いた様な、困った様な顔で和也も水音を見据えた。

「よく解るな、あの技は力をかなり使うんで、まだ5秒位しか技を保つ事が出来ないんだ、

唯でさえ普通 능력者よりも力が弱いんだ、俺にとってはかなりきつい大技だ」

「未完成か・・・あの技なら、あのクソ猫も1発だろうによ」

怜次も考え込む様に腕を組んで目を瞑った。

「どう思う・・・己宮内」

和也が森林の中に響く様に大きな声を出した、

二人が同時に顔に？を浮かべた。

「何言つてんだ？お前？己宮内さんはいな・・・」

怜次がそう言いかけた瞬間、携帯電話が鳴った。

「これって・・・」

水音が携帯を取ってスピーカーを押して和也に向けた。

「良い訳はあるか？」

和也が悪戯っぽく携帯に言った。

『クツクツク・・・相変わらず侮れないな』

校門前で聞いた、低い声が携帯から響いた。

「あの公園にはあの時間で誰もいなかった、お前が先に避難させたんだろう、

あの黒猫の事を知っていたなら、お前ならやりそうな事だ」

「へ？は？」

怜次はまだ解っていない様だ。

「盗聴器は何処だ？そして、あの猫の事を教えてもらおうか」

『惜しいな盗聴器じゃない発信機だ、

お前等が学校から貰った携帯（生徒手帳兼）あるだろ？あれには発信機が付いていてな、

しかも衛星と繋がっているからお前等の行動は見放題ってわけだ』

「プライバシーの欠片もねーな」

怜次が不満そうに言った。

『まあそう言ふなよ』

「学校から出さない為に監視されてるって訳か・・・」

和也が低い声を発した、

『・・・』

己宮内にも緊張が走ったような無言の感覚が入った。

「それよりもあの猫は？」

水音が慌てて話を戻す。

『あの猫の首輪を見たか？』

和也がチラッと怜次と水音を見た。

怜次はブンブンと首を振った。

「私見たよ、確か・・・」『G・W00210』

「何だそりゃ・・・？えと・・・ゴールデンウィーク？」

怜次が困惑の色を浮かべた。

「・・・アホ」

和也が呆れた様にため息を付いた。

「ウルセー！！」

怜次も声を荒げた。

『ジェノサイド・ウェポン（genocide・weapon）、

の略だ、これを訳すと殺戮兵器という意味だ要するに、だ、』

少し間を開ける

『あの猫は機械なんだよ』

「アレが機械ならあのミサイルも納得が行く」

（嫌、いかねえよ…）

怜次が迅速に心の中で突っ込んだ。

和也は携帯に向き直ると考える仕草を見せた。

己宮内は話を進める。

『00210と言うのは、210番目に作った兵器だろう、

実はこれは俺が大分前に作ろうとした奴だ、元々兵器では無かった、

請負人のサポート役に回すはずだったが上手い事行かなくて中止に

なった開発だった。』

また少し間を空けた。

怜次の唾を飲み込む音がした。

『数年前に盗まれたんだ、設計図や作りかけをな』

「誰が？」

怜次が当たり前の疑問を出した。

『・・・それは解らない、何故あの機械が来たのかも・・・な』

「なるほどな、兵器を盗まれた事と、

それが殺戮兵器に変わった何て事が社会にばれれば信用がガタ落ち、そんな事は科学支部会長としては許されない

だが・・・下手に動けば、滅多に動かない科学支部を不信に思っ奴も居る、

だから俺達下っ端にやらそうってわけか、」

『そんな所だ』

特に驚いた様子も無く己宮内は平然と言った。

「お前の考え方は解る、俺でもそうするだろうからな、」

和也はゆつくりと立ち上がり水音に近づいた。

「だがナア・・・」

和也の声の最後に妙な違和感が現れた。

和也は水音から携帯を取り上げた。

「和也・・・？」

水音は不思議そうに和也を見た。

和也は携帯に向かって口を2、3回開いた。

「？」

「？」

怜次と水音には聞こえなかったが、何かを言ったのは確かであった。

『あ・・・ああ、すまない』

携帯のスピーカーから慌てた様な声が水音と怜次に聞こえた。

和也はすぐに水音に携帯を返した。

「で、あの黒猫の事を教えてくれ」

和也はすぐに話を戻した。

『ああ、アレ自体は対した能力は無いが、幾つか改造されている、ミサイルを体の中で構築する事が出来る様だ、そして変身能力は・・・今は壊れているみたいだ

様々なリーダーも追加されていた、これを新たに改造した人間は俺

と同じ様に天才だ』

（うわ、この人何気に自分を天才扱いかよ）

怜次が心の中で突っ込んだ。

『だが一番凄いのはー…』

一瞬間を空けた。

『感情が出来ている』

「機械が？」

怜次が不思議そうに聞き返す。

（あ・・・）

水音はさっきの聞き覚えの無い言葉を思い出した。

シニタクナイ

『ああ、どういわけか天才の俺が作った機械構造レーダーに生命反応があった』

（うわー！絶対にこの人、俺様思考だ）

怜次が心の中で、また突っ込んだ。

「OK、天才、何かム力つくから切るぞ」

怜次は向けられている携帯の切るボタンを押した。

『おい、待っ！』

それ以上の言葉はもう携帯から出る事は無く、静かにツツツという音だけが残る。

（あ、和也もアレ（俺様思考）はイラつくんだな）

「和也、よかったの？」

水音は携帯を戻しながら言った。

「大体の情報は手に入れた、

ミサイルの軌道や、機械の精密な動きは覚えている、後はレーダーに注意すればいいだけだ」

和也は立ち上がり続けた。

「行くぞ」

「あ、和也、怪我！」

水音が止めようと和也に近づいた。

和也の頭の血は止まっていた。

「え？あんなに酷い傷だったのに」

「ああ俺は傷が治るのが昔から早いんだよ」

（早いなんてもんじゃないよ、あんなに血が出たのに）

水音は不信そうに和也を見た。

普通なら1針は縫うかもしれない傷、しかも頭部の怪我だ、そんなに早く治るのはありえない。

「フーン、丈夫なんだなー」

怜次は能天気に関を掻いている。

「まーな」

そう言つと和也は歩き出した。

その後を怜次が付いていく。

「ま、いつか」

水音も考えるのをやめて二人を足早に追い掛けた。

誰もいない広い公園、

大きな川が有り、公園の真ん中には噴水が置かれている、

その噴水の前に黒い猫がジツと身を縮めて体を伏せていた。

黒猫の両耳だけが鋭くピンツと立っていた。

精巧、生命体レーダ二百M二周波数を広ゲル

機械らしい雑音に近い声が誰も居ない公園に響く。

周囲二百M内二生命反応、物理的機械反応、共二無シ。

確認、コレ（私）トノ戦闘ニヨリ、被害才広ゲナイタメニ避難、マ
タハシールド（結界）ノ様ナモノデ二百M内二私ヲ閉ジ込メ確保力

クホ、マタハ排除ノ為ト認識スル。

結論、スデニ回りコメレ、包囲サレテイルト断定、先ホドノ三名ハ唯ノ時間稼ギ

方法、ヲ検索・・・検索終了、脱出ルートヲ確保し、逃走ヲ試ミル、不可能、円形状ニ包囲サレテイル可能性有リ

他にもいくつかの方法を口ずさんでいたが全てが冷たい「不可能」という言葉に打ち消されていた。

ゆっくりと両耳が元の形に戻っていった。

「コレ（私）ハ…死ヌノカ…」

さつきとは違う雑音から少し高いだけの綺麗な声にかわっていた

「機械トハ人間ヨリモ、ハルカニ強イハズデアルノニ、

コレ（私）タチ、機械トハナント弱イノカ…」

「アノ者達ハナンドッタノダロウカ」

黒猫の脳内メモリーに先ほどの事が頭の中で再生しようとしていた。まず最初に再生されたのは、自分が3人に追いかけられた事だった。まず長い棒を持った男が壁に顔をぶつけその後、堀で次々と3人が落ちていった。

「中々、面白カッタナ」

「オモシロカッタ…？、コレハ、楽しい、トイウカンジョウダッタカ」

また頭の中で一時停止されていた記憶が再生された。

長い棒を持った男、1人に追いかけられ続け、最後には池に落とされた。

「アレニハビツクリシタ、コレガタシカ、驚く、ダツタカ」
最後に戦闘になり、白い男が棒の男を庇った所で停止した。

「アレハナゼタスケタノダ？アレハドンナカンジョウナノダロウ…」
黒猫の頭で白いめんどくさそうな男と槍を持ったアホっぽい顔の男と赤髪の綺麗な女性が写った。

「マタ、アエナイダロウカ」

黒猫が初めて無意識に口から出した言葉だった。

黒猫はピクツと動くとすぐに上体を起こし、耳をピンツと立てた。

同時に機械の雑音が響いた。

2体ノ生命反応ヲ確認、2体共AU能力者、一名ハ唯ノ能力者モウ
一名ハズバ抜ケテ力ガ強い、
ダガソレ以外デモ現在ノ科学デハ解リ得ナイ何カヲ察知シタ。）

黒猫の真正面を歩いてきた二人の影が見えた。

1人は長い棒を持った男、もう一人は赤髪のツインテールの女性
遅れて機械の雑音がもう1度、響いた。

モウ一体ノ生命体ヲ確認、科学デハ証明出来ナイ何カ、生命体トシ
テハ何カガ違ウ、存在証明ガ出来ナイ、測定不能測定不能）

遅れて、もう一つの影が現れた、純白、白髪白眼の男だった。

黒猫が口を開いた。

「マタアエタ」

「うお！！和也！水音ちゃん！猫がしゃべった！しゃべった！！」
怜次が黒猫を指差しながら叫んだ。

「うん凄いねー」

水音もあっけらかんと言った。

「機械に言語機能だったか？が入ってるのだろう」

和也もだるそうに言った。

「才前達ハコレヲ殺シニ着タノ力？」

「ああ・・・」

和也の言葉と同時に水音が一瞬顔を曇らせた、

頭の中にまだ残っているあの言葉、シニタクナイ

「ソウカ、戦ワネバナライノ力」

「そう言う事だ」

そう言うのと和也は刀を抜いた。

怜次も同時に槍を構えた。

水音だけは気が引けていた。

黒猫が動こうとした瞬間、水音が黒猫と二人の間に割って入った。

「やっぱり駄目だよ！」

水音が黒猫に背をむけてばっと手を広げた。

「水音ちゃん！？」

怜次はうるたえたように、手に持った武器を緩めた。

「！？」

（コノ人間八何ノツモリダ？）

黒猫が頭を傾けて水音の背後を見た。

「水音：どけ」

和也は鋭い声を向けた。

「どかない！助けを求めているのが何であろうと私は助けたいよ！

心があるなら、なおさらだよ！」

水音も負けじと声を張った。

「・・・」

和也は小さくため息を付くと、刀を下ろした。

怜次も釣られて槍を下ろす。

「和也！」

水音は嬉しそう声を上げたが、和也の目を見た瞬間、凍りついた。

和也の純白の瞳は氷のように無感情のまま、水音を見据えていた。

「水音、何か勘違いしていないか？俺達は請負人、代価を貰い、それ相応の働きをする」

請負人は仕事を受ければ絶対に遂行しなければならない、請負人にNOは無いんだ」

怜次は心配そうに見守っていた。

「でも！この子は死にたくないだけなんだよ！！」

水音は叫びながら、黒猫の寂しい声を思い出していた。

「この子は！助けの声を聞いてもらいたかっただけなんだよ！！」

水音の声は和也にふり注いだ。

「だが・・・、この依頼を取ったのはお前だ、水音、」

和也の目はまだ冷たく見据えていた。

「だけど・・・だけども・・・」

水音の瞳から小さな雫がポロポロと零れ落ちた。

水音の脳裏には赤髪の子供が暗い部屋ですっと一人でつみきをしている姿が浮かんだ。

子供とは思えない暗い顔立ち是不健康に思えた。

「一人だけってのは辛いんだよぉ・・・和也ぁ」

和也はその涙を見た瞬間、鳥肌を立てたように驚いた。

目は元の普通の純白の目へと変わっていた。

「い！いや！そんなつもりでいったのではない！ただ仕事はちゃんとせねばという・・・その」

和也は水音に近づくと慌てて弁解を始めた。

怜次は目を真ん丸にしてその光景を見ていた。

（あ・・・あんな光景初めて見た・・・）

「もういいもん・・・和也のバァ力」

グスツと水音は和也に顔を見せないように後ろを向いた。

「え・・・あ・・・す、すまない・・・」

和也はうるたえながら後ろを向いている水音に謝った。

（・・・チヨロイ）

水音は後ろを向きながら少しだけ舌を出してウィンクをした、悪戯っぽい笑みに変わっていた。

（あーあいつは絶対将来女の尻にひかれるタイプだな）

怜次は暇そうに座り込みながら見たこともない和也の焦りぶりを楽しんでいた。

「オイコラ」

忘れられていた黒猫が突然口を空けた。

「コレノ存在忘レンナヨ」

「あ、忘れてた」

怜次がボケーとしながら口に出た言葉だった。

「イヤ、ワスレンナヨ」

黒猫が右手を少し上げて横に振ってビシッと突っ込みの形を作った。

和也は突然真剣な顔に戻り黒猫を見据えた。

「お前はとうしたい？」

黒猫の青い目と和也の純白の目が重なった。

「コレ・・・？」

「そうだ、お前は死にたいか？それとも、死にたくないか？」

和也の目が先ほどのように冷たい目になっていく。

「和也！」

水音が咎める様に和也を見る。

「ワタシハシニタクナイ」

「何故だ？お前は危険な存在だ、何処から来たのかもわからない、人を傷つけるかもしれない」

和也は水音を無視して話を続ける。

「・・・ワタシハ、ニゲルノニツカレタツカレタンダ」

黒猫のメモリーには沢山の人間の死体が写っていた。

「タダワタシノナカニウマレタカンジョウノヒトツ

「恐怖、ガワタシノナカニアルダケダ」

「シニタクナイ、」

「そうか・・・」

和也はゆつくりと黒猫に向かって歩き始めた。

「和也！」

水音が後ろから追いかけ様とした。

「・・・」

怜次がガシツと水音の肩を掴んだ。

「怜次君・・・」

怜次は顔をゆつくりと横に振った。

和也は黒猫の前に近づくとジツと黒猫を見据えた。

水音と怜次が後ろで見守っている。

(ワタシハシヌノカ)

黒猫はキュツと目を瞑った。

(・・・・・・?)

いつまでたっても痛みは感じない。

ゆつくりと目を開けると目の前に大きな手があった。

和也が無表情のまま手をさし伸ばしていた。

「助けてやる、俺から上に言おう、だが誓え2度と俺の仲間を傷つけるな」

黒猫が驚いた様に見張ったが和也の優しい目を見た瞬間ツツと小さく笑い、小さな肉球を和也の手に乗せた。

「チカオウ、」

黒猫の機械の心には何か特別な物が湧き上がっていた。

「ありがとう、」

後ろから見ていた水音はつとしたように胸を撫で下ろしその後ろ

に居た怜次はニィ〜と笑っていた。

ドォ……ン

短い銃声音と共に小さな黒猫の体が宙に飛んだ。

「……………な!？」

「……………キヤ!!」

怜次と水音が驚いた声を上げる。

和也も一瞬呆然と飛んで行った黒猫を見送った。

和也の背中に戦慄が走った。

（何処だ!？何処から撃った!？）

和也がバツとあたりを見回した。

怜次と水音が黒猫に向かって走って来たのが和也の目に映った。

「怜次!水音!黒猫を頼む!!」

和也の叫び声が2人の耳に届く。

和也が一度目を瞑るとすぐに目を開いた。

（落ち着け、冷静になれ!

弾は一発!赤い首輪が飛んだという事は首筋による的確な射撃、

距離は最高でも50メートル、隠れる事が出来る場所は……）

和也がもう一度あたりを見回す。

あたりは平原に噴水、とても奥に小さな森が見え、

ポールで周りを敷き詰められた池

（50メートル内で隠れる事が出来るのは……噴水の後ろか!）

和也は噴水に向かって走り出した。

（体力は……よいいける!ぎりぎりです1秒!いけるか!?!いや、1秒

あれば十分だ!噴水ごとぶった斬る!!）

和也が刀の柄に手を掛ける、

走りながら即座に引き抜いた刀は鞘から出た部分からすでに真っ赤

に燃え盛っていた。

噴水の少し前で刀を大きく振った。

「炎！！斬！！」

和也の声と共に炎を纏い、2メートルはある刀は一直線に噴水にぶち当たった。

キィ……ン

噴水に斜めの切れ目が入ると、ゆっくりと切れ目にそって噴水が崩れ落ち、一気に燃え盛った。

「す……げえ……コンクリートの噴水を斬った！？」

怜次が呆然と独り言を漏らした。

「怜次君！！この子抑えて！！」

水音が怜次に叫んだ。

黒猫は痙攣を起こし、ブルブルと震えていた。

撃たれた首筋から茶色い液体が出ていることが機械であるということとを証明しているようだ。

水音はハンカチで首筋を抑えていた。

「あ、ああ」

怜次が慌てて震えている黒猫の体を抑えた。

燃え盛る噴水から黒い影が宙に飛んだ。

（く……逃したか……）

和也が苦しそうに膝を付いた。

同時に纏っていた炎も消えた。

黒い影は着地するとすぐに走り出した。

「くっそ……」

怜次が追いかかけ様と即座に立ち上がった。

「怜次！！行くな！！」

和也がまだ座り込んだ状態で叫んだ。

「けど……」

怜次は立ち止まると和也に抗議の声を出した。

「あそこまでの的確な射撃：相手は凄腕のガンマン（銃使い）だ、
返り討ちにされるぞ！！」

「ああ！？俺が負けるってのか！？」

怜次の黒い目に凄味が帯びた。

「そういうことじゃ、ぐう……」

和也がうめき声と共に苦しそうにその場に蹲った。

「お……おい！和也！」

怜次は慌てて和也に駆け寄った。

先ほどの目が元の淡い黒色に戻っていた。

和也の額に汗が滲んでいた。

「ど！どうすりゃ！！」

怜次がオロオロと和也の目の前でうろたえていた。

その時、

怜次の肩に重みを感じた。

怜次が振り向くと白いコートを羽織り、銀縁のいかにも度の濃そうな眼鏡、その裏に、薄らと写るめんどくさそうな和也に似た目つき、口に煙草を加えた20代後半の老けた男、

やさしそうな目の色で怜次の肩に手を置いていた。

「安心しナア……こいつは力を使いすぎただけさ」

ニツと男は笑った。

一瞬、何が起こったのか怜次には解らなかった。

「あんた……誰だ？」

怜次は呆然としながらも男を警戒して見た。

あまりにもの一瞬でいつからそこにいたのか、全く解らなかった。
確かに誰も居なかったはずの怜次の後ろに男は居た。

男はもう一度、ニツと笑った。

「顔を合わせるのは初めてだなア、己宮内、そう呼んでくれ」

「あ！あんたが！己宮内さん！？」

己宮内はサッサと水音に向かって歩き始めた。

「己宮内さん!!」

水音が嬉しそうに、こちらに向かってくる己宮内を見た。

己宮内は座り込むと黒猫をジッと見た。

「酷いな…起動線がやられてる、」

己宮内は携帯を取り出すとボタンを押さずにしゃべり出した。

「B-62地域にへりをよこせ、5分だいいな」

携帯をパチンと閉じるとポケットに戻した。

水音が心配そうに己宮内を見ていた。

それに気付くと己宮内はニツと笑うと水音の頭にポンツと手を置いた。

同時に水音の顔がうつすらと赤くなった。

「だーいじょうぶだ、アレはすぐに直す」

水音がパアツと顔を輝かせたが、また暗い顔に戻った。

「あ・・・あの依頼の事です」

己宮内の言った『破壊しろ』、という言葉が水音の脳裏に浮かんた。

「クツクツク、和也の苦労を無駄にする気はないさ」

面白そうに笑った、先ほどの和也の慌てっぷりを見ていた様だ。

「己宮内さん!!ありがとうございます!!」

水音がとても嬉しそうに顔を輝かせた。

近くのベンチまで来ていた和也と怜次がその一部始終を見ていた。

「よー和也、いいのかよー」

ニヤニヤと笑いながら隣で座っている和也を肘で突付いた。

「・・・?」

和也がまだ額に汗を浮かばせながら、顔を少し傾けた。

「お前はアレを見て本当に何もおもわねえのか?」

怜次が顎で射した先には傷の処置を終わらした黒猫を挟んで楽しそうに談笑する己宮内と水音、

「・・・いや?」

和也がまた不思議そうに頭を傾けた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

怜次が怪訝そうに和也を見た

「もついい・・・・・・・・」

怜次が呆れたように肩を落とした。

「悪い、少し・・・寝させてくれ・・・」

和也はそう言つと、ゆつくりと、目を瞑つた。

「・・・・・・・・ちえ、かつこいいなあ、お前は」

怜次は眠りについた和也にボソツと漏らした。

「己宮内さん！」

怜次はベンチから飛び上がると己宮内のそばに行つた。

「なんだ？」

己宮内もすぐに振り向いた。

「和也にとつて俺は邪魔なのかな・・・」

怜次が深刻な顔で己宮内に言つた。

「・・・・・・・・」

己宮内は黙つて聞いていた。

隣りの水音もジツと怜次を見ていた。

「俺は親友だと思つてんだけどなあ・・・」

怜次はとても悲しそうに目を伏せた。

何故会つたばかりの己宮内にこんな事を言つたのか、怜次は解らない。

唯、水音に言うには気が引ける、他のものにも言い難い、怜次の弱さがそこにあつた。

会つたばかりだからこそ、自分の知らない和也の知り合いだからこそ、自然に言いたくなつていた。

「クツクツクツク」

何度も聞いた低い笑い声。

「安心しなア、和也はそんな事思つてないさ」

如何にも年上という感じの男は怜次を年下としてではなく、同じ位置として、話し掛けていた。

すざまじい権力を持つ男はすざまじい心の持ち主であった。

「でも・・・」

怜次がまだ目を伏せていた、水音が居るのも忘れ、怜次はいつもの強気の姿勢とは違う自分を見せていた。

一瞬だった、和也と戦った事がある、だから友と言えた、無表情の更に奥にある心をあの時垣間見た気がした。だから不安に思えた、和也が時々見せる拒絶は酷く心に残った。

だが己宮内は何の気も無しに話始めた。怜次の事を知ってなのかは解らない、だが、その声は相変わらず低い変わらない声で、

「あんたら森で俺に電話してたら、その時、和也が俺に言った言葉があつてな」

怜次と水音が森の中で突然、和也が携帯を取った事を思い出した。

「『今度そんなことで俺の仲間が傷付く様な事があれば俺はお前をゆるさない』、ありやア・・・あんたは十分信頼されてんだよ」

その言葉は怜次の胸を打った、確信できた、あいつの心を掴んだ様な気がした。

和也は別に拒絶を見せているわけでは無かった。簡単な事だ、感情が不安定なんだ。

いつかで聞いた言葉。

「へ・・・へへ」

怜次は嬉しそうに目を瞑った。

（なんだよ、悩んでた俺が馬鹿みてえじゃねえか）

水音もうんうんと嬉しそうに頷いていた。

空からバタバタバタ！という騒音が響いた。

空中で大きなヘリが静止していた。

ヘリからハシゴが下ろされ、己宮内はそれを確認すると怜次の手を両手でギュッと掴んだ。

「え？あ？」

怜次は驚き後ずさった。

「ありがとう、」

己宮内は嬉しそうに、眼鏡で見えないが確かに目を輝かせた。
己宮内は片手で黒猫を抱くとハシゴに飛び乗った。

「じゃあな！仲良くしなあ！」

己宮内を乗せたへりがゆっくりと離れていった。

「さて、和也を起こして行こっか」

へりを見送った後、水音が怜次に振り返った。

「そうだな」

怜次も軽く伸びをした。

「おい、コラ、白髪起きろ」

怜次が槍でチョンチョンと突付いた。

「んあ？」

和也が間抜け面で起きるとボーっと怜次の顔を見た。

「ああ、行くか、」

和也はベンチから立ち上がろうとしたが、

「あ、れ？」

力なくその場に倒れた。

（ツチ、流石に炎斬を1日に2回は無茶が過ぎたか）

「ったくよく、世話が焼けるなオイ」

怜次はそう言つと和也の右に回り、

右肩を持つて立ち上がらせると右手を自分の肩に回した。

「和也頑張ったもんね」

水音も和也の左に回り左手を自分の肩に回させた。

「お・・おい自分で歩けるって」

和也が困ったように声を荒げると怜次がすぐに言い返した。

「うるせ、フラフラのくせに何言つてんだよ、それに…」

怜次は一瞬間を空けて顔をそむけてから言った。

「な…仲間だからな」

怜次は友達という言葉をよく使うが仲間という言葉は使ったことが無かった。

不安定だった物がようやく形になった、そんな気がした。

一つの繋がりによって、仲間という形が出来たのだ。

和也は一瞬驚いた様な顔になった後、ツフと顔の力を抜いて言った。
一緒に居る友達から戦いに置ける背中を預ける仲間にへと代わった
馬鹿に沢山の言葉は要らない。

和也はぶっきらぼうに

「ああ・・・悪いな」

いつものように言った。

それを見ていた水音が嬉しそうにくすくすと笑っていた。

（しかし…黒猫のリーダーでも察知出来なかった、あの人間は一体…）

へりの中で黒猫を抱きながら己宮内は噴水から出てきた黒い影の事を考えていた。

へりの中から外を見下ろすと怜次と水音が和也の左右で担いでいる姿が見えた。

それを見た己宮内はツフと嬉しそうに笑った。

「まあいつか、ある意味収穫だったのかもな」

己宮内はもう一度3人を見ると眼鏡の裏で目を輝かせた。

ーおまけー

依頼終了後、怜次、水音、和也は寮内の居間でくつろいでいた。
プルルルルルル！！プルルルルルル！！

居間に電話の音が響き渡る。

プルルルルル！！

「和也ー電話に出るよ」

怜次がソファーに寝転んだ状態で、近くで椅子に座って本を読んでいる和也に言った。

「ヤダ…貴様が出ればよからう」

和也は本から目を離さずに言う。

「めーんどくさい」

怜次はソファーの上で仰向けになった。

和也が本から目を離すと怜次を片目でチラッと見た。

怜次も同時に和也を横目で見る。

2つの視線が重なった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

沈黙が二人の間に流れた。

怜次がソファーから突然飛び上がった、

それと同時に和也も椅子から飛び上がる。

二人は一気に右手を後ろに下げると、勢いに乗せて前に出した。

「「最初は！！グー！！」」

2人の声が重なる。

「「ジャンケンー！！」」

（和也）グー

（怜次）グー

「「あいこで！！」」

（和也）パー

（怜次）パー

「「あいこで！！」」

遠くから見ていた水音が二人を見て呆れたように、
ため息を漏らした。

水音が電話の前まで来ると、もう一度、馬鹿二人を見た。

「「あいこでしょ！！あいこでしょ！！あいこでしょ！！」」

「何だかんだいって君等、似てるよ」

水音の口から呆れたような声が漏れる。

プル…

水音が受話器を取ると同時に電話が止まった。

（あれ？）

水音が首を傾げるとすぐに高い女性の声が電話から出た。

『留守番電話は1件です』

怜次と和也もジャンケンをやめてこつちを見ていた。

水音の細い指が点灯している留守番スイッチに触れた。

『よー和也！怜次！水音！』

先ほどまで何度も聞いた声。

「・・・己宮内？」

『初依頼、成功おめでとう！！そこで依頼料なんだが』

「おー！依頼金かぁ！！あの己宮内さんの依頼だったら結構もらえるんじゃないのー！！」

怜次が嬉しそうな声を上げた。

「待って、まだ続きがあるみたいだよ？」

水音が不思議そうにしながら怜次を止めた。

『無しな、つかよこせ』

「・・・？」

3人が同時にハ？という顔で電話を見る。

『いやゝ俺も上の人間だから、こつというの結構言われるんだよねゝ
派手に潰したナァ、公園の噴水500万円』

青い顔で3人がポカーンと口を空けた。

『払えないならばらく俺ンとこの依頼はタダ働きナ、連帯責任で

全員でな』

お気楽な声が響く。

『じゃ！が・ん・ば・れ』

ガチャツツツツツツ

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

3人の開いた口が塞がらなかった。

第5話 機械の心 完

第5話 機械の心（後書き）

遅くなつてすみません・・・

実はこの話は自分的にあまり好きではない、

でもこれ入れなきゃ話進めれないし・・・

今回は短めでしたが、次は結構長くなる予定、

それでは次回、『第5話 仲間の繋がり』でまた会いましょう

第6話 学校の出来事（前書き）

和也は唯仲間を守る為に必死になっていた。

あまり経験が無い友達が消える事はある種の恐怖を持っていた。

その人が消えるという瞬間が『あの子』と被る。

第6話 学校の出来事

第6話 学校の出来事

暗い影が広がる部屋、

そこにあるのは長い机に、

左右に3つずつ置かれた椅子に5人の黒い影。

光りは長机に置いてある一本の蝋燭だけであった。

右端上に座る男が話し始めた。

「さて、どういう事ですか？黒のジョーカー？」

礼儀正しい澄んだ声が鋭く左端下に座っている男に言った。

「そうだ！！G・W 00210が捕まるような事があれば、
貴様が破壊する事になっていただろう！！！」

右端下で座っていた男が力強く立ち上がると、

左端下の男に向かって叫んだ。

左端の男はめんどくさそうに耳を塞いでいた。

「クラブ、うるさーい」

左真ん中に座っていた女性が不満そうに怒鳴った男に言った。

「何だと！！ハートオ！！！」

クラブと呼ばれた男が女性に怒鳴った。

「黒のジョーカーが怖がるでしょオ？ネエ？」

そう言くと黒のジョーカーと呼ばれた男に擦り寄った。

黒のジョーカーはうつとおしそうに女性を無視する。

「キサマア！！ハート！！潰すぞ・・・」

クラブの声にドスが聴いた瞬間、クラブの周囲が揺らいだ。

「アラア・・・あたしと殺る気イ？一生奴隷にしてやるわぁ・・・」

ハートの周囲の空気も薄く揺らいだ。

「Nonsense…（ナンセンス…）」（馬鹿馬鹿しい…）」

右端の真ん中の男があきれた様に漏らす。

「まあまあ、落ち着きなさい二人とも、」

最初に話出した男が二人を止めに入った。

「ツチ・・・スペードに感謝しな・・・」

吐き捨てるように言うのとクラブはすぐに席に戻った。

「フン、命拾いしたねエ・・・」

ハートも同じ様に吐き捨てるように言うとすぐに座った。

「さて・・・説明して頂けますか？白のジョーカー・・・？」

スペードが目を光らせて黒のジョーカーを睨んだ。

「・・・」

一瞬だけ間を空けて黒のジョーカーは口を開いた。

「中々面白い物を見つけてね、

見つかりそうになったから退場させてもらったよ」

「そんなのいいわけだ！！」

クラブがまた叫ぶ。

「待ちなさい、結果的に上手くいったじゃないですか」

「しかし！！」

クラブは下がらない。

「少し黙りなさい！！」

スペードが声を荒げてクラブを睨んだ。

「ぐう・・・」

「ぶぶ、ダサ・・・」

ハートが軽く笑った。

クラブが即座にハートを睨んだ。

「で、面白い物とは？」

スペードがすぐに話を戻す。

「純白の頭に白い眼・・・和也という名前の男」

右端の真ん中の男が名前を聴いた瞬間、ピクツと体を揺らした。

（和也・・・どこかで聞いたような・・・）

スペードが不思議そうに頭をひねった。

「それよりも次の任務も僕にやらせてくれ」

黒のジョーカーが嬉しそうにクラブに言った。

「貴様！！次は俺の仕事のはずだ！！！！」

クラブが黒のジョーカーに怒鳴り散らした。

「君・・・僕に指図するなよ、殺すよ？」

黒のジョーカーの漆黒の目が残酷なまでに光っていた。

「な!？」

クラブの背中に気持ち悪い肌寒さが伝った。

(何だコイツ!?)

「いいかげんにしないか!!!」

スピードが大声で怒鳴った。

「解った、次の任務は黒のジョーカーに任そう、」

「そうでなくちゃ」

「なんだと!？」

「いいですね?クラブ？」

スピードはチラッとクラブを見た。

ギリッと歯を噛み締め、クラブは力いっぱい拳を丸めた。

「ああ・・・」

「それじゃあ言うてくるよ」

そう言うのと、立ち上がりドアに向かって歩き出した。

ギィィィ...

ボタン、

ドアが悲鳴を上げながら閉まった。

クラブがおもいきり机を叩いた。

ドォン!!!!!!

「あの野郎、新入りのクセに...」

「でも腕は確かです、予定どおりG・W00210が毒を入れてくれたんです、

これで簡単に『神風』の妹を殺す事が出来るでしょう」

右端の真ん中の男はジッと押し黙っていた。

（和也・・・）

男の脳裏には純白白眼の男、和也が写っていたが、

今とは違い少し若く、獰猛な鋭い目を光らせていた。真つ暗の薄暗い居間に電話の音が響いていた。

プルルルル！！プルルルル！！プルルルル！！プルルルル！！ガチャツ、

ドアの開く音と同時に和也が居間に入ってきた。

「・・・」

眠そうな目で電話を見るとため息を付いた。
プル！

和也が受話器を取ると電話の音が止まった。

「もしもし・・・」

和也の眠たそうな声が受話器に漏れた。

『・・・君は和也君かい？』

和也には聞き覚えのない声、

「・・・ああ」

『私の名前は風間、君に頼みがある』

（風間・・・？ああ、水音の兄貴か）

和也が不信そうに声を出す。

「で、水音の兄貴が何の様だ」

『水音が狙われている、水音の護衛をして頂きたい』

「どういう事だ・・・？」

和也の顔色は変わらない。

『解らないが、情報屋から手に入れた情報だ、

私は仕事が忙しくてね、そこで水音の護衛を頼みたい』

和也の右眉が少し動いた。

「妹より仕事が大切なのか？」

和也の声に薄らと怒りが見える。

『・・・完全な情報じゃない』

電話の先で一瞬、戸惑った様な声が出た。

「それでも水音を守るのが優先だろう？」

ふつふつと和也に怒りが芽生えてきた。

「貴様は水音が大切じゃないのか！！！」

和也の怒りの声が暗い居間に響いた。

『すまない・・・頼んだぞ・・・』

ガチャッ、ツーツーツーツー

和也は受話器を睨むと、電話に投げつけた。

ガッシャーン！！！！

（・・・水音は絶対に俺が守る、もう同じお気持ちはしたくない！！）

和也の脳裏にストレートの赤髪の女性が笑いかけていた。

ツツツツツツ

誰かが階段を下りてくる音が聞こえた。

「！！！」

「なんがあゝ？うるせえぞぉ」

寝ぼけた声で現れたのは怜次だった。

「和也？何やってんだ？」

怜次が不思議そうに和也を見た。

「い、嫌、何でもない」

そう言っていると和也は慌てて階段の方へ向かった。

（この事は俺で片付けよう、あいつを巻き込みたくない）

「・・・和也？」

怜次は逃げるように去っていった和也を、

もう一度、不思議そうに見た。

夜は明け、

「うー！ん！」

朝日の帯びる部屋で、パジャマ姿の女性、水音が伸びをしていた。
「いい天気だ」

ジツと窓の外の光に目をやった。

ズキン…

「……？」

前日の依頼で負った傷、黒猫にひつかかれた傷が包帯の下で疼いた。

「う……あ」

一瞬の眩暈と共に水音が膝から崩れた。

ドクン、ドクン

包帯の下からでも傷口が脈打ているのが解った。

「何……こ……れ？」

水音はゆつくりと倒れていった。

「くあく眠い、」

欠伸と共に部屋を出た怜次は水音の部屋の前で妙な物を見た。

「……？」

それは毛布に包まれた和也がジツと水音の部屋のドアで座っていた。

「何やってんだ？お前」

怜次が近づいて和也に話しかけた。

「……む、もう朝か」

和也はそう言っと、毛布を剥いで立ち上がった。

「何で刀持ってた？」

怜次が眠そうな目を擦りながら言う。

「水音はまだ起きてないのか？」

和也はジツと扉を見つめた。

「無視かよ……」

「おい、水音？」

和也がドアに不安そうに声を掛けた。

ガチャツ

ギイ〜〜

開く音と、ドアが小さな悲鳴を漏らす。

「ふあい？」

水音がボサボサ頭のまま、眠そうな声を出した。

和也はほっとした様に胸を撫で下ろす。

ドタドタ

3人の乱暴な階段を下りる足音が聞こえた。

居間には食卓がすでに並べられていた。

「いやゝ今起きたら窓際のすぐ横で寝てたんだあゝ
変な物だねえゝ」

食卓に付いた水音が眠そうな声で言った。

「あー俺もあるよ、起きたら屋根の上に居たんだよ！アレはビビっ
たなゝ」

「怜次君・・・道に迷う夢見たでしょ・・・」

水音は眠そうな目でチラツと怜次を見た。

「ウエ！？何で知ってるの！？エスパー！？」

「怜次君知ってる人なら大体解るよ、ねえ和也、」

そう言つて水音は和也を見ると、和也はジツと水音の方を見ていた。

「・・・？何か付いてる？」

水音が右手で顔を触つてみる。

「あ？ああ、嫌、なんでもない」

そう言つとすぐに顔を伏せた。

「・・・？」

水音が頭を傾げる。

「・・・」

怜次が不安そうに和也を見た。

「ヤッホー！皆！」

玄關に出た少し先にブンブンと手を振った女性が見えた。

「おう・・・」

眠そうな声

「ヤッホー、美奈！」

朝から元気な声

「美奈ちゃん!!」

突然の嬉しそうな声が水音と和也の後ろから聞こえた。

「美奈!!ちゅわーん!!」

怜次が抱きつこうと一直線に走り出した。

ドドドドドドドド!!

すさまじい勢いで美奈に向かって両手を広げた。

「・・・フウ」

美奈は一息付くと右手を後ろにおもいつき振りかぶった。

「せーのお!!」

声と共に右手を一気に前に出した。

ドガアア!!

怜次の顔面に美奈の鉄建がめり込む。

「ぐへあ!？」

怜次がもの凄い勢いで吹っ飛び、寮の近くの壁にぶつかった。

ドギヤア!!

「美奈ー今日も見事な一発だねー!」

水音が怜次を無視して美奈に近寄った。

和也は無言で粉碎した壁の所で倒れている怜次に近づくと、しゃがんで言った。

「お前さ・・・そろそろ諦めろよ・・・」

「ッフ、毎日殴られようが、俺の愛は不滅さ」

怜次は和也が見た中で一番いい顔をした。

「・・・アホ」

そう言うのと和也はサッサと先を歩き始めた。

「ああ!ちょ!待って!瓦礫で足抜けな!いや本当待って!!ちょ!!和也サアアアアアン!!!!!!」

怜次の叫び声が木霊する。

学校

「おー！和也、おはよー！」

二人は部屋に入るとすぐにさなぎと出会った。

「で、何で二人揃って血流してんの？」

さなぎは顔面から血を流している怜次と頭から血を流している和也を不信そうに見た。

「美奈ちゃんに殴られたー！」

怜次がビツと親指を突き立てた。

「・・・轢かれた」

怜次は無表情に答える。

「君達、本当に毎日がループしてるんやな・・・」

さなぎが呆れたように言った。

「おー怜次、和也、おはよう相変わらず血流してるな」

今井が当たり前の様に2人に言った。

「相変わらずとは何だ・・・」

和也が血を流したまま今井に言った。

「だってそうだろうが」

ガラッ

その時ドアが開き、きよ先生が入ってきた。

「はーい！席につかないと撃つよー！」

マシンガンを片手にきよ先生が物騒な事を言う。

「うわ！やっべー！」

怜次はそう言うのと慌てて机に向かった。

「おう、今井、後で聞きたいことあるんだけどいいか？」

和也がドクドクと血を流しながら言った。

「？、OK、今は席に付けよ、殺されんぞ」

「はい、和也、遅い」

きよ先生がマシンガンを構えた。
ドガガガガ！！

「あ、すんません」

マシンガンを食らった和也は体中から血を流しながら席に付いた。
（何であんだけ血流して死なないんだろう・・・）
クラスの8割以上がそう思った。

休み時間

今井と和也は屋上に來ていた。

「で？話って？」

今井が屋上のポールにもたれて腕組みをしていた。

「ああ・・・実は・・・」

和也の言葉に今井が割って入った。

「おっと、告白はゴメンだぜ、俺にそんな趣味は無エ」

「情報で聞きたい事がある」

和也は完全にスルーした。

「・・・たまにはボケに回ってみたい俺を察してくれよ」

今井が悲しそうな声を上げた。

「で？何の情報だ？情報によっちゃ金取るからな」

「水音の情報で何かないか？」

「・・・個人的情報があるのはAクラス以上の請負人だけと考えていい、

残念ながら水音ちゃんの情報は無い」

「そう・・・か・・・」

和也は肩を落とした。

「・・・情報屋つーのはこういう詳細しないのが普通だが・・・
水音ちゃんに何かあったのか？」

今井はジッと和也の目を見た。

「いや・・・別に」

和也は自分でも目が泳いでいるのが解った。

「ッハ嘘が下手だな、無理に詳細はしないさ、でもな、何かあったら言えよ」

今井は二ツと笑った。

「ああ、ありがとう」

「であるからこの代名詞は・・・」

厳しそうな若い男が机の間を歩きながら教科書を片手に朗読をしている。

最初に和也にこの学校の説明をした男だ。

男はある机の前で立ち止まった。

「・・・」

男のこめかみに青筋が浮いている。

机に突っ伏して軽い寝息をたてている白髪頭。

「う！わ…おい！起きろよ！和也」

隣りの席の怜次が慌てて和也を小声で起こそうとした。

男はゆっくりと教科書の角を和也の脳天にロックオン。

そのまま思いつきり振りがぶった。

ドオオン！！

クラスの隣り、水音のクラスから銃撃音が響いた。

「水音エ！！」

和也は椅子から飛び起きた。

ガターン

その拍子に椅子が飛ぶ。

同時に教科書と和也の頭の上下のクロスカウンター、

男の顔面に、立ち上がった和也の脳天がアッパー気味にクリーンヒット。

「ぐへあ！？」

男の短いうめき声、これだけでもかなりのダメージを食らったのが、

鼻から出る鮮血で伺える。

それを無視してすぐに和也はドアに向かって走り出した。

廊下に出るとすぐに隣りのクラスの前まで来るとドアにおもいつき
り力を加える。

ガターン！！

大きなドアの開く音と共に部屋に飛び込む。

「水音！！！」

「・・・ん？」

和也が不思議そうにクラス中を見渡す。

特に変わった事のないクラス、変わった所と言えば

全員が呆然と飛び込んできた和也を見ていた。

「へ？は？和也??？」

窓際の真ん中あたりにいる水音が目を丸くして和也を見ていた。

「何やってんのよアンタ」

教壇に立っているのはきよ先生、片手に教科書、片手に拳銃、
拳銃の口先から煙が出ている所を見ると、銃撃音はきよ先生の拳銃
からのようだ。

「ああ・・・あーあー」

頭を掻きながら目がみると眠そつな顔になる。

「邪魔したな」

ビツと右手を上げてすぐにクラスを出た。

「はい、さいなら」

きよ先生も同じように右手をビツと上げた。

「??????」

水音は訳がわからないという顔で去って行ったドアを見ていた。
クラスの殆どが水音と同じ行為をしていた。

ガラッ

無表情でクラスに戻ってきた和也。

「おかえり！」

ドア際近くのさなぎのあつけらかんとした無頓着な声。

「ただいま」

無表情の同じような無頓着な声。

「ん？」

和也が遠くで座っている怜次と今井に気付いた。

二人はとても慌てた様に両手をあげたりさげたり、している。

（何やってんだ・・・？）

怜次が右手の人差し指で後ろを何度も指差した。

（後ろ？）

和也はゆっくりと後ろを振り向いた。

後ろには、すざまじい男の顔があった。

右手に丸めた教科書で肩をポンポンと叩いていた。

先ほどの国語教師だ。

「・・・・・・・・」

一瞬沈黙が流れる。

「あー・・・すみません」

悪気も無さそうに右手で頭を掻きながら愛嬌一つ作らずに言った。

「廊下に立つてろオオオオオ！！！」

すざまじい怒鳴り声が和也の耳を劈く。

「先生、大変です、どこら辺の廊下で立てばいいかわかりません」

火に油

「~~~~~！！」 声にならない叫び。

休み時間

「いっつ・・・あのヤローおもいつきり殴りやがって・・・」

和也は痛そうに右頬を摩った。

「いや、アレはお前が悪い」

怜次が即座に突っ込む。

「ああ、お前が悪い」

今井も追い討ちをかける。

「そうか？」

和也が首を傾げる

「そこで、そうか？つて思える和也が凄いわー」

さなぎが関心した様に頷く。

「・・・そうか？」

もう一度首をかしげる。

（馬鹿だ）

（馬鹿だ）

（アホや）

3人が完全に同じ事を考えていた。

3時間目 体育

体育は2組と1組との合同授業、和也達は2組のクラスで体操服に着替えていた。

和也はフラフラと体を揺らしながら、上半身の服を脱いでいた。

「かーずやー!」

ドン!!

さなぎが思いつきり背中を叩いた。

背中にももの凄い激痛と重みが重なった。

和也は体にもみをまかせ、見事に吹っ飛び、机の中に飛び込んだ。
ガシャーン!!

「ほわああああ!？」

さなぎが驚きの声を上げて慌てて和也に近づく。

「ご！ごめん！そんな吹っ飛ぶとは思わなかったんや！！」

「大丈夫だ・・・気にするな」

無表情のまま和也は立ち上がった。

「！？」

立ち上がると同時に足がふらついた。

「わ！と！」

さなぎが慌てて和也を支える。

「悪い・・・」

和也の顔にはあまり生気を感じられない。

「和也・・・疲れてるんか？」

さなぎが心配そうに言った。

「問題ない・・・」

声にも若干、力が無い。

「和也・・・どうしたんや？」

めっちゃ神経質になっとなで？

授業終わったらすぐに隣のクラスに行くし・・・相談乗るで？」

さなぎが更に心配そうに和也を見た。

「いや、大丈夫だ・・・」

そう言うとすぐにクラスを出た。

「・・・」

さなぎが困ったような心配した様な複雑な顔で和也を見送った。

（出来るだけ水音の近くに居なければ・・・いつ狙われるか解らない・・・）

和也が水音の居るクラスのドアに手を掛けた。

ガラッ

ドアの開く音と共に男にとってのパラダイスが和也の目の前に広がった。

「ん？」

和也の目にはまだ着替えている途中の女性の方々が見て取れた。

「キ・・・」

「キヤアアアアアアアア」

耳を劈くような叫び声にとっさに和也は目と耳を塞ぐ。

「アアアアア・・・」

声がゆつくりと小さくなっていった。

（・・・？）

和也が不思議そうに目と耳を空けた。

目の前には『能力者』の女性達がすざまじい顔で睨んでいた。

ある女性は手に木刀、ある女性は手に電気ノコギリ、ある女性は両手を頭上に上げ、黒い禍々しい球体が浮いている。

「ここまで堂々とよく入ってこれるよ」

その先頭にツインテールの燃える様な赤髪をした女性が立っていた。

「お、水音」

和也は無頓着な顔で軽く下着姿の水音に挨拶した。

水音は顔は笑っているが青筋が弱冠浮いている、禍々しいオーラが見える。

「ざ・ん・げ・は？」

水音は微笑みながら言った。

「あー・・・」

頭を掻いていた時、偶然、水音の胸が目に入った。

この時、ある女の子の言葉が和也の頭に浮かんだ。

『女の人がキゲン悪いときは誉めてあげるのがいいよ』

（うむ・・・何やらキゲンが良くない様だ、ここはキゲンを損なわせない様にせねば）

そう考えた和也は顔を上げて水音を見た。

「？」

水音の顔はまだ笑っているがすさまじく恐ろしい。

「胸小さいな」

誉め言葉と認識したのか、完全に勘違いしている。

「！！！！」

水音が顔を真つ赤に染めた後頭の中で何かが切れる音がした。
ブツン…

「和也の馬鹿アアアアアアア！！！！！！」

水音の掛け声と共に女性達が和也に一斉に襲い掛かった。

「ぬおおあ！？」

10分後

「……………」

教室の前に人の形では無い、見るに耐えない物がグロテスクに転がっていた。

「なあ、これ何かな……………」

怜次は目の前の見るに耐えない物体を指差した。

「和也………だった物体？」

「今井、嫌な事言わんと言ってや」

さなぎも顔を青くして言った。

「ゲツホゲツホーイツテエ……流石に死ぬと思ったな」

和也は血だらけのまま、よろよろと立ち上がった。

「……………」

（ええゝ立ち上がったちゃったよこの人ゝてか人間？）

怜次が頭の中で突っ込んだ。

「イテテ…」

流石に痛そうに顔をしかめている。

（なんでコイツ生きてんだろ）

（なんでコイツ生きてんだろ）

（なんでコイツ生きれんのやろ）

本日2度目のシンクロとなった。

ショートホームルーム

SHR後、

廊下を水音が歩いていると、前方に和也が壁にもたれ掛かっていた。

「水音！」

和也は水音に気が付くと水音に駆け寄った。

「………」

水音は和也を無視してサッサと先に進んだ。

「おい、水音」

和也も慌てて水音の後を追う。

「………」

水音は足を速めた。

「ちよつと待てよ」

和也も同時に足を速める。

水音は更に足を速めた。

「おい！待てって！」

和也が水音の腕を取ると無理矢理せき止めた。

「何よ！！」

水音がキツと和也を睨んだ。

「いいか、帰るときは絶対に俺を呼べよ」

和也が真剣な面持ちで言った。

「何で！？和也今日おかしいって解ってる！？」

授業中乱入したり、私の後ろを何度も付いてきたり！！私の保護者にでもなったつもり！？

馬鹿にしないで！！！！」

水音は手を思いっきり払い除けると廊下を走り出した。
その後ろ姿をジッと見つめている和也の目はうつすらと悲しそうな
目の色をしていた。

「ほんとと！！和也つて最低！！あんな人だなんて思わなかったよ
！！！！」

学校の帰り道、憤慨した様子の水音は美奈と並んで歩いていた。

「アッハッハ！！水音が怒るのもなあゝんか久々だなゝ」

美奈は楽しそうに笑った。

「え？そっかな？」

「そうだよ、前は怒っても感情に出す事は無かったからねゝ」

美奈の顔がフツと和らいた。

（これも和也のおかげ・・・かな）

「それより和也、何か言つてたけどいいの？」

「へ？見てたの？」

水音が驚いた様に目を丸めた。

「アッハッハ、噂になつてるよ、公衆の面前で水音が大声で激怒し
てたつてね」

美奈はニコニコと笑いながら言つた。

水音の顔がみるみる赤くなつていく。

「そうだつて・・・和也の馬鹿・・・」

美奈はそんな水音の横顔を見つめた。

「あーのさ、そこまで怒んなくていいんじゃない？」

「あたしから見るとさ、確かに変な行動ばっかだけど、なーんか必
死に見えるんだよね」

「必死？」

水音が首を傾げて美奈を見た。

「うん、よくわかんないけど、何か考えがあるんじゃないかなあ？」

「そかな・・・」

水音が和也の行動を改めて思い返した。

「ま、なんにしても帰ったら話あってみたら？あたしは仲悪いままの二人何て見たかあないよ」

美奈はニコニコと笑っていたが、目は真剣な目つきであった。

「わかった」

水音も美奈を見返すとニコツと笑った。

「じゃーね！また明日！」

美奈は分かれ道で水音と分かれた。

美奈は何度も振り返って手を振っていた。

水音も美奈が見えなくなるまで見送った。

「心配してくれてたんだろなあ、ありがと美奈」

見えなくなった美奈に聞こえるはずのない御礼をもらした。

「さつてと！さすがに言い過ぎだし、帰ったら和也に謝ろつと！」

水音はいつもの様にグツと伸びをして歩き出した。

だが、

物陰に隠れている、残酷な漆黒の目を光らせている何かに気づく事はなかった。

第6話 学校の出来事（後書き）

遅くなった第六話！！

機械の心に繋がる話はどうとう敵の面影が・・・？

ヤー長かった

あ、誤字チェックとかしてませんからあったら言ってもらえます？
眠いのであとがきは後に追加するかも、では次回の話でまた会いましょう

第7話 漆黒の男（前書き）

和也に怒りを見せた水音、

水音の為に必死な和也、

2人の関係に小さな亀裂が走る。

その2人を物陰から見張る、残酷な瞳の正体は・・・？

第7話 漆黒の男

いつもの帰り道を半分まで差し掛かった所で水音が立ち止まった。

（・・・）

水音はゆっくりと後ろを振り向いたが水音以外の人は見えない。

（付けられてる・・・？）

目には見えないが何かが後ろからつけている感覚があった。

水音は足を速めた、

後ろから同じ様に人がつけている気配がする。

「！！！！」

水音の背筋にゾツとする様な寒気が走った。

水音は一気に走り出した。

今度ははつきりと後ろから走る足音がする。

ドゥン！

後ろから大きな音と共に足を何かがかすめ飛んだ。

「キャ！」

突然の足の痛みにバランスを崩して前のめりに転んだ。

ツキと水音は後ろを振り向くと、黒いフードを被った男が拳銃を片手に不気味に微笑んでいた。

「逃げなよ」

澄んだ少し高い声が男から聞こえた。

「え？」

水音は壁に手を寄せながらヨロヨロと立ち上がった。

どうやら銃弾が足を翳めた様だ、

足から血がドクドクと出ている。

その時、フードから見える漆黒の黒い目を見えた。

さっきと同じ様なゾツとするような寒気が走る。

男は不気味にニタァっと笑った。

「!!」

頭の中でもう一人の声が聞こえる。

逃げる 逃げる

逃げる

逃げる

逃げる

何度も響く声、

こいつは

危ない

水音は足の激痛に耐えながら走り出した。
本能的に感じた、

この男は危険だと

ツハツハツハ、

どれ位走っただろう、息が酷く荒い、
額からも汗が滲んでいる。

足は既に限界を超え、血を流しながらも走り続けていた。

その後ろをあざ笑うかのように走るでも無いスピードで黒いフードの男が追いかけている、

片手にはフードよりも更に黒い拳銃を握っている。

水音が道の右に出ようとした瞬間、男が後ろから拳銃を構えた。
ドオン！！

短い銃声音が響く、

水音の前方を銃弾が霞め飛んだ。

水音が目を見開いて立ち止まった。

男は拳銃を下ろしながら口を開いた。

「そつちじゃないよ」

男は楽しそうにまたニタアつと不気味な笑みを見せた。

水音は慌てて前に走り出す。

「そうそう、そつちだ」

男は先ほどと同じ様に水音の後を追いかけた。

（これは…誘導されてる…？）

水音は息を弾ませながら前方を見ると、古ぼけた廃工場が見えた。

ドアを押しつけて一気に工場の中に入ると、中はとても広く、埃まみれだ。

しばらくは誰にも使われていない様に見えた。

水音は急いで振り向いた。

その先には入り口の前で黒いフードの男が立っていた。

「フウ・・・中々頑張ったネ」

フードの男は、頭からすっぽりと被ったフードを捲り上げた。

その男は和也とは全く正反対な漆黒の真っ黒な髪に同じ様に真っ黒な瞳をした男だった。

「あなた・・・何のつもり！？」

水音はツキと男を睨んだ。

「クククク、まだ虚勢を張る体力は残っているんだね、足が震えているよ、可愛いじゃないか」

男はあざ笑うかの様に水音を見た。

男の言う様に、水音の凄味は虚勢に過ぎなかった、足からはまだ血がボタボタと落ちている上に体力的にも精神的にも追い込まれていた。

「質問に答えて!!」

水音は更に睨んだ。

「OK、解ったよ、そう怒らないでよ」

男はまだ不気味に笑っている。

（この人・・・からかつてるの？）

水音は男から目を離さないようにしている。

「僕は君を殺しに来たんだ」

水音は一瞬、男が言った言葉が理解出来なかった。

「え？、私を・・・殺す？」

「そう」

男は何か楽しそうだ。

目の前が真っ暗になった様な感覚、TVの中だけの世界が今現実として水音の目の前に現れた、

コロサレル

水音は顔を真っ青にした。

（そんな、どうして？何で？）

水音の頭の中はグルグルと回っていた。

「それにしても大変だったよ」

男は水音の状態を無視して話を続ける。

「君がいつまでたっても一人にならないから、

殺すタイミングがこんなに遅くなってしまったよ」

男は興奮した様にスラスラと話を進める。

「あの男のおかげでね、純白の男」

水音が少しだけからだを動かした。

「かず・・・や？」

「和也と言っのかい、どうやら和也は君が狙われている事に気付いていたと思うよ、

やはりあの男は凄い男だったんだよ」

男は嬉しそうに話していた、まるで新しい玩具を見つけた子供の様にはしゃいでいる。

（和也は気付いていた？何で？教えてくれなかったの？でも…そんなの今はいい）

水音はゆつくりと顔を上げた。

顔はさっきまでの青い顔からしつかりとした顔つきに戻っていた。

「私はここで死ぬわけにはいけない！！」

（和也には酷い事を言った…帰って謝らなきゃ…）

「ククク！！そうこなくっちゃ！！あつさり死なれちゃ僕がつまらないよ！」

男は拳銃を片手に構えなおした。

水音はポケットからハンカチを取り出すと血が出ている足に巻きつけるとキュツと締めた。

（応急処置はこれでいい、後は私がどれだけ戦えるか…）
立ち上がると血が止まらない足を不安そうに見た。

（水音・・・先に行ったのか、大丈夫だといいたが）
和也は一人、帰り道を歩いていた。

周りにも何人か歩いている人たちが見て取れる。

和也は廊下での水音の事を考えていた。

（帰ったら・・・謝ろうか・・・）

珍しくしょんぼりと顔を伏せていた。

「ねーコレ何ー？」

前方で二人組みの女性が下を見て騒いでいた。

「血の跡かなー？何かコワイ」

二人組みはすぐに前を歩き出した、

和也が先ほどの二人組みが見ていた地面につくと何となく下を見てみた。

「・・・これは」

下には血痕が落ちていた、

ジツとそれを見た後、しゃがみこんでその血を指先で触った。

指先に赤い血が少しだけ付いた。

（まだ完全には乾いていない・・・）

和也が前方を見ると血痕がたんと続いていた。

「まさか・・・」

和也は胸騒ぎに襲われ、続いている血痕の後に向けて走り出した。

「水の柱！！」

水音が構えた両手から一直線に水流が男に飛んだ。

男はギリギリで地面を蹴って攻撃を避けた。

水流は外れ、工場のコンクリートの壁に激突した。

「アハハハハ！！どうしたんだい！！攻撃が荒いよ！！」

（く！早く戦いを終わらせなきゃ、勝てなくなる！！）

水音も同時に男に向かって走った。

足に激痛が走る。

「水の矢！！」

間髪居れずに水音が即座に手を向ける。

水音の手から4本の細い水の糸が男に向かっていく。

「ハ！この程度で僕を倒すきかい！？」

男は拳銃を向けて引き金を引いた。

ドゥーン！！ドゥンドゥーン！！

3つの短い銃声音が工場内に響き渡る。

3つの弾は水音の水の矢の内の3本に一ミリもずれずに弾が当たり、水の矢は粉碎した。

バシャア！

残った1本の矢が男に当たった。

男の体には少し強い水鉄砲程度にしか衝撃は与えられなかった。濡れた体を見ると男は呆れた様にため息を付いた。

「なんだい？この程度かい？」

「！！！」

水音が男に向けた手をグツと丸めた。

男にかかった水が冷気を帯びながら固まっていく。

「これは・・・氷！？」

男の顔色が豹変していく。

「力自体が弱ければ応用すればいい！！！」

水音は叫ぶと男の頭上へと飛んだ。

空中で、頭上で男に両手を向ける。

「氷の柱！！！」

叫ぶと同時に両手からみるみる巨大な氷が出来上がっていく。

「体が…動かない」

男は逃げようとするが凍った水が地面と連結して、動くことが出来ない。

（勝った！！）

そう水音が思った瞬間であった、

水音の体に何かの異変が起きた。

「！？」

体の力が抜けていく。

同時に男の体に付いた氷と、氷の柱が消えていった。

「キヤ！」

水音は着地に失敗して背中から落ちた。

「な・・・何!？」

立つ力さえ出てこない。

「残念だよ・・・」

男は肩を竦めた。

「面白くなってきたのに…これだったら最初から本気でやれば良かったよ…」

男はブツブツと誰に話すでもなく顔を伏せていた。

「う・・・あ・・・」

足は血だらけで、頭痛と眩暈が水音を襲っていた。

「毒が回るのはもつと遅いと思ったのに・・・本当残念だ・・・」

男は倒れている水音にコツコツと足を為らして近づいていく。

「ぐ・・・う」

水音は手を男に向けたが力が抜けていき、水を作り出すことが出来ない。

男は水音のすぐそこまで行くとしやがみ込み片方のツインテールを握って持ち上げた。

「キヤア!!」

髪が引つ張られ、激痛と共に顔が持ち上がる。

「もう興醒めだよ・・・さっさと死んで」

男は残酷な目で拳銃を水音の眉間に銃口を突きつけた水音の眉間に冷たい物が当たる。

その冷たさが死ぬ瞬間というゾッとする感覚を走らせた。

（この人、人を殺すのに躊躇が無い！何て気持ち悪い殺気・・・でも、私は似たような殺気をしてる、何だっけ・・・）

ゆっくりと男が引き金を引いていく。

カチャッ

嫌に耳の近くで音が聞こえる。

その瞬間考える事が出来なくなった。

（ゴメン・・・和也、あやまりたかった・・・）

水音は覚悟を決めて目を瞑った。

バン！！

工場のドアが大きな音と共に開いた。

薄暗い工場の中に光が入る。

壁に手を掛けて息を整えている影が見えた。

（だ・・・れ？）

光の影で顔が見えない。

息を整えるとツスと顔を上げた男は、純白の目をぎらつかせていた。

（！）

ツドと水音の感覚に押しのせる殺気、

（そうか、この人に似てる殺気って、たまに和也が見せる殺気だっ

たんだ・・・）

「水音を離せ」

声は冷静に見えたが、感情を押し殺しているようにも見えた。

「クククク！待っていたよ」

男は水音から手を離すと立ち上がった。

「・・・」

2人の間にピリピリとした空気が漂う。

「君とまた会いたくてね、もう少し遅かったら帰るところだったよ」

和也の目には倒れている水音しか映っていないかった。

「覚えているかい？黒猫の時に噴水事斬ろうとしたじゃないか、あ

れには焦ったよ、それに」

「黙れ」

和也の無機質な声が男の声を遮った。

「下がれ！」

和也の声に薄らと怒りが見えた。

「・・・」

男はフウツと小さくため息を付くと大げさに両手を上げて後ろに下

がった。

下がるのを確認すると和也はすぐに倒れている水音に近づいた。

「・・・大丈夫か？」

しゃがみこんで倒れている水音を抱きかかえた。

「エヘヘ... かつこ... 悪い... 所見せちゃった... ね」

無理に笑っている様に見えた。

和也が即座に水音の状態を確認した。

（息が荒い、熱もある、顔色も悪い・・・

特に足の出血が酷いな、早く病院に連れて行って適切な処理をした方が良い）

「和也・・・ゴメン・・・ゴメンね」

か細い声は擦れて震えていた。

「喋るな体も動かすな、息を整えて寝とけ」

体を揺らさない様にゆっくりと頭を下ろした。

「待つてろ、すぐに病院に連れて行ってやるからな」

和也は無表情ながらも優しい声で言った。

「和也・・・駄目・・・逃げて」

水音は先ほどの殺気で男の実力が解っていた。

勝てない

水音の脳裏に浮かんだ言葉は口に出す事は出来なかった。

ツザ

和也は男とは少し離れた位置で立ち止まった。

「クククク、僕を退屈させないでね」

男は子供の様に目を輝かせながら拳銃を抜いた。

「・・・」

和也は無言で刀を抜いた。

「僕の名前は美濃悠那ヨロシ…」

男が言い終わるか終わらないかの瞬間、
和也の刀が振り下ろされた。

ギン！！

悠那はギリギリに拳銃で自分の身を守った。

（！、あの間合いを一瞬で）

「ゴチャゴチャとうるせえんだよ…こっちは急がなきゃならん、即効で終わらす！」

数センチの間で和也はドスの効いた声を発した。
怒りで手に力の入る刀は悠那をギリギリと拳銃を震わせていた。

「クククク、そう言わずもつと楽しもうよ…」

少し高い声は興奮した様に嬉しそうであった。

「殺し合いをさあ…！」

悠那はそう言うのと拳銃で刀を払った。

和也は刀を構えながら１メートル程後ろに飛んだ。
ギツと睨んだ瞳はまだ怒りに燃えている。

「そんなに僕があの子を傷付けたのが許せないかい？」

悠那は顎で倒れている水音を指した。

「黙れ、貴様と話す事は無い」

和也はジリジリと歩み寄りながら睨み続けている。

「もつと仲良くしようよ」

ニコニコと悠那は笑っている。

「・・・」

和也は何も答えずに刀を一直線に向けた。

「炎尾！」

刀の先から一直線に炎の弧を描きながら悠那に向けて火の塊が走った。

悠那は呆れたように肩を竦めた。

「全く気が早いね」

ドゥン！

拳銃から出る鉄の塊が炎の塊に当たった。

パン！

ぶつかる音と共に炎尾がかき消された。

炎が放たれた場所には和也は居なかった。

「さて…何処かな？」

まるでこうなる事を悟っていたかの様に悠那はニヤニヤと笑っていた。

悠那は後ろに拳銃を向けた。

「！！」

後ろから刀を振り下ろさんとしていた和也の目の前に拳銃が付きつけられた。

「フフ！、背後からの奇襲…悪くない戦い方だね」

悠那はそのまま引き金を引く。

「チィ！！」

和也は舌打ちと同時に地面を蹴り上げた。

ドォン！！

目的を外した弾丸がコンクリートの地面に弾かれる。

飛び上がった和也の体は悠那の頭上を越えて目の前で着地した。

「！！」

和也は腹部に刀を振る。

（片手はまだ後ろを向いた状態だ、この体制から拳銃を向ける事は出来ない

殺った！！）

ギィン！！

もう一つの片手で抜き取られた拳銃が腹部をガードしていた。

「クク！手は2本あるんだよ」

悠那は戦いを楽しんでいる様に笑っている。

（2丁持つてるのか・・・めんどくさいな・・・だが！）

カチャッ

和也は刀の向きを上に変えると

腹部から上段へと刀を振り上げた。

ガキィン！！

拳銃が宙に浮いた。

「あ……」

悠那は間拔けな声を漏らした。

和也が振り上げた刀は腹部を守っていた拳銃に当たった。

振り上げからの2段構えの一直線の突きは喉もとを確実に狙っていた。

（今度こそ終わりだ！！）

和也は勝利の確信に目を光らせた。

「！！」

喉元に刀を突き付けたままピタッと止まった。

ガシャンッ

遠くで拳銃が落ちる音がした。

「どうしたんだい？」

そのまま突き刺せば、君の勝ちだよ？」

刀を突き付けられているというのに顔色一つ変えず悠那は微笑を浮かべている。

「……く」

和也の白い目から怒りが消えていった。

和也の脳裏には赤髪のスレートヘアの女性の後姿が映っていた。

「殺しは……しない、去れ」

和也は刀を突きつけたまま言い放った

「今更なんだい？君の目を見れば解るよ、たくさんたくさん殺してきたんでしょ？」

僕と同じ濁った目、殺し合いをしようよ」

不気味な微笑みは今も続いていた。

（なん・・・の・・・話？）

ぼんやりとした頭のまま水音の耳に二人の会話が入っていた。

和也は一瞬驚いた様に目を見開いたが、すぐに元の顔に戻っていた。

「俺はお前とは違う・・・サッサと消えろ」

悠那は笑顔を顔からツツと消した。

子供が玩具に飽きた時のつまらなそうな顔。

漆黒の目は先ほどの和也の様に澱んだ。

「残念だよ・・・」

そう言った瞬間、悠那はしゃがみ込み右足の太ももに巻きつけられていた物を抜き取った。

それを立ち上がると同時に突き上げた。

「くっ！」

一瞬反応の遅れた和也は間髪いれずに上体を後ろに反った。

それは和也の頬をつつすらと縦に切り、血が少し飛び散った。和也が避けながら見えた者は小型のサバイバルナイフだった。

（あんな物まで持ってやがるのか）

和也は頬から垂れる血を手で拭くと刀を構えなおし悠那を見た。

右手に拳銃、左手にサバイバルナイフを握って、漆黒の目を光らせていた。

その姿が和也には妙に禍々しく見えた。

悠那はサバイバルナイフを戻すと、和也に背を向けて歩き出した。

「貴様：戦闘中に背を向けるとはどういう事だ」

和也は刀を構えながら睨んでいる。

「君なんぞに本気もクソも無いからね、攻撃したきや攻撃しなよ」
笑顔が消した悠那の顔は無表情ながらも酷く残酷な目をしていた。

（こいつ・・・俺をなめてやがるのか・・・？）

「あつたあつた」

悠那はしゃがみ込み、拳銃を拾い上げた。

「さあ、やり直しだよ、まあすぐに終わる事になるだろうけど」
悠那は両手に持った拳銃を腰のホルダーに収めた。

和也は水音の方を見ると、先ほどより息が荒くなっている。

和也は軽く舌打ちすると顔をしかめた。

（時間が無いかもしれない・・・絶対に・・・絶対に助ける・・・
！！）

和也は悠那に向かって一気に走った。

ドオン！！

（！？）

銃声の音と共に反射的に横に飛んだ。

悠那の方を見ても、少しも動いていない。

（あいつ、撃ったのか？いつ？）

ドオン！！

またしても銃声音が響く。

その瞬間に和也の目に悠那の動きが見えた。

（早撃ちか！！）

察した瞬間、もう一度悠那に向かって走る。

ドオン！！ドオン！！ドオン！！

今度は3発の銃声音が響く。

和也はタイミング良く右、左、右と避けた。

（目を凝らせば、銃の向きで、何とか避けられる！）

悠那の1、2歩前で刀を振り上げる。

（両手からの連続の早撃ち、サバイバルナイフを出す事は出来ない、近距離では早撃ちで狙うのは難しい！）

拳銃とは元来、1に抜き、2に構え、3に狙い、4に撃つ、この一連の動作によって行われる。

早撃ちの場合1、2から3を飛ばし4に向かう事により一連の動作の一部を削ることによって生じる能力である。

和也は動体視力で目に終えるギリギリの部分で2の構えで銃口の向きで弾丸の飛び出す部分を見ていた。

近距離に近づけば3の動作を飛ばした、ただの早撃ちなら当たる事

は無いと和也は判断したのだ。

「な・・・に？」

悠那の目の前で和也は立ち止まっていた。

ポタッ

真紅の血が和也の腹部から垂れ落ちた。

「ほーら・・・すぐ終わった」

あっけらかんとしたつまらなそうな声。

和也の腹にはサバイバルナイフが深く刺さっていた。

カランッ

和也の手から刀が零れ落ちた。

和也はゆっくりと倒れこんだ。

「君みたいな考えの人多いんだよね、拳銃はフェイク
本当はもっと早く撃てるんだけど、本気だとサバイバルナイフ抜
けないしね」

つまり、悠那はすざまじい速さでホルダーに銃を収め、サバイバル
ナイフを抜き取ったのだ。

「貴様：実力を隠してやがったな」

和也は苦しそうに手で刺された所を抑えていた。

「隠す？君が弱すぎるんだよ」

はき捨てるように言っていると悠那は倒れている悠那を無視して歩き出し

た。

その歩く先には水音が倒れていた。

「！！！！」

和也の表情が青くなった。

「きつさまああ！！！！水音に手を出したらぶ飛ばすぞお！！」

和也の叫び声が工場に木霊する。

悠那の手に持つ真っ赤に染まったサバイバルナイフが更に恐ろしく見えた。

「もう君に様は無いよ、サツサと仕事終わらせて帰ることにしたよ」
「くそ！くそ！」

和也は必死で体を擦じらせて立とうとしている。

「ジツとしてなきゃ早く死ぬよ？思いつきり刺したからね」

悠那に微笑が浮かぶ。

「そこで倒れときナよ、すぐに済ますから」

悠那は水音の前で立ち止まると、真紅に染まったナイフを逆手に持った。

「待て・・・つつてんだ・・・ろ」

刀で体を支えながら和也は立ち上がった。

服は腹の部分だけ真っ赤に染まり、その血の量を物語っていた。

悠那は振り向くと少し驚いた顔を浮かべた。

「へえ、丈夫だね、でも無理したら腸が飛び出るよ？」

「水・・・音に・・・さわ・・・るな」

息が続かない、喉に血が溜まり喋り辛い。

「・・・うるさいな、もう君にはあきたんだよ」

拳銃を和也に向けた。

ドォン！！

何度も聞いた銃声音は和也の足に命中した。

「グァァ！！！」

呻き声と共に和也は倒れこんだ。
カランッ

虚しそうに刀はコンクリートにもう一度音を立てて倒れた。
足からも真紅の血が垂れる。

「かず・・・や」

水音の目にうつすらと涙が浮かんだ。

「・・・死んでもらうよ」

同情も何も無い、よどんだ漆黒の2つの目だけが水音を見つめていた。

水音に触れようとした瞬間、悠那の後ろから声が聞こえた。

「触るな・・・つってんだ・・・ろ」

悠那はバツと後ろを振り向いた。

（確実に足を貫通させたと思ったけど・・・）

和也の顔にうつすらと汗が滲んでいる。

足からも腹からも血が出続けていた。

（・・・ふうん、もう長くはないな）

和也が倒れている場所から今和也が立っている場所までの道が血の道と化していた。

悠那は呆れた様に肩を竦めた。

「もう立ってるだけがやつとみたいだね」

さつきと同じ様に拳銃を和也に向けた。

和也はフラフラと体を揺らすだけで最早避ける力は無かった。

「和也・・・ヤダ・・・」

水音は力無くフルフルと首を振っていた。

ドオン！！

さつきと同じ銃声音が木霊する。

銃弾は和也の胸を貫いた。

「ゲホオッ！！」

和也の口から血が噴出された。
バランスを崩した様に倒れた。

ドサッ

水音の顔に和也の血が飛び散った。

「あ・・・あ・・・」

水音は目を見開き、顔を強張らせて震えていた。

「イヤーーーー！！！！」

水音は立ち上がると叫びながら和也に走りよった。

パシヤッ

和也の近くに来ると足に水の音がした。

「これ・・・は、血？」

水の音の正体は和也の周りに広がった真っ赤な血。

「和也！」

更に顔を青ざめた水音は和也の頭を持ち上げた。

「うご...く...な...つつたろ...」

和也は力なくそう言った。

「これでもう動けないね」

悠那は拳銃を水音に後ろから向けた。

「水音！！」

グンッと和也は水音の腕を引っ張った。

「キャッ！」

和也はとっさに水音を抱きかかえて悠那に背中を見せた。

ドオン！！

和也の背中に弾丸が当たる。

「グアアア!!」

和也が苦痛の叫び声を上げた。

「!?!、まだ・・・動けるのかい!?!」

悠那は一瞬呆然としていた。

「ヤダ・・・ヤダ・・・和也・・・」

水音の目から涙が溜まる。

「絶対・・・助けるからな・・・『もう、同じ過ちはしな・・・い』」

└

和也の虚ろな目は最早何も見ていなかった。

ただ、ゆっくりと倒れていった。

（ア・・・レ?俺、なにしてたん・・・だ・・・け・・・?）

血を出しすぎた和也は最早考える事も出来なくなっていた。

「和也・・・和也・・・お願いもうやめて・・・」

右手でギュツと背中を握り締めポロポロと涙だけは流れ続けていた。

（この子は・・・何で・・・泣いてるんだ・・・?）

「何故だ!?!もう動けるはずが無い!」

騒然と目を見開いた悠那は信じられないと見ていた。

（コイツが・・・あの子を泣かしたのか?『沙羅を』・・・）

「もう・・・やめ・・・て・・・私は大人しく殺される!?!だから・・・」

・・・だから和也は助けて!?!」

水音は泣きながら悠那に言った。

（駄目だ・・・死なせない）

和也は自然にそう思った。

「それは出来ないよ、君もこいつもここで殺す」

拳銃をもう一度水音に向ける。

「そん・・・な」

水音は涙を流しながら、顔を伏せた。

「やらせな・・・い、」

和也の服は血で真っ赤な服になっていた。

「和也・・・もう・・・もう立たないで・・・」

水音は必死で和也を止めようとしていた。

「何で・・・何で立つんだよ！！もう死ぬんだぞ！！」

悠那が奇声を上げた、

「大丈夫・・・沙羅・・・俺が・・・守るから」

和也は水音に笑い掛けた、誰にも見せない様なとても優しそうな笑顔だった。

「！？、和也！どうしたの！？」

水音は和也の言葉に違和感を覚えた。

（誰かと・・・間違えてるの？）

和也の目には静かな光が宿っていた。

（何なんだ！？コイツは・・・何故、何故まだ立ち上がる、何故逃げない！）

「う・・・あ・・・」

悠那は自然に体が後ろに一步下がった。

「うあああああああ！！」

ドオン！！ドオン！！ドオン！！ドオン！！...

悠那は狂った様に銃弾を飛ばし続けた。

先ほどの早撃ち等ではなく、恐怖に駆られた荒い撃ち方であった。

和也の体に銃弾が当たり、掠り、その度に真紅の真っ赤な血が飛び散り、服は純白の髪と共に更に赤く染まる。

和也の純白の目は何もみていなかった。唯、薄らと光る目の光だけ

は、消えていなかった。

・・・リン

意識が薄れ行く中、和也の耳に鈴の音が聞こえた。

- 真っ白な世界 -

(ここは・・・?)

和也は真っ白な世界にポツンと一人だけ立っていた。

(俺、なにしてたんだっけ・・・?)

和也の頭には何も浮かぶことは無かった。

『こんにちは』

突然目の前から、透き通った声が、白い世界に響き渡った。

前方をグッと和也は目を凝らしたが、声の主は白い光の影によって見えることは無かった。

小さなシルエットが光の中で浮かんた

(子ども・・・?)

和也は口を開いた、

「・・・」

（おい）

和也の口から声は出なかった。
驚いた和也は両手で喉を抑えた。
試しに和也は声を出そうとした。

口はパクパクと開いたが声は出ることは無かった。

（何だこれは！？）

『あの時』は出たのにね』
透き通った声がまた響く。

（あの時？どういう事だ？）

『何だ、それまで覚えてないの？』

「！？」

（心が読めるのか！？）

『読める？解るんだよ、僕は君だからね』

子どもはうつすらと笑った様に見えた。

（貴様は何を言っている？）

和也の声は出ないが口だけは動く。

『まだ今の君が知る事じゃないよ』

またその子供は小さく笑った。

（そうだ！！水音！！今はもう何でも良い！！出口は何処なんだ！？）

和也は何故一瞬の間、水音の事を忘れていたのが全く解らなかった。

『何で行くの？』

子供は不思議そうに首を捻った。

（早く行かなきゃ水音が・・・！！）

和也の顔には恐怖が薄らと浮かんでいた。

『君が行っても無駄だよ、勝てないのは解っているんでしょ？』

和也はグツと顔をしかめると拳を握り締めた。

（解っている…俺が行っても勝てるはずがない…）

漆黒の男が和也の脳裏にうつすらと浮かんだ。

（でも…でも…）

和也の胸が熱くなる。

「それでも俺はあいつを助けたいんだあ！！！！」

和也は慌てて両手で口を塞いだ。

（声が…出た…？）

子供はとても嬉しそうに笑った。

『その言葉…待ってたよ』

（あ…れ…？）

和也の意識が霞み始めた。

薄れ行く微かな景色の中、子供の声が聞こえた。

『信じてるよ、もう同じ過ちはしないでね』

そこで意識は途切れた。

『信じてるよ…』

妙に耳に残る、優しそうな声、何処かで聞いたような。

（何処…だ…け…な…）

血の海の中で和也は倒れている。

「ヤダ…ヤダ…和也…和也…」

水音は和也の横で座り込んでポタポタと熱い滴を流していた。
震える手を伸ばすと和也の顔に触れた。

冷たい

そのまま和也の口に近づけた

吐息が手に掛からない

「そんな…そんな…」

水音の顔は真っ青になる。

また眩暈が生じる。

「う……」

手を付いて体を支えた。

悠那は少し離れた所で座り込んでいた。

ツハ…ツハ…ツハ

呆然と座りこんでいた悠那は荒い息遣いをしていた。

周りには沢山の弾丸が転げ落ちていた。

（僕とした事が……感情に流されてあんな殺し方をするなんて……）

悠那は立ち上がると、拳銃を握った。

（これで邪魔する物は無くなった）

チャキッ

拳銃は真っ直ぐに水音に向けられた。

それに気付いた水音は涙で濡らしながら悠那を見た。

「お……お願い……私は死んでもいいから……和也を……和也を病院に連れて行ってあげて」

水音は声を震わせながら言った。

「そいつはもう死んでるよ」

酷く冷たい声だった。

（何で・・・この子といい・・・あいつといい・・・自分よりも他人を優先するんだろう）

悠那には全く解らない事だった。

（何で？自分の命が大事に決まってるじゃん、あそこまでしなくてもいいじゃないか、勝てないのに、助からないのに・・・どうして）
悠那はこの2人の行動が妙に苛ついた。

（むかつく・・・）

自分には全く解らない行動がとてつもなく嫌だった。

引き金に指を掛けた。

水音の顔が強張る、

だが和也を守る様に手を広げて睨んだ。

・・・リン

水音の耳に入った微かな鈴の音。

（まただ・・・）

悠那の瞳に力が入る。

「なんで・・・なんで！！もう死んでるじゃないか！！」

悠那の手に力が入る。

ドオン！！

「！！！！」

水音はギョツと目を瞑っていた。

痛みを感じない。

ゆっくりと目を開けた。

銃口からは煙が出ているので銃弾が飛ばされたのは解った。

この近距離で銃弾が外れることは考えられなかった。

水音の目に映っているのは目を見開き呆然としている悠那と震える手で持つ拳銃、

拳銃は今も水音に向けられている。

その瞬間ゾツとする者が背中に伝わった。

慌てて後ろを振り向くと、

さっきまで倒れていた和也が立っていた。

体中に血を染み付けさせていた。

純白の髪は所々に血を被っている。

そして今、見開かれた純白の目、

その姿は血を纏う悪魔の様であつた。

「ククク・・・」

和也の口の端が不気味に広がる。

「ヒヤハハハハハハハハハハハハハハ！！！！！」

空を仰ぎ、大声で高笑いする和也の姿が目の前にあった。

!

ビリビリと叫び声が水音の体に伝わる。

悠那の口から、言葉が漏れた。

「……………」

「じゅ……………」

『純白の悪魔』……………」

「君があんな純白の悪魔なのかい!？」

驚きの顔から悠那の顔は和也と同じ様に残酷な笑みに変わっていた。

「クク！！君が！！君がそうなのかい！？？」

君こそ實力を隠していたじゃないか！！今度こそ殺し合いになるね
エー！！」

「ヒヒヒヒ！！殺す殺す殺す殺す殺すウ！！」

和也の声とは思えない、気持ち悪い声が小声で言っているのが水音に聞こえた。

水音は立ち上がる事が出来なかった。

ツズと背中に背負われる様な重みが掛かっていた。

（これは……！？また殺気！？いや……違うそんな生温い者じゃない！
！これは……『狂気』！？）

リリリリリリリリリリ！！！！

落ちている和也の刀、氷鈴刀の柄の先に付いている三つの鈴が激しく鳴っていた。

水音の耳に鈴の音があららしく聞こえていた。

まるで、和也を止めようとしているかの様に鳴るその音は妙に悲しかった。

「アハハハハハハハハハハ！！！！」

「ヒヤハハハハハハハハハ！！！！」

2つの残酷な笑い声が工場内で響き渡った。

第7話 漆黒の男 完

第7話 漆黒の男（後書き）

遅くなってすいません・・・

ですが、第8話と同時に作っていたので第8話はすぐに出せると思っています。

次でこの話も区切りふがつきます、
それでは次の話でまたあいましょう。

第8話 黒翼の墮天使VS純白の悪魔（前書き）

前回で、水音を守る為に和也は漆黒の男、悠那と戦うが圧倒的なレベルの差で和也は血だらけに成る、絶体絶命の瞬間、和也は突然不気味な笑い声を上げた、今までの和也ではない様子に水音も背筋に寒気が走る。

第8話 黒翼の墮天使VS純白の悪魔

第8話 黒翼の墮天使VS純白の悪魔

戦いが全てだ

その手に血塗られた者を持ち、

魂と魂がぶつかる

弾け飛ぶ魂はその一瞬、とても美しく輝く

生き残るのは一人、それを真の辺りにするのも一人、

そんな中を生きてきたんだ

殺すのに躊躇は無い、

殺す者が正義、殺された者が悪、

この世界で生きてきた僕にとって、

何でもない仕事の一つ、

戦いは僕にとってこの上ない至高

残酷な笑みを浮かべたまま、純白の何かはすざまじい速さで一直線に走り出した。

（早い！！）

悠那は慌てて2丁の拳銃を和也に向けると、引き金つを引いた。何発もの銃弾が和也を一直線に狙う。

「ヒヤハハハハハ！！！」

避け様ともせずに一直線に向かってくる和也の体中に銃弾が霞め、当たる。

だが、勢いは止まらない。

その瞬間、悠那はカチツという音に銃弾が切れた事をすぐに認識した。

（しまっ！！）

そう思った瞬間、和也は悠那の目の前まで来ていた。

悠那は後ろに下がるとサバイバルナイフを抜き取った。

「忘れたのかい！？僕にはまだコレがあるんだよ！」

ナイフを逆手に持つとそのまま和也の頭に振り下ろした。

ザクッ

鈍い肉を刺す音、

「！？」

和也は避けるのではなく、右腕を前方に出し、振り下ろされるナイフを右腕に刺させた。

悠那の顔から笑みが消えた。

（なんだ、こいつの戦い方は？）

悠那の頭の中の何処かで一瞬そんな事を考えた。

「ヒヤハア！」

右腕にナイフが刺さったまま左手の手のひらを丸めた、腰を回しての強烈な一発。

鈍い音と共に悠那の顔面に拳が入る。

「グア！」

鈍い呻き声が口から漏れる。

「うう・・・」

顔を抑えながらヨロヨロと後ろに下がった。

顔から手を離すと真紅の血が鼻から垂れ落ちた。

それを見た瞬間、和也はさらに唇の端を広げ、不気味な声を出す。

「ヒヒ！！血だ血だ血だ血だ血だ血だ血だア・・・」

薄気味悪い和也ではない声は広い工場内に響き渡る。

悠那が歯をギリツと食いしばった。

「貴様・・・」

悠那は拳銃をほおり出すと、再び服の中から拳銃を取り出す。

再び拳銃を和也に向けて引き金を引いた、

何発もの銃弾が和也を襲った。

和也の足、腕、胸に銃弾が当たると、血が噴出した。

それでも和也の顔から不気味な笑みは消えない。

ボタボタと血が流れ落ちている。

悠那は和也に向かって一直線に走り出すとナイフを構えた。
ナイフを和也の体に振り切る。

腹の肉の切れる音と共に血が噴出す。

和也はまだ笑っている。

（なんだ・・・？）

先ほどと同じ様に頭に霞む言葉。

ナイフをもう一度振る。

同じ様に血が飛び、肉が切れる。

まだ笑っている。

殺そうとしても殺せない、今までとは違う。

逃げるのでは無い、避けるわけでも無い。

（何だ・・・？コイツは！？）

和也の不気味な笑みにゾツと寒気が襲った。

「ウアアアアアアアアアアアアアア！！！」

叫び声と共にナイフを振り下ろす。

「ヒヤハハハハハハハ！！！！！」

笑い声と共に振り下ろされるナイフの切先を素手で受け止める。

グチャッ

手の平が刃で潰れる音がした。

音と共に手から血の雫が伝い肘で落ちる。

「な・・・な・・・」

ナイフはビクともしない、それ所から逆に押されている。

和也はもう一つの手で再び顔面に拳を入れた。

「グー！」

216

水音はその光景を見たことがあった。

（あれは・・・炎斬・・・）

だが一つだけ水音の知っている炎とは違っていた。

（黒い・・・炎？）

その炎の刀は前に見ていた炎とは違い、リンとした真つ赤な炎では無く、残酷な禍々しい漆黒の炎であった。

ニタニタと笑いながら炎を引きずる形で再び悠那の所に近づいていた。

ひきずった後はコンクリートが溶け、小さな溝の道が出来ていた。

悠那は睨み付けながらヨロヨロと立ち上がった。

苦々しそうに口の中で切った血を吐き捨てた。

「僕にもプライドがある、もう暗殺何かどうでもいい・・・今ここで君を殺す！！」

ナイフを捨て服を脱いだ。半そでの服の上からホルダーを服に巻いて被せていた。

ホルダーに入っている古ぼけた拳銃を抜き取った。

「『黒翼の墮天使』（こくようのだてんし）・・・その名の意味を思い知らせてやる！！」

ブチブチブチブチ！！

服が破ける音と共に背中が避け始めていた。

苦しそうに体を擦る。

グチグチャブチ！！

気持ち悪い肉の避ける音が木霊する。

（・・・あ）

悠那の背に黒い翼が広がっている。

両翼の翼を足せば2Mはある大きな翼であった。

拳銃を和也に向ける、

翼から風を起こす様に大きく広げた。

そして翼の黒い羽毛が空中を浮く。

水音の体にも風が当たった。

「すごい・・・綺麗」

水音にはこのような状況でも、驚きよりも美観が頭をよぎった。

拳銃を持つ手に力が入る。

「誰にも防がれた事の無い、僕の最高の力だ！！！」

キン！

音と共に銃口に光が集まる、みるみるうちに真っ白な光が大きくな
っていく。

『GOD!! deal a crushing!!!! (神よ

！！怒りの鉄槌を！！！)』

悠那の体が一瞬浮いたかと思うと、引き金を引くと共に、悠那は後
ろの壁へと吹っ飛んでいった。

同時に爆音が鳴り、先程までの光が和也に向かって一直線に伸びて
いった。

「ツキヤア！！」

すぎまじい音に水音が耳を覆う。

ゴオオオオオオオオ！！！！

レーザービームの様な光は空を裂き、

すぎまじい音をたてながら、みるみる和也に近づいていく。

和也は動じることなく立ち止まった。

変わりに唇の端を大きく歪め、引きずっていた刀をスツと上に持ち上げ構えた。

黒い炎がユラユラと燃え上がり、熱で刀の周りが小さく揺れる。

後ろ足でコンクリートを思いっきり蹴り、光の光線に向かって走り出した。

その怒りの漆黒の瞳は戦いのへのプライドの為に黒翼と共に全てを呑み込む光を放った。

その残酷な純白の瞳は殺戮を求め、燃え上がる不気味な炎と共に光に飛び込んだ。

ギン！！

弾けるような音の次に一瞬の静けさが訪れた。

ドオオオオオオオ...

衝撃波と光が一気に広がっていく。

「キヤア！」

水音が吹き飛ばされない様に下にしがみ付く。

バキバキバキバキ！！

衝撃の耐えられない古びた工場は音を立てて破壊されていく。

木片や鉄の塊が飛ぶ。

光は工場から漏れ、大きな光の柱へと空中に駆け上がった。

場所は変わり。

明るい部屋に一人の女性が入ってきた。

「んー いいお湯加減」

美奈は上機嫌にタオルで頭をワシヤワシヤとふき取った。

ショートカットの髪がバラバラと方向性無く乱れる。

顔も少し赤く火照って気持ちよさそうに笑っていた。

何となくガラスに目をやると不思議な物が見えた。

遠くで細い光の線が天空にあがっていた。

「・・・何あれ？」

薄暗くなった空の下を2人の男が並んで歩いていた。

「あゝつかれた・・・」

夜道の寮に向かう坂道でグツと腕を伸ばす今井と、

「結構長い依頼になってもーたなー」

隣でポテトチップスの袋をあさりまくっては口に運ぶ、さなぎがいた。

「お前が途中でお菓子買いに行かなきゃもっと早く終わったんだよ」
今井がじとーっと横目でさなぎを見た。

「そーゆー今井の情報源ミスはどうやねん」

さなぎも同じ様に横目で見る。

「アレは・・・まあ・・・猿も木から落ちる？みたいな？（意・得意な事でも失敗する事もあるという事）」

「よお落ちるお猿さんやねんな・・・」

ため息代わりに今井の目の前でポテトチップスの空をプラプラと振った。

「・・・・・・・・ウルセ」

言葉に詰まった今井の最後の抵抗であった。

その時であった。

ドオオオオオオオン！！

地響きという感じな音に二人は同時に振り向く。

「なんだ・・・・？」

今井が慎重に辺りを見回した。

「今井！アレアレ！！」

さなぎが指差す方向に一本の光の線が見えた。

坂の頂上から見える異質な光景に二人は啞然としていた。

薄暗い部屋の窓際に、

小さなベッドとその上に有る布団を被る膨らみがあった。

「・・・・・・・・ん」

寝巻き姿の小柄な女の子が布団から這い出て窓の外を見上げた。

金色の綺麗な髪が少し揺れる。

天空に上る光の柱が遠くから細い糸の様に見えた。

それを見た女の子はブルツと肩を震わせて、慌てて布団の中に潜った。

「あの光・・・怖い・・・」

枕をギュツと抱え込むと小さな声を漏らした。

「先輩・・・・・・・・」

ツチツチツチツチツチツチツチ

時計の音が妙に耳に入る。

イライラと貧乏揺するをしながら椅子から動かない男がいた。

「あー！ー！ー！暇だああ！！！」

誰も居ない寮に黒髪の背の高い男が立ち上がり叫び声を上げた。

「チッキショー・・・水音も和也も帰ってくんの遅エよ・・・」

馬鹿っぽい男、怜次は居間でつまらなそうに伸びをする。

「・・・シャーネ・・・探しに行くか」

まだ退屈そうに目を細めて玄関に向かった。

ガチャツ

玄関のドアを開けると薄暗い夜空が空中に広がっていた。

「ほおー・・・もう夜だったのかぁ・・・」

暗い夜空を見上げて独り言を漏らす。

ドオン・・・

うつすらと耳に障る普通では聞こえない音に反射的にその音の方を見た。

「なんだありや・・・」

怜次の向けた目には光の糸が見えた。

その瞬間、怜次の背中に妙な感覚が走った。

「なんだ今の・・・」

不可思議な感覚に首を傾げ、もう一度光の方向を見た。

既に光は消えていた。

「・・・何か走らなきゃいけねえ気がする」

小言を漏らすと一気に光の糸の方向に走り出した。

暗い屋根の上に立つ一人の男が髪を風に靡かせて立っていた。
顔立ちの良い男は遠くに見える光の柱をジッと見ると、足元に目を移した。

「近い……ですね、あの場所の測定がわかるかい……？」

暗闇の中、足元で黒い物体がのそつと動いた。

真っ黒い猫はピンツと背筋を伸ばして口を開いた。

「測定位置、X 2 6 1 2 1 6、Y 1 2 4 6 5、推定二ヨリ、ココカラ2キロ先ト断定、致シマス」

「2キロか……間に合うでしょうか……」

顔に掛かる髪を掻き上げると美青年の顔が覗いた。

「……急ぎますよ」

ビュウ……

風の音がすると何も無かった様にその屋根の上には何も居なかった。

その逆の方向を、すざまじい速さで屋根を飛び交い、
光の柱に向かって走るマントを羽織る人の姿があった。

「near……（近い……）」

そう言うマントの人間は更にスピード上げた。

パラパラと変わり果てた工場から木屑が零れ落ちた。

ゼエ・・・ゼエ・・・ゼエ・・・

荒い息をしながら悠那は慌てて辺りを見渡す。

辺りは跡形も無く消え去り、天井にはポツカリと穴が開いた夜空が見えた。

離れた所で水音が倒れていたが、和也の姿はどこにも無かった。

「ククククク！やった！僕の勝ちだあ！！」

翼がバサツと揺れ動いた。

「アハハハハハハ！！」

悠那が高笑いをあげた瞬間であつた。

グシユアア！！

一瞬の出来事に悠那は呆然と立ち尽くしていた。

胸に斜めのまつすぐな切り傷から一気に血飛沫を飛ばした。

「ゲホ・・・？」

膝から落ちると両手で胸を押さえながらゆっくりと後ろを振り返つた。

その後ろには燃え盛る炎の刀を片手に不気味に微笑み和也が居た。

（何故僕がやられたんだ・・・？いつ？どう・・・して？僕の最高の技を突つ切つてきたのか！？そんな事出来るのか！？）

あの技は人の跡すら残らない程の技だぞ！？）

「馬鹿・・・な」

ドサツと音を立てて悠那は倒れた。

胸から止まらない血が悠那の体を覆う程に広がっていく。

「う・・・」

水音がゆっくりと起き上がる。

和也の瞳がゆっくりと水音に向く。

ニタアアつと気持ち悪い笑みは新たな獲物を見つけた野獣の様な不気味さを漂わせていた。

「ぐ……」

うめき声を上げる悠那を素通りして、どす黒い炎の刀を片手に持ちながら水音に近づいていく。
口の端が更にゆがんでいく。

「かず……や」

掠れた声で水音は和也を見た。

体中に毒が回っているせいで足元がおぼつかない。

ヨロヨロと壁をつたいながら立ち上がる。

和也の目は既に人の目はしていなかった。

澄んだ白い目はギラギラとてらつく鋭い眼光へと変わっていた。

体中から垂れ出る血は和也をさらに不気味に見せていた。

手に持つ日本刀は今も漆黒の炎を包み、元の和也が10秒しか維持出来なかった炎斬は今も続いている。

水音にゾツとする物が背筋に走る。

（こわ……い、だけ……ど、和也を……助けな……きや）

水音の頭はボーっとして何も考えれる状況ではなかった。

だが和也を助けなければならぬ、それだけが何故か頭に浮かぶ。

和也がどんどん水音に近づいていく。

水音も壁を伝いながら和也に近づいていく。

みるみるうちに差が縮まっていった。

和也は水音の目の前まで来ていた。

更に唇の端を歪めた和也は、刀をゆっくりと振り上げる。

水音は小さく肩を揺らしていた。

（こわ……い、でも……でも）

力無い水音の目にツキと力が入る。

「こんな和也じゃない!!」

燃え盛る刀が水音の頭上に振り下ろされた。

水音は目を瞑らずに振り下ろされる刀を一直線に見据えた。

「!!!」

水音の数センチ前で炎の刀はカタカタと震えながら止まっていた。

熱気が水音の顔に掛かる。

水音の額に冷や汗と熱風による汗が一緒に流れた。

和也が右手に持った刀を振り下ろした瞬間、和也の左手が自分の右手首を掴んでいた。

「・・・!!」

和也の目が澄んだ白い目に戻っていた。

「和也・・・!!?」

水音が驚愕の声を上げた。

「・・・け」

和也の唇が一瞬動く。

「・・・え?」

水音には上手く聞こえなかった。

「どけエエ!!!」

和也が叫んだ、と同時に震えていた刀が止まった。

「キヤ!」

水音が慌てて横に飛ぶ。

その瞬間、刀が振り下ろされた。

ドゴオオ!!!

水音がいた所の地面のコンクリートがはじけ飛ぶ。

和也が横目で避けた水音を睨んだ。

その目は先ほどの酷く歪んだ白に戻っていた。

再び和也の唇の端がニタアアツと広がる。

「そんな」

体に力が入らない。

水音は最早動く事は出来なかった。

和也は再び水音に向けて刀を振り上げる。

和也の顔に残酷な笑みが広がっていく。

先ほどと同じ様に刀を水音に振り下ろした。

水音は覚悟を決めた様に目を瞑った。

その時、弾かれた様な妙な擬音が水音の耳に入った。

「・・・・・・・・？」

水音は痛みを感じない自分を不思議に思いながら、ゆっくりと目を空けた。

目の前にいたはずの和也は飛ばされた様に、

離れた所に倒れていた。

滑らかな風が水音の頬に当たる。^{なめ}

「ギリギリでした・・・」

透き通る様な綺麗な声の男性が水音の前に立っていた。

その男性の足元に黒い猫が背筋を綺麗に伸ばして立っている。

「お・・・お兄・・・ちゃん？」

水音の顔はまだ毒で苦しそうだが、驚きと喜びが浮かんだ。

お兄ちゃんと呼ばれた男性、風間は振り向くと、

水音にやさしく笑いかけた。

「しかしどういう事だい？護衛を頼んだ相手に命を狙われている、その上に暗殺者らしい男は血を流して倒れている」

「それは・・・」

水音が言おうとした瞬間、倒れていた和也が立ち上がった。

「クヒ！クヒヒ！クヒヒヒヒヒ！！！」

和也は片手で顔を覆うと、不気味な声を上げた。

「ヒヤハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！」

風間の背中にもゾツとする物が走った。

「これは・・・普通じゃありませんね」

「ククククク！！何と良い日だぁ！！こんなにも特別な血が揃うなんてエエ！！！」

狂気に狂った和也が始めて言葉を出した。

「！？」

水音が目を見開いた。

（しゃべ・・・た？）

「特別・・・とは？」

風間が冷静に聞き返す。

「漆黒の男！！」

そう言うのと倒れている悠那を指差した。

「そして『生まれてはいけない存在』！！申し分無い・・・ヒヒヒ！！！」

最後に水音の方を見ていた。

風間が和也の言葉を聴いた瞬間、凍り付く様な視線を見せた。

「お前たちの血は何色だろうなあぁ！！クヒヒヒヒヒ！！！」

とても楽しそうに和也は笑った。

「私と殺る気ですか・・・？」

風間の目が鋭く光る。

「ヒヒ！！残念ながら今の俺様では貴様に勝つ事は出来ない！！！」

『今の状態』ではなアアア！！！！」

和也はまだニタニタと笑っている。

「力が開放される時、お前の血を広げてやる！！さぞ綺麗だろうなアア！！」

「力の解放・・・？」

風間の目はまだ戦闘態勢を崩さなかった。

「ヒヤアハハハハハハハハハハハハ！！！！」

（駄目だよ・・・）

水音は苦しそうに手を伸ばす。

（何が駄目なのかはわかんないけど・・・駄目だよ・・・！）
伸ばした手に何かが当たった。

（これ・・・は・・・和也の刀・・・？）

いつからそこにあっただのか、元からそこにあっただのかは判らない。

その瞬間氷鈴刀の鈴がまた鳴り始めた。

済んだ鈴の音はまたも、工場内に響き渡り、水音の体にも震撼しんかんした。

その時、水音の耳に幼い子供の声が聞こえた。

『もう、十分だよ・・・残り・・・2つ』

（え・・・？）

音が鳴り始めた時、

先ほどまで笑っていた和也の顔が苦しそうに歪んだ。

「ッグウ！」

「何故だ！？何故戻ろうとする！？」

大声で誰に言うでもなく叫んだ。

「折角・・・折角出たのにイ！！」

狂気の和也の言葉は続く。

「嫌だ！！嫌だ！！もつと俺は血を見るんだ！！」

さらに顔を歪める

蹲りながら鳴り響く刀に手を伸ばす。

「嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だア！！！！」

不振そうに風間は狂気の和也を見据える。

「何だ・・・？」

「え・・・？」

水音にもわけがわからなかった。

唯、刀が吸い寄せられるかのように、水音の手のひらに握られた。

キーン！という音と共に刀が光りだすと、またたくまに光が広がっていき、水音を包み、風間を包み、工場内を真っ白い光へと包み込んだ。

「ヤメロオオオオオオオ！！！！」

和也は水音に向かって走りながら叫んだ。

工場内を光に包んだかと思うとすぐに光は巻き戻しの様に刀にへと戻っていった。

瞑っていた目を開けると和也が目の前で倒れていた。

「和也!!」

持っていた刀を放すと、重たい体を腕でむりやり引きずり、和也に近寄った。

血は今も垂れ流れ、体中の傷は悪化した様に紫色になっている部分まであった。

「・・・・・・! ひどい・・・・」

誰が見ても、重体とわかる様な怪我は見ていただけで寒気を思わせた。

風間は呆然と立ち尽くしていた。

（なんだ今のは・・・・? 目の前が一瞬にして真っ白い光の世界になった、これは水音の『もう一つの力』のせい・・・・?）

ツハと我に帰ると水音が和也の近くにいた。

「水音! 離れなさい! まだその男が立ち上がるかもしれないですよ!!!」

風間が水音に慌てて駆け寄ると腕を手にとった。

「だって、お兄ちゃん!!」

水音は力無く兄に助けの目を向けた。

短いため息を付くと風間もすぐに和也の元に駆けつけた。

その後から黒猫も続いた。

風間はジッと和也の容態を見ているのを隣で心配そうに水音が見つめていた。

誰が見ても、その容態が判りきっていた。

顔もうつすらと青くなりつつあり、血は流れ続け、体中の傷口は治る兆しすら見せない程に大きな傷を開いていた。

「・・・・」

「G・W00210、この少年の容態をどう見ますか・・・・?」

風間は、和也の状態を見せる為に黒猫を和也の隣に近寄せた。

「出血量70%、外部損傷50%内部損傷30%心拍数不安定シテオリマセン。心臓ノ鼓動運動ガ殆ド止マツテイマス。ソレヲ全テ総合スルト、コノ方ノ生存可能性ハ・・・2%デス」

黒猫は真っ直ぐに倒れている和也を見据えながら早口で和也の状態を説明した。

「に・・・2%・・・そんな」

水音が目を見開いた。

（2%・・・まだ完全に死んでいないのか）

風間は氷鈴刀を拾うと、和也の首筋に刀の刃を当てた。

「!!お・・・お兄ちゃん・・・何を・・・!!」

水音が慌てて風間を止めに入る。

「この青年は危険です、今ここで完全に息の根を止めます」
風間は先ほどの和也を思い出していた。

「な・・・!?!」

刀を払いのけると水音は和也の前で両手を広げた。

「・・・どきなさい」

風間が水音を細い目で睨んだ。

「いくらお兄ちゃんでも・・・和也を殺したら・・・絶対に許さないから!」

水音はたじろぎながらも睨み返す。

「・・・フウ」

風間をあきれた様に小さくため息を付いた。

刀を捨てると風間は言った。

「いいでしょう、どうせ、ほっといても死ぬ怪我です・・・」

「・・・」

詰まった様に水音は俯く。

「・・・せない」

水音が小さな声を出した。

「・・・なに？」

風間には聞き取れなかった。

「死なせない」

そう言うと、

倒れている和也に向き直るとぐったりとしている片手をギュッと両手で握り締めた。

「・・・！！まさか・・・やめなさい」

風間の言葉は水音の耳には届かない。

「死なせない死なせない死なせない・・・」

ブツブツと呟く言葉と共に水音の手が光りだした。

その光は握っている和也の手から体へと連動していった。

最後には和也の体は温かい光に包まれていた。

風間がまぶしさに目を覆う。

（この光は・・・）

みるみる内に和也の体中の傷の血が止まった。

「つつ！」

水音の体中の毒が急速に体を蝕んでいく。

（倒れちゃ・・・駄目だ・・・和也を・・・助けなきゃ）

ガクンッと水音の顔が落ちた。

「たす・・・けな・・・きゃ」

そう呟くと和也の上に重なる様に倒れ、同時に光が消える。

「水音！」

慌てて風間は水音に駆け寄った。

ソツと水音の額に手を当てる。

触れた手から酷く暑い熱が伝わった。

（凄い熱だ・・・もうすぐで手遅れになる・・・）

「風間、少年ノ生存率が2%カラ30%ニ跳ネ上がりマシタ！」

黒猫が驚いた様に和也を見ていた。

「何が起コツタノ力理解出来マセン、現在ノ状況下デコノヨウナ事が起キルノハ有り得マセン！！」

「・・・水音の力ですよ」

風間はそれだけ言つと水音を抱き上げた。

「ソの力、是非氣になル」

鈍った日本語が背後から聞こえた。

「！」

風間がバツと振り向いた。

「Hello」

頭からすっぽりとマントを被った男が立っていた。

（私が気づかないとは・・・）

「何者ですか？」

「I beg your pardon（これは失礼致した）」

男は大げさに手を回して執事様にお辞儀をした。

「I'm name (White joker) (私の名前は白のジョーカー)」

(白のジョーカー?)

「この男の仲間だ」

そう言うのと倒れている悠那を指差した。

風間が身構える。

「No、戦う意思は無い、今回はこちらノ負け、連れ帰らせてもらう」

そう言うのとコツコツと足音を立てて悠那に近づいた。

「酷くやられタ、大丈夫力？」

しゃがみ込んで悠那の状態を確かめる。

「ぐう・・・」

悠那が苦しそうなうめき声を上げる。

「生きてるナ」

簡単に男は言うのと風間の方を向いた、その後には和也の方に視線が行った。

「その男は大丈夫なノ力？」

男の視線はまだ和也の方を向いていた。

(・・・? 何故和也の心配を・・・?)

風間は疑問に思いながらも言葉を返した。

「ああ、今の所は何とか生きてる」

「そう力・・・」

風間には男が妙にうれしそうに見えた。

男は更に続けた。

「我々は犯罪組織の群衆である」

「!？」

風間は一瞬、男が何を言ったのか判らなかった。

「組織の名は『トランプ』お互いのコードネームをトランプの記号で呼び合うことから付けられた名ダ」

「何故そんな事を私に教える？その男の仲間ではないのか？」

風間は身構えながらも不思議そうに聞いた。

相手に自分の所在を悟られる事は、最も危険な行為、その組織の名を知るだけでも、実に調べやすくなる。

自分の所在はあっさりと口にしたこの男の行動は最早裏切りと言っても過言ではなかった。

「また・・・いずレ」

そう言うとも男は煙の様に消えた、倒れていた悠那もいつのまにか消えていた。

「・・・」

あまりにもものあっけなさに一瞬、風間は呆然とした。

黒猫がまたもピンと背筋を伸ばした。

「先程ノ二名ハコノ地域200メートルカラ照合デキマセンデシタ何ラカノ能力ニヨリ、逃走、追跡出来マセン」

黒猫の機会音が工場内に響き渡ると同時に、ボロボロになった工場

から木屑が落ちる。

（ここも危険か・・・）

「・・・私達もこの場を離れます」

風間の周りに風が吹くと、竜巻の様に風が渦巻くと風の塊が3人と一匹を囲み、穴の開いた天井からすざまじい速さで飛んでいった。

第8話 黒翼の堕天使VS純白の悪魔 完

第8話 黒翼の墮天使VS純白の悪魔（後書き）

遅くなってスイマセンでした。

本当はもっと長かったんですが、その話は次回に入れて、ひとまず、漆黒の男との戦いをおわらします。

次の話でもう少し続きますが、お付き合い願います。

第9話 その時の怜次、その後の和也、それからの悠菜（前書き）

悠菜との戦いは終わり、

気づけば真っ白な部屋に横たわる和也、

怜次が和也に対し怒りを見せ

水音は和也に対し不安がよぎり

悠菜は和也に対し光悦を覚える

第9話 その時の怜次、その後の和也、それからの悠菜

第9話 その時の怜次、その後の和也、それから悠葉

「ここは何処だ・・・」

光の柱の下へ走った怜次は見知らぬ地に来ていた。

うつそうと茂る草木は日本には有るまじき光景であった。

「何処だよ！！何で真っ直ぐいったのに、山の中に居るんだよ!？」
山の中で怜次の突っ込みが響き渡る。

ザアツと風が吹き、山中の木々の葉同士が擦れ合い耳に障る音を立てた。

怜次の背中が音に合わせてビクツと揺れた。

「・・・」

辺りを見回すと、真っ暗な山の中は怜次の全てを飲み込む様に見えた。

「と・・・とりあえず、帰ろう・・・」

怜次はいそいそと山道を降りていった。

その瞬間、怜次の目の前に異様な光景が広がった。

地面に広がる2メートル程の円が描かれていた、

描かれている線は紫色に輝き、円の中には見知らぬ字で埋め尽くされていた。

その図は本で見る魔方陣を思わせた。

「何だこりゃ？」

その言葉を発した瞬間、弾かれた様な音と共に魔方陣の上からマン
トをすっぽりと被った男と倒れている血だらけの男が光と共に現れた。

「ななななんだあ!？」

驚きの声を上げて怜次がしりもちをつく。

「何だ？お前等？」

怜次は慌てて立ち上がると突然現れた男を睨んだ。

男は怜次を見た瞬間ビクつと体を揺らすと、軽く舌打ちした。

「Shit・・・」（くそ・・・）

怜次が訝しげに睨む。

（何だこいつ？シット？嫉妬してんのか？）

怜次は脳内で軽く素でボケた。

「sorry・・・あンタに八悪いガ気絶しテもらウ・・・」

男が右手を怜次にかざすと手のひらから光の玉が飛ばされた。

光の玉は怜次にぐんぐんと近づいていく。

「う・・・わ！」

状況が理解出来ないまま、怜次の額に光の玉が当たった。

ドン！という音が暗い山道に響き渡った。

それと同時に怜次がゆっくりと後ろに倒れていく。

草むらの中に怜次の体は埋もれた。

「・・・」

男はそれを確認するとくるつと後ろを向くと何かボソボソと呟いた。

「Inseguia un odorato di Lei io
corro chi dopo per Lei perch&a
mp;eacute; Lei chi La soddisfa
no, e vuole volare una goccia
di una fuga delicata, e corre
dopo lui;」

男は歌う様に言つと、少しずつ声を大きくして行く。

男の声は澄んだ綺麗な声をしており、暗闇の中では異質に見え、そこだけが光っているという印象を受けた。

「per sempre per sempre（永久に永久に）」
付け足すように最後に優しく、小さく言った。

同時に、マントの男の足元に先ほどと同じような魔方陣が現れた。

魔方陣はみるみる内に輝くと、暗闇から光へと一転していた。

「イツテエー!!」

怜次が草むらから立ち上がった。

「てめえ!! 何しやる!!」

怜次が後ろを見せている男に怒りの言葉をぶつける。

「!!」

男は再び振り向くと、驚いた様に小さな声をあげた。

それと同時に、に魔方阵はテレビの画面が消える様にプツンと音を立てて消えた。

「だが・・・」

怜次はそこでニツと笑みを浮かべた。

「判りやすいぜ!!」

先ほどのキョトンとした顔からみるみる目の色が変わる。

「戦闘開始だ!!」

その言葉と共に右手を背中にする。

男も身構える。

（こいつ…戦い慣れシテいるナ）

背中にやった手は空を切り、怜次の手が無造作に何かを掴もうとしている。

「・・・?あれ?」

更に何かを掴もうと空を手が描く。

（しまったああー!!!! 槍持って来てねえ!!!!）

怜次の顔は闘志の顔付きがア水面に変わり、右手が背中に行った状態で固まっている。

男は今も警戒を続けながら怜次を睨んでいた。

（w a h a t?・・・ 奴八何をやってイル?ダが奴は只者で八無い、）

男はチラッと血だらけの悠那を見た。

（この男の為にモ長引かせれない逃げた方がいいか）

怜次の痛恨のミスでお互いにらみ合う形で硬直していた。

（やつべー！やつべーよ！槍無きや戦えねーよ！！）

怜次の顔は薄っすらと引きつっている。

（つく！何なんだ！こノ男！こノ顔は何をシようトしていル！？oh, No！！こんなに戦いが読めない男は初めてダ！！！！）

男は勝手に混乱していた。

（素手で戦える相手・・・じゃ無エわな・・・）

怜次は今だに右手を後ろに回している。

怜次が軽く舌打ちをすると、背中に戻している手を下ろした。

「考えんのはガラじゃ無エわ、素手で潰す！！」

怜次の目がギラついた目に戻る。

（こいつ、素手で戦える気力？、か・・・賞賛があるのか？それとも唯の馬鹿なのか？

しかし・・・今は時間が無い）

男はしゃがみ込むと両手を地面に付けた。

「悪いガ君との戦いはまた今度ダ、see you」

またしても同じ様な文字が浮き出る、しかし先ほどとは違い、形は歪な円な上に、色は紫ではなく赤を示していた。

赤い光が広がると、パアンと叩く様な音と共に消え去った。

そこには何も無かったかの様に、草木が広がっていた。

「あのヤロウ・・・なんだったんだ？」

怜次は男の居た場所をまだ睨んでいた。

「とりあえず・・・どうやって帰ろうか」

再び暗い夜道で呆然としていた。

（あれ？ここは？何処だ？）

和也は何かの上に乗せられている。

耳に障る車輪の回る音、

うつすらと目に映るのは血相を変えて、和也の乗せている者をひっぱっている白いナース服の女性が数人。

「心拍が安定していない！急いで手術室に！！」

聞こえのある男の声、

（誰だ・・・？）

男を見ようとしたが体は上がらない、

（駄目だ・・・眠い・・・）

うつすらと開けた目は再び暗闇へと戻っていった。

次に目を開けたときは真っ白い部屋でベッドに寝かされていた。

ぼうっとする頭でぐるっと周りを見回した。

真っ白い部屋にはベッドの隣にある椅子と小さな机、そしてその上にある花瓶、それだけしかない部屋であった。

「ここは何処だ？」

和也の顔が困惑に変わる。

体中に包帯が巻かれており、腕からは細いチューブで点滴を刺されていた。

その時ドアの開く音がした。

起き上がっている和也とドアを開けた人とが丁度目が合う。

その人は見覚えのあるツインテールの長い赤髪をなびかせていた。

「水音」

反射的に和也の口から女性の名前が出る。

「かず・・・や？」

水音のか細い声は少し震えていた。

「うむ、ここは何処だ？」

あっけらかんに言った和也の言葉を無視し、水音は和也に向かって

走った。

「和也!!」

水音は思いつきり和也に抱きついた。

「ぐぼはあ!？」

水音が抱きついた拍子に、和也の傷に見事にめり込んだ。

「あ・・・ごめん」

水音は慌てて和也から離れた。

「でも、良かった・・・本当に良かった」

水音の顔がみるみる泣き顔に代わっていく。

「え?あ?お・・・おい泣くなよ」

和也の顔に動揺が広がる。

「おいその最低男、女の子泣かすなよな」

またしてもドアから人が現れた。

黒猫以来の顔合わせの男は、あの時の様に、細い銀縁メガネと啞えタバコに真っ白のコートのポケットに両手をつっ込んでいた。

「己宮内」

和也の言葉に呼ばれた男、己宮内はめんどくさそうに軽く手を上げると、歩く音にわざと足音を入れた様にコツコツと音を出しながら近づいた。

「おい、これはどういう事が説明しろ」

和也はいつもの無表情で言った。

一瞬、己宮内は妙な顔つきになったが、軽く肩を上げて、ため息を付いた。

「久々だつてーのにあいかわらずだな」

和也の無表情は変わら無い。

「・・・まあいい」

己宮内は話始めた。

「お前はここ三日間眠り続けていたんだよ」

和也の無表情が一瞬、困惑の色へと変わった。

「三日間も・・・?」

「ああ、三日前、お前と水音ちゃんを担いだ風間が病院に急いで入ってきた、2人とも重傷だったが、和也、お前は一番危なかった」
「水音は・・・大丈夫だったのか・・・？」

この言葉にすぐそこで座っている水音が変わりに答えた。

「うん、時間性の毒だったから、解毒剤を打って貰ってすぐに横になったから大事にはいたらなかったって」

「そうか」

和也がほつと胸をなでおろした。

（自分よりこの娘の心配か・・・本当馬鹿だなこいつは・・・）

己宮内は呆れ顔でほつとしている和也を見て話を続けた。

「お前の傷を見た時はゾツとしたぜ、体中穴だらけの人間なんて始めてみたからな、成功するか解らない手術だったからな、俺が直々にした、成功かどうかは五分五分だったが目が覚めてよかったな」

まるで人事の様に己宮内は言い切った。

「何だ、貴様手術まで出来るのか」

和也が軽く眉を上げる。

「たりめーだ、俺に出来ない事は無い」

自身過剰の己宮内が軽く胸をはる。

「ま、お前の生命力に呆れるよ、体の中から計20個の弾丸が出て来たんだ」

水音の背筋に寒気が走る。

（そんな体で戦ってたんだ・・・）

「そーか」

一瞬の間が空いた。

「おい、そーかって何だよ」

己宮内が呆れた様にため息を付く。

「そうだよ何かもつとリアクションしようよ」

水音も続いて、ため息を漏らす。

「な！なんだってエ！？」

和也が突然大げさに両手を挙げて大声を張り上げた。
無表情のまま。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

2人の目が悲しい人を見る様に和也を見た。

「何だよ・・・・、貴様等が言っただろうが・・・・」

和也が拗ねた様に口を尖らせる。

またしても沈黙が続いた。

「あ・・あの、和也？」

水音が重い口を開くと和也んび恐る恐る話掛ける。

「・・・・？何だ？」

さっきまでの会話から突然戸惑った声に変わった水音を和也は疑問に思えた。

「あの時は・・・・」

その時、水音の言葉の途中で白いドアが開くと共に、
聞きなれている4人の声が聞こえた。

「和也ー！」

「アッハッハ！水音早いよー！」

「和也まだ起き無エの？」

「今日の見舞い品はバナナだ！」

さなぎ、美奈、怜次、今井の4人が入ってきた。

「お！和也起きとるやん！」

耳に障る大阪弁のさなぎの声は和也には妙に久々に思えた。

「ああ、久しぶりだな」

和也も返す。

「しかし、コテンパンにやられたな」

今井の言葉に和也が呆然とする。

「・・・・何？」

「よ！負け犬！」

怜次が更に場を困らせる。

「しゃべったのか・・・？」

水音の方をゆつくりと振り向いた。

「え？えっと、己宮内さんには言っただけど、皆には・・・」

今度は己宮内の方を振り向く。

「本来は機密事項なのだが、コイツ等には知る権利があるからな」

和也の目つきが変わる。

「貴様、勝手な事をするな、コレで関わる事になれば死ぬかもしれない相手だぞ」

和也の頬に衝撃が走った、

「！？」

和也は一瞬何が起こったのか判らなかった。

その強い衝撃に和也はベッドから転げ落ちた。

怜次が拳を握り締めながら倒れている和也を睨み付けていた。

和也の頬は怜次に殴られ、うつすらと赤みを帯びて腫れていた。

「貴様、何しやがる！」

和也の目が驚きと怒りに目をギラつかせた。

怜次の目も怒りに燃えていた。

「勝手な事だと？てめえが何も言わねえから己宮内さんに聞いたんじゃない無えかよ！！」

和也の目が一瞬、空を泳いだ。

「それは暗殺の敵は主に強敵だと判断し、巻き込めば貴様も被害を受けるから」

「はあ！？強敵！？巻き込む！？それがどうした！！それで水音ちゃんの命が助かるなら俺はこの命を何度でも投げ出すぜ！！」

怜次は簡単に言った、怜次はそういう男であった、馬鹿正直に生きる怜次にとって和也の自分だけ重荷を背負う行動が許せなかった。

「お・・・おい」

怜次が更に和也に突っ掛かろうとしたが、今井がそれを後ろから抱

く様にして止めた。

「簡単に・・・言ってくれろ!!」

和也にも怒りが込み上げてきた。

立ち上がると怜次に怒鳴りつけた。

「貴様に何が判る!!俺の気持ちが!!俺の全てが!!俺は誰にも傷ついて欲しくない!仲間なら尚更だ!!目の前で、大切な人が傷つくのが!!」

いつもめんどくさそうであまり性格が出ない和也が、初めて、見せた姿であった。

少しかだけ区切りを入れて、和也が思いつきり叫んだ。

「もう・・・俺は誰も傷つけたくないんだあ!!」

(和也が?和也がこんな大声を張り上げるなんて・・・)

和也の口からは聞けそうに無い言葉に、水音は驚きを隠せなかった。他の3人も水音と同じであった。

だが水音はもう一つ不信に思った、

(もう誰も傷つけたくない???一体どういう事なんだろ?)

今井は怜次を止める手の力が抜け、美奈もいつもの、笑顔から少しだけ眼の色が変わる。

いつも騒いでいるさなぎすら、呆気に取られていた。

ドア際で立っている己宮内だけは、濃いメガネから和也に悲しそうな目線を見せていた。

今井の手が緩んだのを見計らって、怜次は和也の胸倉を掴んだ。

「おい!怜次!」

今井は再び止めようとしたが、怜次の顔から怒りが消えているのを見て、すぐにやめた。

「怜次・・・」

「傷つくのが何だよ・・・そんなに仲間が信じられないか?一人で

背負い込まないでくれ、俺に背中を預けてくれよ、俺だって、仲間が傷つくのは見たくない」

怜次は悲しそうに言った。

その目は同情か、悲しみか、それとも両方なのか、複雑な色に染まっていた。

「・・・！」

怜次の言葉に、和也の脳裏に美しい声が広がった。

『一人で背負い込まなくてもいいよ、あたしは君の隣に居るから、疲れたら、体を預けて寝てくれないかな？』

その声は一瞬で欠き消えた。

（そんな・・・事もあったな・・・）

和也は目を伏せた、白いコンクリートの床が目映る、だが別の何かも眼に映っていた。

「すまなかつた・・・な」

その言葉を聴くと怜次は胸倉を離しニツと笑った。

「わかればよし！！」

そう言うのとサツサとドアの方に歩いていった。

「そんじゃ！サツサと元気になれよ！こっちは依頼が溜まってんだからよ！」

ボタンと音を立ててドアが閉まると、怜次はもうその部屋には居なかった。

「たく・・・不器用だなお前等」

今井は呆れた様に言った。

「ま、俺はそんな怒って無いけど、無茶すんなよ」

そう言うのと怜次の後を追うように、ドアの方に歩いていった。

「じゃーねー2人とも！」

さなぎも愛想よく笑うと今井の後を追いかけた。

「アッハッハ！あたしは正直どうだっていいけど、水音を守ってくれてありがとね！和也！」

美奈もいつもの様に笑うと、怪我など関係なくバシバシと和也の背

中を叩くとすぐに出て行った。

3人が出て行った後、部屋はシンと静かになった。

「ねえ和也・・聞きたいことがあるんだけど・・」

水音はベッドに座ったまま和也を見据えた。

「・・・なんだ？」

再び元に戻った目でめんどくさそうに水音と同じ様に座った。

「『純白の悪魔』って・・・何？」

その言葉が出た瞬間、和也の目に薄っすらと殺気が帯びた。

「さあな・・・」

それだけ言つとベッドの中に潜り込んだ。

感覚の鋭い水音には、和也が一種の警告を見せたのが判った。

「しゃべれないって事？」

水音は警告を無視して、布団を被った和也に話しかける。

「・・・・・」

和也から言葉は帰ってこない。

「・・・水音ちゃん、ちよつと・・・」

見ていた己宮内は水音を呼び止めた。

（この人は和也の何かを知っている）

水音は反射的にそう考えた。

己宮内は水音の手を取ると強引に引っ張った。

「まずはここを出て話そう」

己宮内の声には緊張が走っていた。

引っ張られるがまま水音は引きずられる様に、ドアへと向かった。

「じゃあ、これだけ教えて！！本当に人を殺した事があるの？」

ドアが閉まる直前に言つた言葉は布団を被って、水音を見ない和也に届いたのか、一瞬だけ首が動いた。

だが、すぐに己宮内がドアを閉めたので、和也が首を縦に振つたのか横に振つたのかは判らなかった。

「己宮内さん、和也の事を知ってるんですか・・？」

水音は己宮内の目を一直線にジッと見つめた。

（流石というべきか・・・やはりというべきか・・・どちらにせよ、良いカンだ）

己宮内も同じ様に水音を見据える。

「俺は何も言えない、水音ちゃん、和也の事に首を突っ込まない方がいい」

冷静な表情をしているが、眼鏡の奥からはつきりと警告を知らせる目を見せた。

「大体なんで、和也の事が気になる？人には言えない事の1つや2つあるもんだぜ？水音ちゃんにもあるだろ？」

水音は戸惑った様に己宮内から目を背けた。

「そ・・・それは・・・」

水音の脳裏に血だらけの女の子の姿が浮かんた。

「今は忘れてくれ、和也の『あの姿』も、和也が水音ちゃんを友達と言ったんだ、だったらあいつは絶対に裏切らないから・・・あいつを信じてやって欲しい」

己宮内は全てを見透かしていた、あの姿というのは狂気の和也の事を言っているのだろう。

「あの時の和也を知っているんですか!？」

水音にはその言葉が信じられなかった。

「ちよつと・・・昔な」

あんな事が過去にもあったのが信じられなかった。

「水音ちゃん、和也の事頼んだぜ」

それだけ言つと水音に背を向け、歩き出した。

「あ・・・あの!!」

水音は己宮内を呼び止めようとしたが、己宮内は軽く手を上げるだけで、振り向く事すらしなかった。

「・・・」

水音は一人廊下で立ち尽くしていた。

ガチャ、

和也の部屋のドアが開くと、のっそりと和也が現れた。

「あれ？和也、どうしたの？」

水音の問いに、めんどくさそうに、和也は答えた。

「喉渴いたから、何か買ってくる」

そう言くとサッサと歩き出した。

歩き方が妙にふらついているのが痛々しかった。

「和也、私買ってくるよ」

見かねた水音が和也の背中越しに言った。

和也が口を開いて何かを言おうとしたが、一瞬、考えた様に下を向いた、

そしてすぐに顔を上げた。

「ああ、すまない」

そう言くと和也は自分の部屋へと戻った。

水音は和也の行動に少し笑いそうになった。

笑いを堪えながら、水音は自販機に向かった、通り過ぎる人達には水音は少し気持ち悪くみえただろう。

いつもなら自分で行こうするのに、怜次の言葉を気にしていた様だった。

自販機に小銭を入れると、適当にボタンを押す。

一連の行動の時も水音の頭には和也の事が浮かんていた。

和也が遠慮を見せなかった。

和也は変わろうとしている、何となくだがそう思えた。

今は聞かないでおこう

和也の事を考えているとそう思えた。
いつか、和也が自分の事を話すのを・・・
それまでは、ずっと待ってしよう

片手に缶を持ちながら、病室のドアの前まで来ると、ドアノブに手を掛けた。

回そうとした瞬間、中から和也の声がして、手を止めた。

水音に飲み物を頼んだ後、すぐに和也は部屋に入った。
自分のベッドの上に座ると、再び部屋を見回した。

真っ白な個室はベッドとその隣にある、椅子と、小さな机だけであった。

その小さな机が和也の目に止まった。

机の上には小さな花瓶があった。

花瓶にはまだ真新しい花が刺され、その花瓶の隣には少し枯れた花が置いてあった。

（今日、目が覚める何て判ってるわけ無いし・・・毎日来てくれたのか？）

和也は心から込み上げる気持ちが芽生えた、和也には忘れていた様な気がした懐かしい気持ち。

（毎日・・・来てくれたのかぁ・・・）

だが、込み上げる気持ちとは裏腹に、もう一つの気持ちも込み上げてきた。

ドクン・・・

心臓が跳ね上がる。

和也にはもう一つの気持ちが無なのか判らなかった。

右手を目の位置まで上げるとゆっくりと手のひらを開けて、ジッとその手のひらを見た。

純白の目が薄っすらと曇っていた。

「また・・・死ねなかったか・・・」

無意識に出た言葉に和也自身も気づかなかった。

同時に、ドアが開いた。

「あ・・・」

水音が両手に缶ジュースを持ってドアの前に居た。

「ああ、サンキュ」

そう言くと和也は水音の手から缶ジュースを貰うと、指を引き手に掛ける。

「・・・？どした？」

呆然と立っている水音を不思議そうに見上げた。

「あ・・・えっと・・・皆帰っちゃったし、わ・・・私も帰るね」

水音はそういうと笑顔を見せた、その笑顔は強張って見えた。

「じゃ・・・じゃあね」

いそいそと水音はドアに向かった。

振り返ることも無くドアを開けると慌てて出て行った。

「何だ・・・？」

不思議そうに和也は首を傾げた。

（聞き間違いだよね・・・うん、そうだよ）

水音は和也の言葉が判らなかった、聞き間違いだと思った。

聞き間違いだと思った。

水音は顔を上げずに、下を向きながら、冷たい廊下を歩いた。

妙に足に温もりが感じれなかったのは、廊下のせいだけでは無いと思う。

廊下を歩いていると、看護婦達がドアの前で固まっていた。

「ちよつと押さないでよ！」

「あたしにも見せて！」

看護婦達は譲り合う事無く、ドアの隙間を覗き見ようとしていた。

「あのー・・・どうしたんですか？」

水音の声に一人の看護婦が反応した。

「それが凄い2人のイケメンがこの部屋に居るのよ！」

興奮した様に看護婦は言った。

「はあ・・・」

どうでもよさそうに水音は生返事を返す。

「見てないからそんな事言うのよ！ちよつとこっち来てー！」

看護婦は無理矢理、水音の腕を引っ張って、ドアの前へと座らせた。

「・・・あの・・・？」

俄かに興奮した看護婦達に囲まれ、水音は逃げられない。

観念した様にドアの隙間を覗き込んだ。

ドアの隙間から見える、見覚えのある2人が向かい合って椅子に座っていた。

一人は偉そうに、もう一人は几帳面に座っている。

「悪いが、あんな化物を近くに置いておくのは気が引けるね」

几帳面な男は髪を掻き揚げて、言った。

掻き揚げた瞬間、除く目は睨んでいる様に見えた。

（お兄ちゃん・・・？）

聞き覚えのある透き通る声の持ち主は風間であった。

「化物・・・ね、そいつはどういう事だ・・・？」

低い声の持ち主は己宮内、銀縁眼鏡から除く眼は風間と同じ様に眠
そうな目の更に奥底で睨んでいる。

「とぼけるとは・・・いい度胸をしているじゃないですか・・・」
透き通る声に薄っすらと殺気が込められる。

「フン・・・」

己宮内が目を背ける。

「純白の悪魔・・・」

風間の言葉に己宮内がすぐに風間に目を向けた。

珍しく、焦りが一瞬見えたがすぐに無表情に戻る。

その焦りを見逃すはずも無く、風間はニヤツと不適に笑った。

「と言ったかな、あの男」

己宮内が軽く舌打ちする。

（クソが、何処で気づきやがった？ W210のメモリーにはそんな
シーンは無かったが・・・）

己宮内はあの後、機械の黒猫が見た映像を再生していた。

そこに映るのは、狂った和也の姿であった。

「さあな・・・何の事だ？」

「あくまでとぼけるきかい？ 己宮内さん」

「・・・」

己宮内が口を噤む

「じゃあ、逆に聞こうか・・・あの光は何だ・・・？」

己宮内の眼光が更に鋭くなる。

「光・・・？」

風間は何の事か判らなかつたが、すぐに理解した。

「あれだよ、水音ちゃんが纏っていた光」

「あ・・・」

水音にも見覚えがあつた。

あの時の和也の傷を治していった光、水音自身が出した光であった。
「・・・・・・・・」

次に口を噤んだのは風間の方であった。

お互いが無言で、2人の睨み合いが続いていた。

空気が重い・・・

ドアの隙間からでも水音はそう感じた。

「クツクツクツク」

己宮内が含む様に笑った。

「ガキが・・・調子乗ってんじゃねエぞ」

己宮内の銀縁眼鏡の奥底の瞳に殺気がこもる。

「いつまでもガキだと思ったら大間違いです・・・先輩」
風間も同じ様に殺気が宿る。

普通の人間よりも数倍感覚の鋭い水音は2つの殺気に体が痺れていく。

（これが、トップクラス同士の睨み合い・・・）

数分間、殺気だけがその部屋の中でぶつかり合った。

請負人界を引っ張る若きエースと呼ばれた風間と、

請負人本部、直々からこの学校に直属を命じられるほどの實力を持つ己宮内

水音は恐怖とは別の気持ちが入み上げた、どちらが勝つのか・・・最強同士の睨み合いはそんな、怖い者見たさを沸き立てる者もあった。

だが一瞬にして充満された殺気はプツンと切れた。

「ダリイ・・・やっぱいいわ、お互いこんな所でいがみ合ってもしょうが無いだろ」

めんそくさそうに己宮内が立ち上がった。

「それもそう…か」

風間からも殺気は消えた。

「だがなあ…」

己宮内が銀縁の眼鏡を外した。

「あいつを…和也を化物なんて言うんじゃないよ…」

初めて見せる己宮内の目は輝くまでの金色こんじきの目をしていた。

普段、度の高い眼鏡で見えなかった目は鋭く、風間を睨みつけていた。

ツチ…

風間は軽く舌打ちするとすぐに眼鏡を掛け直し、ドアへと向かった。

（やば！）

看護婦達をおしのけて水音は慌ててドアから離れていった。

部屋で今も座っている風間の顔に一筋の汗が垂れ落ちた。

「フ…フフ」

風間の顔に乾いた笑みが浮かんだ。

恐怖…実力の高い風間が久々に感じた感覚であった。

手にも薄っすら汗が残り、今も背筋が寒い。

「…元Sランク、こんがん金眼エンペラーの帝王…実力は健在…か」

己宮内の金色の眼光を思い出すと風間はまた身震いした。

暗い部屋に長い机、そして六つの椅子

以前と違い、その六つの椅子には全員が座っていた。

「前には居無かったね？ダイヤ？」

以前には誰も座っていなかった左端の上の椅子に目をやった。

「・・・以前は、別の仕事をしていて来れなかった」

感情の籠もっていない言葉には逆に不気味を思わせた。

「まあ・・・いいでしょう」

スピードはゆっくりと背もたれに体を預けた。

「黒のジョーカー・・・解っているね？」

淡々とした言葉とは裏腹にスピードの目は鋭く光っていた。

「・・・」

黒のジョーカー、悠菜は何も答えない。

「あんだけ言つといて、失敗に終わるんだからなあ、何も言えないのは無理無いだろ！」

嫌味ったらしくクラブの声が悠菜に向けられる。

「・・・フン、油断しただけさ」

悠菜は軽く流しながらクラブに目をやった。

「正体までばれて、ボロボロにやられただけで、よくのこのこと返つてこれたものだ」

更にクラブは悠菜に皮肉を言った。

「・・・なんだい？喧嘩を売っているのかい？君程度なら、手負いでも勝てるよ」

悠菜は立ち上がると漆黒の目でクラブを睨んだ。

「上等だあ！今すぐぶっ殺してやる！！」

クラブも立ち上がった。

右端に座っていたスピードは小さくため息を付くと前髪をかき上げた。

「君達は本当に血の気が多いようですね」

クラブがそう言った瞬間、悠菜の背筋に冷たい者が走った。

悠菜は反射的に拳銃を取り出すと、盾にする様に目の前に掲げた。

ドン！

二つの擬音が重なった。

その音と同時に、クラブと悠菜は逆の方向へと吹っ飛んでいった。

「ぐぁ！」

「ぐー！」

二人は壁にめり込み、壁に細かい亀裂が入る、血が壁を伝いながらずるずると壁から落ちていった。

拳銃で直撃を避けた悠菜は苦しそうに膝を立てた。

クラブは気絶しているのか、倒れたまま立ち上がらない。

「だっさーい」

ハートが馬鹿にした様にケタケタと笑っていた。

「ほう・・・さすがは『黒翼の堕天使』、いい反応だ」

スピードは無表情のままパチパチと悠菜に拍手を送る。

「だが、私に今は雇われているという事を忘れないで欲しい・・・
用済みと判断したらすぐに殺す」

スピードは殺意の籠もった、目を向けていた。

「解ったよ・・・」

悠菜は悔しそうに下を向いた。

防いだ衝撃で悠菜の服から血が染み出した。

「ぐ・・・」

悠菜が苦しそうに顔をゆがめる。

「まだ傷が癒えてないのなら、直す方を優先したまえ、直ったらこ
ちらが払った分だけの仕事はして貰う」

悠菜は黙って頷くと部屋を後にした。

ボタン

暗い部屋から出た先は明るい廊下が続いていた。
壁を伝いながら悠菜は歩いた、時々止まっては苦しそうに傷を抑える。

「和也・・・この痛み忘れないよ・・・」

悠菜の目に殺意が芽生えていた。

だが、それとは別に、子どもの様な嬉しそうな輝きもはなっていた。
まるで、新しい遊びに熱中した子どもの様な輝きを

くおまけく

病院のお見舞いに行った次の日、

再び怜次と水音は和也のもとに向かっていた。

「怜次君わざわざ私に付き合わなくてもいいんだよ？」

水音がチラリと横目で怜次を見た。

「いーっていーって！どうせ暇だし、」

（それに、白衣の天使何て早々^{ナース}拜めねーし）

言ってる事と考えている事に罪悪感全く無しの怜次は看護婦を見る
度に頬を緩ませている。

その病院内を先ほどから子ども達が走り回っていた。

曲がり角を曲がった所で見覚えのある白髪頭が少し前を歩いている
のを見つけた。

「あ、和也」

水音がそう口ずさんだ瞬間、水音の横を女の子が和也に向かって一
直線に走り向かっていった。

（あー当たるな）

怜次は何の気もなしに頭にそんな言葉が浮かんだ。

ドン！

和也の足に女の子はぶつかった。

和也は無表情のまま純白の目でぶつかった女の子を見下げた。

女の子は和也を見ると酷く驚いて見せると小さく肩を震わし、脅えていた。

顔も泣きそうな顔になっていく。

それもそうだろう、和也はひたすら無表情のまま女の子を見ているのだ、

女の子には怒っている様にも見える顔はとても恐ろしい者に思えたようだ。

水音は和也が学校に入ってきて3日程の事を思い出した。

通路で和也が歩いているのを見かけて声を掛け様とした。

そこに和也の前方をいかにも遊んでいるという男の二人がでかい声で話しながら歩いていた。

片方の男が和也の肩に当たった。

「イッテーエ」

そう言つと男は和也を睨み付けるとすぐにまたもう一人の男と歩き出した。

「おい・・・」

和也はぶつかった男の肩に手を置いて、無理矢理自分の方に向かせた。

「謝るつて事を知らないのか？」

和也の顔は無表情で目はまっすぐと男を見据えていた。

「ア？何言つてんだテメエ？」

男はいかにもめんどくさいという感じで和也を睨み付けた。

「二人で堂々と廊下の真ん中を歩いていたら邪魔であろう」

和也の言葉は正しかった、その男2人が通った時、迷惑そうに道を開けている人が何人もいた。

「ウゼー、何こいつ？」

男は和也を指差すと隣の男に言いながらギャハハッと笑った。

和也は無言のまま、諦めた様に下に目をやった。

そのとたん、すざまじい速さで男の襟首を掴むと壁に押し付けた。

「ひ、ひいいい!？」

男は一瞬の事で高い悲鳴を上げた。

「もう一度言う、謝れ」

和也の純白の眼光が男を睨み付けていた。

「ひ・・・ひい!」

男は和也の威圧した目に見る見る血の気を引かせていく。

「ご・・・ごめんなさい」

（まさか子どもにまであんな事しないよね・・・）

水音は心配そうに和也に近づいていく。

和也は無表情のまま女の子の背に合わせてしゃがんだ。

女の子はビクツと体を揺らしたが、逃げようとはしない。

和也は女の子に手を伸ばした。

女の子は恐怖で目を瞑った。

和也はぽん、と女の子の頭に軽く手を載せた。

女の子は驚いた様に目を開け、水音も同じ様に驚いた。

「大丈夫か？」

わしわしと頭を撫でながら和也は優しく言った。

「・・・」

女の子は不思議そうに首を傾げると、コクリと頷いた。

「そうか、気をつけるよ」

和也が微かに笑った、かなり微妙だがほんの少し女の子に笑い掛けた。

（うわ！気持ち悪！）

普段見慣れない笑顔を遠くから見ていた怜次は悪気無しに思った。

水音もその少し前で若干固まっていた。

和也は女の子に飴らしき物を渡していた。

女の子はさつきとは違い、ニパツと笑うと走ってきた廊下の逆をまた走り出した。

廊下の途中で立ち止まると和也に向かってブンブンと手を振った。

女の子の中で和也の印象は良い人の部類に入った様だ。

和也も軽く手を振って女の子に答えた。

見えなくなるまで手を振ると和也は女の子の走り去った廊下を見ながら、ポツリと言った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・子供は良い」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

水音の頭に浮かんだのはあまり考えたくない言葉であった。

怜次も似た様な事を考えているのが水音には解った。

まだ和也に遭って日が浅いからなのかどうかは解らないが水音達にとって、和也「雨の中の子犬を拾う姿。」

というのは想像し辛かった。

だから和也の言葉『子供は良い』『子供好きの爽やかな青年、というより、『子供は良い』『子供な女の子が好き（恋愛対象）な無愛想な男という方が合点がいった。』

「む？来てたのか？」

和也がこちらに気づくと何も無かったように近づいてきた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

二人は無表情で和也が近づいた分だけ避ける様に後ろに下がる。

「？、何だその犯罪者を見るような目は」

和也は不思議そうに首を傾げる。

「和也つて・・・ロリコンだったんだ・・・」
水音が暗い声でボソツと言った。

「・・・・・・・・？」

和也は無表情のまま再び首を傾げる。

その次に無表情から少しムツとした様な顔つきになった。

和也は水音の頭にポカッという間抜けな音がしそうなチョップを加えた。

「ひゃ」

水音がチョップに反応して小さな声を漏らす。

「アホ、誰が^{ロリコン}変態だ、俺は酷く嫌悪感を覚えたぞ」

意味の解らない事を言いながら和也は腕組みをする。

（あ、ちよつと怒ったんだ）

和也の無表情にまた新たな感情を見た気がした。

「いやー、お前がロリコンとはナー、この変態！明日のクラスはこの話で持ちきりなー！」

怜次がとても面白そうにバシバシと和也の背中を叩く。

その時、和也の真正面に居た水音の顔が青ざめていった。

怜次の角度からは見えないが、水音の目は間違はなく和也の顔を直視している。

（ん？何だ？）

怜次が水音の顔を不信に思っていると和也が振り向いた。

いつもなら見せない爽やかな笑みを浮かべながら、怜次の肩にポンツと手を置いた。

笑顔とは裏腹に和也の額に青筋が浮かんでいる。

「・・・・・・・・！」

あの子供の時とは違う笑顔に怜次は殺気を感じた。

「え？マジ？」

怜次の言葉に軽く頷いた和也は笑顔のまま怜次の顔面を握り締めた右手でブン殴った。

ドガァ！と、バキィ！のダブルの効果音を奏でながら怜次は吹っ飛んだ。

そのまま病院の白い壁にぶつかり、白い壁が一瞬にして、真っ赤に染まる。

ずるずると壁に血の道を作りながら下に落ちると、怜次は一言だけ言った。

「み・・・水音ちゃんと、対応・・・違う・・・くない？」

そう言っていると怜次の意識が消えた。

それを見ていた看護婦が恐る恐る近づき怜次の容態を調べた。

「・・・・・・・・誰か先生呼んで！顔の骨が砕けてる！」

その光景を見ていた水音は、ある一つの事が解った。

（前言撤回・・・『ちよつと』じゃないや、『もんのすごい』怒ってる）

水音は頬を引きつらせた。

第9話　その時の怜次、その後の和也、それから悠葉　　完

第9話 その時の怜次、その後の和也、それから悠菜（後書き）

とりあえず漆黒の男の話がようやく終わりました。

結構長かったですね

今回は漆黒の男の話のプロローグみたいな話なので、私はあまり好みません、

また、あれば感想や指摘する所、など、次なる精進の為、ご指導をお願いいたします！！

第10話 見え無い少女と桜木怜次 1（前書き）

朝

漆黒の男との戦いから和也はその男の事を、今井【情報人】に捜査を依頼する。

水音を襲った組織が明らかになる。

昼

怜次は見知らぬ少女と会つ、
キーワードは『青空』

第10話 見え無い少女と桜木怜次 1

視え無いという事で悲観した事は無い。

むしろ好都合ではないだろうか

どんな形になろうと、

どうせ見え無いのだから、

吐き気を覚えることは無い

次第に記憶は色を忘れた。

血の色はどんな色だったろう？

人の体を巡るそれはきつと素晴らしい色だろう。

ソの色ヲ忘レタのダケガ残念でナラナイ

ワタシはキョウも浴びる

人ヲ動かス素晴らしイ血トイウものヲ浴びる

生暖かい【ソレ】はキつと素晴らしイ色に違いナイ

また、途中から自分が解らなくなった。

AM7:45

「うむ、良い味だ」

白髪白眼の男、和也は目を細めながら目の前の食卓を箸で摘んでいた。

紺色のブレザーの下にカッターシャツ、赤いネクタイにブレザーに合わせる様な同じく紺色の長ズボン、ブレザーの胸の所に金色の盾の様なマーク、本当ならピシツとしている様に見える姿のはずの制服は見た目からか少しだらしく見える。

目つきが眠そうにしているのは、朝が弱いのかもしれない。

「しかし、塩加減が甘いな、弱火で焼きながら塩の粉末を少量加える事を求む」

何か妙な事を言いながら和也は湯気を立てる赤い鮭の焼き物を摘んだ箸の先の赤い実を睨んでいた。

「お前は姑か！！ってか料理出来ねエーのになアんで知識は持っているんだよ！！」

身長180はある大男が和也に向けて声を荒げる。

不良っぽい感じが取れない男には妙な違和感があった。

その違和感の正体は大男の身につけている物にあった。和也と同じ

様な制服の上から可愛いピンクさんの絵がプリントされたピンク色のエプロンを身に付け片手でお玉を振り回している。

不良っぽいツンツン頭の大男はあまりにもその違和感が拭いきれない。

「怜次、馬鹿にするなよ料理の知識を持つ事で、いつ如何なる時も栄養配分を考え絶対的な健康バランスを保つのだ、そもそも・・・」
長くなりそうな言葉に怜次と呼ばれた大男が終止符を打つように叫んだ。

「お前、食いモンなら何でも食うだろーが!!」

その和也の隣では目の前の食卓をジッと睨んでいる赤髪の女性が居た。

可愛いピンクのリボンで2つに髪を括っている女性は綺麗というより何処か可愛いというイメージの女性であった。

上半身のみは和也達と変わらないが下のスカートは膝より上までの少し短いと思われるような青色のスカート。

和也達とは違い綺麗にピチッと着た女性は端から見れば優等生に見える。

睨む様にその色鮮やかな食卓を見て、小さくため息を漏らす。

ため息と同時に両脇で括ったツインテールが少し揺れた。

「不公平だよ・・・」

女性が悲しそうに漏らすと独り言のように呟いた。

「なんで怜次君はこんなに料理が上手いんだい、まだ下手くそでも一生懸命作って、恥じらいながら料理を出して『ど、どうかな?』

とか言う方がまだマシだよ」

怜次が水音の言葉に固まる。

「いや、水音ちゃん?俺にどんなキャラ希望?」

水音と呼ばれた女性は頬を膨らませながら怜次を睨んだ。

「不公平だよ、何で女の子の私よりも料理が上手いんだい」

その言葉に怜次と和也が固まる。

「私にも作らせてくれないのに」

その言葉に二人の男は顔が青ざめる。二人の脳裏には全く同じ事が考えられていた。

過去に水音の料理（ドロ状）を食し、その味は例えるなら核兵器を思わせるレベルの高さを見せた。

その核兵器（水音の料理）を食し、何度卒倒したかは数え切れない、救急車を呼ばれた事もあり、その料理の腕はある意味最強で最凶であった。

食べなければいいのだが、目を輝かせてジッとこちらを見ている水音を見ると正直断る事を考えると複雑な気持ちになる馬鹿二人なのだ。

しかし、毎日あんな物を作られては体が持たない。

そこで水音に料理をやらせない、という結論を得た二人は常に警戒を怠らず、怜次が料理を作り、台所を空けないという策に出た。

しかし、いつまでも続くわけもなく、そろそろ不満がるだろうな。という予感は的中へと変わった。

二人の明日はデッド オア アライブ

「嫌々、水音ちゃんのはその、生死に関わるし・・・」

怜次は出来るだけ丁寧に言った。

つもりだが顔が強張っている。

水音は怜次の顔をジッと見た後、俯いた。

「そつか・・・そうだよ、あんな不味いもの食いたくないモンね・・・うん解ってる」

水音の肩が小さく震えた。俯いた時に前髪で顔が隠れているのが更に辛く見える。

へ？とポカンとする怜次の眉間にハンマーの様な怒りの鉄建が飛んだ。

ぐばあ！？という叫びと共に怜次が吹っ飛ぶ。

和也が若干顔に怒りを見せながら、拳を戻した。

「てめええ！！何！！しやがんだコラアア！！！」

怜次も怒りに任せて立ち上がると和也の胸倉を掴む。

「貴様・・・女（水音）を泣かす様な奴とはおもわなんだぞ」

和也も怜次の胸倉を掴む。

この男、もとい和也は水音に好意を寄せている・・・というのでは無く、唯単に水音に甘いのである。

この言葉から見れば、ならいいじゃんと他人事に考えてしまうのだが、水音が困れば即座に鉄拳が飛ぶ駄目駄目なのだ。

その常被害の中心に居るのが怜次である。

「はあああ！？ほんつつつと！！お前はアアアア！！！」

「フン、来るか？ブタさんエプロンをしている奴になど負ける気はせんわ」

「てんめえええ！！クロス！！ぜってえクロス！！！」

和也と怜次の言い合いの最中、二人の周りに熱気とバチバチと電流が迸る。

「やめなさい！！！」

先ほどまで肩を震わせていた水音はいつもの顔で怒った様に二人を見ていた。

「何で喧嘩してるのかな？駄目だよ喧嘩は！」

水音は両手を腰に当てて大きくも無い胸を張って2人を睨んだ。

（嫌、水音（ちゃん）が原因なんだけど・・・）

「・・・」

いつ入ったのか、寮内の居間のドアの前に今井が立っていた。和也達と同じ紺色の制服を着ている。

違うのはキツチリと着ているという事だけ。

「・・・」

「・・・」

「あ、今井君」

二人の沈黙も露知らず、水音が軽く今井に手を上げた。

若干疲れた顔をしたまま、誰の遠慮もいれず、ズカズカと入ってくると、ツフーという声と共に椅子にへたり込んだ。

「何？お前いつから居たわけ？」

怜次は和也と掴みあったまま固まっていた。

いきなり今井が来るとは思っていなかった。現在は7時、今なら学校への用意が順当だろう。

予想外の事に怜次は頭の中をグルグルと模索していた。

「和也の『うむ、良い味だ』から」

今井が簡単に答える。

「最初からかよー！声かけろよ！てかお前は【数少ない】突っ込み方面なんだからボケンな！！【俺が】余計疲れる！！！」

怜次は早口で今井に叫ぶ、未だに和也の胸倉を掴んだまま。

今井は疲れた顔を一層疲れを被せて椅子に背中を預ける。

顔を思いっきり後ろに仰け反らせた。

水音はいつもとは違う今井に違和感を覚えた。

「だ・・・大丈夫？」

今井は仰け反らせたまま枯れた声を出した。

「やっと、手に入れたんだ・・・情報を」

お茶を入れてくる、と水音はパタパタと音を立てて急いで台所に向かった。

「情報・・・？どういう事だ？」

怜次が台所に行く水音を横目に聞いた。

和也達の請負人^{つけあいにん}という、依頼を受けて仕事を遂行するのは別に今

井は情報人^{じょうほうにん}という仕事をしている。

情報人とは、警察等では入手出来ない様な情報や相手の戦力、はたまた城の見取り図まで様々な情報を売る仕事だ。

請負人は依頼で必要な情報は常に情報人から買い取る。

しかし、情報人は請負人のみに売るのではなく、犯罪者に情報を売ることも有り悪人、善人、隔てなく売り買いをする、いわば『中間』

の人間だ。

情報人は請負人とはまた別のスキルを要する。

情報を集める為のずば抜けた記憶力。

情報を手に入れるための裏切りや戦闘という度胸、それを踏まえた上での客からの信頼を集める人柄。

オールマイティに何でもこなせなければ勤まらないこの仕事を学生で持っているのは珍しく、それは同時に今井がそれ相応の実力を持っている事を意味していた。

和也は鬱陶しそうに怜次の胸を押してむりやり放した。

その時に怜次の目がまだ治まっていないうと、更に怒りに目を光らせていたが和也は気にしない。

「手に入ったのか？」

和也はそれだけ言っていると今井をジツと見た。

今井は疲れた顔を向けて軽く頷いた。

和也は今井と向き合える形で長机に座る。

その一連を見ていた怜次は今井が何故ここに来たのかが解った。

「和也、今井に情報、頼んだのか？」

怜次は軽く驚くと慌てて和也の隣に座った。

和也が何の情報頼んだのかは薄々察しが付いている。

今井は水音が運んできたお茶を軽くすすってから水音に軽く礼を言う。和也を見て、それから怜次を見て、最後に水音を見た。

「情報はお前から・・・てなつてたけど、別に怜次、水音に言つてもいいんだな」

和也は少しだけ頭を前に倒した。

その動作を了承と受け取った今井は情報人としての仕事をまっとうする事にした。

「俺が売る情報の名は」

一瞬だけ間を空けた。重苦しい空気がこれから言つことを更に重くしている様に。

「犯罪組織、通称トランプ」

怜次はやっぱりか、と確信した。過去に己宮内に、どのような犯人か聞こうとしたが、「これ以上は言えない」と固く断られていた。和也が入院時に己宮内が怜次達に教えたのは、

『和也が水音を守る為、何者かに大怪我を負わされた』これだけで、実際の事は己宮内は伏せていた。

これだけでも誰かがこの学校に侵入した事が解り、本当なら機密事項で有り、

周りには和也の傷は『腐敗した工場が壊れ、それに巻き込まれた』という事になっていた。

和也、水音に口止めをするのが普通なのだがあの時は己宮内の配慮によって教えられている。

情報人は最低限、何の情報か、誰の情報かを情報を提供して欲しい者に聞かなければ成らない。

『トランプ』

名前だけは水音が兄から聞いていた。

請負人としても、この学校都市にしても上位に居る風間は襲ってきた者たちの事を当然の事のようにしていた。

どこまでも妹に甘い風間である。

今井から情報を取ったという事は和也も同じ様に己宮内に詰め寄っていたのか、と怜次は適当に考える。

怜次が椅子にもたれると、目の片隅に水音が映った。お茶を渡した後、すぐに怜次の隣に座った水音は顔が青くなっていた。

俯いて机をジッと見ている。

時々唇を噛む仕草を見せ、目に薄らと恐怖が浮かんでいた。

命を狙ってきた組織の名を聞いて、狙われたときの事を思い出したのかもしれない、と怜次は不安げな水音に同情する。

水音の脳裏に歪んだ純白の目をした和也の皮を被った狂気の塊の存在が浮かんでいたのを怜次は知らない。

次に怜次は今井を見た。

今井は珍しく困ったような顔をしていた。

疲れに染まっている顔は、はつきりと和也達の心配をしていた。

言おうか言うまいかという風に何度も口が開いたり閉じたりしている。

和也に頼まれ調べ上げた情報は危険な物、それを教えれば和也達が傷つくかもしれない。

今井は情報人としてはまだ幼い。

だからこそ甘い部分が有り、自分の情報のせいで友達が危険に踏み込むのは気が引けた。

それを見ていた和也が先に口を開いた。

「今井安心しろ、別に襲撃するわけではない、次に襲われた対処法だ」

和也は元々自分から首を突っ込んだりはしないし、『どこでどうなるうがどうでもいい』そんな考えの方が強い。

それを知っている今井は和也の言葉に偽りは無いと核心し、肩を軽く上げて目を瞑った。同時に重苦しい空気が軽くなった。

今井は淡々と話し始めた、水音を襲った組織の事を

AM 8:20

いつもの1-2のクラス、

いつもの様に暴れてる奴、話してる奴、能力使って遊んでいる奴、その中に一人、椅子に大人しく座り、腕組みをして目を瞑る和也の姿があった。

和也は朝の今井の話を思い返していた。

「この組織はお互いをトランプの記号で呼び合う、その中で分割されている部隊はスペード、ダイヤ、ハート、クローバー、12人ずつに分かれた部隊だ。」

この4つの部隊のそれぞれトップに立つのがK^{キング}と呼ばれてる4人だ。

その中でもトランプのリーダー各として成り立ってんのはクローバーのK^{キング}だ。

別に白のジョーカーと黒のジョーカーっつー雇われたっぽい二人組みもいる、そこはトランプの歴史でジョーカーが後から入ったのに関係してんのかも知れないな

数はトランプと同じ32枚と同じ32人。組織としては少数だが全員が能力者の総勢部隊だ。」

今井はそこで一旦口をつぐみ三人を見た。
質問を待っているようだ。

和也が口を開く。

「その4人組のK^{キング}と二人のJ^{ジョーカー}の特徴や実力は？」
今井は軽く首を振った。

「悪いがそこまで解っちゃいない、実力はあるだろうよ、能力に特化した組織だ、警察も手を焼いてる」

水音も口を開いた。

「何を目的にしているの組織なの？」

齒痒そうに今井は目を逸らす。

「・・・まあ、0能力差別の批判かなあ、言ってる事は良い事に聞こえるけどよ、被害者にとっちゃ唯の無差別テロと変わらないさ、前なんか差別反対の為にバスのつつて死人出した事もあるしな」
和也が舌打ちをした。

この様な能力者は少なくない、0能力者は極めて嫌われやすい、だからこそ立ち上がるものもある。

やり方は色々だが、トランプは暴拳、力で無理矢理、差別を組み替え様としている。

このやり方を持つ組織は数多く存在、その存在が関係の無い0能力者達に非難が降りかかる事は解らないのか。

何故トランプが水音を襲ったのかを聞くと、今井は悔しそうに首を横に振った。

あの後、実質判ったのはそれだけであつた。

今井は謝っていたが、本来これだけの情報でも手に入れるのは法律の合間を縫う仕事だ。

今井は十分やつてくれたと和也は思っている。

そして、皆で寮を出る時にさり気なく和也の手に紙を握らせていた。不思議に思ったが今井の目が『ここで見るな』と告げていた。

和也はポケットに手を入れて一瞬固まると、周りを確かめ、誰も見ていない事を確認する。

ゆつくりと朝渡された紙を出すとシワを広げていく。

その紙はA4程の薄い紙、今井が慌てて渡したので沢山の折れ目でグシャグシャになっている。

そこにはカラーで写るある男のプリントの絵とその下にある文字だけで構成されていた。

『美濃悠那 みのゆうな ガンナーのマスター（凄腕）のAランク

12歳の頃に請負人の職業に就き、その容姿と解析不能の能力、黒い翼を持つ事から、別名【黒翼の墮天使^{てんし}】と呼ばれている。12歳にしてAランクの仕事をこなす事から最年少内では最強、と呼ばれ将来に期待されるが、13歳で請負人を脱会、現在では15歳とされているが、その姿を見るものは皆無、最先端の情報では【裏】の世界の住人となったと言われている。現在では最も有力な情報だと思われる。』

器械の文字で密集された言葉は全てあの時の工場の一人の少年を指していた。

そのプリントされた絵は幼いながらも、漆黒の目とその髪は変わっていない。

グシャツと紙を片手で握るとA4の紙が押し潰される。

「今井・・・感謝する」

和也はランプを襲撃するつもりは無い、今井に言った様に次に襲われた時の対策だ。

だが、和也はある男の事はそんな安易に考える事は出来なかった。水音（仲間）を傷つけた事を忘れた訳ではない。

「次は潰す・・・」

和也がぼそつと口に出た言葉はクラスで騒いでいる者達には聞こえない。

和也の周りだけ冷たい空気が走った。

瞬間であつた。

「か！ず！やー！」

「必殺！ドキ 2人一緒のドロップキックウウー！」

2人分のドロップキックが和也の後ろから頭部に的中すると、椅子から凄い勢いで吹っ飛んだ。

いやっはー！と2人がハイタッチ

和也は直ぐに立ち上がるとドロップキックをかました2人を睨む。机の角に頭をぶつけたのか、頭からダラダラと血を流している。

片方は無邪気な笑顔を見せているさなぎ、もう一人はニヤニヤと下品な笑みを浮かべ、指定された制服とは別に右手首に金色のリングのアクセサリーを付けた青年、名は正人まこと

170程の身長を持つ、同じクラスの少年だ。

「何だ貴様等……喧嘩を売っているのか？喜んで買うぞ」

和也の目が苛立ちで2人を睨む。

「そんな目しちやイヤ〜ン、ちよつとした茶目っ気じゃんよー」

正人がケラケラと笑っている。

「さっきなあ！すごい美人がおつてなあ！教えたる思つてなあ！」

さなぎがニコニコと笑っている。先ほどのドロップキックを完全にスルーしている。

「そんな事を教えるなら怜次の方がいいだろう」

常に女の尻ばかり追いかけている馬鹿を横目で探すが見当たらない。

「それがさ〜れいちー何処にも居ないんだよねー、だから仕方なく、かずつちに教えようと思つて！」

正人の言つたれいちーとは怜次の事を指し、かずつちとは和也の事を指している。

正人は人を愛称で呼ぶのが好きらしく、和也もあまり深くは突っ込まない事になっている。

「……ならばわざわざ俺に教える意味は無いんじゃないか？」

2人は同時に悪戯っぽく笑うと更に同時に言つた。

「「うん、暇つぶし」」

「……………」

和也が刀を抜いたのはその言葉の後の事であつた。

ガシャーン！やドガア！ドゴオ！という音の後に大人の女性の声の

『何やってんのあんたら！！』という言葉と共にズガガガガガ

！！という銃声音が鳴つたのとは全く関係なく怜次は商店街の前に居た。

「イイイイイイイイ、これは無いだろ、無い無い」

白い布を被せた長い棒を背負いながら怜次は一人呆然としていた。

怜次は考え込む様に眉間にシワを寄せると腕組みをする。

「ちよつと教室出て？トイレ行こうとして？商店街？無理があるだろ」

自分のすぎまじい方向音痴に軽く突っ込みを入れてから深くため息を付いた。

「どうやって帰ろうか……」

生まれ持った特性に慣れているのかすぐに立ち直っている。

この学園の過半数を占める生徒達は現在学校に滞在中、なので車も殆ど通らず、ちらほらと見える学生姿の少年達はいわゆる不良と呼ばれる人種だろう。

その商店街の中から一際大きな怒声が聞こえた。

薄暗い路地裏からの物の様だ。

「おいおいおい！！どういう事だあ！？てめえ！！」

「……特に同じ事を言う必要は無いと思う」

低い男の次の次に澄んだ少女の高い声が聞こえた。

（こ……これは……！！）

怜次の脳裏にズバシーン！！と稲妻が走る。

（お約束的な展開！？）

怜次がその声に向かって走り出した。

（オイオイオイオイ！！春ですか！？春ですか！？この展開はか弱く美しい（仮）少女が不良に絡まれている所を美青年（自称）が通り掛ってカツコウ良く不良をなぎ倒した後、『お強いんですね』（美女仮）とか言われてそれに美青年（俺）が『大した事じゃないさ……』とか言っちゃって『ステキ！』みたいなキヤーが！！ウハハハハハハ！！方向音痴最高！！俺のバラ色未来が見えたぜエ！！）
脳内0.1秒で見事なまでにピンクな妄想を駆り立てていた。

待ってマイハニー！！という掛け声と共に商店街の声のした方向の路地へと猛烈ダッシュ。

スライディング気味に路地裏に飛び込むと、まず怜次の目に映った

のは美しい少女では無く。

股間を抑えて悶えて倒れている不良であった。

「……………あれ？」

予想外の事に脳内が一瞬停止。

「おぶひょ！？」

間拔けな声に怜次がそちらを振り向くと丁度、もう一人の不良らしき男が股間を抑えながらゆっくりと後ろに倒れて行っていた。

その目には透明な塩水が噴出している。

「しつこい」

先ほどの澄んだ声の持ち主の方向へと怜次が顔を向けると不良の股間に向けて蹴り上げたと見られる右足をゆっくりと下ろした少女が立っていた。

白いワンピースを着ている少女は麦わら帽子を深くまで被り、目は見えないが、真つ黒な髪が後ろに綺麗に伸びていた。

スラッとした体立ちに無駄は無く、背の高さは160位だろうか。綺麗なラインの背中まで伸びている黒髪は手入れが無いのか所々はねているが、その自然さが妙に合っている様に見えた。

足にサンダルと夏使用の格好だ。

サボりなのか、学校の制服とは著しく離れている。

端から見れば酷く美しい少女だが怜次は最初の衝撃が頭に残っている。

全くか弱いとは思えない少女は男の股間を蹴り上げたのだ。

少女がこちらの方を向く。

怜次がビクツと体を揺らす。

2人の不良は今も股間を抑えて蹲っている。

「あなたもコレの仲間？」

少女がそう言うとな不良の一人に右足に乗せた。

ぐは！という不良の声を無視して少女は体重を右足に加える。

ぎゃあ！！とかなり痛そうな声を不良が上げた。

「お、おい……やめてやれよ」

見かねた怜次が止めに入る、不良は赤の他人だが、股間を抑える不良を同じ男として見ていられない。

「質問の答えになっていない、あなたも味方と判断する」

少女がツカヅカと近づいてくる。

目標は転がっているものたちと同じマイ・サン（私の息子：注）シモネタ）

文字通りキモが冷える思いをすると、怜次が慌てて首を振る。

少女は怜次の目の前で止まると自分よりも遥かに背の高い怜次を見上げた。

「！」

その見上げている目は怜次の顔など見ていなかった。

見た事の有る様な真っ白い目、だが和也とは違う、薄く美しく、そして少し濁った白。

「……目が視えないのか？」

怜次がとつさに口にした言葉を少女は動揺することなく未だ無表情で見上げている。

「そう、違うの」

少女は怜次の言葉には答えず、首を横に振ったのを確認すると、怜次の横を通って路地裏から出ようとした。

「ちょ！ちょっと待ってくださいよ！！」

怜次は慌てて少女の腕を掴んでいた。

腕を握られたまま、再び見えないはずの目をこちらに向ける。

「離して」

冷たい、軽蔑する様な声。

「あ、嫌、その」

怜次が冷たい言葉に圧倒した様に手の力を緩める。

力を緩めていても離さない怜次に少女は目を細める。

そして

「ぐへあ!？」

少女の右足が怜次の股間にへと真っ直ぐ頭上に蹴り上げれていた。その瞬間怜次の足が微かに浮いた。

怜次は猛烈な痛みの中、大の男の不良が倒れている理由を垣間見た気がした。

少女は倒れながら腕を離れたのを横目にサッサと歩き出した。

「ちょ……待って……」

怜次は股間を抑えながら少女に声を掛ける。

少女が立ち止まる。

「てめえ……躊躇も無しに男の弱点蹴り上げるか？普通……」

少女は振り向きもせず答える。

「しつこい方が悪い、男はどれもしょせんは一緒、あなたも、その周りに転がっているのも」

転がっている不良の一人がナンパしただけじゃねえか……と呟いたので、その時の現状を把握。

「ったく、とんだ女だな……折角の俺のバラ色未来を粉碎しやがって」と、勝手な妄想を粉碎されたのは結構効いた様だ。

怜次が壁伝いにヨロヨロと痛みを堪えながら立ち上がる。

少女は振り返らない、視え無い目で振り返った所で意味は無いのかもしれない。

少女は声だけ怜次に向けた。

「私は視え無い、だから的確に急所を突いて終わらせるのが優位」
「……………」

怜次が静かに息を飲む。

少女は視え無い。

そのハンデを持って人生を歩めば、そのハンデは大きな壁となる。

一步、動く事でさえ苦悩が過ぎる。

そんな毎日が、もし自分に在ればと思うと怜次はゾツとした。

そんな状態で逃げる事も戦う事も出来ない少女は一撃で倒す事を学んだのかもしれない。

「…………悪かったよ」

怜次が視線を地面に落とし、少女の背中に謝る。

「でもなあ…………」

怜次が視線を上げる。

「わざわざ金（ピー「妙な発信音が流れました」）蹴り上げることは無いだろー！」

余程痛かったのか、怜次の目が若干赤くなっている。

「……………」

「……………」

2人の間に沈黙が流れた。

その時、少女が振り返った。

少女の乱雑な黒髪がふあつと浮くとゆっくりと落ちる、

怜次は改めて少女を見た。

本当に美しい少女である。

髪を手入れし、ドレスを着れば、何処の国のお姫様かと言われても

不思議では無い。

白い眼は見えていないのに怜次を見つめる。

もつと観ていたい、ずっと観ていたい。

怜次は自然にそんな事を思った。

見とれていた、少女が近づいてきている事にも気づかずに。

怜次の中で何かが揺れ動いた気がした。

少女が怜次の目の前で止まる。

怜次は自分との身長差が大きいなあとはんやりと考え、更に無表情

な顔つきを見て笑ったらもつと可愛いだろうなあと考え、

そこで我に返った。

それと少女が握りこんだ拳を上げたのは同時であった。

今日2発目の顔面攻撃。

少女の拳は怜次の顔面へと吸い付く様に走った。

ポコ

太鼓を鳴らす様な音がした、決してあまりにも惨^{むじ}たらしい音を少しでも改善しようとした、などという事など考えず、今何が起こっているのか理解していない少年の名誉の為にも、目を瞑^みってほしい。路地の壁へと吹き飛ばされる。

とても細い腕を持つ少女が出した力とは思えない威力。勢いよく壁に激突すると同時に殴られた鼻の部分に熱いものがジワツと込み上げる。

「& % \$ # & \$ % ! ? ! ? ! ?」

言葉にならない声を張り上げて苦痛を堪える

両手で鼻を押さえ、ダラダラと流れる鼻血、確実に鼻がイッた。

ダラダラと冷や汗を流す。先ほどの蹴りよりも深いダメージが怜次に残った。

赤かった目は更に赤くなり、ほぼ半泣きの状態であった。

先程の不良達に対して少女はまだ手加減をしていたのだと実感した。前の股間への痛みをまだ宿した上でのそれを超える第2撃目は耐える耐えない以前の問題だ。

痛みで転げまわっている怜次に少女は手の平を見せる様にさし伸ばしてきた。

怜次は痛みを堪えながらもその手を不思議そうに見た。

「ごめんなさい」

ダラダラと鼻血を流し、鮮血に汚れた手を気にせず少女は立ち上がる事を促す。

手のひらを出したまま言った。

先程までの突き放すような声とは違い柔らかい印象を受ける。

怜次は少女の手を取り慌てて立ち上がる。

少女の手は小さく、とても暖かい。

暖かいのは自分の血のせいかもしれない。

「・・・・・・・・嫌、アンタ何がしたいわけ？」

怜次が困惑する。

この少女の行動が解らない。

股間を蹴り上げ、鼻が折れるほどの強烈な拳、その後に少女は謝った。

誰が見ても解らない行動だ。

「・・・・・・・・あなたは私に謝った、だから私も謝る、最初の急所への謝罪だと思っていい」

少女は淡々と言いながら、ワンピースのポケットから小さなポケットティッシュを取り出し、怜次に手を貸したときに付いた血を拭いた。

「じゃあこの強烈な右ストレートは？」

怜次は今も鼻を押さえて血を止めようとしている。

少女はポタポタ、というよりドバドバ流れて落ちる鼻血の音に気づいたのか

先ほど使っていたポケットティッシュを怜次に渡した。

あ、さんきゅ、と簡単に言う。と怜次はそれを受け取る。

チーンと赤い塊を出している間に少女は答えた。

「あなたの謝った後に苛立ちを覚えた」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

またしても沈黙が流れる。

「え！？それだけ！？」

怜次が鼻を押さえながら声を上げた。

少女は首だけ動かしてコクツツと頷くと再び音も無く怜次に近づく。怜次の目の前で止まった。

「え？あ？」

怜次は少女の行動に困惑した。

少女は手を伸ばすとソツと怜次の頬に触れる。

怜次がその瞬間固まった。

少女の柔らかい感触が頬に触れている。

少女は背の高い怜次をジツと見上げている。

真下から見た少女はとても可愛らしく、心臓が跳ね上がった。

「せーの……」

少女の小さな声が怜次に聞こえる。

バギヤアツ！

今度はリアルな音がする。

怜次の顔が横つ面にぶん殴られる。正確には横に曲がった鼻を再び逆側に殴ったのだ。

「ヘギヤアアア！！！！」

2回目の断末魔、

ゴロゴロと路地を転がり、最後に蹲る。

「戻った」

少女の言葉に怜次が顔を上げると、少女は怜次の顔、基鼻を指差していた。

そしてもう一度

「戻った」

怜次はまだ痛む鼻の形を確かめるように摩る。

ひん曲がったはずの鼻は元の形に戻っていた。

「痛いのは最初だけ、もう痛くなくなる」

少女の言葉どうり、痛みは大分和らいでいた。

怜次は呆然とするが、瞬時に少女が治してくれたのだと自覚する。

「あ、ありがとよ」

不思議な少女は再び怜次に背を向けて路地の外へと歩き出す。

「・・・・・・・・」

こんな痛い目にあっても、怜次は少女ともう会えないのかな？と思うと少し寂しく感じた。

会って殆ど立っていないこの少女に何故そんな事を思つかは解っていない。

これでもう合えない赤の他人にとっさに怜次は繋がりを作ろうとした。

「な、名前は！？」

少女の背に向かって怜次は叫ぶ。

少女は振り向かない、この少女はきつともう振り向かない。

怜次は少女を知っている様な気がした、あつた事は1度も無いのに、何故そう思ったのか判らない。

きつと答える。

少女は人差し指を上に向けた。

怜次は釣られる様に上を見た。

青い空が広がる晴天。

「『 青空 』」

「青空？」

怜次は再び少女の後姿の方を向く。

青空と答えた少女は既に居なかった。

狭い路地にはもう少女は居ない、何事も無かった様に。

怜次はしばらく路地で固まっていると、路地角から再び足音が聞こえた。

帰ってきたのかと顔を上げると、そこには無愛想な男が立っていた。
「・・・・・・・・」

白髪頭の男は怜次を一瞥した後、失礼なため息を付く。

「・・・帰るぞ」

それだけ言つと白髪頭は怜次に背を向ける。

その背は怜次にはあの少女と被る。

前座も無しのストレートな言葉、躊躇わない攻撃、何を考えているか判らない仕草。

「そっかぁ・・・」

怜次は何故会ってもいない少女の事が判ったのか理解した。

「似てるんだ・・・和也と・・・」

怜次は歩き出す和也の背を追いかけて、路地を出る。

和也は少し離れたところでこつちを観ている。

相変わらずの無愛想は変わらない。

ここも少女と似ている。

和也の方に歩き出すと、ふと後ろを振り返った。

あの惨劇の少女は居ない。

唯の赤の他人は去っていった。

もう会う事は無いのかも知れない。

だが怜次は再び少女と出会う、運命の様に引き合わされる。

怜次は思う。

（また会いたいなぁ……）

青い空は答える事も無く、見上げる怜次を見下ろしている。

少女と再び出会う場所が戦場だという事も知らずに。

P M 1 : 1 0 分

既に一時を回っていた。

第10話 見え無い少女と桜木怜次 1（後書き）

えー、遅くなりました、2話分書いてつとやっぱ遅くなるね、うん、もう1話はもうすぐ出来るのですぐ出せそうです。

この話と次話は繋がっています。

今回注目して欲しいのは【情報人】 【青空の少女】です。

やっと出せました。

情報人はこれからチラホラ出ると思います。

青空の少女は主要キャラなので忘れずに頭の隅にでも覚えて頂けたら幸いです。

それではまた次で会いましょう

第11話 平穏な日々に変化が交差する（前書き）

朝にトランプの存在を知る。

怜次は昼に少女と出会った。

小さな変化が平穏なはずの日に介入していた。
様々な変化に気づく事も、気付かない事も。

第11話 平穏な日々に変化が交差する

第11話 平穏な日々に変化が交差する

PM1:00分

「帰ってこないな」

隣の席の怜次の机の上に行儀悪く座る和也はその机の周りに居る2人に言った。

「帰ってこないねえ」

さなぎは何が楽しいのかケラケラと笑っている。

「昼休み入ったな」

今井が腕組みをしながら答える。

「……行ってくる」

和也は机から飛び降りるとスタスタと教室の出口へと向かう。

ドアから出て行く和也を今井とさなぎが見送る。

ドアが閉まったのを確認してから、さなぎが今井にヒソヒソと話しかけた。

「行ってくるって、怜次探しに行くんやろか？」

「だな」

今井もひそひそで返す。

「何だかんだ言ってるあの2人仲良いんやね」

さなぎが更に楽しそうにわらって続ける。

「……ああ、そうだな」

今井は顔をしかめると間を空けた。

「ほっとけないんじゃないか？」

さなぎが不思議そうに首を傾げる。

今井が言った事が判らなかつた様だ。

和也は比較的、人が良い訳ではない。

だから人を、しかも怜次をほっとけないと思うのはお門違いだと思つた。

「どゆこと？」

今井はさなぎを横目だけで見ると、鼻から大きく息を吐く。

「さあーてな」

「……何かしつてんの？」

さなぎは反射的にそう言っていた。

今井とは長い付き合いのさなぎは今井が困ったときに、こういう癖をするのを知っていた。

「……さあーてな」

間を空けて同じ言葉が続ける。

今井の疲れた様な目は和也の出で行ったドアを見ていた。

昨日の深夜、AM3:21

今井は今回の仕事で情報を知るためにパソコンを使い様々な情報を引き出していた。

暗がりの中、光は画面の青白い光のみ、情報人としての腕を振るう。いわゆるハッカーと言われる作業だ。

カタカタとキーボードを叩く音は迅速かつ無駄が無く、慣れた手つきで指が軽やかに動く。

パソコンの画面に移された規則正しく並べられたフォルダやデータ達。

それはどれもが唯の一般人が見ていいような物では無く、一つ一つに暗証を入れるシステムを持つ嚴重さである。

【一年間の犯罪履歴】 【能力者による社会的問題】 【xxxx年
月 日、犯罪組織によるバスジャック】 【etc】 【etc】 【e
tc】 ……

沢山の情報網を頭に叩き込む中、妙な物が混ざっていた。

【イレイザー部隊】

これだけなら怪しいわけでは無い、そのフォルダの中にあるデータに気を引くものがあつた。

イレイザー部隊とは別名、排除人。はいじょにん

請負人とはまた異質の選ばれた請負人に特別な仕事を設ける。

要は汚れ仕事だと思えばいい、排除人は依頼人で禁止されている殺害、暗殺、等を時に犯罪に手を染める依頼事を約束された特別な部隊である。

エリートクラスの実力を持つ排除人は全員が請負人という、Aクラス以上の存在だ。

報酬は大きいがその分危険の伴う物である。

この仕事はあまり面では知られておらず、おもて今井も情報人でなければ知りようのない事であった。

排除人の仕事の経歴からトランプの事を知るつもりであった。

まさか『こんな物』を見るとは思っていなかった。

【イレイザー部隊】というフォルダから更に様々なデータに分けられていた。

そのデータを一つずつ違法の手法でパスを通して見て行く中、最後に残ったデータは規則正しく並べられたデータから2つ3つ間を空けて置かれていた。

黒の文字でデータの内容を教えていた今までのとは違い、赤い文字で書かれていた。

【純白の悪魔】

「・・・・・・？」

今井が眉を寄せる。

純白の悪魔

その名は聞いたことはあるが、どれもこれもありえない噂で構成された都市伝説の様なものだ。

要するにハッキリとした情報が無いのだ。

情報人をしていると次々と新しい情報を見る事になるのだが、このケースは始めてであった。

ちよっとした興味本意で先ほどまでと同じ様に違法の手法でパスを

入れる。

ブー…

耳障りなハズレの音がパソコンから鳴る。

先ほどまで一発でパスを通していたのが、初めて失敗した。

「……?」

軽やかに打ち込んでいた指が止まる。

再び同じ様に指を動かす。

ブー…

またしても同じ音が鳴る。

「……?」

どうやら先ほどまでよりもかなり嚴重な様だ。

今井は大きく息を吸い込む。

肺一杯に空気を送るとゆっくりと吐き出す。

深呼吸と同時に目を瞬く、集中力を練り上げていく。

「…なめんな」

その一言と共に再び指が動き出す。

先ほどまでの軽やかな動きとは違い、力強い動き、その目はパソコンの画面を凝視している。

次々と画面が変わる。

今井は、ハッカーとしての実力は上に在る様だ。

ピー…

今井が手を止めると共に耳障りな機械音が高い正解の音を出す。

今井はフンと鼻を鳴らすと手に入れたデータを開く。

その画面には一枚の写真と文字で形成されていた。

「……………なんだこれは」

独り言が口から漏れた。

その目は驚愕の色に染まり、画面を凝視していた。

ツブツブツブー！

突然の低い音がけたたましく鳴り響いた。

パソコンの画面に大量の警報のマークが表示され、最早手に入れた情報も見えなくなっていく。

バツと顔を上げると、今井は慌ててパソコンのコンセントを引き抜いた。

力いっぱい引いた導線はブチブチ！と痛快な音を立てて引き抜かれる。

それと同時にパソコンの画面がプツンとテレビを消した様に真っ黒な色へ変わる。

今井は軽く舌打ちすると再び独り言を漏らした。

「見つかったか……………！」

パソコンへのハッキングは様々な警報装置やパスワードを外さなければならぬ。

今井が見落とした警報がデータの持ち主に気づかせたのだ。

その持ち主はハッキングからこちらの居場所を割り出そうとしたのだ。

今井が後数秒気づくのが遅ければ今頃警察の世話になっていただろう。

バチバチと鳴る導線を握りしめたまま立ち尽くす、今見た情報は既に頭に入った。

だが、常識的にありえないその情報は今も脳内を駆け巡る。

「純白の……………悪魔、か」

そのデータの横端に貼られていた、ある少年の顔には見覚えがあっ

た。

白い目と同じ様な白い髪は印象深く頭に焼き付いている。
都市伝説と思われていた伝説は、幻想では無く現実に存在していた。

「今井？今井ー？」

さなぎの高い声でハツとする。

昨日のパソコンでの件を今井はまだ考えている。

「大丈夫かー？」

今井の顔を覗き込むさなぎの目は少し心配そうにしている。

大きく息を吐くと軽く手を振って大丈夫と表現する。

昔からの腐れ縁のさなぎにはこれで十分通じる。

（つたく…まだ寝ぼけてんのか？俺…）

自分で自分の顔をパシパシと叩くと眠い目を擦る。

あるはずが無い、疲れているんだ、と自分に言い聞かせる。

あの和也に限ってそんな事は…と、

今井が昨日見た者は、

何人もの人間を殺し続けた。

本当の悪魔の情報であつた。

昼休みで人が何人も横切る通路の中、

和也は学校の出口へと向かっていた。

目的地は方向音痴のお迎え。

昼休みまでに見付からなければ、直ぐに学校に戻る予定だ。

もう既に何回目になるか解らない怜次搜索にはかなり呆れていた。

過去に怜次をほっといたまま寮に帰った事があった。
帰った先の寮には大量の領収書が送られてきていた。
顔を青ざめる和也と水音。

後に怜次が喧嘩で暴れ周り、

その被害を受けた健全なる一般人の方々の弁償等諸々（もろもろ）
の類が回り回って、更に関係の無い和也と水音に回ってきたのだ。

現在、和也達の寮は借金に負われ、結構大変な状態であり、水音に
泣きながら怜次の事を頼まれている。

過去の依頼により、和也が真つ二つにした噴水も未だ弁償出来てお
らず、そんな和也が水音の頼みを断ることは出来なかった。

和也は深く深くため息を付いて肩を下ろす。

怜次の居そうな所を考えながら歩いていると、周りの話し声が耳に
入った。

『おい！見たかよ！スッゲー美人！』

『ああ、新しく入った先生か？』

『さっき通路の先で綺麗な人が居たよ！』

『スッゲー！モデルみたい！！』

周りの喋っている事は殆ど似たような内容の様だ。

通路の先に行けば行くほど騒がしくなっていた。

和也は気にせず歩いていると、話の基らしき人が同じ様に歩いてき
ていた。

それは20代位の女性であった。

ツヤツとした黒髪、顔の化粧は中々の物があり、大人の女性を思わ
せる顔つき。

180はある身長にしっかりと出る所の出た体つき。

それを更に強調する様なピッチとしたスーツは体の曲線がはつきりと判り、

わざわざ見せている様に大胆に胸の部分を開いている。

歩く度に見えるか見えないかの服と同じ様な黒のピッチとした短いスカート。

そのモデルの様な大人の魅力を醸し出す女性は成る程、箱入り状態の学園の生徒達には珍しいらしく、男達にとっては、常に成長しきっていない同年代近場の少女達を見るよりは新鮮さがある様だ。

そんな美しい女性を和也は見ることなくすれ違った。

女性も和也の白髪を物珍しげに一瞬見ただけで直ぐに目を戻した。

瞬間であつた。

和也の背中に妙な物が走つた。

過去に何度も覚えのある旋律、

和也が戦闘に命を掛け、相手もまた命を取りに来ている。

あの漆黒の少年との戦い前の様に。

それは命を奪つた事がある物のみに存在する感覚、

和也は振り向いた、女性は振り向いてはおらず、

和也の純白の眼に女性の後姿が映る。

その眼はいつものめんどくさそうに細めている眼ではなく、戦闘時の睨む状態と似ていた。

この女は危険だ、と脳内が認識する。

調べる必要があると脳内が命令する。

「……………すみません」

小さな声だが女性に聞こえる様にはつきりと和也は言った。

礼儀正しく呼び止めた声にはある種の敵対心が込められている。

女性はその声に反応したのか、振り向くと、和也に近づく。

ニツコリと笑うと女性は自分より背の低い和也に視線を合わせた。

その笑顔は普通の男性ならば眩暈がする程に美しかったが和也の表情は変わらない。

「何かな？僕？」

甘ったるい声で女性は和也に話しかける。

和也には完全に子供と見下している様に見えた。

「いえ……一瞬、血の匂いがしたので」

本当は血の匂い等しない、だが殺意持つものなら、この言葉だけで意味が判る筈である。

和也は注意深く女性の顔を見る、少しでも異変が在るか探るためだ。だが、女性の顔は変わらなかった。同じ様な笑顔のまま。

「わけわかんない事言って、私に近づく為の算段かな？もう、そんなんじゃ女の子は落ちないゾ」

「……」

勘違いか、そんな言葉が頭に浮かぶ。

和也は拍子抜けした様にいつもの顔に戻ると再び歩き出した。

「あ、待ってよお、」

女性は直ぐに歩き出した和也の横に引付くと和也の腕を取った。

女性は両手で腕を包んだ。

和也の腕に胸の柔らかい感触が当たる。

「君可愛いネ」ちよつと位なら、お・ち・か・づ・き・になってもいいよ？」

耳元で囁く甘ったるい声、普通の男性ならくらくらと来る誘惑だが、和也は少し感覚が違うようだ。

バツと腕を抜くと女性と距離を取ると一言、冷たく言い放つ。

「おばさんには興味無いんで」

それだけ言い残すとサッサと歩き出した。

後ろ側で女性は笑顔のまま固まった。

何人も男を落としてきたプライドが一気にズタズタにされた。

固まりが解けると女性は先程の美しい笑顔は消え去り和也が過ぎ去った通路を睨む。

「ガキがあ……」

ゾツとする様な声と共に、和也が感じた感覚があたりに揺らいた。

女性は誰にも聞こえない様に舌打ちをした。

その時、大きく開いた胸が揺れ、胸が更に前に出ると、カードの様な物が落ちた。

女性はそれを拾うとそのカードに軽くキスをして、再び胸の谷間へ収納する。

カードはトランプの1枚であった。

ハートのマークとKを示す剣を持つ王の絵。

それは何処にでもある。

トランプの、

ハートの、

キングのカードであった。

PM1:20

一年一組のクラス、いつもの様に窓側の真ん中の席で水音はポケー
つとしながら窓の外を見ていた。

昼休みを使ってグラウンドでサッカーをする自分と同じ様な学生達
が見える。

時折サッカーボールが妙な動きをするのは能力を使って遊んでいる
のかもしれない。

この学校は能力の規制をそこまでしている分けでも無く、喧嘩や傷
の元になる様な事に能力を使うと学校から処分を下される。

そんな少年達から目を上に向ける。

あまりにも青い晴天がそこにあった。

春ももう終わりなのかも知れない。

「良い天気……」

ボソツと一人事を漏らす。

「おばあちゃんか、あんたは」
後ろから声がした。

ゆつくりと振り向くとそこにはニコニコ顔の少女が居た。

黒髪ショートカットが良く似合う少女は美奈、水音の親友だ。

「若モンなんだから、空ばっか見てないの！」

美奈はそういうと笑っている顔を更に楽しそうに笑う。

美奈はこういう少女である。

活発でいつも笑っている。

何処にでもいる少女、能力者という事意外は。

「……」

そんな少女が一瞬、間を空けた、長い付き合いの水音としては結構珍しい事だと思った。

「ねえ美奈……」

水音は美奈とは昔からずっと親友だった。この学校で育った水音にとって、同じ様に小さい頃に入ってきた美奈は数少ない自分の過去を知る存在だ。

ん？という感じで美奈は水音を見る。

「突然命を狙われたらどうする？」

美奈は右手の人差し指をで顎を器用に支えて空を見る。

少し考えた後、嫌、考える素振りを見せた後、美奈は答えた。

「ぶっ飛ばす」

答えは考えずとも出てくる。

笑みを浮かべながら少女が口にしない様な言葉を吐いた。

水音は驚かずに、やっぱり……とため息を付く。

「なにになににー？もしかして襲われたのー？」

何か勘違いをしている。

「うーむ…和也もやるなあ……」

そこで水音の顔色が変わる。

「！、何で和也が出てくるのー！！」

「おやおやーん？そのリアクションは何かあったのかなーん？」

美奈は右手を口に当てて探るような目を向ける。

楽しんでいる。

「違うってー！！」

水音は遊ばれている事に気づかず、美奈に一生懸命反論していた。それを見て楽しそうにしている美奈。

何処までも平穏な日。

（楽しいなあ……）

美奈の目が細く細くなる。

（大切な私の平穏……）

グラウンドからサッカーをする学生たちの声が一際大きく上がった。美奈はいつもの笑顔のまま水音に向かって横に退くように手をヒラヒラと動かしした。

不思議そうにしながら水音は椅子から立ち上がり横に退いた。

水音が先ほどまで眺めていた大きく開いた窓がある。

その窓から見える青い空に一つの点が見えた。

点はどんどん大きくなっていく。

点はサッカーボールへと変わり、更に開いた窓へと近づく。

グラウンドの生徒の誰かが打ち上げたのだろう。それは運悪くこの教室へと向かっていている様だ。

美奈は近づいてくるサッカーボールをいつもの笑顔で見ている。

サッカーボールは一直線に窓の直ぐ近くにいる美奈へと向かった。

サッカーボールが水音が居た場所を通過し美奈の顔に当たる

直前。

パン！という音と共に、美奈の足もとに落ちた。

顔色変えず笑顔のまま自分の足もとを楽しそうに見た。

そこにへしゃげたサッカーボールが落ちていた。

「これは……？」

水音は直ぐに美奈が自分を助けたのだと解った。だが、結構な強度を持つサッカーボールが一瞬で割れたのが解らなかった。

美奈に当たる直前にヒュンツという音と共にサッカーボールと美奈の間に何か走ったのは見えた。

だがそれが何かは確認出来なかった。

美奈はもうボールでは無い物を窓からグラウンドに投げた。投げた後、美奈は水音に振り返りいつもの笑顔を見せる。

下の学生達の驚く声が聞こえた。

今の一瞬でありえないサッカーボールの形に驚愕している様だ。

(！！)

水音の背筋に寒気が走る。

平穏なはずのクラスで殺気が走った。

普通よりも鋭い感覚を持つ水音だが、誰が発したものかを感じる事ができなかった。

目の前に居る美奈はいつもの様に笑っている。

長年一緒にいる水音も気付かない程に美奈が殺気を押し殺したのに気づかない。

美奈は常に笑っている、それは逆に美奈の素顔を見ることがないという事だ。

(私の平穏を奪おうとした奴は絶対に許さない……)

美奈は笑顔の仮面を被り、心の奥底で怒りを燃やしていた。

自分の幸せを奪おうとした、水音を襲った男を忘れる気は無い。

P M 1 : 3 0 ・昼休みが終わるチャイムがした。

PM4:00・3時間半後の校門。

「サツサと行け、アホタレ」

和也の言葉に押され、怜次が校門の先へと入る。

「アホタレって何だよー！お前だってアホじゃねーか！」

怜次が不満そうに眉を顰^{ひそ}める

「…いいから早くきよ先生のところ行ってこい、貴様のせいで俺も学校に帰れなかったじゃないか」

学校は丁度終わってしまった様だ。

実質怜次は3時間以上掛る場所に居たのだ。

「アホー！アホー！」

恩知らずは遠くから怜次に子供の様な言葉を連呼していた。

「いいからさっさと行け！！」

和也が声を荒げた瞬間、怜次は猛ダッシュで学校内へと消えていった。

全く…っと、小さく洩らすと肩を落とした。

和也も後に続くように歩いた。

その時、誰もいないはずの学校前で声がした。

「あなた」

和也は何気なく振り帰った。

5メートル先程に長髪の少女が立っていた。

ワンピース姿にサンダルをはいている少し早い夏仕様

同じ年位だろうか、長い黒髪には所々はねたような部分もあるが、それが自然な姿であった。

奇麗な少女であつた。

「…何だ」

無愛想な返事を和也は返す。

「…」

少女は答えない。

和也はめんどくさそうに頭をかいてもう一度同じ言葉を言った。

「何だ」

少女は口を開いた。

「あなたは変わっている」

「…？」

和也の無表情の顔から片眉が動いた。

少女そんな和也を無視して口を動かす。

「この学校は能力者だけを集めた学校…範囲は幼稚園児から高校生」

「…それが何だって言うんだ」

和也の声が少し荒くなった。

意味のわからない事を言う見知らぬ少女に苛立ちを覚えた。

「能力者の力量はFからSに分けられ、その中でも危ない存在は別の場所へと分けている」

少女は和也の後ろの学校を指差した。

「この学校以外に中高合同の学校はまた遠い所に配置されている、広い土地ね…」

少女は親しい友人の様に和也に話しかけている。

滑らかに少女の話は進む。

「そして今あなたのいる学校はその中でも最も最弱に位置する学校、Sランク4人Aランク7人Bランク25人…後はC以下が殆ど」

和也がそこで妙な事に気づいた。

（…？何故そんな事が解る？）

現在、和也の学校のレベルが低いのは知っていたが全ての生徒達の

ランクを知っているのは教育者だけだった。

もし一人一人に聞いていたとすれば和也にもこの少女の事は知っているはずだ。

「でもあなたは違う」

少女の話は進む。

「全くの異例：あなた何者？」

その言葉で和也には何が言いたいのか解った。

「話はそれだけか？ 感知能力者、何処の所属かは知らないが…興味本位で調べたのなら痛い目を見る」

感知能力者ならば誰にも知られずランクを知る事が出来る。和也はそう考えた。

だが、

レベルの低い学校でも中高合せて相当の人数が居る学校を調べ上げたのはかなり凄い事ではあった。

和也は無表情のまま目だけ睨むように少女を見た。

「…」

そして話は済んだという様に少女に背を向けた。

「あなたみたいな例外は『作戦』に邪魔だから…」

先程までの声が突然耳元でした。

「！？」

「バイバイ」

再び耳元で声がする。5メートル程だった距離は今の一瞬で詰められていたのだ。

「っ！」

和也は振り向く事よりも瞬時にその場にしゃがみ込んだ。

ブォン！という空気を切る音が和也の首が合った場所を通った。

ツチ！と、逃げ切れなかった頭上の髪が数本散る。

しゃがみ込んだと同時に前のめりに和也は扱けた。

直ぐに立ち上がり後ろを振り返る。

そこに、

誰もいなかった。

「…な!？」

和也は直ぐに周りに警戒を張る。

だが何処にも先ほどの少女は居ない。

「バカな…」

音をたてず、一瞬で5メートル程の間合いを詰め、迷いのない攻撃。

「確実に首を狙ってやがったな…プロか？嫌…それよりも消えた？

この短時間で？」

あたりは何もなかったように静まり返っている。

「クソ…」

和也は苛立ちからか、頭をガリガリとかくと、再び学校へと歩き出した。

その後ろ姿を見送る先ほどの少女には最早気付かなかった。

手には先程までは持っていなかった、穂先が三つに分かれている三叉槍、基トライデントと呼ばれる2メートル程の槍。

「…良い反射神経…それとも体が覚えている本能か…どちらにせよ…一筋縄では行かない…か」

少女の独り言は誰が聞くでもなく、風に流される。

風の去る後に、少女は再び消えていた。

そんな事を知らない和也は校舎内に足を踏み入れたところであつた。

P M 4 : 1 0

空は夕日へと近づいていた。

「失礼しやしたー」

鉄のドアが横に開くと怜次が出てきた。

ドアの上に『職員室』とハッキリとした文字で書いてあった。

怜次は回りを見渡す。

学校は既に薄暗く、外の明かりで照らされているだけだ。

廊下の奥は暗闇で見えず、何処までも続いているようで気持ち悪く見えた。

「遅い」

出てきた怜次に冷たい一言が降りかかる。

和也が壁にもたれて怜次を真正面から見ていた。

「んだよ…また待ってたのかよ」

怜次はバツが悪そうに頭をかく。

いつもの事は予想できていた。

「私もね」

水音が怜次の視界に横からヒュツと現れた。

怜次はいつもの笑みを見せて謝罪と礼を言った。

「わーりい！そしてサンキュー」

フン、と和也はそっぽを向く。

水音は満足した様に怜次と同じ様に笑顔を向ける。

「あら？まだ居たの？」

怜次が出てきて直ぐにきよ先生も職員室から出てきた。

「このバカ待ってたんで」

「てんめ！バカってなんだよ！バカって！」

怜次が和也の言葉に即座に反応する。

「ふーん？早く帰りなさいよー」

きよ先生はそれだけ言って、直ぐに暗い廊下へと姿を消していった。
「？」

その姿を見送りながら水音は首を傾げた。

「そんじゃー！俺らもかえつかー！」

そう言っていると怜次は歩き出した。

それに続こうとしたが和也は足を止めた。

振り返ると水音が今もきよ先生が消えていった暗い廊下を見ていた。

「……水音？」

和也の声に水音が振り返る。

その顔は困惑を示していた。

「ううん…何でもない」

水音の顔はいつもの顔に直ぐに戻った。

（…先生？）

水音にはきよ先生がいつもと少し違う様に見えた。

「…水音」

違和感に気づいた和也は無表情で水音を見つめる。

「お前は感覚が鋭すぎる…集中せずとも見える筈のないものが見えたりする、何を見たかは知らんが…深読みはしない方がいい、相談に乗れる事があれば聞いておくが？」

「…うん」

和也なりの優しさだと言う事は解った。

だが、この『感覚』を口にするには言葉が見つからなかった。

「お前…」

和也の言葉が一瞬鋭くなった気がした。
「？」

「嫌：何でもない」

和也の無表情が厳しい顔へと変わった。

「おーい！おっせーぞおめーら！」

暗い廊下のギリギリ見える位置で怜次が手を振っていた。

「行くぞ」

それだけ言うと和也は歩き出した。

（水音の感覚がかなりの物なのは知っていたが：まさか『人の感覚』読み取ったのか？殺気とは違う人間の中の『流れ』：それを無意識に読み取ったのであれば……）

人の感覚、つまり人の思いや感情、大雑把に言えば何を考えているか、

そついう思いや感情は感覚として周りに広がる。

例えるなら、沢山の人が一つの所に閉じ込められれば『不安が広がっていく』これが『流れ』と呼ばれるもの。

『殺気』とはまた違う、簡単に読み取れるものではない。

殺気等はある程度の訓練や実践を持つ者ならば簡単に感じられる。

だが人の自然に持つ『流れ』は感じにくい。

これを読み取ることができれば、考えていることを知ることは出来なくても、自分にとって悪い事を考えている、良い事を考えている等の事を知ることができる。

だが、もしこの様な力を無意識に行えば、永遠に人の感覚を聞いていなければならない。

いうなれば人の居るところでは不安や恐怖や喜び、悲しみ、等を聞き続けることになる。

それはいわゆる愚痴や自慢を聞き続け、しまいには頭が壊れるか、心が壊れるかの状況に追い込まれる。

そして水音の鋭い感覚は意識的では無く、無意識的に放たれている。

（まさか：な）

だが、そんな人間はいるわけがない。
それにもしそудとしたら水音はとつくにおかしくなっているはずだ。

「何…たの？」

考え込んでいた和也は突然掛けられた言葉をしっかりと聞き取れなかった。

水音が覗き込むように隣を歩く和也の顔を見た。

とつさに和也は2・3歩後ろに飛んだ。

「…いつからいた」

和也の顔が少し赤い。

いつもの無表情がひきつっている。

「行くぞって言ったの和也だけど？」

水音が不思議そうに首を傾げる。

「そ…そうか」

水音の顔を見ない様に上を向く。

「？、さき言ってるね」

それだけ言つと水音は怜次の方に先に歩きだした。

「…まったく」

呆れた様に先に歩く水音に続く。

突然話し掛けられると、焦ってしまうのは未だに治らない。

（あいつ何言つたんだ？）

水音が突然話し掛けた言葉が気になった。

どうという分ではないが、何となく気になった。

というより馬鹿な事を考えない様に別の事を考えたかった。

（何、と最後の、たの？は聞こえたんだが…）

水音を疑う様なことをとつさに考えてしまった自分が嫌だった。

（なに…を……たの？何だっけな）

少し先には水音の後ろ姿があった。

赤髪のツインテールが歩くたびに揺れている。

（なに…を…かん…たの？）

もう少しで出てきそうだ。

（なにをかんがえてたの？そうだ、そう言ったんだ）

思い出した後に、和也の顔色が変わった。

慌ててその言葉を小さな声で口ずさむ。

何を考えてたの？

「！？、俺は何も言っていないはず…」

偶然かもしれない、考え過ぎかもしれない。

だがあの時に自分が考えている素振りをしたつもりは無かった。

水音が振り返って和也に笑いかけた。

「早く行こ？和也」

変わらない一日、小さな異変が少しあっただけ、何も変わらない一日
3人はいつもの様に帰路へと向かった。

P M 5 : 0 0

空は既に赤く赤く、一日の終わりは近い。

第11話 変わらない日々に小さな異変が交差する - 完 -

第11話 平穏な日々に変化が交差する（後書き）

早く出ると言いながらこの空きの長さ…

やはり部活との両立の難しさに頭を抱える日々です。

久しぶりの11話目、この話は前の話と続いています。

まだもう一回続きそうですこの調子だと…

今度はもっと早く出さなきゃ…

ちなみにこの話に出たトライデントとは槍の切っ先に3つの刃が付いていると思えばいいでしょう。

両端は短く、真ん中の刃が長い。

戦い方では両端の短い刃で相手の武器を捉える事が出来たり。避けたと思わせて両端の刃で仕留めたりと中々便利な武器です。

この武器の使い方には両端の刃のどちらかと真ん中の刃で首を捉え首を切りやすくする武器でもあります。

それと人間の『感覚』と『流れ』の話が出ました。

これはちよつと難しいのですが不安が伝染する等、実際に感覚や流れというものがあります。

実際、微妙な表情の変わり方や態度で人の感覚というのは意外に読みやすいものです。

ですが、自分でも出しているつもりのない不安などは無意識的に出るものなので、これを知る事は難しいでしょう。

人間のこういう性質は完全に解析出来ているわけではないそうです。

こんなもんでしょうか、それではお付き合いありがとうございます。ごめいました。

また次回、【ここにあった文字は消させてもらいます、私の不手

際により題名を間違えました、真に申し訳なく存じます】でお願い
します。

第12話 学校占領！！危機襲来！！（前書き）

平穏であるはずだったこの世界で何度も小さな異変が存在した。
その存在は知らず知らず大きく膨らんでいった。

もう、止まらない。

危機は近い。

敵は目の前だ。

第12話 学校占領！！危機襲来！！

0：00 新しい日が始まる。

まだ外は暗い、そんな深夜。

暗い部屋に長方形の机、そして六つの椅子。

全員の顔は暗さでわからず、薄っすらと照らす光は机の真ん中にある1本の蝋燭。

左端の上からダイヤ、ハート、黒のジョーカー。

右端の上からクローバー、白のジョーカー、クラブ。

トランプを治める6人のリーダー。

その6人のうち、ジョーカーの2人組以外の4人の後ろには11人ずつの部下。

合計54名のメンバー、それが能力者による犯罪組織、別名『トランプ』。

そしてその54名をまとめているのがクローバーのキング。

クローバーのキングはいつもの様に冷静な声を放つ。

「今回の作戦のキーはハートのキング、」

「はぁーい」

ハートが元気良く手を上げた。

クラブの舌打ちをする声が出た。

それを無視してスペードが話を進める。

「白のジョーカー」

白のジョーカーはハートとは違い何の反応も見せない。

「そしてハートのクイーン」

その言葉にクラブの目の色が変わった。

ガタン！と椅子が倒れる音が暗い密室で響き渡った。

「何故ハートの部下が作戦の主力に入っている！」
同じ様に声も響き渡る。

クラブのキングが声を荒げてスペードを睨でいた。
「特別な能力を持つているからです」

スペードはあくまで冷静に声を発する。

「だからといってハートの部下を！」

クラブが食い下がる。

フウ…と呆れた様に小さくため息をついた。

「…あなたは自己意識が高すぎます」

「その何が悪い！！」

クラブの中で何かが弾けた。

自己中心的なその性格が災いした。

自分以外の人間が優位に立つことが許せない男だ。

「大体スペード！貴様がこの組織を指揮している事、事態気に食わないんだ！」

スペードの後ろで待機しているスペードの部下の一人が一步前に出た。

その顔にはうつすらと怒りが宿っている。

その部下をキングが右手を出して征した。

クラブのキングを一瞥してから渋々という具合に部下は元の位置へと下がった。

「この中で最も力の強い者がまとめればいい！それは誰だ！？この俺だ！！」

クラブのキングは叫び続ける。

6人のリーダー達は微動だにしていなかったが、黒のジョーカー、基、夕菜の眉が少し上がった。

プライドの高い夕菜にはイラつく一言であった。

「俺が最強だ！！誰も逆らうな！！」

そう叫んだ瞬間、スペードのキングの目が本当に、寂しそうに目を

細めた。

「そうですか…残念です」

そう言うのと右手をゆっくりと上げていく。

だが右手を上げきる前に、それは起こった。

「ッガ！」

クラブのKが声を上げて倒れたのだ。

「？」

スピードのキングが何かしたわけではない。

「いやゝすみませんね、ウチのリーダーが」

クラブの後ろに並んでいた一人がお気楽な声を上げた。

スピードのキングが上げていた右手を下しながら声の主を見つめた。

「クラブのクイーン…」

そう呼ばれた男はヘラヘラと笑いながら頭をかいている。

「嫌、スピードのキングの手をわずらわせるわけにはいかんでしょ、
身内は身内で片付けますんで」

「…」

「…」

瞬時、目が交差する。

スピードのクイーンの額に薄らと汗が浮かんだ。

「いいでしょう…」

その言葉と共にホツとした顔を浮かべた。

（た…助かった…）

本来クイーンがキングに声を掛ける事は無い。

それは権力上の事では無く、殺される恐怖で声を掛ける事はない。

それ程、キングとクイーンの実力差は大きい。

だが不意打ちとはいえ、キングを気絶させたこの男、クラブのクイ

ーンは結構の実力者の様だ。

「ただし、クラブのクイーンには今回の作戦に参加してもらいます」

「えゝ！？」

スピードのキングはツフと片頬を小さく上げた。

（自分のリーダーを守る為に我が身を呈したその意志の高さ、いいモノ（心）を持っている…）

（うあつちゃゝ…いらん事しちゃったよ）

クラブのクイーンは深くため息を付いた。

「それでは再び作戦の確認を行います」

何も無かったように作戦の話へと戻った。

気絶したクラブのキングは何人かが運んで行っていた。

明るい朝日が目に染みる登下校の朝。

「眠い…」

沢山の登下校者の中に和也達の姿があった。

頭から血を流しながら何度も目を擦っているのは和也、その右に呆れた表情の水音、

そして2人よりも前に歩き、明後日の方向を見ている怜次だ。

「和也……いい加減普通に登校しようよ」

「…………朝の眠気に慣れる事は無い」

「違うよ、眠気だったら私にもあるよ何で毎度事故るの！」

和也が首を傾げる。同時に頭から血が垂れる。

「変か？」

「変だよ！」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

軽いやり取りの後、水音と和也はゆつくりと、ある人物を見た。

この一連の動作に参加していない者だ。

「ねえ、怜次君どうしちゃったの？」

「わからん・・・・昨日帰ってから、ずっと何か考えていた様だったが、朝起きた時からあんな調子だった」

2人はひそひそと話し合う。

怜次がおかしい。

朝起きて現在の通学路までずっと怜次は呆^{ほう}けている、というより惚^{ほう}けているという感じだ。

「・・・・・・・・怜次君？」

まず前に居る怜次に声を掛けたのは水音だった。

明後日を向いていた怜次が水音の方を振り向いた。

怜次は口の端が釣り上がって、気持ち悪い笑みを浮かべていた。

まず水音がその笑顔を見て引いた。

「何かな？」

「い・・・・いや、怜次君がいつまでたってもつつこみ入れないから・・・・」

怜次は笑顔のまま、

「それはすまないことをしたね」

「怜次君、そこはいつもだったら『いつから俺つつこみ役!?!』とかじゃないの？」

「嫌、そこは『つつこみ役って何だよ!』だろ」
和也が軽い訂正を入れた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

2人で怜次の反応を見る。

怜次は気持ち悪い笑みを浮かべたまま

「ソデスネー」

（しゃべり方が違うね！？）

（やる気無エ！）

水音と和也が同時に頭の中でつつこんだ。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

何となく寂しい2人であった。

ペンポコパコペンパーン

気の抜けたチャイムの様な物が校舎に響き渡った。

学校の連絡の時のみ流れるこのチャイムは妙に耳から離れない。

「・・・毎度思うがこのチャイムはどうにかならんのか？」

このふざけたチャイムが和也はどうも苦手だ。

「いつもの校内放送は普通なんだけどね、己区内さんが生徒連絡にこの音楽を指定したんだよ」

水音のあまり関係のない説明を聞く和也が呆れたように目を細めた。

（己区内の野郎…）

『エーチエックチエックー』

気の抜けた声が学校中に響き渡った。

『特別教師用書類室、及び情報探索室の入室、接近を禁止する』
「そんな部屋あるのか？」

呆けている怜次を無視して水音の方を向く。

「うん、和也はまだ来て間もない（というより和也が覚えenいただけ）から知らないかもしれないけど、この学校無駄に部屋多いからね」
校内放送はまだ続く。

『きよ先生いらっしやいませんか？』

間の抜けた声から綺麗な女性の声へと変わっていた。

『きよ先生、いらっしやったらすぐに職員室に来てください』

「……………」

「こんな朝から呼ばれているのか」

（そうだよな、朝から呼ぶ事なんてあんま無いよね、まだ来てないかも知らないし……そんなに大事な用事？）

和也の何気ない一言が水音には引つ掛かった。

（あれ？昨日最後に見たきよ先生が向かった先って特別教師用書類室と情報探索室がある方向だったけ？関係あるのかな？）

昨日、帰る一步手前で暗い廊下を歩いて行ったきよ先生の表情はいつもと違う気がした。

考え込む水音の頭にポンつと手が置かれた。

「和也？」

水音が顔を上げて和也を見上げた。

「何を考え込んでいたが知らんが、その考え込む癖はやめておいた方がいい……………」

「何で？」

見上げたまま首を傾げる。

「戦闘中等で無駄な思考は怪我に繋がるぞ、前の依頼でも危なかったじゃないか」

少し考える素振りを見せてから、水音を首を傾げた。

「心配してくれてる？」

そう言った瞬間、和也が顔を背けた。

「ち、違う…戦闘の時に足手まといになられては困るわけだな・・
」

「本当？ねえ、何か珍しいね」

水音が和也の顔を覗き込もうと回り込む。

同時に和也は慌てて顔を背ける。

「ねー、本当？本当ー？」

再び水音が回り込む。

和也が背ける。

二人でグルグルグルグルと通学路の道で回っている。

二人は気づいていないが、周りの同じ様な通学路を歩く学生達から
黒いオーラが漏れていた。

（このバカップルめ・・・）

そんな様子を更に気にしていない怜次はにやけながら「そうだよ・
・・これが恋だよ・・・」と独り言を漏らしていた。

時は過ぎ、1時間目の水音のクラス。

教室の端、水音は今日も空を見る。

授業は進んでいるが、それでも空を見る。

いつもはこんな状態でも耳に入る先生の声は今日は全く聞こえない。

（…何だろコレ）

冷静に見える水音だが、冷や汗だけは止まらない。

「寒気が…止まらない…」

異変は学校の校舎に入ってから始まった。

最初は気に留めるほどではなかった。

だが現在では、吐き気さえする。

いつもの教室とは違う空気があった。

まるで別の世界に入った様な。

（駄目…）

そう思った瞬間、震える手を上げた。

「先生、気分が優れないので…保健室に行ってきます」

教師は最初は難しい顔をしたが、軽く頷いて再び授業を始めた。

ふらつく足取りでドアへと向かう途中、美奈と目が合った。

珍しく笑顔では無く、心配そうな顔つきをしていたが、直ぐにいつもの笑顔で笑い掛けて来た。

水音も力無く笑い返したが、笑った様に見えたかは定かではない。

同時刻、別のクラス。

「…であるからしてー能力者の歴史は長い様で短く…その歴史の中で多くの英雄による能力者と犯罪による能力者が勃発しているわけでー、これが現在の能力者たちの問題にもなっているわけである」
机と机の間をゆっくりと歩く若い教師の言葉は子守唄の様に一部の生徒達を洗脳する。

「眠い…」

その中の一人に和也の姿があった。

目が開いたり閉じたり、頭がグワングワンと揺れているのは和也もある程度抵抗している様だ。

（こいつって……）

和也の席より3つ分程席の離れた位置に今井が呆れた様に和也を見ていた。

現在は3時間目、相変わらずの変わらない毎日。

今井の目は和也の隣に移る。

そこに居る怜次は頼杖を付いて和也を通り越して窓の外を眺めている。

時々思い出したように、ニヘラァ〜と笑うこの男は周りから見ればかなり気持ち悪い。

突然和也の方からドギヤァン！というすざまじい音が響いた。

静かなクラスで突然の音に全員がそっちを向いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

和也が机に突っ伏して煙を上げていた。

「zzzz」

小さな寝息が聞こえる。

限界だった様だ。

思いつきりぶつけたせいか、机一面に血が広がっている。

それに気付いていない隣の怜次は今も空を眺めている。

再び気持ち悪い笑みを浮かべた。

（こいつら……）

再び今井は呆れた顔を浮かべた。

その今井の前の席のさなぎがいつもの様に楽しそうに笑っていた。

「あいつらメツチャアホやー」

先程まで教科書を読んでいた教師は溜息をつくと低い声を漏らした。

「今井ーその馬鹿を保健室につれてけ」

教師の低い声は今井を志願した。

「ハ！？」

今井がガタン！と音を立てて立ち上がる。

「何で俺が！？」

教科書を教壇の上に置いて教師は再び低い声を上げる。

「今井は保険委員だろ？そいつ血出してんじゃん」

そう言って教師は和也を指差す。

「いつもの事じゃん！先生、和也の事めんどいだけでしょが！」

「エー、シラナイ」

教師が両耳を塞いで教壇をグルグルと回っている。

この教師、きよ先生の次あたりにめんどくさがりである。

この学校は生徒のアホ率と対比して同じ位のアホが教師の中にも存在する。

しかし、そういう教師のほうが以外に好かれているのもこの学校の良い所かも知れない。

「…！」

「………！」

10分程の言い合いの後、

和也を担いだ今井が教室のドアを開けた。

その表情はかなり嫌そうである。

「イツテラツシャーイ」

後ろでとてもいい笑顔で教師は白いハンカチを振っていた。

「うるっさい！」

今井が力いっぱいドアを閉めて敵意を示す。

「重たい……」

ダラダラと流れる和也の血は今井の背中を真っ赤に染めていた。

その生暖かさにブルツと寒気が走ったが、大きなため息の後、またよたと歩き出した。

「やっと……ゼエ……着いた……」

息荒げに今井は保健室の前に辿り着いた。

背中に背負われた和也は、

「うむ、くろろ」

そう言つと今井の背中からシュタツと降りた。
血はもう止まつていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・お前いつから起きてた」
今井の睨む様な視線。

「教室を出たあたりから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・おい！」

今井が軽く突つ込む。

「いいから行くぞ」

そう行つて、和也は保健室のドアを開けた。

「なーんでそこまで付きあわなきゃ・・・・・・・・？」

文句を言っている所で疑問に気づいた。

和也がドアを開けたまま固まっている。

「どうし・・・・・・・・」

た？と言いつ切る前にすざまじい声が響き渡つた。

「イヤアー・・・・・・・・・・・・・・・・！！！」

甲高い女性の声と共に和也の顔面に時計が飛んできた（あのジリジリ鳴る奴）。

顔面に減り込む、ゴホア！という和也の呻き声も続かない。

次に何かの薬品と思われるビン、それも顔面に当たり血が飛ぶ。

次に・・・・・・・・（以下略）

最後に巨大な氷が和也にぶち当たつた。

今井が、あ、死んだな、と思つた瞬間でもあつた。

結構冷静である。

「和也のバーカー！」

その言葉と共にドアがピシャツと閉まる。

その声で中にいる先客が誰か理解した。

水音だ。

「・・・・・・・・」

一瞬の沈黙の後、今井は和也に近づく。

「何があつた……？」

巨大な氷の下から苦しそうな声が聞こえた。

「み……水音の……着替えシーン」

「……」

再び沈黙。

「……ツチ」

今井が軽く舌打ち。

「おい……今の舌打ちは何だ」

和也が今井の方を睨んだ。

今井、男として忠実な生き物。

（カメラ持ってきときや良かった……高く売れるしなあ……嫌、むしろ自分のこの目に収められなかったのが残念だな……嫌々今からでも開けりゃ（ドア）見られるだろうか、でもまあは（和也の状態）なりたくないしなァ、和也が犠牲になってる間に見ときや良かった……） 舌打ちの理由

「和也……」

「何だよ」

大量の瓦礫と氷から和也が這い上がって来る。

「もう一回ドア開けるきない？」

数分前

「あれ？先生居ないのかな？」

保健室には教師の姿は見当たらなかった。

「ウエ……汗で体気持ち悪い」

水音は冷や汗で汗だくになっていた。

（んゝ、まだ気分悪いけど先に服換えといたほうがいいかな）

保健室には換えの制服が結構置いてあり、汚れたりするとよく生徒は借りに来る。

「よししょ」

オッサンみたいな掛け声と共に上着を思いっきり脱ぐ。

（さっきほどじゃないけど、まだ寒気は酷いなあ……風邪かな？）

「……、……！」

ドアの前で声がした。

（先生かな？）

保険の教師は女性なので服を脱ぐ行動は止めない。

スカートに手を掛けた瞬間、ドアが開いた。

「………」

「………」

ドアに立っていたのは、良く寮で見ている白髪頭の和也だった。

水音は完全に硬直していた。

現在水音は下着のみ、手に掛けているスカートは脱ごうとしている形で太ももの所で止まっている。

つまり上も下も見えている状態。

和也も硬直している。

前回、着替え中を見たときは水音はツインテールのままであった。だが現在はツインテールの紐も外している。

お忘れの方もいるだろうが、和也は水音のストレートヘアが苦手なのだ。

和也の顔が真っ赤になっていくと共に、水音の口が「イ」の形になる。

和也は未だ硬直 or 赤面、水音はシヨツク or 赤面。

「イヤァー――――！！！」

叫び声と共に片っ端から周りのものを投げまくる。

ゴホア！とか聞こえたが気にしない。

怒りとシヨツクで能力が漏れる。

周りに冷たい冷気と水気が増す。

強すぎる能力が無意識に氷を作り出したのだ。

そして巨大に出来た氷は猛スピードで和也に衝突。

確認せずに思いっきりドアを閉めた。

ゼーゼー！と、荒い息を立てている自分を必死に落착けようとしていた。

自分の胸に手を当てて精神集中、再び新しい制服へと手を伸ばした。

ペンポコパコペンパーン

制服の袖に腕を通した瞬間、朝で鳴った校内放送が鳴り響いた。

（あれ？今授業中だよな？）

授業中に校内放送が鳴る事は滅多に無い。

緊急放送の場合はこんな緊張感の無い音は鳴らない。

和也達が出て行った後、

1 - 2 のクラス。

パチコーンと景気の良い音がしていた。

「いい加減こっち向け、うすら馬鹿」

教師の放った白チョークが怜次の額に直撃していた。

授業中に、にやけ面で窓の外を眺めている怜次に教師は、そろそろ

イラつきを覚えた。

「ったくよく、こつちも仕事何だからよ」

そう言つて授業に戻るうとした、が

再び怜次が目に入ると、先程と全く変わらず明後日の方向をにやけ面のままであつた。

「・・・いい度胸だ」

そう言うと思いつき腕を振りぬいた。

怜次の額に何か当たると共にパツと粉が舞い、怜次の顔面が後ろに仰け反つた。

クラスが、『またか・・・』とため息を付く。

この教師の授業では必ず誰かが被害に合う。

その名も誰が名づけたか【高速！消失！粉雪スーパーチヨーク！！】その名の通り高速でチヨークをブン投げる。

相手の額に当たつた瞬間あまりにもの威力にチヨークは粉碎、粉の様に散ることからこの名がつけられた。

前回は和也、その前は直人、常に誰かが被害に会う。

被害に会つたものはあまりにもの威力に脳震盪、額が割れる等等。ちなみに怜次はこれの常連。

過去にチヨークが粉碎せず額に刺さつた伝説を持つ。

その被害者達を無視して授業を進めるのがいつもの授業風景だ。だが、今回の怜次は違つた。

気絶するどころか、再びにやけていた。

その光景にクラスの生徒達はザワザワと騒いでいた。

「生きているだど!?」（注：生徒）

「ニユータ プか!?」（注：生徒）

「お前ら微妙におかしいぞ!」（普：生徒）

そんな中で一番混乱しているのは教師自身であつた。

（そんなバカな！俺の高速！消（中略）を食らつて倒れないだど！

？)

今まで沢山の生徒達を机に沈めた(注：暴力はいけません)プライドは、へらへらと笑っている怜次にスタスタにされた。

「う・・・うおおお！！」

雄叫びと共に再びチョークをぶん投げた。

今度は一発ではない。

何本ものチョークが怜次に当たり粉碎と共に粉雪を散らす。

本来なら一発でも気絶する威力を何発も食らっているが怜次は今もへらへらと笑っている。

それを見た教師はヒートアップ。

呆けていた生徒達はツハと我に返った。

一人の男子生徒が慌てた声を出した。

「ちょ！先生！！それ以上やったら死ぬって！」

男なのに力チューシエをはめて黒髪をオールバックにしている少年の名は正人。

だがテンション上げ上げの教師の耳には届いていない。

「君が！倒れるまで！投げるのを！やめない！」

妙な叫び声と共に更に投げるスピードを上げる。

「先生！そのネタは解り難いですー」

一人の女子生徒が妙な所に突っ込みを入れた。

のんびりとした声を上げた少女は眼鏡を掛け、少し青の入った長い髪の大んびた少女。

だがこの声も、ばりばりの教師には聞こえなかった。

その少女の後ろの席でため息らしき物が聞こえた。

「須美ー、そがん事言わんでええべさ、関わつとーたらいらん事巻き込まれるえ」

頬杖を付いている少女は緑色の髪を後ろに縛ってポニーテールにしている。

先程の少女とは正反対に背が低く幼い容姿をしていた。

須美と呼ばれた大人びた少女は、妙に訛りが深い喋り方をする少女の方を振り向いた。

「でもー鹿波^{かなみ}ー」

鹿波と呼ばれた少女は再び大きなため息を付いた。

「アホはアホに任しといた方がええきに」

その言葉通りに一人の生徒が勢いよく立ちあがった。

「先生！！教師が生徒に暴行を加えるとはどういう事ですか！！！」

巨大なグルグル眼鏡を掛けたこの少年は周りから『いいんちょ』と呼ばれ、性格がとにかく固い。

その大声で教師はピタツと止まった。

「うるせー！ダメガネ！最初に出てきたのに結構忘れられてるクセに喚くなボケエ！」

「な！？先生なんか初登場じゃないですか！！」

「俺はこれからなんだよコノヤロー！死ね！！」

世界広しといえどここまで暴言を吐く教師も珍しい。

「お前が死ね！！」

負けずにいいんちょが言い返す。

「お前がもつと死ね！！」

教師も睨みながら言い返す。

その2人のやり取りを見ていた一人の男子生徒が呆れたようにフルフルと首を振っていた。

黒いサングラスをかけた茶髪の少年はカンペの様なものを出すと何かを書き出した。

それを机に立てると、そのカンペには綺麗な字で『ボキヤブラリー

貧相 子供』と、書いてあった。

「何だところ！」

「待ちたまえ！金井^{かない}君！！それは僕にも言っているのかい！？」

素早く2人は金井と言われた少年に反応した。

金井はもう一度首をフルフルと振ると、再びカンペに何か書き出した。

そこには唯一言『五月蠅い（うるさい）』とだけ書いてあった。
ここで更に騒がしくなるという所で、スピーカーが鳴った。

ペンポコパコペンパーン

力の抜ける音が鳴り響きクラスの生徒達が頭を傾けたと同時に耳をかたむけた。

（授業中に学校連絡？、緊急連絡ならわかるが・・・）
教師も生徒達と同じ様に首を傾げて耳をかたむけた。

）
流れたのは昔なつかしの子守唄。

「子守唄？」
全員が再び首を傾げた。

そして何人かが含み笑いをした、誰かの悪戯だと思ったからだ。
「ったく、誰の悪戯だ？ちよつと行つてくつから自習しといてくれ」
そう言つて悪戯をした生徒にお灸を据える為に教師は歩き出した。
横式のドアに手を掛け、横に引こうとした。

びくともしない。

「？」

不思議に思いもう一度強く引く。
開かない。

生徒の何人かが不思議そうに見ていた。
そこで流れていた子守唄が止まった。
そして、少し間が空くと、人の声がスピーカーから流れた。

『籠り（こもり）なる者には子守り（こもり）を聞かしたし、それ

は心に聴かしたし、そしてそれはそれは夢送りに効かしたし……
男とも女とも取れない、あまりにも綺麗な声が歌うように言葉を紡ぐ。

『籠り（こもり）なる者には子守り（こもり）を聞かしたし、それは心に聴かしたし、そしてそれはそれは夢送りに効かしたし……』

その声は何度も何度も繰り返されていた。

しかし、飽きる事は無く、ただただ聞いていたい。

そんな気持ちにさせた。

クラスの生徒達は怜次を含み、その声に聞き惚れていた。

その時、教師のみ顔を青ざめさせていた。

「お前ら！！！耳塞げ！！！この声を聞くな！！！」
教師の叫び声に誰も反応する事は無かった、全員がトロンとした目でみるみる内に目蓋を閉じていく。

一人、また一人と机に突っ伏していった。

突然襲った睡魔に抗うわけでもなく、唯流れに反る様に眠っていった。

「つくつそが！！！」

教師一人は必死に耳を塞いでスピーカーから流れる声を遮ろうとしていた。

だが、それでも声は流れ続けていた。

教師にも睡魔が襲ってくる。

耳を塞いでも全てを塞ぎきる事は出来なかった。

「何……で、こいつが！！！」

必死に歯を食いしばる。

その時後ろから声がした。

若々しい声が教師の耳に響く。

「無駄つすよ、『言霊』に抗えば頭が狂いますよ」

振り向いた先に居た男は右手にバスタードソードという名を持つ大きな目の両刃の剣を地面に刺してそれに全体重を預けた形になっていた。

た。

茶色に染めた髪に首から提げた銀色の口ザリオ、手首に巻いた金色のリング、そして今時風の若者の格好。

「んだ・・・テメエ」

教師は明らかに敵意をむき出し男を睨む。

男は格好には似合わず、教師に対して礼儀正しい喋り方で接している。

「この学校乗っ取りに来ました」

そついうと男はにやつと笑った。

「乗っ取る・・・だあ？テメエここが何処か解ってるのか？」

睡魔に襲われながらも教師から殺気が放たれる。

「そう簡単に行かないのは解ってるっすよ、だから、生徒や教師を眠らせてからゆっくりっつー戦法」

教師はギリツと歯を食いしばり、机に手を伸ばし立ち上がろうとする。

「ま、生徒はともかく教師はこうやって、ちゃんと眠ってるか見に来なきゃ駄目だけどさ」

男はめんどくさそうに、おおげさに頭を掻く素振りを見せた。

「なめんじゃー！」

教師が叫ぼうとしたが、そこに男が冷静な声で割って入ってくる。

「なめちやいないさ」

男が豹変した。

その姿に一瞬、教師の方がたじろいだ。

（なんっつー目しやがる・・・！）

男の黒い目は獣の様に光る。

「この学校の教師は過去に請負人、しかも超一流だった人間が多い」
男が教師を一瞥する。

「あんたもね、元請負人Aランク、別名『クラッシャー（破壊神）』
破壊神とまで言われた男が丸くなったものですね」

破壊神と呼ばれた男はそこで不敵な笑みを浮かべた。

「ククククク……ガキが……くっちゃべってる暇あったらサッサと済ませたら良いものを」
そういうと睡魔の襲う中、最後の力を振り絞り、教壇の後ろへと手を伸ばした。

ビービービー！

教壇の後ろには赤い警報装置が設置されていた。
これを知るのは教師のみ、もしものの為の装置であった。

警報の様な激しい音がクラス中に響いた。

「じゃあな……寝させてもらっぜ、ウチのガキ（生徒）共には手を出させねえ」

それだけ言つと教師は、固い地面へと倒れた。
それを確認すると男は小さくため息を付いた。

「カツコイイねえ……」

警報の激しい音は今も鳴っている。

同時に放送から流れる声は止まった。そして間が空くと、再び声が流れた。

『凶器持つ物に狂気を、心は芯に狂喜せよ』

『~~~~~』

スピーカーから流れたのは昔懐かしの子守唄。
水音も聞いたことがある様な気がするリズム。

（授業中に子守唄……誰かの悪戯かな？）

特に気に留めていない。

そう思いながらスカートを上げてホックを止める。
着替えはこれで終了。

そこであることに気づいた。

（あれ？寒気が消えた？）

先程まで襲っていた寒気がスッと消えていた。不思議に思いながらも再びドアに手を掛けた。

ガラツとドアを開けた先には、和也が今井の胸倉を掴んで持ち上げている姿があった。

見事に浮いていた。

「…嫌、何やってんの？」

水音が当然の疑問をぶつけた。

「や、ちよつとヤキ入れとこうと」

無表情に見えながらも何となく怒っている気がした。

「ぐふっ…ドア開けてって言っただけじゃん…」

口から血を吐きながら空中でプラプラと揺れていた。

「それよりこの子守唄何？授業中だよね？」

水音の疑問に今井と和也は同時に首を傾げた。

「「さあ？」」

（ま、そりゃそうだよな）

2人に疑問を言った所で解決するとは当然思っていなかった。だが子守唄は突然止まった。

そして再び放送は流れだした。

『籠り（こもり）なる者には子守り（こもり）を聞かしたし、それは心に聴かしたし、そしてそれはそれは夢送りに効かしたし…』

それを聞いた3人のうち、まず水音が首を傾げた。

「何これ？」

そう言つと水音は今井と和也を見た。

放送が何度も繰り返されている、妙に放送が耳に付く。

2人は先程とはうってかわり目を交差させた。

「こりゃー・・・」

今井の言葉と共に和也がコクンと頷く。

「でも・・・なんで？」

今井が考え込む様に、腕組みをした。

「ちょ、ちよつと！2人で勝手に納得しないでよ」

「取り合えず、教師に連絡した方がいい」

水音、完全にスル！。

「ちょ・・・ちよつと」

「ああ、こりゃ緊急事態だ」

再びスル！

「・・・いいもん、いいもん・・・」

三角座りでズーンという具合に顔に影がかかっている。

「・・・冗談だ」

そう言つて、ポンツと水音の肩に手を置く和也。

「酷いよ和也！！凍らすよ！！！」

水音が歯を剥き出しにして和也に叫びながらグーパンチ。

「グハア！！！」

吹っ飛んだ和也を今度は今井がスル！。

「ま、何はともあれ、マジでこりゃ連絡した方がいいな」

今井がため息まじりにそう呟いた。

目は真剣そのものだ。

「そんなに大変なの・・・？」

水音にはさっきまでの放送がそこまで一大事に思えない。

「そーそー！大変じゃねって！」

そこで大声が聞こえた。

聞いたことのある元気な声。

さっきまで気づかなかった廊下を歩く足音。

3人が同時にそっちを向いた。

「正人？」

そこに居たのはカチューシエで前髪を止めてオールバックにしているいつもの姿。

だがいつもの黒っぽい茶色の目では無く、驚くほど真っ赤な目をしていた。

右手に洋風の剣、刃にカールのかかったそれは、サーベルと言われる者だ。

それを肩の上でポンポンと跳ねている。

「その眼……！」

今井の目が驚愕へと大きく開かれる。

「どうした、授業中じゃないのか？」

今井とは違い、いつもの和也の言葉に正人はケラケラと笑った。

「よー！カーズヤー！今井ー！笹草ちゃーん」

大声と共にサーベルの切っ先を3人に向けた。

「殺しにきたよん」

そう言つてゾツとする笑みを浮かべた。

真っ赤な深紅の瞳は残酷に輝いている。

第12話 学校占領！！危機襲来！！（後書き）

とりあえず非常に遅くなってしまった事をお詫びします。
次はもつと早く出せるように頑張ります！

さて、

今回は二つの武器が出ました。

この話には武器が多く出るので、その度パソコンで調べています。
いやはやパソコンは素晴らしい物で簡単に情報が手に入るし、とても興味深い。

ですからその情報から武器の説明を少し。

1つはバスタードソード

バスタードとは、「雑種（または私生児）」という意味である。バスタードをB a s t a r dではなくB u s t e r d（破壊者）と混同することがあるが、雑種と言う意味が正しい。

バスタードソードは、突く為の剣と切る為の剣の丁度中間に存在する剣だそうです。

もう一つはサーベル。

もともとは騎兵の武器として、それまでの直剣に変わって使われ始めた。時代を下ると、サーベルは多くの国の軍隊で軍刀として階級を示す記章ともなり、銃器が主流兵器となつてからも精神的・装飾的な意味合いで携帯され続けた。今日の軍隊でも儀礼用のサーベルが使用されている。

これからも様々な武器が出没すると思いますが、機会があれば説明も付けたいです。

それでは読んでくださっている方々。

第13話 VSクラスメート（前書き）

目の前に居るのは常に笑い合ったクラスメート。

その面影は今は無く、その赤い眼は何を見ている。

手に持つ凶器は何の為に…？

簡単だ、俺達を殺す為に使う道具なんだろう？

どうしちゃったんだよ？正人？

お前もあの『言葉』に踊らされてるのか？

第13話『VSクラスメート』

第13話 VS クラスメイト

和也達のクラスで警報の音が鳴り響いていた。

本当ならば目を覚ましてもいいような耳障りな音に、誰一人反応を見せない。

皆が同じように小さな寝息を立てていた。

耳障りな音がプツツと突然途切れた。

それに合わせたかのように、先程まで寝息を立てていた生徒の数人が目を開けた。

全員が目を開けたわけではなく、幾人かは目を開けず今も小さな寝息を立てていた。

起き上った生徒達はバラバラに動き出す。

軽快とはいいい難く、ノロノロとした動き。

床に突っ伏して寝息を立てる教師や、今も目を開けず机に突っ伏すクラスメイトには目もくれない。

迷いも無く、生徒達は自らの求める場所へ向かった。

そして手にした物は、

人を傷つける物

有る者は剣を、有る者は槍を、

生徒達には、いつものお茶にかけている姿は無かった。

顔に笑みは無く、悲しみも無く、怒りも無い、唯々無表情に。

だが、全員の目の色が変わり、統一されていた。

ひたすらに赤い赤い瞳、

明るいあのクラスの姿は何処にも無かった。

一人が開かなかったはずのドアに手を掛ける。

ドアは音を立てて簡単に開いた。

一人、また一人と生徒達はドアから出て行った。

その中には怜次の姿もあった。

生徒達の後ろ姿を見つめる感情の無い黒い視線には誰ひとり気付かなかった。

視線の主は生徒達から目を離すと、教室の後ろへと目を移した。そこに一つだけ残された物が立てかけられていた。

視線の主は目を細めて白い布で覆われた長い棒を見つめた。

V S クラスメイト

「正人：だよな？」

和也の言葉に正人はニヤツと笑った。

「そうだよ、まさか忘れたなんて言わないよな？」

確かにいつも見ていた正人であった。

声も、その姿も。

だが赤い瞳も、簡単に『殺す』という言葉を使ったのも、正人とは思えなかった。

正人は慣れた手つきでサーベルをヒュンヒュンと音を立てて回す。

「……？」

水音は不思議そうに正人を見つめた。

（あれ？こんなだっけ？）

鋭すぎる感覚は本人が自覚せずに反射的に思わせた。

一步、和也と今井よりも前に出た。

正人が回していたサーベルがピタツと止まった。

「！？、水音ちゃん！！離れて！！」

「え？」

水音は今井の叫び声に後ろを振り向いた。

今井の瞳には正人が、サーベルを水音の直ぐ後ろで頭に振り下ろしている姿があつた。

「水音ちゃー！！」

今井の言葉はドガッ！という音に遮られた。

今井の言葉よりも素早く和也の飛び蹴りが横から正人の顔面を捉えていた。

正人が横に吹っ飛ぶと、固い床に打ち付けられる。

「え？え？」

水音が突然の音に正人の方を見ると、仰向けで正人が倒れていた。その直ぐ前に和也が立っていた。

（和也……？）

普通の人間には変わっていないように見えたが、水音には確かに和也の目つきが変わったのが解つた。

「正人……冗談にしては笑えないな」

和也の眼は正人に対して敵意を向けていた。薄らと和也は怒りを見せている。

「クク……」

仰向けのまま正人は吹き出すのを堪えるように両手を口で抑えていた。

「ククク！アッハッハッハッハ！！」

堪え切れない笑いが正人の表面上に爆発した。足をバタつかせ、腹を抱えて笑い出した。

その姿は水音には異様に見えた。

「正人……」

和也の目にも正人の姿は異様に見えていた。

「ッ
ハッ
ハッ
ハッ
ハッ
…」

正人は笑うのをやめると、何事も無かったように、立ち上がった。いつもおちゃらけている正人の、あまり見たことのない真剣な顔。

「駄目なんだよ和也……」

「駄目？」

水音も何となく正人がいつもと違うことに気づいている。今井のみ深刻な顔付で状況を見つめていた。

「体ン中で叫んでんだ……」

両手で自分を抱く様に腕をクロスさせた。

「殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せつてなアアアアアアア
アアア!!!」

叫び声と共に和也達に向かって正人は走り出した。

「!？」

意表を突かれた和也は咄嗟に身構える。

先頭に居た和也にサーベルを振り下ろす。

数歩後ろに和也が飛んだ。

ブーン！と和也の前でサーベルが空を切る。

「和也！」

水音が慌てて両手を正人に向けた。

状況を判断するよりも正人を止める事を優先する事にした。

能力発動の為に集中力を瞬時に底上げする。

水音の周りに水気が増していく。

横目で正人はそれを見ると、手の中でサーベルを回すと、下手持ちへと切り替えると同時に、そのまま床へと突き刺した。

ドキヤ！という音と共に床にサーベルが突き刺さり小さな破片が飛んだ。

「甘いな！笹草アア！」

正人の言葉と共に、サーベルを刺した床から、ベキベキ！！と音を立てて、亀裂が走った。

亀裂は水音へと一直線に向かうと大きく広がっていった。

（能力か！？）

和也がそう察した時には、亀裂は水音を捉えていた。

「っひや！」

水音は小さな声を上げながら、その場から横っ跳びに飛んだ。集められていた水気は、水音の集中力が切れたと同時に、無造作に周りに飛び散り、水溜まりを作った。

それを見た和也が胸を撫で下ろす。

瞬時に正人が和也から水音へと体の向きをかえた。

下に刺していたサーベルを水音に向かって下から上へと振り上げるた。

ブオン！と先程と同じ様にサーベルが空を切る。

（え？）

（…な？）

水音と和也が同時に眉を上げた。

まるで無意味な行動に意図が読めないでいた。

今井の焦った声が上がった。

「水音ちゃん！『来る』ぞ！！！！」

水音が、え？と声を上げた瞬間、水音の体が『弾かれた』。

空中で弾かれた水音は、正人の作った床の亀裂に落ちて行った。

「っくっそ！！」

今井は即座に亀裂へと近づくと、亀裂の中を覗き込んだ。

今井の険しい顔に和也も状況を理解した。

「和也！！俺は水音ちゃんを追う！！その馬鹿片付いたら追ってこい！！」

それだけ言うと、今井は水音の後を追うために、亀裂の中へ消えていった。

「……簡単に言ってくれる」

和也の表情はあまり芳しくない。

「お前とはガチで戦って見たかったんだよなあ」

手のひらでクルクルと慣れた手つきでサーベルを回す。

ヒュンヒュンと耳障りな音が和也の気分を害する。

無表情のまま正人を見つめる。

「俺は武器も無いんだが……」

【ガチ：意 平等に】

「……」

「……」

2人の視線が交差する。

「お前とはハンデ有りで戦って見たかったんだよなあ」

「おい……何で言いなおした」

和也の迅速な突っ込み。

「うつせーなー！もっと楽しもうぜ！」

正人は和也に向かってサーベルを上から下に振り下ろす。

「勝手な野郎だ」

再び和也は後ろへと飛ぶ。

サーベルが空を切る。

「ああ！わりいね！」

正人が一歩前に出て次は下から上に振り上げる。

（顎から脳天を切り上げる気か…）

溜息まじりな息を吐くと、今度は後ろへと下がらず、前へと一歩出た。

「まあ、構わんがな」

サーベルが和也の体に当たる瞬間に横に向いた。

和也は、すぐ目の前で空を切るサーベルを瞬きもせずに見送った。数本の純白の髪を切り取っていった。

「！？」

正人が全力で振り上げた筈のサーベルは和也の目の前を過ぎる。

和也は武器に向かつて行くと、当たる前に体の向きを変えたのだ。現在、振り上げた形の正人のすぐ横に和也が居る状況である。

「楽しむ前に終るかもな」

皮肉めいた声と共に右足をサーベルへと蹴り上げた。

ギイン！と弾く音と共にサーベルが正人の手から離れ、宙へ飛んだ。
「ぐ…あ！」

和也の蹴りを受けた右手がビリビリと痺れる。

反射的に左手で右手を守るように抑える。

和也はつまらなそうな瞳を正人に向けながら、右手を宙へと上げた。タイミングを見計らったように、サーベルの柄が和也の手に吸いつく様に落ちてきた。

柄を握り込むと、痛みに呻いている和也の目の前に、サーベルの切っ先を向けた。

「ハンデが足りなかったか？」

和也は暗い笑みを浮かべて正人を見据えた。

「わぁお…映画みてーだな！和也」

正人は素直に和也の情人離れした動きに感嘆な声を漏らす。

（こいつ…脅しは利かんか…）

試しに、サーベルを軽く揺らしてみるが、正人の顔色は変わらない。

「とりあえず…何故俺達を襲った？」

正人は冗談で人を殺そうとする人間では無い。

「いきなり情報収集？かったい人間だな…」

正人は赤い眼を細めてつまらなそうに和也を見た。

「その眼もだ、今この学校で何が起きている」

確実に何かが起こっているのは確信していた。

床に亀裂が走っても、剣を振りまわしている人間が居ても、ここま
で騒いでも誰一人来る気配を見せない。

明らかに妙だと感じていた。

正人は質問に答えず、ニヤツと笑ってみせた。

「っへへ、いいのか？和也」

和也は軽く片眉を上げて見せると、眼を瞑る。

再び眼を開けると、睨みつけるような純白の目を光らせる。

「質問をしているのはこっちだ」

正人は顔色を変えず、言葉が続ける。

「こんな事してる暇あったら笹草や今井を追った方がいいんじゃないか？」

「何…？」

その言葉が軽く首を傾げた。

その瞬間、ドオオオン！！と何かを破壊させた様な音が響き渡った。

音と共に、激しい揺れが襲った。

「ぬ…！？」

和也は突然の揺れにバランスが取れず、膝を付いた。

「いい揺れじゃん」

正人の声が頭上からした。

正人は激しい揺れの中、当たり前前のように立っていた。

「！」

ツゴーと鈍い音と共に和也が宙に浮いた。

何かの衝撃が和也の体にぶち当たった。

何かが飛んできたわけではない、突然衝撃が和也を襲った。

自分が宙に飛んでいる事に一瞬気づく事が出来ないうでいた。

床に激突した衝撃で初めて、自分が飛んでいた事に気づいた。

固い床に上向きで倒れていた。

「！？」

慌てて起き上がると、自分の右手を見た。

その手に握っていたはずのサーベルが無くなっていた。

カランツと自分が先程立っていた場所で金属が落ちる音がした。

頭が混乱していた。

まるで、真正面から巨大な者に衝突した様な感覚。

しかし、自分の体よりも前に出していたサーベルに最初に衝突を感じるはずであった。

しかしサーベルには衝撃はきていなかった。

サーベルを通り抜けて、掴んでいた掌には確かに衝撃があった。

それだけでは無い、体のにまで衝撃が走った。

茫然としていた。

まだ何が起こったのかわからなかった。

「大切な者なんだから大事に扱えよ」

正人のむすつとした声に和也は我に返った。

前を向くと、正人が自分の武器を拾い上げている所であった。

「っゝゝゝ!!??」

慌てて立ち上がろうとすると、体中が悲鳴を上げた。
激痛に目を瞑る。

（何だこれは…!?!）

「丈夫だなー…てか普通は今ので眠ってても、いーくらいなんだけ
どな」

正人は、サーベルを回している。

ヒュンヒュンと音を立てて。

「お前の力（能力）か」

和也の言葉に正人は赤い目を細めて、笑って見せた。

「まだまだ…楽しもうぜ…和也ア」

目の前のクラスメートは笑い合う存在では無くなっていた。
赤い眼は狂気を示し、狂喜に溺れる。

VSクラスメート 完

第13話 VSクラスメート（後書き）

えー…はい、『VSクラスメート』でした。

大分遅くなりましたが、話が長くなりすぎたので2つに分けて調節している間にこんなに時間が…

新しい別の話作ったり、部活だったりで、忙しいもんですね学生。ええ。

マジニートになりたいです。

ひきこもりてえ！

と思う最近でございます。

今も修行中のトーシロの自覚ありますので、感想が有れば非常にうれしいですが、アドバイスとかアドバイスとか頂きたく存じ上げます。

「もおお手上げだよヘタクソが・・・」という方も見捨てずにお願ひ致しますm(――)m

それでは、また次で逢いましょう。

ありがとうございました。

5/26 本文の変更を行いました。

入れ忘れていた文章が在ったことに気づき、慌てて入れさせていたきました。

ご迷惑をおかけします。

第14話 VSデストロイヤー（前書き）

和也と正人が戦っているなか、和也から離れた水音達にも一つの影が迫っていた。

今井は情報人という仕事をしていたからこそ現状を理解できた。何も知らない水音に話さなければならぬ、現在の状況を。自分達の状況を。

第14話 VSデストロイヤー

第14話 VSデストロイヤー

眼の前が真っ暗な世界。

何も無い世界、視覚という物が存在していない。

と言った方が解りやすいかもしれない。

最初は視覚も存在していたと思う。

いつから消えたのかは覚えていない。

だけど聴覚はまだ生きている。

声がある、低い声。

「
-」

心地良いその声を私は聴いていた。

言葉を聞いているというより、声を聴いていた。

動けない私に沢山声を聴かしてくれた。

最初は無機質だと思った。だけど聞いているうちに沢山表情が有る事が解った。

明るかったり、暗かったり、表情豊かな声。

「
-」

「
-」

「
-」

「
-」

「
-」

毎日毎日聴かしてくれた。

ふと疑問に思った。

何で聴かしてくれるんだろ？

この声以外の声を聴いた事があつただろうか？

その時初めて聴くのではなく、聞く事にした。

「だよっ……」

良く聞こえないな。

耳を、もっと耳を澄ましてみる。

「何で　だよおおっ……」

おかしいな？声を聞くのってこんなにも難しかったっけ？

「に　て　に　……」

そういえば声を聞くのって久しぶりな気がする……？

もっと耳を澄まさなきゃ、思い出せ、

「う……え……うえ……うえええ……」

聞こえた……？

言葉じゃない、言葉。

悲しい、悲しい、悲しい、

泣いてるの？

何で？

どうして？

こんなのが聞きたかったんじゃない。
泣かないで、泣かないでよ。

何で泣いてるの？

お願い、泣かないで？

変だな、私も悲しくなってきた。

「ううつ…ううつ…また、手を…繋いでくれよ…」

手を繋いだら、泣きやんでくれるの？

だったら手を繋ごう？

そしたら…泣き声じゃなくて、笑い声が聞きたいな…

「っ！！」

ッバ！！と起き上がると同時に妙な声が聞こえた。

「ぐべはあ！？」

「ん？あれ？私寝てた？」

キヨロキヨロと周りを見渡すと首を捻る。

（夢・・・？）

あまりにも現実的な夢。

右の掌を見つめて、もう一度首を捻る。

「ぬぐおおおお・・・」

すぐ近くで、顔面を押さえて悶えている今井の姿があった。

「今井君・・・何してんの？」

「すんげえ石頭だね・・・水音ちゃん・・・」 気絶していた水音が心配で覗き込んだ所にヘッドバットが顔面に炸裂。

「？」

「...まあいいけどさ、」

今井は諦めた様に小さく溜息を付いた。

「ここは？佐久間君は？」

水音はまだ状況を把握していなかった。

頭がまだ上手く回転していない。

佐久間とは、正人の苗字だ。

あまり面識の無い水音は苗字で正人を呼ぶ、だが面識が無くても正人の事を知らない者は、この学校内にはあまりいない。

「水音ちゃん、あんた正人の作った亀裂に落ちたんだよ、ここは一つ下の階じゃないかな」

改めて水音はあたりを見渡す。

長い廊下に幾つも分けられた授業用の教室。

先程とあまり変わらない風景。

変わった所と言えば、一つ一つの教室名の表示板が変わっていた。

保健室であった場所は科学室という表示板に変わっていた。

頭上を見上げると、確かに人一人なら簡単に入りそうな程の亀裂が存在していた。

「んで、俺は気絶してる水音ちゃんを追いつけてきたんだよ」

ボウツとしている水音の頭が回り始めた。
体の節々が痛い。

亀裂から落ちた時に気絶したのでは無く、正人がサーベルを振った瞬間、体が弾かれた様な痛みの所から記憶が無い。
そこから意識が飛んだ様だ。

自分を追い掛けてきた今井はともかく、和也の姿が見当たらない。

「和也は…?」

今井は口を一度嚙むと、鼻から大きく息を吐いた。

「置いてきた」

「置いてきた…?」

来ていないでは無く、置いてきたという言葉が引っ掛かった。

「多分、今も正人と戦闘中だろ」

「え?」

正人の言葉を聞いた瞬間、血の気が引いて行った。

「佐久間君つて、この学校で7人しかいないAランクの能力者なんじゃ・・・!?!」

この学校では優秀な成績、能力者の高ランクは数少なく、様々な学校の中では『最もレベルが低い』とさげすまれているが、変わりに『戦闘能力が極めて高い』人種が多い。

特にS、A、Bの戦闘能力が群を抜いている。

その数少ないAランクの一人が正人である。

正人の付けているカチューシエは能力制御用のアクセサリーで、水

音の付けている髪留めと同じ力を持つ。

水音も数少ない一人であるが、戦闘能力は然程高くない事で、知られているわけではない。

「早く助けに行かなきゃ・・・！」

つば！と翻し、今井に背を向けた。

突然、剣を振りまわす状態の正人ならば、和也を殺してもおかしくはない。

嫌な物が水音の頭をよぎった。

「水音ちゃん！」

今井が走り出そうとする水音の腕を掴んだ。

「は・・・離してよ！！！」

今井の掴む力が更に強くなる。

「落ち着くんだ！！犠牲は少ない方がいい！！！」

今井の言葉に水音は、え？と小さく言葉を漏らした。しまった、と言う様に今井は水音から目を逸らす。掴んでいた腕がゆっくりと離された。

水音は今井に向き直ると肩を掴み強く揺さぶる。

「どういう事？ねえ！今井君！！どういう事！？」

「・・・」

今井の口は堅く閉ざされていた。

無理に口を噤んでいる様な感じだ。

「何でそんなに『不安』にしてるの！？」

今度は今井が、え？と言葉を漏らした。

「何を『怖がつてる』の！？今の現状がどうなってるか知っているなら教えてよ！！」

水音の言葉と共に今井の目が驚愕に見開かれた。

「水音ちゃ・・・」

今井は一言も、顔の表情にすら『不安』も『恐怖』も表したつもりは無かった。

（つかしいな…）

今井は開かれた目をゆつくりと戻すと、大きく溜息を付いた。

「解ったよ、心配させたくなかったんだけどな…」

「…」

水音がホツとした様な表情をすると、今井の肩から手を離れた。

「とりあえず・・・簡単に説明する、今はあまり時間を掛けたくない」

「う・・・うん」

今井の表情の変わり具合に一瞬躊躇いを覚えた。

「まず、この学校は危険に直面している、下手をすれば死ぬ」

簡単に死という言葉を使った。

今井の表情はふざけているわけではなかった。

「あの時の2度の放送は能力者による者だ。多分、俺達以外の人間は全員身動きが取れて居ないと思う、確証は無いが極めてその可能性が高い」

あまりにも早い早口が水音の目の前で展開されていた。

「そしてその中の何人かは…」

今井は口を一度噤んでから水音をチラッと見た。

今井と水音の視線が交差する、話に付いて来れているかの確認。

案の定、一生懸命聞こうとしているが、若干困惑気味に見えていた。

「水音ちゃん、大丈夫？」

「だ！大丈夫！続けて！」

今井は鼻から大きく息を吐くと口を開いた。

「その中の何人かは操られてる、正人を見て核心した、目が赤かったろ？」

水音の頭の中で先程の正人が思い浮かべられる。

（確かに・・・赤い目になってた）

「マインド（操り）の能力者は操る対象に、『跡』を残す、今回の場合はマインドコントロール時に対象の目が赤くなる、そういう能力者は聞いたことがある、多分そいつだな、マインドの能力にも色々あるが、この能力者は対象の状態によりマインドの成功率に比例する、

そこで、先程の最初の放送は別の能力者による『眠り』を引き付ける力、これを放送で流し、眠らせてから能力を使えば、より成功率は上がる、眠りながらも状態が強い人はたまにいるが」

（簡単じゃ無いんですけど...）

「...??？」

水音が首を横に軽く傾けた、それを合図に今井は喋る事を止めた。

「...」

今井は表情を変えず、ゆつくりと説明を始めた。

「OK・・・、要するに学校は今占領されてるんだと思う」

水音が慌てて、うんうんと頷く。

「誰が占領したかは、わからないけど・・・占領の仕方は簡単」

水音が付いてきているかを確認しながら話を続ける。

「さっきの放送は学校の奴等を全員眠らせる為の者だ」

水音は、さっきとは違い今度はしつかりと付いてきていた。

「あれ？私達は大丈夫みたいだよ？」

「まあ眠っていない奴が居た時の為の保健に、今度は人を操る能力者だな」

水音も何となく現在の状況が見えてきた。

「洗脳能力者で眠っちまった学校の奴等を操って、例外を消す」

今井は再び口を閉ざした。

そして視線を水音に向ける。

「じゃあ正人君は・・・」

「っそ、操られてる、つっても実際…操ってる奴が『』を殺せーやなくて、そういう風にオートにしてるだけ何だけどな」

「え…えつと？」

水音が再び首を傾げた。

「・・・ミスった、今の無し、要するに操ってる奴が『』を殺せー

！』とか命令出して自分の意思じゃ反抗出来ず言われた通りにしちやう状態」

「でも私達は？」

「ああ、俺達は条件が合わなかったんだよ、マインドの能力者は確かに強いけど指定した条件が合わない限り能力を食らう事はない、」

「その条件って、さっき言ってた人の状態によるって言ってた奴？」

「いや、それ以外に別の条件があると思う」

「1つは操る人間の状態で、もう1つの条件は…？」

そこで今井はバツが悪そうに頭を掻く素振りを見せた。

「ここまで偉そうな事言つてたけど、それがどんな条件かはわからないんだよな…これだけの人数が同時に揃う条件何てすぐ出てきそうなんだけどな…」

今井は少し考える素振りを見せたが、すぐにやめた。

「とにかく和也を助けに行ける状況じゃないってのは解った？」

「じゃあ和也を見捨てるの!？」

水音の目がツキ!と今井を見詰める。

今井は表情も変えず、水音を見据える。

「まあ聞きなよ、今現在戦闘に特化した能力者達が殆ど敵に回ったと考えた方がいい」

その言葉に水音はまだ完全に自分が状況を理解していない事に気づいた。

「俺達の最優先は援軍を呼ぶ事だ、それにこの3人で和也が残ったのは運がいい、和也が最も生き残る可能性があるからな、俺達の今出来る事は助けを呼び、少しでも早く和也を助けに行く事だ、違つかい？」

言葉はなだめる様に優しくだったが、今井の目は真剣そのものだった。

自分一人が助けに行っても無駄なのだと知る。

助けに行っても自分の実力じゃ足手纏いになるだけだと気づいた。

その事実には自分の無力さに唇を咬む。

そして今井の『不安』と『恐怖』が何なのかが解った。

「っ!」

言い返す言葉がみつからず、言葉を詰まらせる。

(・・・)

今井の言葉は正論だ。

そしてその言葉が水音と同じ様に和也を心配している事に気づいた。

「解ったよ、今は援軍を呼ぶ事が優先・・・だね」

水音は俯いた。

がむしゃらに動こうとしていた自分が恥ずかしく思えた。

今井は3人全員を生かす最優先の計画を立てていた。

今井がそこで表情を崩した。

ツツと小さく笑みを作る。

「時間も無い、直ぐに行動しよう」

「…うん」

水音は顔を上げた。

今は和也の為に少しでも早く、助けを呼ぶ事。

それが現在の一番の選択肢。

「確かに和也なら耐えてくれる…よね」

横目で決心した様子の水音を見ながら、目を細める。

（耐えてくれる…ねえ、まあそれだけじゃないんだけどさ）

今井は水音に全てを言ったわけではなかった。

和也なら死ぬかも知れない。

全生徒が殺しに来る。

確かに、これは考えた。

だがそれを打ち消す程の『恐怖』は別に存在していた。

『逆に和也が全生徒を殺すかもしれない』

それだけは水音には言わない。

和也を友だと思っから。

考え事をしていた今井の耳に笑い声が聞こえた。

慌てて水音から視線を外して前を見る。

水音も同時に同じ方向を向いた。
廊下の離れた先に、仁王立ちの様に立っているショートカットの少女が居た。

「アッハッハッハ！！さっすが今井！！けど逃すき無いけどねー！
！」

明るい笑い声が廊下で響く。
2人は一瞬呆然としていた。
先に口を開いたのは今井では無く水音の方であった。

「み…美奈・・・？」

小顔に似合う綺麗な黒髪も、絶やさない笑顔も変わらない。
ただ、赤い目だけが妙に浮いてる気がした。

「そついう事！残念だけど、ここからは出れないよ？」
笑顔でゆっくりと水音達へと近づく。

水音達は一步、後ろへと下がった。

「どついう…」

事？と言おうとしたが、そこで言葉が止まった。
驚愕に目が見開ける。

直ぐ目の前に美奈が居た。
水音に向って小さく舌を出して、悪戯っぽく小さくウインクをした。
そして水音の目の前から直ぐに消え去った。

「がつ！あ？」

すぐ横の今井から、うめき声の様な、疑問符の様な声がした。
反射的にそちらを向くと丁度、今井が床に崩れるように倒れていた。

倒れた今井を見降ろす美奈がそこに居た。

「今井君！！」

水音の声に反応せず、今井は床に突っ伏したままだ。

ゆっくりと、見下ろす今井から水音へと視線が移った。

水音に向かって、いつもの笑顔を向ける。

「今井は色々知ってるから先に眠ってもらわないとねえ」

正人は内面も、目以外の外面も変わった様子はなかった。

唯、先ほどまで無かった手にはめた黒い革手袋、そして上靴から白いスポーツシューズに。

美奈の戦闘スタイルへと変わっていた。

しかし、何処となく妙な違和感があった。

正人の時とは違う、また別の違和感。

人を傷つける事を好まない正人だからこそ思えた違和感。

美奈にはその違和感が無かった。

まるでそれが本来の姿の様に。

本当に何時も通りの美奈に寒気が走った。

「美奈：操られて…る？」

赤い目を細めて楽しそうに笑う。

「うん！みたいだねー！」

冷たい汗が背筋を通る。

「闘わないと…いけないの？」

水音の言葉に、変わらない笑顔のまま頷いて見せた。

「死にたくないなら抵抗した方がいいと思うよ？」

その言葉と共に水音が口を噤むと下を向いた。

そんな水音を見ると、美奈は片眉を上げて見せた。

「水音は闘いたくないんだ？」

闘いたい訳がない。それが水音の本心だった。

いくら自分が死ぬかも知れなかつが、友達を傷つけて平気な人間では無い。

「美奈…」

小さく言葉を洩らす。

美奈は俯くと、何時もの様に豪快に笑わずクスツと小さく笑って見せた。

「闘わないなら…」

ゆつくりと美奈が顔を上げた。

「無抵抗で殺すだけなんだけどね」

全くと言って良い程の感情の無い声。

そして、いつもそこに有る笑顔が消えていた。

あまりにも無表情に、無機質に、

「美…奈？」

肌に刺す様な剥き出しの感情、寒気が走る程の敵意。

殺気

（この殺気は似てる…！『あの時の和也と』）

殺気を超える押し潰されそうになる程の殺気に、言い方によれば『狂気』と言った方が解り易く思えた。

和也以外に狂気を持つ人間が身近に居た。
無機質な表情や、感情の無い声。

全てが美奈の初めて見る姿であった。

（こんな表情、初めて見た…）

昔から仲のいい水音ですら初めて見る姿は驚愕よりもショックが大きかった。

「隠して… たんだ…」

やるしかないのか・・・？この美奈と

そんな水音の思いも知らず、美奈が再び水音の前に現れた。水音は振りかざされる腕を呆然と見ていた。

「！」

風を切る音と共に一直線に水音の顔面へと美奈の拳が走った。当たる瞬間にその拳は水音の目の前で止まっていた、親友による殺気の込められた寸止めに水音は我にかえった。

廊下中に水気が増していく。

【水】を使う水音は大気中の水分を最大限活用して【水】を作り出す。

美奈も空気が湿気で湿るのを感じ、水音が戦闘モードに入った事を確信した。

「っそうこなくっちゃ！」

美奈の表情がいつもの笑顔へと戻った。

「…？」

外面はそう思えた。

だが水音には、いつもの笑顔と違い妙な違和感がある気がした。身近に居る人間しか解らない様な本当に小さな違和感。

タンタンツとリズムカルに両足で小さくジャンプを繰り返す。

黒い革手袋を嵌めた手を深く握り込んだ。

ブォン！と音を立て、顔の横を何かが走った。

水音の髪が何かの風圧で一瞬浮いた。

「ッッフーン ボケてたら直ぐ死んじゃうよん？」

「…あ」

間拔けた声が水音から洩れる。

拳圧による生み出した風は水音の髪を数本散らせた。

ハラハラと赤い髪の毛が廊下に落ちていく。

黒い拳は余裕を見せる様にゆっくりと元の位置に戻された。

再び拳を前に置きフットワークを繰り返す。

「水音… もう2回も死んでるよ？」

「っ！」

美奈の呆れた様な言葉は水音に怒りを思わせた。

すぐ目の前に居る美奈に両手をかざした。

「水の柱！！」

水音の言葉と共にかざした掌に瞬時に水気が集中していく。

「おっとお！」

ゼロ距離から放たれた筈の攻撃は簡単に横飛びで避けられた。

「アッハッハ！ムキになっちゃってかゝわいー！」

高らかな笑い声が廊下に響き渡る。

外れた水の柱は粉の様に水蒸気へと再び変換された。

思ったように威力が出ない。

（駄目！本気でやったら廊下を埋め尽くしちゃう！）

水音の強すぎる能力は完全にコントロールする事が出来ず、中途半端に力を制御する事が出来ない。

水音が横眼で倒れている今井に目をやる。

（こんな狭い所じゃ今井君を巻き込んでしまっ…どうしたら！）

美奈が軽く身を屈めた。

瞬間、美奈が消えた。

水音が慌てて再び両手をかざす。

「氷の壁……！」

水音の目の前で、まず水が作り出された。

そして氷へと変換。

同時に美奈が氷りの目の前に表れた。

低い体制から上空に突き上げる、狙いは真つすぐと水音の顔面を狙っていた。

「っひ！わ！」

手をかざしたまま、反射的に目を瞑った。

バキィーン……！と激しい音が響き渡る。

顔面に当たる前に固い氷りに遮られた。

「あつは！やるじゃん！」

（防げた……！でも、こんなたまたま続かない……あんな早い受けきれない）

はつきり言えば実力差は歴然、一番身近に居たから知っていた。

周りが美奈の事を馬鹿な人間だと笑っていたの聞いたことがあった。

授業を真面目に受けていた所なんて見た事も無い。

運動だけのよくいるタイプの人間に見えるのも解る。

だが、それが間違いだと言う事を水音は知っていた。

長い付き合いの水音だから知っている。

昼行燈

美奈にはこの言葉が一番ぴったり来ると水音は思っている。

気楽な声が氷越しに聞こえる。

「しっかし、かったいね」

氷の壁を殴り飛ばした右手をプラプラと振って見せた。

「さ…流石の美奈の馬鹿力も氷の前じゃ歯が立たないみたいだね！」
嫌味で言ったつもりだったが、声が微かに震えていた。

「アツハツハ！声が震えてるね！実践経験少ないんだから無理しない方がいいんじゃない？」

「む、無理なんかしてないよ！！」

実質凶星であった。依頼による戦闘は全て怜次、和也に任せ後方支援。

上位ランクになれば戦闘経験もある程度身に付くが、唯でさえ低いランクの依頼ばかりをこなしていた分、戦闘の依頼も少ない。

「ま、上出来じゃない？あたしの一撃を止めたんだから」

美奈は軽く氷を叩いて見せた。

叩く音が氷の内側で反響した。

「ま、負け惜しみにしか聞こえないよ！！」

水音の言葉に一瞬、美奈がキョトンと目を丸くした。

そして噴き出すように笑った。

「アツハツハ！私の能力忘れた？」

美奈は笑いながら、ゆっくりと冷たい氷に掌を添えると。

「あたしの能力は…」

当てた掌を中心にピシ、ピシ、と音を立て、氷りにヒビが入っていく。

先程殴られた時は、傷一つ付かなかった筈の氷の壁に亀裂が広がっていく。

「な、何で！？」

パキン！とガラスの様な音と共に水音の氷の壁が砕け散った。

氷の破片は落ちていくと共に気体へと戻っていく。
残ったのは、笑顔のまま右手の掌を水音に向けている美奈と、呆然と美奈に両手を向けている水音。

「あたしの能力は【力】、単純な【パワー】！直ぐ終わっちゃうから使いたくないんだけどね」

水音もゆつくりと手を下した。

全力で殴っても砕けなかった氷は、美奈が能力を使った瞬間、掌を添えて少し押しただけでいとも簡単に砕け散った。

人、一人を気絶させる事が出来る程の力も持った美奈が全力でぶん殴っても氷の壁に傷が付く事は無かった。

しかし、美奈の能力は氷を簡単に打ち破った。

単純にその威力は想像出来る。

（あんなの一発でも食らったら…）

水音の背中に寒気が走った。

「直ぐに終わっちゃうのは嫌なんだけどね」

もう一度、同じ言葉を繰り返した。

その言葉通り、先程の様に氷で防ぐ事は出来ない。

能力を使いながらならば氷事潰されるだろう。

勝てない…死

瞬間的に頭に過った言葉に、否定する様に慌てて首を振った。

「まだ解らないよ！！」

声が震える、正直に怖かった。

美奈のいつもの笑みが見えた。

その笑みを見た瞬間、恐怖が消えた。そして再び違和感が。先程のいつもどおりの違和感では無く、底抜けに明るい美奈からはあまり似合わない感情。

水音の鋭い感覚はそんな小さな感覚を逃さなかった。

（何で？操られてるのに…悲しい…？）

確かに感じた、悲しみという負の感情。

「水音は知ってたっけ？あたしの請負人ネーム」

依頼人時に別名とされる名前、

付けられる名前は、本人を示す。

「デストロイヤー（破壊者）」「Destroyer」…あたしは全てをぶっ壊す！！」

「！」

はつきりと感じた。

悲しみの感情。

美奈は再び構えなおした。

（何…これ…！？）

禍々しい狂気を思わせる感情と、悲しみを思わせる感情。

2つの感情が水音の頭をなんども過る。

自分の知らない2つの美奈の世界。

いつも笑っている美奈からは感じたことのない。

悲しみの感情。

狂気の感情。

美奈が俯いた。

陰に隠れた顔は見る事が出来ない。

しかし、その顔が笑っている、と思う事は出来なかった。

「死な……ない……で……」

苦しそうな、嗚咽の様な声が漏れた。

（え？）

水音には美奈の言葉を聞きとる事は出来なかった。

それは、美奈が先程と同じ様に状態を低くしたからだ。
最高速を出す為の構えだ。

先程までの突然目の前に現れるのはこれによるものだと理解する。

ドン！と地面を蹴る音と共に、一瞬で距離が詰まる。

「っ！」

水音は瞬時に手を前にかざすと再び氷の壁を作り出す。

それを見た美奈は口の端を更に吊り上げ、拳を強く握りしめた。
一直線に氷に向かって拳を突き出す。

パリン！と先程よりも豪快に氷の壁が割れた。

拳の勢いは止まらず、そのまま水音へと襲いかかる。

「！！」

恐怖で目を瞑りながらもかざしていた両手をギュツと握る。

破片となった氷は先程の様に消えずに水へと変わった。

薄目でしっかりと水音はそれを確認する。

水音に当たる直前で拳がビタツと不自然に止まった。

（？）

それも一瞬、直ぐに拳は動き出す。

美奈の耳に不自然なパキツという音が聞こえた。

その一瞬を水音は逃す事は無い。

（！）

慌ててその場から転がるように逃げ出した。

美奈の拳がすざまじい音を立てながら空を切る。

（とりあえず別の場所に！今井君を巻き込まない所に！）

水音の目の前に先程確認した『科学室』と表札された教室。

慌ててドアを開けると中へと転がり込んだ。

ドアを閉めると同時に集中力を瞬時に底上げする。

パキパキ！と音を立ててドアが固い氷で封じられていく。

そこでへたれこむと、辺りを見渡す。

見覚えのない教室は3年生専用の科学室と知る。

その教室は水音達の教室よりも大きな教室だった。

大きな机が数個置かれたその教室は、数人で実験をする為に用いられたもの。

教室の端に置かれた2つの大きなガラスケースにはビーカーや禍々しい物が点在されている。

教室の前には大きな黒板と教壇。

授業後だったのか、教壇の上には幾つかの科学用品がそのまま置かれていた。

一番ドアから遠い机へと向かうと机の陰に座り込む。

「落ち着け…落ち着け！！」

震える手を押さえながら自分に言い聞かせるように何度も何度も繰り返す。

美奈と戦う事は初めてだ。

しかし、水音は美奈を昔から知っていた、その実力も。

水音の表情は青ざめ、体が微かに震えている。

突然だったからこそ、美奈との戦いに対応出来た。

美奈との戦闘に、間が出来た事により緊張が沸々と湧いてきた。考える事が出来てしまった。

和也は？

今井君は大丈夫かな

何とかしなくちゃ……

美奈が私を殺す…？

美奈を倒さないと駄目なの！？

嫌だ！！！！

そんなの！！

怖いよ…

水音には致命的な弱点があった。

日頃から反射的に人の感覚を読み取ってしまう水音は思考が混乱しやすい。

そして精神的に弱い面がある。

極度の緊張と焦りが水音の神経をすり減らし、現状況に震えていた。

だが、それ以外の理由で自分がおかしくなっている事には気づかなかった。

実験室の端に一列で並ぶ蛇口からポタポタと水が垂れ落ち始めた。

能力は自らの意思以外に、本人の状態によっても異なる。
集中状態や感情の高ぶりにより能力の力の上下も変わる。

水音自身の混乱は能力にも影響される。

自らが制御しない強すぎる能力は暴発する。

ドオン！！

爆発の様な音は一列に並ぶ蛇口から。
大量の水が全てから噴き出していた。
噴出す水は溢れ出ると、床へと流れる。

教室の床が一瞬にして水びたしへと変わった。

その現象を起こしたのは、濡れた床に三角座りで震えている少女。

殺せ

声がした。

何処かで聞いたことのある声。

慌てて水音が辺りを見渡した。

しかし、そこに水音以外の姿は無い。

「だ、誰！？」

怯えた水音の声は教室内で反響した。

再び頭に言葉が響く。

美奈を殺せばいいんだよ。

その言葉が水音の心に染みた。

それが当たり前の様に。

そこでツハと我にかえった。

（私は今何を…？）

水音に寒気が走った。

今、一瞬でも美奈を殺す事を考えた自分が居た。

「わ、私どうしちゃったの!？」

一度頭を振ってから再び頭を抱える。

（早く美奈を倒す方法を考えなきゃ…）

再び何処かで聞いたことのある声が頭の中に響く。

『倒す』何て甘い事を考えるから弱いんだよ

『殺せ』ばいいんだよ

「!」

殺せという言葉が体を震わせる。

「や、やだ…」

気づいた。

この聞き覚えの声が誰なのか。

自分自身の声だ。

「何で…」

その疑問に答える声が頭に響く。

何で？今更？声はずっと聞こえてたはず
聞こうとしなかっただけ

IIII! ! ! ! !

狂った様な自らの声で何度も何度も言葉が頭に響く。

「いやあああああああああああああああああああああ
あああああああ！！！！！」

狂ったようにかぶりを振った。

「あああああああああああああああああああああ
！！！」

バキーン！！と割れるような音が幾つも教室に響く。

噴き出していた蛇口は威力と共に碎け散っていた。

壊れた蛇口から未だ噴き出す水は空中に分散され、水しぶきは舞う床を埋め尽くしていた水が音を立てて氷へと変わっていた。同時に水しぶきは粉雪へと変換される。

そこに異様な風景が広がる。

7
 •
 •
 •
 •
 •
 8

教室内でサラサラと舞う雪の中、無言で水音が立ちあがった。

パキン！と割れる音がした。音と共に水音の髪留めが床へと落ちる。

暴発した能力に耐え切れなくなった能力制御（髪留め）が完全に壊れたのだ。

両方で結ばれた赤い髪がゆっくりと下に落ちる。

髪型が綺麗なストレートへと変わった。

顔を上げた先に、紅い髪に負けない位の赤い眼へと変わっていた。

第14話 VS デストロイヤー - 完 -

第14話 VSデストロイヤー（後書き）

第14話 VSデストロイヤー

でした。

殆どが現状況の説明で終わるとか…

そこは置いといて、水音と美奈でした。

この2人の過去の話等をいつか書きたいのですが、それも大分先になるかもしれません。

美奈は一見お気楽に見えるが、実はまとも。

みたいなキャラがほしいな〜とか思ってた書きました。

友達に「この子良いね！ショートカットてのが良い！良いね！」などと興奮していたので一瞬書かなきゃ良かったと思ったり…

というよりもう出てこないはずだったんですが…

色々言いましたが、これからよろしくお願い致します。

それでは次回もよろしくお願い致します。

第15話 無意識の想い（前書き）

急襲する親友、強すぎるレベル差、混乱と暴走。

強すぎる能力は、水音自身でも抑える事は出来ない。
力は暴走す、

暴走は水音自身の狂気を呼び起こす。

その力は功か不幸か。

首謀者達は冷たい眼で現状を見つめる。

一人は心を、一人は体を支配する。

第15話 無意識の想い

第15話 無意識の想い

薄暗く妙に広い部屋。

白い線で描かれた円の真ん中に、あぐらで座る人間が居た。

円の中にある無数の摩訶不思議な文字は暗い中で薄っすらと光る。

そんなオカルト的な物と正反対のものが座る人間の前に幾つか置かれていた。

監視用のテレビは暗闇の中で、科学的な光を放っていた。

ガラスと音を立ててその部屋のドアが突然開いた。

暗闇に光が差した。

「・・・」

暗闇に埋もれる人間は動く事も無く、監視用のテレビを見つめていた。

「何でこんなに暗いのよ、この部屋」

ドアを開けた張本人は部屋に入ると同時にしわを寄せた。

高い声の女性は部屋に入るなり、部屋の電源を捜そうと壁に手を付けた。

「まったくどこよ・・・」

暗闇から鋭い眼光が女性に向けられた。

「電気を付けないで欲しい」

男とも女とも取れない美しい声が暗闇に響いた。

その声に女性が不機嫌そうな声を上げた。

「なんでよ？」

「・・・」

暗闇に埋もれる人間はその質問に答える事はしなかった。

「…なんでよ？」

女性は再び暗闇の人間に聞いた。

「………」

それでも暗闇の人間は答えなかった。

女性は大袈裟に溜息を付くと小さく首を振った。

「あんた私の部下のくせに生意気よね…」

その言葉と共に暗闇から再び鋭い眼光が飛んだ。

「別に、あなたの下に付いたつもりは無い」

その言葉に女性は、はあ？と声を漏らした。

「あなたより『下』のつもりは無い」

その言葉の意味が解ったのか、女性の表情が暗闇でも解るほどに険しくなった。

「あんた…私に勝てるつもり？」

そこで暗闇から向けられていた眼光が消えた。

暗闇の人間が女性から目を離れたようだ。

「否定するつもりは無い」

その綺麗な声が女性を苛立たせた。

「別にあんたを殺してもいいんだけど」

わざと聞こえる位に強く舌打ちをした。

ジロリと視線を人間の前の監視用テレビに向けた。

「つか、監視なんて必要なわけ？」

暗闇の人間はゆっくりと口を開いた。

「あなたと私の力は絶対では無い、場合によれば洗脳が解ける可能性がある」

女性は馬鹿にした様に鼻で笑った。

自分の力に、そんな事はないという、絶対の自信が女性にはあった。

「その可能性って？」

そんなのも解らないのか、と言いたげに人間は肩をすくめた。

その行動が女性を苛立たせる。

「私の洗脳は心（精神）に、あなたの洗脳は脳に…どちらかの洗脳が解けた時のみの保険を我々がお互いに掛けている」

「知ってるわよ、ボケ」

女性がボソツと毒づく、その声に今度は暗闇の人間の方が苛立ちを覚える。

「それで？」

そんな事を気にせず女性は先を促す。

暗闇の人間は苛立ちを隠すと、先を続ける。

「私の力（能力）は強い心（精神力）を持つ人間には効果が薄い」

「だから眠らしたんでしょ」

女性がつまらなそうに言った。

「…眠っていれば意志が無い分、こちらに有利だとは思える…」

淡々とした声は続ける。

「しかし、それでも無意識による心まで制御出来るとは思えない…」

「無意識って？」

そこで大袈裟に暗闇の人間は溜息を付いて見せた。

「自分で考えたらいい…」

女性のこめかみに解り易い程の青筋がビキツと入った。

「フン…欠点のある能力なんて、二流もいいとこね」

馬鹿にした様な言い方で、再び鼻で笑う。

「そしてあなたの力（能力）にも欠点がある」

女性の目が暗闇の人間を睨む。

「脳に送る身体的ダメージが洗脳を上回れば、洗脳を消す可能性もある…その2つが一辺に起こる事は無いが、可能性が無いわけでもない」

「…」

女性はそこまで聞くと不敵に笑って見せた。

「それは悪魔で可能性よ？そんなの何の充てにもならないわよ」

「…」

暗闇の人間はそこで黙った。

女性は呆れたように首を軽く振った。

（我々は元々、大人数に能力を使うのに適していない…、その悪魔での可能性も高い確率で有りうる…）

暗闇の人間が、それを口にしなかったのは特に理由があったわけではない、単にめんどくさかったのだ。

「そんなの下の人間にやらせりゃいいじゃない」

そう言いながら女性が一步、近づいた。

同時に、暗闇で薄っすらと光っていた文字が突然強く光りだした。

「何…？」

女性が声を漏らした。

女性が何かしたわけではない、それは偶然に起こった。

暗闇から光に覆われた人間は綺麗な声で誰に言うでもなく漏らした。

「また一人…心の闇に惑う者が狂気に染まったか…」

男とも女とも取れ無い綺麗な声の人間は全く感情の無い言葉を零した。

「っっっっ」

呻き声と共に今井は目を開けた。

起き上がると同時に腹部に強烈な痛みが走った。

「ぐっっっっえっっっゲッホゲッホ!!」

咽る自分に気絶させられた事を思い出す。

「気づいた？」

自分を気絶させた本人の高い声が上から聞こえた。

見上げた先に笑顔を浮かべる美奈の姿があった。

美奈の赤い目と視線が交差した。

今井は自分が生かされている事を瞬時に察すると、恐怖で目が見開いた。

死ぬ覚悟が出来ていなかったわけでは無い、だがそれでも恐怖は拭えない。

「殺すんなら優しくしてくれよ」

震える声で、つよがりでそう言った、それが精一杯の抵抗であった。

その言葉に美奈は短く笑った。

「まだ殺さないよ？」

今井の表情は恐怖から疑問に変わった。

ニコニコと笑う美奈を見て不思議に思う。

（操られてるんっっだよね？）

今井の予想では、というよりもその予想通りの筈なのだが美奈は例外であった。

正人の様に暴走しているイメージは無い。
しっかりと意志がある様に見えた。

自分がまだ生きている事自体が不思議だった。
そして水音の姿が見えない。

自分が寝ている間に何があつたのかが気になった。

「水音は？」

今井は自然といつもの様に美奈に話しかけていた。

返答はいつも通りの様に見えた。

「ん？あの中」

そう言つと美奈は目の前のドアを指差した。

理科室と表札されたドアの隙間から白い冷気のようなものが溢れていた。

「あれは・・・？」

まだ完全に状態を把握出来ないでいた。

美奈が再び短く笑つた。

「今井君も『コツチ』側に付いたら？」

突然の美奈の言葉に今井は一瞬困惑した。

「それはどういう事だ？」

美奈は今井の方を見ずに頭を小さく振つた。

「アッハッハ…うっん…何でも無い」

その表情も仕草も操られているというにはあまりにも美奈らしかった。

美奈是水音が居ると言つた理科室をジツと見つめていた。

（水音ちゃんが出てくるのを待っているのか？逃げるとは考えないのか？）

そんな今井の考えも知らず、美奈はひたすら赤い瞳でドアを見つめていた。

今井が慌てて首を振つた。

（いや…水音ちゃんには悪いが今なら逃げられるかもしれない…）
今井は現在でも最も効率のいい手段を選ぶ。
そこに感情を持ち込むことは無い。

美奈はづく事は無かったが、その時、今井のあばらにヒビが入っていた。

今井自身側にいるが、後ろを向いている状態、解る筈がない。
ゆっくりと立ち上がろうとすると、殴られた所に激痛が走った。
（つつ！！ギリギリの所で走るか…）

気づかれないように、体を少しづつ動かしていった。

「ねえ今井君」
そこでいきなり美奈が今井に話しかけた。

今井はビクツと体を揺らし、慌てて美奈を見た。
顔は今井の方を向いていない、今もドアの方を見ていた。
小さく息を吐くと動揺を見せない様に声を出した。

「なんだよ？」

「……逃げようとしなくてね」
声色が変わった。

「あ…ああ」
勿論嘘だが、何か言わなければ怪しまれる。

ドギヤア…！というすざまじい音が直ぐ目の前でした。

「！…！」

美奈の右足の下のコנקリートが飛び散った。

幾つかの小さな破片が今井の顔に当たった。
見事な窪みは確実に、脅しが含まれている。
呆然としている今井の上から声が降り注ぐ。
「あたし…何するか解んないから…」
いつもの明るい美奈の声色とは全く違う声。

今井はそれ以上動く事が出来なかった。
信じられない殺気が美奈の背中から伝わった。

今井は仕事状、戦う事が少ない分殺気や気配に疎い部分があった。
しかし、その今井でも肌で感じた殺気は想像以上のものがあった。

振り向かない。

美奈はひたすらに水音が居る教室を見ていた。
待ち焦がれるように、赤い目を輝かせて。

第15話 無意識の想い 完

第15話 無意識の想い（後書き）

はい、ありがとうございました。

亀の様に遅い更新ですが、日々（色々）頑張っております。

やっと思臭いのが出てきました。

友人に、「お前のキャラは何故喧嘩ばかりする」等と言われておりますが、そんな気は無いんですが…

今回は敵の話だけでしたが、次の話は実は出来ておりますので早く出せたらナー…なんて…。

それではまた、次でお会いしたいです、

もし、指摘、誤字がありましたらお願いいたします。

精進の為、人からの意見は大切にさせて頂きます。

それではありがとうございました。

第16話 レヴィアタンVSデストロイヤー（前書き）

2人の洗脳の能力者。

一人は心に、一人は身体に。

心は、無情に奥底の狂気を引きずり出す。
身体は、意志とは無関係に殺戮を求める。

一人の能力者は、言った。

『無意識の心』

赤目の少女の思いは続く。

心の思いは想いとなり望む。

想いは重りとなりて、その体を急き止める。

心は涙を流し、身体は悲鳴を上げる。

それをみつめるは同じく赤い瞳。

狂気と狂気がぶつかり合う。

第16話 レヴィアタンVSデストロイヤー

水音は座っていた、一列に並ぶ蛇口からは大量の水が流れ出ている。空气中に冷気が舞っていた。

それに合わせるようにゆらゆらと揺れる粉雪が水面に落ちる。

その部屋には春だとは思えない肌寒さがあった。

スカートや制服がずぶ濡れになっていく、少女は気にせずに水浸しの床に座っていた。

赤く長くストレートへと変わった髪は床に付く。

濡れる髪の毛も気にせず、俯いていた。

その目は何を見るでもなく、ひたすらに下を見ていた。

ブツブツと小さく口を動かしていた。

それは言葉と言うにはあまりにも言語として機能していなかった。それでも歌う様に、呪文の様に繰り返す。

水音の口は突然止まった。

ゆっくりと立ち上がると、ドアへと歩き出した。

一歩足を踏み出すたびに、水浸しの床がパキパキと音を立てる。

歩いた後に氷の足跡が出来ていた。

ゆらめく粉雪は水音の周りを舞い、水音の移動に合わせて粉雪も動いていた。

小さな粉雪は一点に集まっていくと白い球体へと変わっていた。

それを繰り返し、幾つもの白い球体が水音の周りを浮いていた。

水音の周りに白い冷気がまとわりつき、流れる様に消え去った。

その後に、濡れていたはずの水音の服は濡れる前の姿へ戻っていた。それは、乾いたというより水分を取り除いたという方がしっくりく

る。

凍りついたドアの前に立つと、水音はほんの少しだけ首を傾けた。それに合わせて長い赤髪が顔に掛かる。目の前に自らが凍らしたドアが在った。

右手をそのドアにかざした。

水音のストレートの赤髪がフワツと少しだけ浮いた。

同時に凍りついていたドアがパキッと小さな割れるような音を立てた。

凍りついていたドアは更に被せるように、凍っていった。

パキパキパキ！と音が何度も響く。

パキン！と大きな音を立てると、ドアはバラバラと崩れていった。凍りついていたドアは唯の破片へと変わった。

そのドアの先に、

黒いショートをなびかせる親友が居た。

俯く目は床をみつめる。

その瞳は赤く輝く。

その瞳は狂気を示す瞳。

第16話 レヴィアタン【Leviathan】（捻れた水使い）
VS デストロイヤー（破壊で示す者）

突然に破片へと変わるドアに、今井は反射的に目が行った。
氷の破片の後には水音が立っていた。

2つ縛りの赤髪が下ろされていた。

その姿に、今井は水音が無事だった安心より不安が脳裏に過った。

最初に声を掛けたのは美奈だった。

「水音：！」

瞬間、

ヒュンツと美奈の顔の横を何かが通った。

え？と小さく声を上げてソツと掠めた頬を掌でなぞった。

赤い血が掌を少し染めた。

頬が切れていた。

『切れる』というより『斬れる』といった方がしっくり来る気がした。

それほどスパツと切れていた。

そこで水音の周りに幾つもの白い球が浮いている事に気づいた。

（何だ？）

今井が茫然と水音を見ていると、その内の一つがパキツという小さな音を立てながら細い針状へと変わっていった。

再びヒュンツという音がするとその針状の物は消えた。

同時に美奈が素早く右手を自らの目の前へと出した。

一瞬、今井には美奈が何をしたのかが解らなかった。

美奈の右手に集中すると、人差し指と親指で細い針を掴んでいた。
それは先程の水音の周りにあった針状の物。

「・・・へえ」

親指と人差し指でその針状の物をクルクルと回していると、針状の者はゆっくりと形を崩した。

（あれは…氷？）

針状の物は液体へと変わり、美奈の掌を湿らした。

美奈は湿った掌をグツと丸めると拳を作った。

その拳をジツと見つめるともう一度呟いた。

「・・・へえ」

水音がゆっくりと掌を美奈に向けてかざした。

美奈は自らの拳から水音に視線を映した。

明らかに様子がおかしい事は今井にも直ぐに解った。

嫌な予感が過った。

水音が顔を挙げた瞬間、嫌な予感の的中する。

黒い瞳が深紅の瞳へと変わっていた。

「マジかよ…」

そんな言葉が漏れた。

茫然としている今井に美奈が振り向いた。

今井と美奈の視線が一瞬だけ交差する。

だがそれは一瞬で、振り向いたと同時に回し蹴りが今井の胸に直撃した。

「あ…があ！？」

苦痛の声と共にバキィ！と乾いた音がした。

ヒビの入っていた今井のあばらが美奈の一撃で完全に折れた。体が浮くと、そのまま壁へと激突した。

そのままズルズルと床へ落ちて行った。

「何しやが…る…！」

声を出すと、横腹に激痛が走った。

そのまま一周した美奈は今井の方を見ず、背中を見せたまま冷たい声を放った。

「邪魔…」

「な…に？」

睨み合う美奈と水音。

凍りつく空気、戦闘の始まりの一步手前といった状態。

（何で…？）

水音の目は、おそらく『マインド』により目が赤い痕へ変わっていた。

今井には何があつたか解らないが、操られているはずの美奈と水音が睨み合っている。

（仲間じゃないのか？）

操られている2人に戦う理由なんて無いはずだ。
無いはずなのだ。

「何でそんなに敵意を向けるかなあ…」

先程の冷たい声とは違う悲しそうな声。

「一緒になつたら…戦わないで済むと思ったのにな」

あの明るい美奈からは信じられない、震えている声。

（なんだよ…それ？）

一緒に、とは同じ操られている状態になったらという事だと今井は認識した。

どうやらこの状態は、美奈本人にも解っていない様だ。

唯、解ることは美奈は水音を仲間にしようとした。それは殺したくないから。

最早、操られている美奈自身の苦肉の策、水音を想う友情。

「そんな事が…」

驚異の精神力が操られてもなお、忘れない友情が在るのか。

今井は感動していた。そんな真剣な美奈に。

「何で…」

美奈が小さく零した。

「何で…」

美奈は一度掌を開くと、ゆっくりと拳を握りこんだ。

「何で…」

声の震えが止まっていた。

「何デ…」

そこで今井は美奈の様子がおかしい事に気づいた。

自らの精神力と、洗脳の力が美奈自身の中でグチャグチャに掻き回される。

理性が崩れる。

今井には、気のせいか嗚咽で漏れる声が嬉しそうに聞こえた。

「何で何で何で何で何で何で何で何で何で何デ何デ何デナ
ンデナンデナンデナンデ！」

美奈は大きくかぶりを振る様に頭をを大きく振った。

「！？」

叫び声が廊下に響きわたる。

「戦ったら止まらない！！戦ったら殺してしまう！！殺したくない！！殺したい！！駄目エ！！駄目駄目駄目駄目駄目！！！！」

「み…美奈ちゃ…」

突然の豹変に今井は目を見開いた。

水音の表情は変わる事は無い。

唯唯、美奈を見つめる。

瞬間、美奈が目の前から消えた。

美奈は瞬時に水音の目の前に移動した。

右手を深く後ろに引き、タメを作るその拳が美奈に振り下ろされた。

バキン！！と割れる音が響き渡る。

水音が再び瞬時に氷の壁を作ったのだ。

しかし、先程と同じ様に美奈の力押しで氷は碎け散った。

拳はそのまま水音の顔面を捉えんと走った。

ツゴ！！と鈍い音が響く。

（直撃！？）

今井の視線が美奈を捉えた時、既に鈍い音がしていた。

確かに美奈の拳は直撃していた。

しかし、水音は目を細めるだけで、動く事は無かった。

美奈が殴った部分に薄い何かが張っていた。

（あれは…？）

その光る薄い膜は生きているかのように蠢くと、美奈の拳にすざまじい速さで纏わりついた。

「あ…あ…！？」

慌てて美奈は拳を放し、距離を取った。

拳に着いた膜は除所に広がっていった。
銀色に輝く液体は腕を完全に覆った。

水音が腕を美奈に向けた。

瞬間、周りで浮かんでいた大量の氷の針が美奈に向って飛んだ。

「つく……！」

得体の知れない液体で動かない腕を庇いながら瞬時に足に力（能力）を入れると横つ跳びに高く飛んだ。

美奈が居た場所に幾つもの突き刺さる音がした。

水音の赤い瞳は美奈に向けられ、離れる事は無い。

両手を美奈に向けると、水音が小さな声を漏らす。

「水の……柱」

水音の両手の前に大きな水球が作り上げられると、弾丸の様に美奈に向って走った。

いくら速く動ける美奈でも空中で動く事は出来ない。

そのまま水の塊が美奈に直撃した。

「……！」

そのまま美奈の体は宙を浮くと壁に叩きつけられた。

「ぐ……う！」

呻き声が美奈の口から漏れた。

美奈が床に崩れ落ちると、そこに水音の追い打ちによる氷の針が飛んだ。

床に足が付いた瞬間、既に美奈の姿はそこに無かった。

能力の瞬間的な速さが廊下を駆け抜ける。

同時にまだ動く左手を後ろに引き強くタメを作る。

一瞬で縮まる、水音と美奈の距離、反応が遅れた水音は、今度こそ

モロにみぞおちに入った。

バキィ！！という音と共に水音が吹っ飛んだ。

壁にぶち当たると、美奈と同じ様に床に崩れる。

美奈に殴られた部分がキラキラと光りながら崩れた。

瞬間的に作り出した氷が美奈の拳の威力を殺した。

しかし、それでも完全に殺す事は出来ず、無造作に立ち上がる水音の脚がグラついた。

美奈は水音を見下ろす様に睨みながら、口から赤い物を吐いた。

赤いソレは壁にぶち当たった衝撃による物。

水音の口の端から血がツーツと流れる。

水音と美奈の赤い視線が再び交差する。

（なんだこれは！？）

その全てを見ていた今井には何が起こったか解らない。
早すぎる攻防。

何よりも、水音が美奈と互角以上に渡り合っているのが『ありえなかった』

今井は美奈の実力は知っていた、知っていた上で水音が勝てる勝率は皆無の『はず』であった。

だが今の水音はあまりにも違っていた。

「強いじゃん……」

そう零した美奈が笑った。

美奈の体は銀色に光る液体で体半分が覆われていた。

パキパキと音を立てながら、最初に液体が広がった右腕が凍りだした。

美奈の体がぎこちなく揺れる。

体が動かなくなっている。

今井にはそういう風に見えた。

水音の見せる初めての技、氷と水以外に見せる『液体』。

動かない美奈に水音は左手の人差し指で指差した。

（！？、空気が変わった？）

同時に水音の周りがキラキラと光りだす。

次に体を横に向けると、右手の人差し指、中指、親指で掴む仕草を見せ、左手と垂直に胸の位置まで引いて見せた。

周りの光が水音の一点に集まっていく。

向けていた人差し指を、細長い物を掴むように縦に握る。

光が集まると、そこに長い弧を描く光る透明な棒が現れた。

目を凝らさなければ解らない程の細い透明の糸が棒の先と先に繋がっていた。

それは弓と呼ばれる武器。

飾り付けの無いシンプルな弓は、演舞に用いる物の様に細長い。

（水音ちゃんが…武器！？）

今迄に水音が武器を持つ所は見た事が無い。

情報人として働く今井に『知らない』という事は許されない。

高校に入る前から水音の事は知っていた。

今までに水音が武器を持つというのは聞いたことが無かった。

そんな考えをよそに、水音は動けない美奈に標準を向ける。

水音の周りの雪の様な小さな白い球が次々と細い氷の針へと変わる。その針の向きは全て美奈に向けられていた。

今井の背中ではゾワッと寒気が走り抜けた。

今の水音に躊躇は無い。

初めて見る殺意に満ちた水音の目。

「ダメだ！！水音ちゃん！！」

今井は叫んでいた。

昨日まで笑い合っていた2人が目の前で殺しあっている。

優しかった水音が美奈を殺そうとしている。

いつも楽しそうで、笑っていた美奈が親友に何度も拳を振るった。

（なんだよこれ…）

今井は奥歯を強く噛み絞めた。

何も出来ない自分が、力の無い自分が悔しくて。

目の前の現状をどうする事も出来ない。

声を上げる事なら誰でも出来る。

情けなく叫ぶ自分が居た。

狂ったように叫ぶしか無かった、この声が届きますように。

何て非科学的な事を考えながら。

闇の世界は沢山見て来たつもりで居た。

情報人という仕事は嫌でも残酷な情報を頭の中に焼き付ける。

だからこそ思い込んでしまっていた。

だが、違った、今、本当の闇を見ている気がした。

自分の考えの甘さを嘆いた。

「クソ！クソ！」

立ち上がるうともかくも、足は言うことをきいてくれない。

ミシミシと折れたアバラが軋む。

幸せな学校に戻って欲しいと、願いたかった。

今井の思いも知らず、美奈の指が羽から離れる。

同時に水音の唇が小さく動く。

『断絶の矢』

友の命を絶ち切る断りの矢が美奈の心臓を狙う。

瞬間、矢の羽からペンシルロケットを思わせる水の飛沫が噴射した。その勢いに乗せた輝く矢は、動けない美奈に向って真っすぐに飛ぶ。ありえない速度は風を起こし、矢の通った後の蛍光灯は次々に割れていく。

ワンテンポ遅れて、水音の周りの大量の氷の針が美奈に向って飛ん

だ。

氷の針は小さな孤を描きながら大量の流れ星の様に容赦無く降り注ぐ。

今井が目を強く見開いた。

自分の知っている人間が：

美奈を中心とし、１メートル内に挟れる地面のコンクリートが砂煙として舞い上がる。

砂煙がゆっくりと晴れていく。

今井の目が驚愕で更に見開く。

そこに美奈の姿は無かった。

美奈は水音の能力で身動きは取れないはずだった。

しかし、美奈はそこにいなかった。

大量の血が美奈の行き先を示していた。

水音の首が血の先にグリンツ！と回った。

その機械の様な反応に今井は背筋を寒くする。

水音の視線の先に、血だらけの倒れている美奈が居た。

肩に水音の放った『断絶の矢』が突き刺さり、体中に幾つもの氷の針が刺さっていた。

美奈は瞬時に、まだ凍っていない左足に力（能力）を注ぎ、強く横に飛んだのだ。

心臓を狙う『断絶の矢』を完全に避ける事は出来ず、肩に突き刺さった。

美奈が先ほど居た場所から、美奈が倒れている位置にまで、夥しい血が流れていた。

ボタボタと赤黒い血が肩から流れ落ちる。体の到る所からも血が流れている。

当たり前ながらも瞬時に飛んだ時に、噴き出した血は、生きている量とは思えなかった。

ゴフツと美奈の口から血が噴き出た。

「あ……あああ……」

美奈は空中を仰ぐ。

廊下に美奈のシャウトが響き渡る。

（……………な！）

ビリビリと肌に伝わる振動に今井は言葉を失う。

「……………」

水音は表情一つ変えず、再び美奈に輝く弓を向ける。

掴む仕草を見せ、後ろへ弾くと光が瞬時に集まり矢の形を形成する。
再び美奈の心臓へ、狙いを定める。

弦を放すと同時に再び矢から水飛沫が飛び発射した。

血だらけの美奈に最早避ける力は無いと、今井自身にも解る。

美奈は強く歯を噛み締め、矢へと顔を向ける。

息を強く吸い込み、右腕を後ろに引いた。

「あゝあゝあゝあゝあゝ！！！！！！」

美奈が迫る矢に合わせるように拳を振った。

同時に、衝撃が美奈の体に響く。

体中から血が流れる。

『断絶の矢』と美奈の拳がぶち当たった。

コンマ数秒だけ、衝撃で矢が止まった。

しかし美奈が腕を振りぬくと『断絶の矢』は碎け散った。

水音の表情が少しだけ動いた。

「まだ…まだあ！」

目の前で立っている少女の足元には血の池が出来ていた。

（…？）

その姿を見ていた今井は違和感を覚えた。

その違和感の招待を掴む事が出来ない、胸の中でモヤモヤしたものが広がる。

（なんだ…？）

少女は迷わない。

右足で地面を蹴った。

瞬時に水音の矢が放たれる。

最大速の2つのスピードは一瞬で距離が詰まる。

美奈が頭を傾けた、顔のすぐ横を『断絶の矢』が通り過ぎる。完全に避け切れず、頬の皮膚が切れる。

外れた『断絶の矢』は、空中で霧散して消えた。

美奈は水音の直ぐ目の前まで来ていた。

振り被る右は水音の顔面を狙っている。

水音の顔の皮膚に、薄い液体の膜が現れる。

（あれは、さっきの！）

最初に美奈が触れ、広がっていく液体。

今井には水音が不敵に笑った様に見えた。

そして、美奈はハッキリと不敵に笑った。

振り上げた拳は水音では無く、地面に叩きつけられた。

コンクリートの破片が飛び散る。

予想外の行動に水音がひるんだ。

一歩後ろに引くと、コンクリートの破片が水音の目に飛んだ。

慌てて眼を閉じるが、直ぐに目を開いた。

目を開くと目の前に美奈が居た。

右足を前に左足を後ろにし、両手とも握りこんだ拳に左は脇を閉じた体制、突き出した右の拳は水音に触れないように間を開けて腹の前に置かれていた。

（あの構えは…！？）

今井にはソレに見覚えがあった。

美奈と水音はすぐ近くにいた。

赤い瞳は無表情で美奈の顔を覗く。

美奈は嬉しそうに笑っていた、さっきまでの狂ったような衝撃が嘘の様に。

「アッハッハ！あ・た・し・の勝ちィ」
楽しそうに笑い声を挙げた。

美奈の純粹な黒い瞳が水音を見つめていた。

「あ…え！？あ！？」

今井がワンテンポ遅れて、異変に気づいた。

美奈の瞳が赤から元の黒に戻っていたのだ。

「ばあいばい」

美奈の樂觀的な声と共に、右足の親指に全体重を掛けて、腰を回す。拳は水音に触れずに、放たれる。

ドオン！！という音が響き渡った。

音とともに美奈が宙を浮く。

そのまま壁に激突すると、壁に亀裂が入った。

ゆっくりと床に落ちると、ガクツと首を落とした。

「ワ…ワンインチパンチ…」

今井が声を漏らした。

「アッハッハ！本当は寸勁すんけいって名前なんだけど…」

血だらけの少女は今井にそう言いながらも、いつもの笑顔を見せた。

「ね」

小さく零すと、そのままゆっくりと冷たい床に倒れた。

第16話 レヴィアタンVSデストロイヤー - 完 -

第16話 レヴィアタンVSデストロイヤー（後書き）

はい、今回の話は戦闘一色でございます。

最初は脇役予定の美奈が、ここまでいくとは…

今回の、水音の別名として出したレヴィアタン【liwjatan】ですが、本当はコレ英語で【Leviathan】リヴァイアサンです。旧約聖書に出てくる海の怪物です。

ちなみにレヴィアタンはヘブライ語です、ヘブライ語でレヴィアタン【liwjatan】の意は「ねじれた」「渦を巻いた」です。ヘブライ語の方が元の様ですね。（よくわからんが）

後、美奈が最後に使った技、『寸頸』は実際にあります。

深く説明するとネタばれになりますのでやり方だけでものせようと思ったのですが、これがどうして…、一人寂しく「エイヤ！トウオウ！」とか言って頑張りましたが、トーシロには無理です。自分でお調べになって、同じ思いをして下さい。

それではここいらで、

遅い更新ですが、これからもお願い致します。

第17話 青空の少女と子供 1（前書き）

水音と美奈の戦いは終わった。

だが、まだ見えない敵との戦いは終わって居ない。

敵の量はあまりにも多く、友すらも牙を向く

和也、今井、水音

少なすぎる人数は、『まだ』立ち向かう事は出来ない。

立ち向かう為に必要な人間。

4人目は、狂気に染まった少年。

狂気を消すのは、かつての少女。

第17話 青空の少女と子供 1

冷たい廊下に、幾人もの生徒が居た。

それを座って見ている『ボク』が居た。

廊下に生徒が居る事是不思議ではない、だが一人一人の姿に異常があった。

ある者は、濁った赤い目を虚ろにし、フラフラと歩き周り、ある者は、奇声を上げながら、血が出るほど頭を掻き耂り、ある者は、廃人の様な瞳をギョロギョロとしながら手足を投げ出して座っていた。

その異様な世界は、少し前までそこに在った学園では無かった。若々しく明るい筈の学生達には、その姿は無かった。

それは、『狂気』に蝕まれた世界。
様々な『狂気』は、まだ人生経験の少ない筈の学生達には在る筈の無い物。

アウトサイダー

その普通では無い人種達は、普通の人種達に蔑まれた者が多い。この学園は、そういった人間達の最後の行き着く先であった。

『ボク』もその一人だ。

口に出さずとも、辛い過去を持つ物が多い。
それは、そのまま『一つの狂気』として心の奥底に存在した。

奥底の『狂気』は、再び呼びだされた。

平穩に、やっと幸せに暮らせて、楽しい学園生活だった世界が

崩された。

再びアウトサイダー達は、苦しみ、悲しみ、怒り、様々な負の感情を爆発させた。

そして、『ボク』も。

様々な行動をする生徒達にも2つの共通点があった。

一つは、赤い瞳。

もう一つは、全員が武器を持っていた。

『狂気』を示す、傷つけるための『凶器』

そこは狂った世界。

在った世界は、そこには無い。

その狂った世界に、イレギュラーな存在が居た。

地獄に天使が居ない様に、

天国に悪魔が居ない様に、

あまりにもその風景に不釣り合いな矛盾した存在。

冷たい廊下を、ペタペタと音を立てて歩いている少女が居た。

黒いストレートの長髪、その髪の上に乗せた物は茶色い麦わら帽子。

白いワンピースが歩く度に揺れる。

スラッとした容姿は一目でスタイルが良い事が解る。

だが、麦わら帽子から除く筈の目は眠っている時と同じ様に目蓋を閉じていた。

少女は目を閉じている筈なのに、歩く姿にまどつく様子も、フラつく様子も無かった。

狂気で狂う学生達に、気にもかけず、真っ直ぐに廊下を歩いていた。

『青空』

かつて怜次に出会い、見えない瞳で怜次をみつめ、空を指差し『青空』と零した少女。

その容姿は。

とても、とても、綺麗で、『ボク』は直視出来なかった。

・
・
・

恥ずかしくて。

第17話 青空の少女と子供 1

冷たい廊下を、少女が歩いていた。

裸足の足にひんやりとした冷たい感触がある。

廊下には少女以外の人間も居た。

だが、少女にはそれが人間には『見えなかった。』

目を瞑る少女には、光景が見える事は無かった。

だが、少女には『視えていた。』

色の無い形だけの世界。

ある者は、濁った目を虚ろにし、フラフラと歩き周り、その度にボ

口ボロと腐った体が床に落ちていた。異臭が鼻に付き、少女が眉を潜める。

ある者は、奇声を上げながら、何本も体から伸びる手で体中を掻き篦り、血だらけになっていた。

ある者は、体の半分が砂の様に崩れており、片方しか無い廃人の様な瞳が不気味に動いていた。

少女は本当に狂った世界に居た。

その異様な光景は、見え無い少女の『イメージ』でしか無い。

目の見えない人間は、その不便を埋めようと周りの機能が発達し、それが目の代わりとなる。

生徒達の直線的な感情は、無理矢理に少女の肌に付き刺さる。

それが、少女の意思とは無関係に見えない筈の世界を視せていた。

だが、そのイメージは少女の想像では無く、狂気で狂った者達の『心』を表していた。

少女は歩きながら小さく零した。

「つまらない…簡単に終わるのか…」

その言葉は、誰に向けるでもなく発せられた。

少女が突然立ち止まった。

廊下の先に続く通路は無い。

少女の前には壁が在るのみであつた。

しかし、少女は踵^{きびす}を返す事は無かつた。

様々な異様な姿をする者達の中に、一人だけ不気味では無い姿をした者が居た。

少女の目の前の壁に、三角座りをして顔を伏せている色の無い『子供』が居た。

子供の直ぐ隣に長い棒が立て掛けてあつた。

「つまらない、と思わない・・・？」

少女は子供に語りかけた。

その声は優しく、透き通った綺麗な声。

子供はビクツと体を揺らし、恐る恐る、と言った風に顔を上げた。
怯えた赤い瞳は、少女を見ていた。

少女は、子供を『視ていた』

「狂気に晒され、まだマトモな姿をした人間は初めて視た」

少女は、先程とは全く関係の無い事を言った。

子供は困惑した様に首を傾げる。

少女は続けた。

「綺麗な心、無垢とも…純情とも少し違う…」

少女は目を開いた。

濁った、見えない瞳は、子供を見据えた。

その時、子供の怯えの色が消えた。

ゆっくりと口を開き、

「きれー…」

子供の声変わりしていない高い声が小さく零れた。

子供は少女から目を逸らした。

恥ずかしそうに、再び顔を伏せた。

少女は薄く笑って見せると、子供を優しく見下ろした。

「私を綺麗と…？目の見える者の綺麗の基準は解らないけれど…私
はあなたの心の方が綺麗に見える」

子供は再び首を傾げた。

「こころー？」

少女は、再び薄く笑う。

「そう、心…」

少女は、そこで思いついた様に立ち上がった。

突然の事に子供は再びビクツと体を揺らした。

「おもしろくなるかな…？」

少女は子供の頭に手を置くと優しく撫でた。

「あなた一人で、逆境を覆すかな？物語は変わるかな？」

子供には少女の言葉の意味が理解出来なかった。

少女は別に理解させるつもりは無かった。

唯、独り言の様に口ずさむ。

「今、この学校で理性を持つのは『4人』だけ…嫌、『別にまだ一つ居る』が、たったそれだけで救えるはずが無い、たった一人で流れは変わるのか…5人で救えるか…？」

少女はクスクスと小さく笑った。

子供は不思議そうに赤い瞳で少女をみつめる。

「おもしろそうだ」

少女の子供を撫でる掌が薄く光った。

「あなたを助けよう、私は『青空』…また会えたならそう呼ぶといい」

その一言と共に子供は廊下に倒れ伏せた。

少女はそれを視届けると、踵を返し、元歩いてきた道に戻った。

小さく笑みを作り、再び零した。

「名が『青空』…？自分でも笑ってしまふな…」

少女は寂しげに笑った。

「色を知らない者が何を言っている…」

『青空』は一人、廊下を歩いていた。

異形な者達等、少女は気にしない。

自らも異形なる者だから。

場所は変わる。

長い廊下で対峙するは、2人の少年。

少年達の間隔は3メートル弱。

片方はカチューシエで前髪を上げてオールバックにしている少年、正人。

手に持つサーベルを、縦に横にと何度も大振りした。

もう片方の少年、和也は正人がサーベルを振る度に何度も宙を飛んだ。

「どしたよ和也ア！」

サーベルをヒュンヒュンと音を立てて回している正人が居た。和也を見下すように赤い眼が爛爛と輝いている。

「ツチ…」

軽い舌打ちの後、ゆっくりと立ち上がる。

「こんなじゃー！つまんねーって！！」

言葉と共に、正人がサーベルを振り下ろす。ヒュン、と音を立ててサーベルが空を切る。

（またか！）

立ち上がりと共に、体に衝撃が走った。

「クッソ…が！」

言葉と共に撥ねられた様に体が飛ぶ。

面白い程に体が何度も跳ねた。

芯に響く衝撃に、体が思うように動かない。

追いうちの様に再びサーベルが振り下ろされる、震える体は動かない。

舌打ちと共に和也が再び宙を飛んだ。

「あ、ぐ…う！」

固い床に打ち付けられる度、痛みが走る。

正体不明の攻撃は和也を苦しめていた。和也は正人の能力が掴めな
いで居た。

そして武器が無い状態は予想以上に和也を苦しめていた。

能力は武器が無ければ出せない、
というわけでは無い。

和也の『火』の能力は水音の『水』と違い、自分自身も傷つける。

武器を通さなければならぬ能力者は多く存在する。

和也の場合、武器を使わなければ自分自身を焼いてしまうのだ。

「最初の威勢はどうしたよ？ヒヤハ」

正人の声が上から降りかかる。

攻撃をしないのは余裕か、和也に対しての皮肉か。

「調子に……乗んな」

立ち上がるも、足が微かに震えていた。

それを見ていた正人は、大きく目を見開いた。

堪え切れなくなつた様に体を仰け反つた。

[illegible]

!

甲高い笑い声が響き渡る。

「やっべー！やっべええええ！！ハイになっちまう！！」

それを見る和也が目を細めた。

（完全に飲まれているか・・・）

覺えの有る狂つたように見開かれた目。

和也は小さく零す。

「肉体か……心か……どちらにせよ壊すしかないな」

狂気に染まった正人の赤い瞳は爛々と輝いている。

それを見た和也の純白の瞳が薄く光を見せた。

助ける・・・！

和也は小さく零した。

そしてすぐに、自分の零した一言に違和感を持った。

（・・・助ける？俺が？）

他人は他人、と考える部分が和也にはあった。

よく一緒に居る正人は決して他人では無い。

洗脳で踊らされる正人を哀れに思う所もある。

助けれる可能性は無いわけでもなかった。

だが、洗脳を解くリスクは極めて低い。

倒すのが一番手っ取り早い方法だった、それは一番解り易い回答だった。

それは頭で考えた結果の答え。

感情に流されない、和也のやり方。

だが、『心』の答えは違った。

‘助けたい’

と、

和也が小さく笑った。

不敵でも無く、不気味にでもなく、唯優しい微笑を浮かべた。
(変わったかな・・・?)

あの時、水音を助けたいと思った。

あの時、怜次を友と思えた。

今、正人を助けたいと思えた。

もし、自分が変わっているのだとすれば、それは、良い事だと思える。

変わったのは、この『学校』に来たから。

うるさくて、騒々しくて、腹が立つ。だが、嫌いになれない。

この学校に来る前には無かった世界。

目の前で敵意を向ける正人やクラスメート達の暖かい心が自分を変えてくれたのだと思った。

『あの娘』と同じ、暖かい心。

そんな、この学校の生活が気に入っていた。
これを妨げる者達を、和也は許さない。

第17話 青空の少女と子供 1 完

第17話 青空の少女と子供 1（後書き）

はい、第17話でした〜
更新が本当遅くて・・・

しかも、後書きと前書きを後から追加するという・・・
何かもう色々、駄目だ・・・

毎度更新早くしよう！とか考えてるんですけど、中々難しいものですね。

駄目だ、部活やめたい。

はい、愚痴です、ごめんなさい。

前回、水音達の話だったので今回は別のメンバー達の方の話もと、まあ、大体誰かは予想出来るでしょう。

本当、俺は隠すのが苦手だと思いますわ・・・
技術が欲しいです。

『5人目』が早く出したいですね、気に入っているキャラですので。

それでは至らない小説ですが、次回も宜しくお願い致します。
あ、後、感想頂ける嬉しいです。

第18話 救いたい敵（前書き）

立ちはだかるは、クラスの友

戦わなければならない。

戦えば倒す。

だが倒せない。

救いたい。

どうすればいい

戦う相手を守りたい。

それは謎々の様な矛盾。

第18話 救いたい敵

戦う相手を救う方法を知らない

それは救う必要が無かったから

戦う相手を守る方法を知らない

それはその様な状況になった事が無いから

そんな状況になる世界にいなかった

そんな必要になる人間がいなかったから

自分の知らない世界がそこに在った

何てめんどろな世界だろう

だけど、この世界が

俺は好きだ。

正人は最早、勝負のつもりは無かった。和也と自分には圧倒的な力の差が有ると思い込んでいた。
頭の中では、自分と玩具という考えしか無い。

「こんな気持ち久しぶりだぜエ！！トンじまいそうだ！！」

正人の言葉に和也は不思議に感じた。

「久しぶり・・・？」

そんな和也等、気にせず今井は楽しそうな声を上げていた。

（能力が解れば対策を立てられるんだが…）

正人はニヤニヤと笑みを浮かべながら、和也をみつめていた。

（完全に嘗めてやがるな…）

だが、和也はそれで怒る事は無い。

寧ろチャンスだと考える。

（何かを飛ばしているのだとは思うが、外傷は無い…物質的な攻撃じゃないとしたら）

和也が唾を吐き捨てる。

吐き捨てられた唾には赤い血が混じっていた。

（何にしても情報が少ないな、時間はあまり掛けたくないんだが）
そこで、ふと考え直す。

（能力は、サーベルを振ってから俺に当たっている、直線に何かを飛ばしているなら簡単に避けられるな）

「んだよ、考え事かア！？和也ア！」

そう叫びながら再びサーベルを振るう。

和也は瞬時にその場から右に飛んだ。
それを見た正人が片眉を上げる。

先程の様に体が弾け飛ばない。

和也がニヤツと笑った。

「フン…！ネタ（能力）が割れなくとも対した事は…」
と、言い切る前に体が弾け飛んだ。

「ぶふえっ！？」

間抜けな声と共に、再び和也が空中を浮く。

（…？違ったか？）

そんな風に考えながらも床に叩きつけられた。

「ッ痛…」

体の芯に響く激痛が和也を苦しめる。

仰向けで倒れている和也は、茫然としながら考えていた。

（おかしいな…理屈は間違っていないと思うんだが…しかし、ワント
ンポ当たるのが遅かった？）

うつ伏せの体を転がすと、仰向けになった。

蛍光灯の光が目に入る。

余程の余裕か、正人は追い打ちを掛けない。

それを尻目に和也は頭の中を整理する。

（正人は能力を使うとき絶対にサーベルを振っている、だが最初に
能力を使った時サーベルを使わずに俺を攻撃した。別にサーベルを
使う必要はないのか？いや違う、わざわざ攻撃のタイミングを読ま
せてくれるわけがない、サーベルを振らなければ能力は使えない。
だが、『あの時』はサーベルを振る必要が無かったんだ。てことは
…『あの時にサーベルを振らなくても能力が使える条件があった』
ってことか）

和也は武器が無くとも、ハンデが有ろうとも、どれだけ不利でも、敗北する気は無い。

過剰意識とは違う、別の思い。

唯、負けれない、負けられない、理由があるから。

起き上がろうと、体を横にした。

その時、すぐ横に液体がある事に気づいた。

反射的に和也は液体を凝視する。

（これは…水？）

それは、少し前に水音が能力の失敗により無造作に飛ばされた水溜りであった。

「…？」

風何て吹かないはずの廊下で小さな水溜まりの中に波が立っていた。それは水溜りの真ん中から、ではなく正人から和也に向けて孤を描く形で幾つもの波紋が立っていた。

（これは…）

和也の脳裏に正人が最初に能力を使った『あの時』の瞬間が蘇る。

（正人は『あの時』たしかに言った、あの言葉の意味は…！）

「つぶ…！」

そんな和也など知らず、正人は噴き出した。

「ぎゃはははは！！ダッセ！！カッつけてそれかよ！」

和也は壁をつたいながら立ち上がろうとする。

和也は立ち上がる際に、透明のガラスに触れた。

窓ガラスには自分の顔が映っていた。

映る自らの顔は、無意識に微笑を浮かべていた。

それを見た正人は、更に口の端を上げた。

「頭ア可笑しくなったか？」

正人の言葉に反応せず、和也は正人を見据えた。

和也は少し間を空けてから口を開いた。

「理解した、お前の能力…『揺れ』だろ？」

正人の表情が崩れた。

表情は瞬間的に焦りに変わった。

だが、直ぐに表情は元に戻る

和也は、その瞬間を逃さない。

「何を根拠に…」

（当たり前…か？）

正人の表情を観察する。

確実に戸惑った様に見えたが、まだ確実に予想が当たっているとは思えなかった。

和也のはあくまでの予想、核心では無い。

「最初に言っただじゃないか、お前自身が」

予想を確実な核心に変わるまで油断はしない。

「……何を」

不安を籠めた様な声が正人から漏れる。

（食いついてきた！心が揺れた！）

洗脳されている筈の正人は、直線の感情しか無い。
今の正人の直線の感情は『喜び』

それ以外の『不安』や『迷い』は正人自身の感情。

「『良い揺れじゃん』ってな」

「それだけで…？」

「少なくともそれがヒントになった」

その言葉に反応する様に、正人の赤い眼が『ぶれた』。
慌てて正人はブンブンと首を振った。

そして、和也を見据える顔に、不安や迷いは消えていた。

その顔には狂気を示す喜びの笑み。

「惜しいなア！正確には『振動』だ」

「フン…惜しいか…」

「解ろうが、解るまいが、俺にや勝てないからだよ！」

（ふん、ワntenポ当たるのが遅かったのは空气中を音が移動する際に円状に広がるからか…）

和也に最初に当たる振動の円の孤の部分をずらした事により、当たる筈だった芯の場所からずれたのだ。

（水音の残した水溜りが孤を描いたのも空气中の振動によるものか）

「俺の別名は『クエーカー！！（振動）【Quaker】』和也ア
！！解った所で俺の攻撃は除けれねエ！」

正人はサーベルを掲げた。

（サーベルを振り下ろすのは微弱な振動を作り出し、自分の能力で強化して爆弾の様な衝撃を作り出す為か。サーベルを振らなくても

俺が吹っ飛んだのは、あの時にサーベルを振らなくても地震により
空気中に振動が出来ていたのか）

サーベルを力一杯振り下ろした。

振動が空気中を通し、和也に迫る。

正人が引き裂くような笑みを浮かべた。

（振動を出した部分を中心に円で広がれば、確かに避ける事は出来
ない、だが・・・）

和也は横向きに思いっきり拳を振った。

和也の拳は窓ガラスに思いっきりぶち当たる。

バン！という音が廊下内に響き渡った。

「！？」

突然の行動に正人は理解出来なかった。

（関係ない！優勢は、変わらない！！！）

正人はサーベルを降った形で止まっていた。

和也も、窓ガラスに拳を付けたままで止まっていた。

正人の顔から笑みが消えていた。

「振動が消えた…？」

空気中を通し円状に広がる筈だった振動は、空気中で突然消え去っ
た。

振動を能力とする正人にはハッキリと消え去る感覚が解った。

赤い瞳が和也を睨む。

「何をした」

和也はゆっくりと窓ガラスから手を放した。

「自分の能力の事ぐらいもっと勉強した方がいいんじゃないか？」

正人の顔が強張っていく。

「空気の振動を瞬間的に強化しているのなら、強化する前に同じ振

動で相殺すればいい」

（窓ガラスを叩いたのは振動を作り出す為か！）

「振動の強化は瞬間的のみ…そんな円状に広がっていく巨大な力を続けたら確実に死ぬからな」

振動は円状に広がるので、最初から振動を強化すれば自分にも衝撃が当たるだけでなく、広がり続ける振動を強化し続けなければならぬ。

当たる直前に円状の側面だけ瞬間的に強化して衝撃波を作り出す。最初に和也がサーベルを握った際に当たった振動の衝撃波はサーベルを通り越して攻撃したのでは無くサーベルに当たる前にはまだ微弱な振動であつたからだ。

正人が空気中にサーベルを振り下ろす事により微かな振動を作り出すのに対し、和也は窓ガラスを叩き振動を作り出した。

壊れやすく硬い窓ガラスは、一種の『硬い膜』と変わらず振動を作りやすい物質である。

声の様な微弱な振動でも掴み取る窓ガラスは、逆に大きな振動を作り出す事にも適している。

先程まで頭の中で駆け巡っていた『喜び』の中に『不安』が生まれた。

（何でだよ…何でバレてんだよ…一言だけでそこまで解るのか？）

だが、それでも『喜び』はまだ存在した。

（違う、違う、違う違う違う違う…！！）

再び頭を振る、何度も何度も。

何かを振り払う様に繰り返す。

「和也ア……！優劣は変わらない！」

「……」

和也は無言で正人を見据える。

「能力が……ばれようが、能力も使えないお前に負けるわけないだろオ！？」

叫びながら正人はサーベルを振った。

微弱な振動が広がる。

和也は合せたように、再びガラスに拳を振った。

バン！と再び大きな音が振動と共に広がる。

窓から手を放し、手を軽く振った。

「別に能力が使えない何て言ってないだろ？」

窓を殴った右手を正人に向ける。

和也と正人の間で見えない振動が相殺した。

それを見越したように、正人は再びサーベルを振った。
空気を通し、再び和也に振動が迫る。

和也は一直線に正人を見据える。

正人に向けた右手が薄い赤色に光った。

「炎尾！！」

和也の右手から真つ赤な炎が放たれた。

それと同時に、和也は硬いコンクリートを強く蹴った。

炎は孤を描き、空気中に新たな振動を作り出す。

正人と和也の創り出した振動は2人の間で相殺された。

完全に意表を突かれた正人は一瞬、呆然と自らに向かう炎を見据え

ていた。

「！」

我に返るとあわてて横に飛んだ。

すぐ横を赤い炎が通過していく、焦げた匂いが正人の鼻に付く。

正人の背筋に寒気が走った。

（掠ったか！？）

慌てて飛んだせいで着地出来ず、正人はそのまま廊下を転がった。

「っぐ！」

慌てて立ち上がろうとした。

だが立ち上がる瞬間に目の前の和也に気づいた。

炎尾と同時に近づく和也に気付けなかった。

正人の目の前で無表情のまま、足を振り上げた。

和也の蹴りが立ち上がろうとする正人の顔面を捉える。

「っつぁ！？」

サッカーボールを蹴るように力一杯、振りかぶった蹴りは、正人の体を簡単に浮かせた。

そのまま数回硬い廊下の上を跳ねると壁にぶち当たった。

「っつぁ・・・」

鳴咽を漏らすと、手に持つサーベルが音を立てて廊下に落ちた。

その音に、正人は慌ててサーベルに手を伸ばす。

「っぐ！」

サーベルに手を伸ばした手に激痛が走った。

その手を踏み潰す足があった。

見上げた先に、冷たい眼で見下ろす和也が居た。

（！？、この匂い…！）

再び焦げた匂いが鼻に付いた。

見下ろす和也の右手が、赤黒く焼き爛れてていた。

それは先程の炎尾を武器を通さずに、生身で能力を使った代償。

右手からポタポタと血が滴っていた。

「お、お前…」

正人の赤い眼が驚きで見開かれていた。

その顔に『喜び』の感情は無い。

和也はしゃがみ込むと、正人と一直線に見据えた。

赤い眼は、再び『ブレ』る。

和也は焦げた右手で正人の胸倉を掴むと、自分が立ち上がると一緒に持ち上げた。

「っぐ…！」

苦しそうな嗚咽が漏れる。

再び和也は正人を見据える。

白い瞳は赤い瞳をジッと見つめていた。

「クズだな…こんなに弱いとは」

和也の冷たい一言に正人は一瞬理解出来なかった。

正人の顔はみるみる怒りの表情へ変わる。

「何…だと！」

赤い瞳が再び大きくぶれる。

「ザコがいきがるんじゃない…せめてデカ口を叩いても恥ずかしくない位なったらどうだ？ザコ」

「何だとお…！」

正人の怒りに満ちた大声が廊下に響く。

和也は馬鹿にした様に鼻で笑う。

「じゃあ何だ？武器も無く、最初は能力すら解らなかった俺にやられた貴様は？」

「こ…の…！」

抵抗しようと正人は胸倉を掴み、和也の手を引きはがそうと手を掛けた。

その抵抗を遮る様に、和也は左手も正人の胸倉に加えると、両手に力を入れた。

正人の両足が床から浮いた。

「！？」

正人は足をバタつかせるが、和也の手は離れない。

そのまま壁に叩きつけた。

「ぐっあ！」

ガン！という鈍い音が響く。

胸倉を掴む両手を離さず、正人を壁に括り付けた。

放せ！！、と叫びながら暴れるが和也の力は衰えない。

和也はそのまま、そつと耳元に顔を近づけた。

冷たい微笑を浮かべ、それ以上に冷たく声を放った。

「認めるよ…ザコが…」

その一言と共にピタリと暴れるのをやめた。

赤い瞳を大きく、大きく見開いた。

和也は暴れるのをやめた正人を床に下した。

その顔に未だ見下したような微笑は在った。

正人は下を向いたまま、小さく零した。

「てめえ…」

怒りに満ちた顔を上げた。

「てんめエエエエエエエエエエ！」

叫びながら振り上げた拳は、和也の顔面を捉えた。

ドガッ！という鈍い音がした。

和也の顔が後方に飛ぶと、それに合わせて2歩3歩と後ろに下がった。

口の中の鉄の味に、和也は口の中が切れた事を悟る。

だが、その顔の薄い笑みは消えない。

肩を上下に揺らし、荒い息を繰り返す正人は憎しみの表情を和也に向ける。

そんな正人を見て、和也は笑みを向ける。

「目は覚めたか？」

その言葉に正人は我に帰った様に瞳を見開いた。

その瞳は、赤い瞳から元の淡い黒色に戻っていた。

「あ、れ？俺、何で？」

自分の両手を広げたり閉めたりを繰り返し、不思議そうな表情をしていた。

和也は膝に手を付くと下に向かって大きく息を吐き、小さく零した。

「良かった…上手かった…」

和也は好きで悪口を言っていたわけではない。

正人の『怒り』を引き出す為に暴言を吐いていた。

洗脳による直線の『喜び』は、正人自身の感情の『不安』、そして『怒り』が『喜び』を打ち消した。

自身の感情が正人の目を覚まさせた。

感情の洗脳は、感情で打ち消せる可能性は有る。

しかし、それは余程の感情の揺れや洗脳されている人間の精神力が関係している。

和也にとってこれは賭けであった。

上手くいく確証は無かった。

正人は不思議そうな表情のまま和也を見た。

「かずちー？」

その素っ頓狂な声は、和也を安心させた。

そして呼び捨てでは無く、いつもの自分と呼ぶ声が更に安心させた。

「何で？これは？…一体？つか何か顔痛エ…」

正人の声に、和也は顔を上げた。

和也の表情に、先程の冷たい瞳は無かった。

「お！おい！かずちー！何だその手は！？焦げてんじゃん！、え？何？何があつた！？」

ころころと表情が変わる正人を見て和也は唯、微笑を浮かべていた。

嬉しかった。

守れたことが。

壊す事しか出来なかった自分が。

「話は後だ、取り合えずここから離れよう」

そう言くと和也は背を向けた。

和也の言葉は正論だった。

正人の様に操られている人間は沢山居ると考えると、一つの場所に定着してはいけない。

今の疲れ切った和也ならば、連続の戦闘は不利だと考えていた。

「お！おい！待てよ！」

正人は訳も分からず、まず落ちていた自分の武器を拾った。

…パキン

和也の耳に割れる様な音が聞こえた。

不思議に思い振り返ろうとするが、続けて走る様な音に気づくと正人が自分の後を追っていることに気づくと振り返るのをやめた。

異変があれば正人が教えてくれると思ったからだ。
なによりも、にやついている自分を見られるのが、

恥ずかしく思えた。

もう正人は敵では無い、こうやって一人ずつ味方を増やせるかもしれない、と和也は思った。

そこで病室で怜治が言った言葉を思い出した。

『俺に背中を預けてくれよ』

（仲間と言ってくれた、あの男は何処に居るかな…）

仲間を必要とした自分が嬉しかった。

昔の自分から変わっていると思った。純粹にうれしかった。

だが、和也の笑みは消えた。

目を覚まさせる為とは云え、正人の体を傷つけ随分酷い事を言っていた。

（そんなんで…本当に仲間と言えるのか…？）

焼き爛れた右手に痛みが走った。

和也は顔を挙げると、辛そうに唇を噛んだ。

きつと仲間同士は傷つけないモノだと、思った。

だが、自身は傷つけた。

蹴り、殴り、暴言を吐いた。

きつと…

そんな自分は、仲間だとは思えないだろう。

だが、それ以外にやり方思い浮かばなかった。

後ろからの走る音が大きくなっていく。
正人が直ぐ後ろに居るのが解った。

ザン！！！！

肉を切る音が直ぐ耳元でした。

・ ・ ・ ・

倒れていた。

何故倒れているのか理解出来ないで居た。

判るのは、背中の強烈な痛み。

「ぐっ……アア！！」

痛みに声が漏れる。

脈打つ感覚に、大きな傷である事が分かった。

だが、解つても理解出来ない。

倒れる理由が、傷の理由が。

痛みを堪えながら、体を横に向け、顔を上げた。

「！！！！！！」

和也の白い瞳に映ったのは、正人だった。

手に持つサーベルに赤い物を確認した和也は、正人に斬られたと理解した。

だが、わからない。

何故自分が斬られたのか。

淡い黒に戻ったハズの瞳は先程よりも真つ赤な赤黒い瞳に。
その瞳は赤というよりも紅に近かった。

わからない。

何故瞳の色が紅くなっているのか。
確かに目は元の色に戻っていた。

だが、正人の目は先程よりも赤い。

正人は紅い眼で倒れている和也を見下ろす。

先程までの感情的な瞳では無く、機械の様に感情の無い瞳。

正人は感情の無い表情のまま、サーベルを振り上げる。

「正…人…」

友に対し、悲痛の声が漏れた。

声を出すだけで、痛みが体中を走り回る。

（俺は…）

悔しさに歯を食いしばる。

（結局、壊すしか出来ないのか…）

『倒さずに戦う』

そんな世界には居なかった。
だから仲間が必要なかった。
だから仲間を知らなかった。

だから初めて仲間を知った時、

嬉しかった。

守りたいと思えた。

『あの子を』

今度こそ守れると思った。

守れると思ったのに

今度こそ

今度こそ…

和也の思いも空しく、正人はサーベルを振り下ろした。

第18話 救いたい敵 完

第18話 救いたい敵（後書き）

はい、やっぱり更新が遅い桜です。

何かね、もう言い訳出来ないっすよね、

はい、しかも今回の話、書きながら思ったんですけど超めんどくさい！！

和也が戦うと大概こうなるかもしれない、と思い始めてきました。

今回に出てきた『振動』ですが、空気中を円状に振動が広がるとい
うのは、水面に円状に波紋が広がるのと一緒に考えてもらえるとあ
りがたいです。

ちなみに、衝撃波は、空気中の振動がある一定を超えると発生し、
それは爆弾とこの爆発時に起きるものです。

その振動を強化する事によって衝撃波と似たようなものがつくれる
んですねえ〜

難しいですねえ〜僕もよくわかっておりません。

後、窓ガラスが振動を作り安いののは、そういう素材だからです。詳
しく言うとアレなんです、窓ガラスは振動を拾いやすく、例えば
窓ガラスに耳を当てていれば、声の振動が窓ガラスに伝わり、窓ガ
ラス近くの方々の話を聞けたりと、非常に振動に敏感なのです。

それでは今回はここで失礼いたします。

次回もよろしくお願い致します。

ありがとうございました。

第19話 クエーカー（前書き）

違う、違う、違う！

友達だ！！友達だ！！明日また遊ぼうぜ！？明後日も！！次の日も！！ずっと！！ずっと！！
友達なんだ！！大切な…

第19話 クエーカ―

目の前に和也が居た。

正人は理解出来ない。

頭が痛い、顔が痛い、至る所が痛い。

覚えのない異常なまでの疲れがあった。

何でこんなことになっているのか？

「何で？これは？…一体？つか何か顔痛エ…」

俯いていた和也が顔を上げた。

その表情はホツとした様な安心している様なイメージがあった。

正人は不思議そうに和也をみつめると、和也の右手が目止まった。

「お！おい！かずちー！何だその手は！？焦げてんじゃん！！、え？何？何があった！？」

正人の焦りも知らずに、和也は微笑を浮かべていた。

嬉しそうに。

「話は後だ、取り合えずここから離れよう」

そう言っていると和也は背を向けた。

訳が分からなかった。

唯、ボロボロの和也の姿が戦闘の後だという事は解った。

何故、戦闘の後なのかは解らないが、

「お！おい！待てよ！」

慌てて和也の後を追おうとした。

だが、すぐに止まった。

直ぐ横に自分の武器があった。

「……？」

（何故こんな所に俺の武器が……？）

ツジ……

「！？」

頭の中でノイズが走る。

フラツと一瞬眩暈がするが、直ぐに立ち直る。

（何だ……？今の？記憶？）

頭の中を映像が駆け抜けた。

頭が混乱して、はつきりと解らない。

和也の方に目を向けると、大分離れていた。

「お！おい！待てよ！」

そう言つと、頭をブンブンと振つた。

考えている時間は無さそうだ

自分の武器を拾つた。

その瞬間。

…ツジ！

再びノイズが走つた。

先程よりも強烈なノイズ。

「ぐ……あ！」

苦しみで声が漏れる。

よろけながらも、その手に持つサーベルは離さなかった。

（こ、れは！ち、がう！！手が……！）

手から武器が『離れない』

石の様に手が固まっていた。

頭の中で、再び映像が流れる。
今度はしっかりとその映像が見えた。

その映像は、自分が和也を攻撃していた。
絶対に自分がしない筈の事が。

サーベルを振り、和也を傷つけていた。

「あ、う？…あ？」
再び声が漏れる。

頭が痛い。

口からよだれが垂れていた。

「あ…うアア…」
よだれを気にせず、廃人の様に目がグルグルと回る。

頭が痛い！！

パキン！！

ノイズの流れる頭の中に、割れる音が入ってきた。
頭からポロポロと破片が落ちた。

能力制御装置。

和也の頭に付けていた赤いカチューシェが砕け散った。
形を残さずに。

「あ…ああ…」

後ろに回していた髪の毛が、全て元に戻る。

サーベルを握りなおし、和也の後を追った。

口のよだれを拭う。

自分の目は血走った様に熱い。
熱い！熱い！熱い！

和也には直ぐに追いついた。

背を向ける和也のすぐ後ろに居る。

何も知らず和也は歩いている。

それに合わせて付いていく様に歩く。
サーベルを持つ手を頭上まで上げる。

おい、なにするんだよ。

両手でサーベルを握りなおした。

やめろよ！そんな事したら！

意識とは無関係に手に力が入る。
そして振り下ろす。

アアアツ！！

ザン！！

肉を切る感触が手に残る。

血が飛び散る、顔に、床に。

不意打ちに力いっぱい振り下ろしたサーベルは、はつきりと深く斬った。

骨までいったかもしれない。

ハムを斬るように簡単に斬れた。

能力まで使っていた様だ。

ドサツと音を立てて和也が倒れた。

ウァァァ！！何て…ことを！

心の声は届く事も無く、唯『自分』は和也を見下ろしていた。

「グッァァ…！」

倒れている和也から呻き声が漏れた。

普通なら気絶してもいい様な致死量の血が流れているのにも関わらず、和也にはまだ意識があつた。

早く何とかしないと和也が死ぬ！！ごめん！！和也ァ！！ごめん！！ごめん！！

だが、思いも空しく、体は自由に動かない。

助けようとする思いとは裏腹に和也に向けて再びサーベルを振り上げていた。

止めを刺す為に、手に力が入っていく。

そして、クエーカーとしての『揺れ』の力がサーベルに流れていく。自らに作り出す微弱な振動をギリギリまで強化する。

微弱な揺れは振動に、強烈な振動で作り出したソレは、電動ノコギリの様に『削る』

そして、『削る』仮定を超えるとその武器は最大の斬り味を作り出す。

どんな物でも、まるでハムを斬る様にソレは簡単に斬れる。

正人自身の持つ、『確実に殺す為の技』

正人の名前は、クエーカー（迷惑な自己地震）

やめろ！やめろ！！

クエーカーは心の中で叫ぶ。

だが、体が動かない。

体が言うことを聞かない。

迷惑な自己地震は、自身すら迷惑とを感じる事はしない。

今の和也はクエーカーでは無い。

嫌だ。

唯の『操られた人形』。

サーベルは振るわれる。

正人の思いも空しく和也に狙いを定め『確実に殺す為の技』を使う。

大切な友に、こんな力を使いたくない…

何で…何で『また』この力のせいで…あああ！！

アウトサイダー（局外者）は、自らの力を呪う。

正人も例外では無い。

突然手に入れた力。

たった一つの力を手に入れたせいで多くの物を失った。

だが、正人はこの学校に来て、また新たな物を手にした。

多くの新しい大切な物を。

だが、自らの手で再び大切な物の一つを失おうとしていた。

第19話 クエーカー

第19話 クエーカー（後書き）

短いですが、正人サイドの状況を書かせていただきました。
早め、早めの更新を目指します。

第20話 死ぬか、殺すか、生かすか（前書き）

助ける為に戦った。

助けたいが為に戦った。

助けるための戦いなんてした事が無い。

だから変になったかもしれない。それでも助けられた事が嬉しくて、きつと自分は変わったんだと思った。

そう思うと更に嬉しくて仕方が無かった。

だけど、そんな簡単に行くわけが無かった。

思うだけならいくらでも出来る。

実現できなきゃ・・・意味が無い。

第20話 死ぬか、殺すか、生かすか

正人の持つサーベルは、倒れて血を流す和也に向けて振り下ろされた。

ブーン！と風を切る音が薄れ行く和也の意識に入り込んだ。

（やられ・・・る）

薄れ行く意識の中、和也の頭にはその言葉だけが浮かんだ。

・
・
・
・

ギンッ！

肉を切る音はしなかった。

変わりに、弾くような音が廊下内に響いた。

（・・・？）

必死に意識を保とうとしながら、顔を上げた。
血の流し過ぎで目が霞む。

その視線の先に、黒い塊が居た。

黒い塊はサッカーボール程の大きさしか無い。

霞む目を必死に凝らす。

黒い塊がはつきりと形を帯びた。

黒猫。

（黒猫・・・？）

そこで意識がはつきりとした。

「黒猫!？」

後ろを見せていた黒猫が、振り向いた。

「久シ振りニナル」

黒猫が当たり前の様に口を開いた。

「お前、あの時の？」

和也と怜次と水音の3人で捕まえた。

黒猫に見せているが、殺戮兵器として作られた存在。

「何でお前が!？」

「コノ学校カラ緊急信号ガ発セラレタ。コレ（自分）ハ緊急時ノ際ニ瞬時ニ対応出来ルヨウニト、コノ学校ニ配属サレテイル」

和也が黒猫の言葉に顔をしかめる。

（おいおい、初耳だぞ・・・？己区内の奴何考えてる？）

機械音の様な黒猫の声が続いていた。

「話ハ後ダ、現在ノ状況ヲ打破スル事ヲ考エル事ヲ優先スル」

黒猫の視線は和也から再び前に。

先程まで直ぐそこに居た正人は、廊下に倒れていた。

その手にはしっかりとサーベルが握られている。

「武器ヲ振ルト同時ニ体ニ突ツ込ンダ、直グニハ立テナイト思ワレル」

黒猫がそう言った瞬間、倒れている正人がもぞもぞと動き出した。

「!？」

それを見た黒猫が驚いた様に一步後ろに飛んだ。

「マインドだ・・・『心』のマインドじゃない・・・『体』のマインドだ」

心へのマインドならば気絶してもおかしくない。

だが、体へのマインドは唯の操り人形と変わらない。

傷つこうが、気絶しようが関係が無い。

和也は壁を伝いながら立ち上がる。

ブシュッ！と音を立てて背中から血が噴出した。

「ッゲウ・・・！」

和也は必死で歯を食い縛る。

立ち上がると目が眩んだ。

(まずいな・・・血を流しすぎた)

黒猫が和也を見ると、目を細めた。

「今迄ノ状況ノ説明ハ出来ルカ？」

「・・・フン、悪いがそんな余裕は無さそうだ、悪いが手短にいくぞ」

正人が何度も立ち上がろうと試みていた。

だが、まだ完全に回復していない様で、上手く立ち上がれて居ない。

「確認するぞ？貴様は味方で良いんだな？」

和也が黒猫を横目で見える。

「認識が早くテ助カル、今ハ過去ノ事ヲ気キニシテ欲シクナイ」
黒猫も和也に目を合わせた。

「・・・どうやって、『逃げる』つもりだ？」
正人が立ち直るまでまだ少しの時間が在る。

「・・・逃ゲル？」
黒猫は不振そうに声を漏らした。

「違うのか？」

「アナタハ逃ゲルツモリカ？」

「悪いが俺の策は無くなった、さっさと逃げる方が得策だ」

「逃ゲ切レル可能性ハ極メテ低イ、アナタハ闘イタクナイダケデハ？」

「・・・何故そう言い切れる」

「アナタノ心肺ニ揺レガ発シタ」

「・・・」
和也が黒猫から目を逸らす。
黒猫はそのまま続ける。

「今ハソレヨリモ、血ヲ止メル事ヲ優先シタ方が得策ダトオモワレル」
和也の背中からダラダラと流れる血は、床一帯を赤く染めていた。

「アナタノ生存率八、現在急激二低下シテイル、コノママデイレバ死ニ至リマス」

「・・・、余裕が在ったら、な」

正人が立ち上がっていた。

真っ赤な瞳を和也たちに向け、サーベルを構える。

その表情に感情は無く、唯唯無表情であった。

そして、サーベルを何も無いところで思いつき振りぬいた。

（！？、ツチイ！また空気振動による衝撃波か！！）

和也はとつさに、ガラスに拳を叩き付けた。

ジーン、と和也の掌に痛みが走る。

だが、振動は完全に消える。

はずであった、

ドン！！

和也は宙を浮いていた。

最初にこの技を食らったときと同じ様に、体中に衝撃が走る。
硬い床に叩きつけられる。

「ッグツァー！！」

背中 of 痛みに、悲鳴が漏れた。

和也は慌てて立ち上がった。

だが、現状が理解出来ないで居た。

先程まで消すことの出来た空気中の振動から作り出す衝撃波。
（何故だ！？）

「成ル程、同ジ様ナ振動デ相殺ヲ試ミタカ、良イ判断ダ」
後ろから黒猫の声がした。黒猫は無事だった様だ。

「シカシ、ソノ程度ノ振動デ打チ消スノハ不可能ト思ワレル」
和也が眉を寄せる。

「どういう事・・・」

和也が言い切る前に、再び衝撃が体中を襲った。

「ックッソ！！」

空中で態勢を立て直し、倒れずに着地する。

（食らい続けてたおかげで攻撃のタイミングが読める様にはなったが、それでもダメージはでかいか！）

和也は衝撃と同時に後ろに飛び、衝撃を和らげたのだ。

「走るぞ！」

和也の掛け声と共に、黒猫と和也は即座に走り出した。

「ドウスルツモリダ？コノ先ハ行キ止マリダゾ？」

「行き止まりの前に空き教室が在ったはずだ！一旦そこに隠れる！」

走りながら後ろを見た。

ヨタヨタと、正人が後を追っていたがスピードは遅い。

正人と和也の間が広がる。

（立つ時も、もたついていたな・・・足を挫いたか？）

挫いても表情一つ変えず追いかけてくる正人にゾツとした。

空き教室に黒猫と一緒に滑り込んだ。

瞬時に和也は辺りを見渡した。

（ドアは2つ……あの正人のスピードなら時間が掛かるはずだ！）
前と後ろに一つずつドアが有る。

無造作に置かれた椅子や机。

黒板の溝に埃が溜まっていた。

その様子から長い事使われていないのが解った。

（少しでも……時間を稼ぐか）

和也は、椅子を掴むとドアに向けて思いっきり投げた。

ガシャアン！！という音が教室内に響き渡る。

次に机を投げる。再び音が響く。

そして再び椅子を投げた。

それを何度も繰り返す。

ドアの前に無造作に山が出来た。

そこで、和也の手は止まった。

手に持っていた椅子が手から離れる。

ガシャアン！！と音が響く。

（まだ……後ろのドアがあるのに……）

手が震える。力が入らない。

眩暈がした。

フラツと後ろに下がると同時に、ピチャツ！と足元から音がした。

反射的に足元を見る。

足もとに、一面の血が広がっていた。

（血を流し過ぎた……か）

そのまま、2歩、3歩と後ろに下がると崩れるように座り込んだ。

「……大丈夫か？」

すぐ横で黒猫の声がした。

「大丈夫では…無い、かな？」

弱弱しく声が漏れた。

ブレザーを脱ぐと、切り裂かれた痕を見た。

（一直線にバツサリ…か…）

それを後ろに持って行くと、袖の部分を前でギュッ！と結んだ。

「つつ！！」

痛みで漏れる声。

顔を挙げ、目を閉じる。

（この傷だと血は止まらないな…後の事は今井と水音に何とかして貰うか）

「ドウスルツモリダ？」

目をつぶったまま、和也は答えた。

「2人、俺以外に洗脳に掛かっていない人間が居る…そっちに行ってくれ、正人は出来るだけ俺が足止めして置く」

その言葉は、死を覚悟した様な声。

「知ッテイル」

「？」

和也は、黒猫の言葉が解らなかった。知っているという言葉がどこまでの知っているなのか解らなかったからだ。そんな和也を無視して黒猫は話を進める。

「死又気力…？」

「ああ…」

その声は、暗い声では無かった。

まるで、本望だと言わんばかりに。

「…ソレデ…ヨロシイノカ？」

「ああ…」

短く答えた。

「ホントウニ？」

「…ああ」

再び短く。

「早く行け、正人が来るぞ」

続けるように言った。

「アナタノ生存率ハ極メテ低イ」

目を瞑ったまま黒猫の声を聞いた。

「ダガ…」

黒猫の声が途切れる。

「ソレ以上ニ先程ノ生徒ノ方ガ危ウイ」

「…！、？」

目を開けて、黒猫を見た。

和也を一直線に黒猫は見ていた。

先程の生徒、とは正人の事以外に考えられない。

「何故だ…！」

反射的に反応していた。

「アノ生徒ハ、能力ヲ暴走サセテイル…アノママカ^{ちから}ヲ使イ続ケレバ

間違イナク死ヌ」

「能力の暴走？」

黒猫は頷くと続けた。

「何故、アノ様ナ状態ニナツタノカハ不明ダガ、自ラノカヲ無理矢理引き出し、ソノ強力ナ能力ニ体ガツイテイッテイナイ」

「アウトサイダーの暴走……」

それは能力者としてBランク以上の人間の起こす、災害の様な者。それを防ぐ為に制御装置が存在する。

（さっきの空気振動を消せなかったのは、最初から振動を衝撃に変えていたからか……）

確かに窓ガラスを叩いた程度の振動で相殺するわけは無いか……だが、力を使い続けている状態という事か）

和也はそこでツハ、と我に帰る。

「……何故それを俺に言う」

黒猫を睨む。

「アナタハドウスル」

質問を質問で返される。

心を覗くような黒猫の瞳。

「……無理だ」

和也の一言はハッキリとしていた。

「武器も無い状態で暴走した能力者に立ち向かえるわけがないだろ」
和也は肩を落として見せた。

「武器ナラ有ル」

その言葉と共に黒猫の顎がガックン！と落ちた。

「は!？」

驚きの声があがる。

ビクッと和也の体が揺れた。

突然目の前で生き物の顎が外れれば誰でも驚くだろう。

黒猫が首をブンツ!と振ると同時に、床に長い物が転がった。
ガラランツ!と金属音が響く。

その白い布で包まれた物を手に取った。

手にベトツとぬめりけがあるものがついた。

「きたないな」

「安心シロ、唾液デハナイ油ダ」

「なお悪いわ!」

叫んだ後、クラツと眩暈がした。

「貧血ナノニツツコムカラダ」

（つく!今はシリアスだと思って油断していた!この機械からボケが来るとは!）

「ドウダ?」

黒猫の言葉に和也は顔をしかめる。

（わざわざ部屋から持ってきたのか・・・?しかし、どうた、と言われても、な）

「俺はいつ動けなくなるか解らないんだ」

その言葉に、ピンツと立っていた黒猫の耳がしおれる様に倒れた。そんな黒猫を見て、和也は小さく笑った。

「俺は元々、時間を掛けて戦うタイプの人間だ・・・短時間で相手を倒す力を持って居ない」

黒猫が和也の言葉と共に、ピンツと再び耳が上に立った。

「何ヲ言ウ、アナタニハ、アノ力ちからガアルダロウ？」

「力？」

「アノ時ノ炎ノ剣ノ事ハ良ク覚エテイル」

「！」

その言葉に、黒猫の言葉の意味が解った。

炎斬えんざん、和也の持つ能力の限界まで力を酷使した技。

能力のレベルが低い和也が唯一、対抗する為に作り出した技。だが、その技は・・・

「駄目だ・・・」

その言葉に黒猫が首を傾げる。

「ナゼダ」

「あの力は・・・確実に『殺す』為の技だ」

コンクリートの噴水すら叩き斬るその力は、『破壊』に特化した力。

和也の言いたい事は、黒猫も理解した。

つまり、『止める』のではなく『殺す』のだ。

「シカシ・・・アノ生徒ハドチラニシロ放ツテオケバ死ヌ」

「だったら俺に殺せつて言うのか・・・？」

和也は静かに言う、だがその言葉に怒りが込められていた。

「・・・ナラバドウスル」

「・・・」

黒猫の言葉に和也は口を噤んだ。

「放ッテオケバ、アノ生徒ノ死亡率ハ100%、ダガ・・・」

そこで黒猫はしっかりと和也を見据えた。

「アナタノ力^{ちから}デ止メレル可能性ハ・・・3%」

「ソレは生存率か・・・？」

和也の言葉に黒猫は頷く。

黒猫は再び聞いた。

「・・・ドウスル？」

「・・・」

和也は俯いたまま答えない。

確実に死ぬのか、それとも和也自身の手で殺すか生かすか。

片方は自らの手に掛けずとも正人は死ぬ。

片方は助かる可能性が有る。しかし、失敗すれば自らの手で友を殺す事になる。

可能性は・・・あまりにも低い。

「ドウスル？」

黒猫は繰り返す。

どちらも正解では無い。

どちらも不正解では無い。
決めるのは和也自身。

「・・・俺は、」

和也は顔を上げた。

「俺はどれくらいもつと思う？」

一帯を染める血は、全て和也の血。

「8分弱・・・良クテ10分」

黒猫の言葉と共に和也は立ち上がった。

「十分だ」
じゅうぶん

和也の中で決心が付いた。

和也の中に選択肢など無かった。

3%の可能性に掛ける。

答えなかったのは決心を付ける為。

自分が傷つけるのは、クラスメート。

傷つける力は、全てを灰へと焼き尽くす『破壊を目的とした力』。

前を見据える。

決心は揺るがない。

今度こそ助ける。

傷つける事を恐れる余裕すら無くなった。

眩暈がした。直ぐに首を振って意識を保つ。

殺す事になろうとも、『助ける』という一つに置いて、戦う。

・
・
・

この命を掛けて。

前のドアは正人の侵入を遮る為に自分が閉ざしてしまったので、後ろのドアへ向かう。

黒猫はその和也の背を見つめる。

機械で有る黒猫は不必要な独り言を零した。

「アナタハ死ナセナイ、アナタガコレ（自分）ヲ助ケタヨウニ・・・コレガアナタヲ助ケル」

無意識に『感情を持つ機械』は零す。

黒猫の目が力強く光を見せた。

第20話 死ぬか、殺すか、生かすか（後書き）

うわ・・・メツチャ時間かかってしまった・・・

新しく書き出した小説、『暴力熱血女と貧弱毒舌男』は早く更新していますので、とても執筆が遅いですがそちらで生存しているという感じに思っ頂ければありがたいです。

アウトサイダーは、書く度にやり直していますのでどうしても遅くなってしまう・・・

しかし、最後まで書きたいので勝手に終わったりしませんのでまた見ていただける方に感謝致します。

感想、指導いただけると嬉しいです。

それでは失礼いたしました！！

忘れていた部分があり、後から本文を追加させて貰いました。すみませんでした。

第21話 クエーカーVS純白の悪魔（前書き）

3%。

少ない可能性に全てを掛ける。

友を助ける為に、命を投げ出そう。

理由何て無い。

強いて言うなら死んでほしくないから。

これだけで十分だ。

今度こそ助ける。

今度こそ。

第21話 クエーカーVS純白の悪魔

薄暗い部屋の中、2人の人間が居た。

一人は薄らと光る何重も囲まれた円の真ん中に座り、目の前に有る監視カメラ用のテレビを眺めていた。

もう一人は、その円には入っておらず、ただクスクスと楽しそうに笑っていた。その笑う声の主は背の高い女。

円に座っている人間は鬱陶しそうにもう一人の女の方を向いた。
「どうした」

女はクスクスと笑いながら暗がりの人間に答える。

「あたしらの能力をくらってるガキの一人が、あんたの能力が解けたみたいでさ」

「・・・？」

それだけでは笑う理由になるとは暗がりの人間は思わなかった。

自分の能力が解けても女の能力が保険になるはずだからだ。

もしも、女が笑っている理由が自分の能力が解けたからだという理由なのであれば、それはあまりにもバカバカしい事だ。

女はとても嬉しそうに言った。

「そのガキが能力を受け付けなかったガキを殺そうとしてるのよ」

女はその綺麗な顔にゾツとする笑みを浮かべた。

「しかもあたしの事を年増とか言いやがったガキだ！キャハハハ！
！もっとグチャグチャになればいいのに」

女の言っている姿は隠しカメラの映像が映る画面には映っていない。

つまり、女は自らが操っている人間を通して見ているのだ。

「ちよつと、あたし見てくるから、あたしの体見ときなさいよ」
そう吐き捨てるように言うと、女は突然倒れた。
それを見ていた暗闇の人間は小さく溜息を付く。

女は操っている人間を通して状況を見る事の出来る能力者だ。

今は、ハッキリと見る為に操っている人間に意識每乗り移ったのだ。

女の力ならそんな事をしなくても見れるが、テレビを見て観戦するのと、実際に観戦するのとは大きく違うように、後者の理由の為に女は意識を飛ばしたのだ。

しかし、意識を飛ばす間当然この女の体は抜けがらでしか無い。

倒れた女を無視して監視カメラの画面に向き直る。

「……」

ふと女の言葉が疑問に思ったのか、目の前に有る装置を動かした。
パッパッパ！と素早く画面が変わっていく。

その中の一つで手を止めた。

画面もそこで止まった。

狭い廊下で対峙するのは2人の少年。

片方は赤い眼をした操られた少年。

（…へえ）

その少年に見覚えがあった。

この学校に来る前に、学校内の生徒の資料を見せられた。その中に居た一人の少年だ。

（確か学校内の戦闘ランキングで上位は3年ばかりの中、唯一の1年生だったかな）

様々な学校が存在する中で落ちこぼれの学校を狙う事になっていたが、落ちこぼれでも決して弱いわけでは無かった。むしろ戦闘力が高い者が多いと聞いて居た中で、そのランキングを見た時に1年生がいた事が印象に残っていた。

片方の男の方も見た。

真っ白な髪、それと同じ様な純白の瞳、一言で言うなら『白』を思わせる少年が居た。

（これは…）

その少年にも見覚えがあつた。

同じように資料の中に居た一人だ。

だが、

その時は、気にも留めていなかった。

唯、変わった容姿だな、程度にしか受け止めていなかった。

しかし、今の姿は資料に在った存在とは違って見えた。

血だらけの体に、睨む様な鋭い瞳。

その目は一、生徒が出せる様な瞳とは思えなかった。

暗がりの中、不思議と画面に釘付けになっていた。

『マインド』の『心』を操る能力者は、この純白の少年を資料以外に知っている気がした。

裏の世界でなら、誰もが知っている名前が浮かぶ。

純白の悪魔。

だが、純白の悪魔がこんな所に居るとは思えなかった。

それを確認するべく、

画面を変えずに見入る事にした。

・ ・ ・

口から吹き出されたのは大量の血。

呆然と血に染まった右手を見る。

感情の宿らない赤い瞳は、直ぐに前を向く。

標的の居場所解る。床に続く赤い血は標的が流したものの。
この血の持ち主がどんな奴かも知っている。
だが今はそんな事は関係ない。

ああ、足が痛いな…痛いけど、どうでもいい、今は。
殺さなくてはいけない。

何故かは解らない、解らないならどうでもいいや。

勝手に体が動いてくれる、

どうでもいい。

どうでもいい、

廊下に出た先に居たのは口や鼻から赤い血を流す正人。その変わりように、一瞬和也は困惑の表情を見せた。だが、決意を示すように手に持つ氷鈴刀を構える。その刀は和也はけして友に向ける様な人間では無い。いつも向けていた先は自らが敵と認識した相手のみ。相手が敵意を向ければそれに習うように敵意を返す。

それは相手が『敵』だから出来た。
刀を握りしめる手が震える。

解つていても無意識に正人に刀を向ける事を拒否していた。先程まで向けていたのは拳、喧嘩でも使う和也が持つ武器で最も殺す可能性の低い武器。

今持つ武器は刀、斬る為に光る切っ先は殺す為に。

「ドウシタ？」

下から黒猫の声が和也の耳に入り、ツハ！と我に帰った。

「…なんでもない」

正人は無表情のまま、サーベルを振り上げた。

「来るぞ！」

和也の声と共に振り下ろされたサーベル。

ぶおん！という空を切る音と共に放たれるのは空気振動により衝撃波。

避ける事の出来ない衝撃が和也に迫る。

和也は小さく零す。

「…炎斬」

その声に合わせるように構えた刀に炎が纏う。
刀に纏う炎はそのまま巨大な刀を作り出す。
そのまま巨大な刀を振り下ろす。

ドオオン！という激しい音が響き渡る。

廊下に爆風が吹き荒れた。

正人の創り出した衝撃波が消える。

相手の衝撃以上の衝撃が空気中の振動を消し去り、それ以上の振動を作り出す。

衝撃波に押される様に、正人が尻もちを付いた。

煙が消え去った先に、和也の刀は元の形に戻っていた。

しかし、先ほどの刀は確かに存在していた。

その証拠の様に和也の目の前の床に、
巨大なクレータが出来上がっていた。

（ホオ、素晴ラシイ威力ダ）

黒猫が思っていた以上にその威力はすざまじかった。

辺りの壁が薄ら黒く焦げている。良く見れば、和也自身の服の裾が黒く焦げていた。

（…自ラニモ降りカカル文字通り、『もろ刃の剣』力…）

和也はガクツ！と膝を付いた。今も背中から流れ出る赤い血液。

（ク…ソ…眩暈がする）

衝撃は和也自身にも帰ってくる。

その衝撃を受け止める事も出来ない程に和也の体は弱っていた。

（でも…お前は最苦しいんだろうな…）

目を向けた先に居る正人は立ち上がろうとしていた。

晴れ上がった右足、口や鼻から流れる血。

和也は齒を食いしばり立ち上がる。

まだまだ戦える。助ける為に。

刀を突き立てよう。

（俺の動けるのは約8分：炎斬を使えるのは3分、先程の炎斬を使ったのは2秒位か）

たったの2秒、炎斬を創り出しただけでどっ！と疲れを感じた。

黒猫の時に使える時間は5秒のみだったが、改良を加え最低限作り出す為に3分までの形状を成功していた。

炎斬を使った後は、その膨大な力により気絶する様に眠る。失敗は許されない。

炎斬を最初が一気に使い続ければ、3分が経った後、和也はそのまま気絶する。

しかし、出し惜しみをすれば出血多量で動けなくなる。

どちらにせよ和也自身に、あまりにも不利な状況であった。

和也はようやく立ち上がりそうなる正人に向って走り出した。

正人に刀を振り下ろす。

反射的に正人はサーベルを構えた。

ギーン！と金属の弾ける音が響き渡る、

（遠距離で来る衝撃波を一回一回防ぐのに使えば俺が先に潰れる。

近距離戦で衝撃波は使わせない！）

ギチギチ、と金属音が2つの刃の間で繰り返す音がする。

真っ赤な瞳と純白の瞳が交差する。

刀とサーベルが重なる。

正人が一歩前に出ると共に和也が後ろに下がる。

（ツク…！？）

和也の手に力が入らない。

一歩出る度に押される。

（操られた人間と正常な人間じゃ全体的にこっちの方が悪い！）
和也の顔付きが変わる。

「あああ！」

声と共に一瞬だけ力が入る。

和也の足が止まった。

押されるだけだった和也だったが、力が均等に押し合う形に変わった。

だがそれも一瞬のみの力、再び正人に押される。

瞬間、和也が後ろに飛んだ。

力を押し続けていた正人は、力の行き場を失い、前に2歩3歩と出る。

無防備な状態の正人に刀を横に振るう！

和也の刀は正人を確かに捉えた。

・・・はずだった。

バチン！！弾ける音と共に刀が弾け飛んだ。

「！？」

弱く握っていた刀は宙を舞う。

飛んだ刀を目で追った。

黒猫が飛び出すと、宙に飛んだ刀をくわえると、和也の横に降り立った。

加えた刀を和也に向けて投げた。

「…すまない」

弱弱しく謝ると、焦げていない手で掴み取る。

黒猫は、一瞬和也を見るも、視線は直ぐに正人を向いた。

「…能力ノ暴走。」

一瞬間を開ける。

「能力ノ暴走ニヨリ、全テノ『振動』ガアノ者ノ力ニナル。刀ト自ラノ間ニ生マレル小サナ振動ヲ瞬間的ニ作り出シタ様ダナ」
つまり、和也が作り出した振動さえ、武器にするのだ。

和也が舌打ちをする。

「攻撃を当てることさえ無理か：無茶苦茶だな」

和也自身も解っていたが、能力の暴走は自らの体を犠牲に莫大な力を要する。

正人が再びサーベルを振り上げた。

（まずい！）

和也が床を蹴る。

ギーン！金属の音が再び木霊する。

振り上げたサーベルをなぎ払うように刀を振った。

振り下ろされる事も無く、刀とサーベルが再びかち合う。

（やはり炎斬か！）

中途半端な攻撃では無く確実な攻撃力。

（だが、アレを当てるのはきつい！）

炎斬は元々『防御』に絞っていた技、動いていない物で無い限り当てるのは難しい。

和也の模索する中、正人と和也との武器の間のギチギチという金属音が変わった。

（ッ何だ！？）

ガキッ！

和也の刀がかけた。

破片が和也の顔に当たった。

瞬間的に和也が後方に思いつき飛んだ。
それを追撃する様に正人が前に出る。

横に振るわれるサーベル。

「ッく！」

しゃがみ込んだ和也の頭の上をサーベルが通過した。
白い髪が数本宙を舞う。

正人の追撃は止まない、サーベルを瞬時に構え振り下ろす。
和也の真上からサーベルが振り下ろされている。

刀をとつさに真上に構えた。
構えた刀にサーベルが振り下ろされる。

当たった瞬間、金属の弾ける音はしなかった。

ギリリギリリリリ！！と、音を立てながら、火花を立てる。
「！？」

大量の火花は、まるで電動ノコギリの様にけたたましい音を立てる。
（刀が！削られる！？）

尻もちを付いた状態から咄嗟に正人の腹に蹴りを加えた。

正人がヨロヨロと後ろに下がった。

咄嗟に立ち上がり、氷鈴刀を見る。

摩擦で焦げた様な跡が有る。

（振動で作り出すノコギリってか…？）

和也が再び舌打ちする。

無茶苦茶な能力の使い方。こんな事を続ければ確実に死ぬ。
直ぐに立ち上がる正人は和也に向って走る。

再び思いつき横に振る振動のサーベル。

無駄なくギリギリでかわす。

しかし、直ぐに次の攻撃に移り変わる。

再び後ろに飛ぶ。

先程の様に刀で防ぐ事は出来ない、唯一の武器が壊れればそれこそ勝機は消える。

和也の居た所をサーベルが振り下ろされる。

ギョル！というけたたましい音が、廊下の床に直線の切り傷を作り出した。

それを見た和也に寒気が走る。

（コンクリートに切り傷を付けた！？あんなの食らえば一瞬やられる！！）

ギリッ！と歯を食いしばる。

（攻撃をするのも無理、相手には確実な一発、だが遠距離になれば空気振動の衝撃波……！）

能力の暴走

（思っていたより予想以上に厄介だな……せめて万全でやり合いたかった）

付かず離れず、相手の攻撃をギリギリで避ける。

掠れる感覚の度にキモが冷える思いがよぎる。

当たる寸前で刀を一瞬触れさせてずらす。

その度に電動ノコギリの様なサーベルは火花を散らす。

手に残り痺れに、どれ程の威力かが解る。

（どれだけ経った！？5分、短くても4分か！？）

もはや猶予が無くなった。

（炎斬の形状に3分……だが作り出しても当てれるとは思えない……3分ぶんの威力を3秒だけに絞り込めば、特大の炎斬を作り出せる！

！一方通行の廊下内じゃ避ける事は出来ない！！）

和也の目の前をサーベルが過る。

（ッ！後は！！タイミング！！それだけの力だ、力を溜める必要がある。炎斬を作り出すのに最低限必要の時間は10秒位か！！形は気にしない！特大の『力』のみに絞った俺の持つ最大限の『力』を作り出す！！）

それは守る為に、倒す為に必要な力・・・！！！！

和也自身も今迄に完全な炎斬を作る事は出来ていない。

未だ未完成の必殺技^{いま}。

練習事は出来るだけ繊細な技として、『もたせる』為に形を意識してきた。

だが、今は違う、完全な力！

数秒間のみの完全な特別な力。

サーベルが斜めに振られようとしていた。

再び、刀を当ててずらそうとした。

瞬間。

今迄に無い特大の眩暈が襲った。

「・・・あ？」

ずらすつもりだったサーベルに刀を当てる事が出来なかった。

サーベルはそのまま、和也の体を斜めに切り裂いた。

「ウアア！！」

悲鳴とも悲痛とも取れる声が和也から漏れた。

モロに食らった。

体に出来た斜めの切り傷から血が噴出す。

ヨロヨロと後ろによるめきながら、態勢を立て直す。

（目が・・・霞む）

霞む目で体に出来た斜めの切り傷を見て、和也は無意識に微笑を浮かべていた。

（…フン、これだけ血が出ているのにまだ出るんだな）

この状況で、笑える自分が居た。

時間を考える必要は無くなった。

時間を計算していたのは、斬られる前まで。

これ以上の血が流れた以上、時間を気にする事すら不可能になった。

（もういい…）

目の前に居る正人は、無表情のまま『確実に殺す為の技』を振り下ろす。

（避ける、必要が無くなった…！！！！）

和也は後ろに下がるのではなく、臆することなく。

前に出た。

「ッ！！！！」

一刀両断のサーベルは肩に減り込んだ。

歯を食い縛る和也の歯がギリギリと力強く噛み締める。

「…！？」

胸まで斬りつけると、そこでサーベルは止まった。

（ホオ…振動ヲ止メタカ）

一部始終を見ていた黒猫は眼を細めて分析する。

（肩ニカヲ入レル事デ筋肉ヲ固メテ固定シ、武器ニ存在スル揺レヲ消シタノカ）

サーベルを刀に減り込ませたのはわざと、そのまま減り込んだままのサーベルは『揺れ』さえ消えればソレは唯のサーベルでしかない。

これ以上押せないと解った正人は引き抜こうとする。
しかし
外れない。

外させない。

1秒

焦げた右手を気にせず、両手で強く強く氷鈴刀を握り締める。

2秒

肩に入れていた力も、握りしめる手に入れる。

3秒

力が抜けると共に、正人はサーベルを引き抜いた。
血が噴き出す。

4秒

同時に、和也の持つ刀に炎が纏わりつく。

5秒

炎は無造作に刀に纏わりつくも形を成しえず、火の粉が辺りに舞う。

6秒

先程見せた炎斬と違う、美しい炎では無い。

無造作な炎。

7秒

反射的に正人は後ろに飛んだ。

8秒

先程と違う異変に、操られている体以前に、本能で動いた。動物としての機能が無意識に危険を察知した。

9秒

後ろに飛んだ正人を、今度は和也が後を追った。純白の瞳が獣の様にギラつき、地を蹴った瞬間、正人と和也の距離は再び0に。

10秒。

振り上げた刀は狭い廊下に余るほどの巨大な炎の大剣。舞うは火の粉と爆風。

和也の意志と無関係に周りを破壊していく。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

雄叫びは和也自身の発した物、体の痛みを紛らわす為か、友に振り切る覚悟の為か。

狼の様な大声は爆風の音を凌駕し、廊下中に木霊する。

反射的に正人はサーベルを真上にかざした。

サーベルに込める最大限の『揺れ』。

『確実に殺す為の技』は守る為に展開される。

全てを灰にする和也の持つ最大の技。

そしてそれ以上の無理矢理作り出したメチャクチャな力。

『力』のみに特化した力は、かざしたサーベルに容赦無く炎斬を振り下ろす。

ギリギリギリ！！と再び火花が飛び、火の粉が舞う。

睨む和也の目は鋭く鋭く。

怯む様に、正人が下がった。

「ッ！？」

和也の創り出した大剣の先が火の粉へと変わっていく。

（即席で創り出しただけに、維持までは出来ない！！）

先から火の粉へと変わり消えていく。

（時間が…無い！！）

そう思った瞬間、更に前に出た。

体の痛み等気にしない、噴き出す血等気にしない！

「オオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

雄叫びと共に、燃え盛る炎が薪を入れた様に一瞬だけ更に燃え盛った。

正人の表情がはっきりと変わった。

無表情な、操られていたはずの正人の表情にくっきりと恐怖の表情が。

ツパキン！

短い金属音と共に、正人のサーベルが真つ二つに折れた。

本気で振り下ろした刀はサーベルを折ると共に正人にも襲い掛かる。武器を無くした正人に、自らを守る術は無い^{すべ}。

だが、和也自身も止める事が出来る程、やわな力を使ったわけでは無い。

和也は消え失せていく炎斬を振りきった。

紅い線を描きながら、斜めの直線に振った。

無防備な正人の体に斜めの一線。

その振り切りと共に和也は崩れるように倒れた。

それに合わせるかの様に、正人も真後ろに倒れる。

それを見ていた黒猫は意味深に目を細める。

第22話 友

震える和也の手から刀が離れた。
カランツと金属音が響く。

まだ意識は残っている。

息が荒い、無茶苦茶な能力の解放が和也の持つ体力以上を持って行った。

強烈な眠気の中、歯を食い縛る。

「！？ガツハ！ゲホ！！」

強烈な吐き気と咳が和也を襲った。

慌てて抑えた手に生暖かい物を感じた。

その掌を見ると、べっとり血が付いていた。

吐血。

それを見て和也が失笑の様な溜息を吐いた。

当然の結果だ。大量の出血以外にも正人と同じようなメチャクチャな能力の使い方をした代償だ。

和也自体、元の能力のレベルが低い分、体への負担は正人以上の物だ。

和也に既に立ち上がる力はない。

腕だけの力で必死に倒れた正人に近づいた。

強烈な眠気が襲えば、そこで動くのをやめて必死に歯を食い縛る。眠気が和らげば再び腕を前に動かす。

それを見ている黒猫は眼を細めて、手助けをしようとは思わなかった。和也も別に助けてほしいとは思わない。

直ぐそこのはずの正人はあまりにも遠く感じた。

「正…人」

か細い声が和也から漏れる。

和也がここまで必死になるのは、生きているか死んでいるかの心配をしていたからだ。

正人が直ぐそこまでという所まで近づくと、弱弱しい声を聞いた。

「和也…」

正人の声。

その声を聞いた瞬間、和也は深い深い息を吐いた。

…良かった。

唯その言葉が頭に浮かんた。

安心した和也は近くの壁に背を預けた。

ドクドクと流れる血も眠気も止まらない。

だが、和也の顔に苦痛の歪みは無い。

隣に黒猫が来ると顔を覗き込んできた。

「成功か…？」

和也の声が聞こえているのか聞こえていないのか、黒猫は和也を見るだけで答えない。

「…？まあ、いいさ」

疑問に思っても、今度こそ助けたんだ…と小さな声で零す。

「和也あ！居るんだろ？」

弱弱い声の主は倒れたまま、辛いはずなのに大声を張り上げた。
その声に和也が虚ろになった眼を開く。

「何だ…」

正人は天井を見つめるだけで、和也の方を見ない。

「ごめん」

その一言に、何の意味を乗せているのか、和也には解らない。

「背中…大丈夫か？」

何時も通り、とは行かないが正人は、はっきりと喋った。

「何だ？記憶が有るのか？」

ぶっくらぼうに和也は答えた。

一度マインドが解けた時、正人に記憶が残っている様子は無かった。
（記憶が残っているのなら…もう友達としては見てもらえないかも
な、思いつきり斬り付けたしな）

そうふと考え、少し寂しさが過った。

だが、後悔はしない、自分は助ける事が出来たのだから。

「ああ…この手で後ろから斬った所から、お前がすんげー怖い顔で
斬りつけた所までバッチリだ」

「ツフン…謝罪してんのか皮肉言ってんのか解らないな」
何時も通りの口調に和也は微笑んだ。

「それじゃあ…あんがと」

そこで和也がまた笑った。

「なんの謝礼だ」

「……」

正人が少し間をあけた。

「俺を…止めてくれて」

その声は悲痛に震えている様に和也は聞こえた。

「ああ…死ななくて良かったな」

和也の言葉に、正人が目を細めた。
細めるだけで、見つめるのは天井。

正人は勝手に喋り出す。

何故喋り出したかは解らない、それ所では無いはずなのに正人は口を開いた。

和也は何も言わず、正人の声を聞いた。

「俺さ、昔ここじゃ無い所に住んでたんだ…そこでは俺、結構悪^{ワル}だっただぜ？」

そう言つて、正人は悲しそうに小さく笑った。

「……」

和也は黙つて聞いている。能力者が過去を語る事は本当に無い。それは誰もが必ず過去に心の傷を持つから。

それでも正人は語る。

「そこで能力に目覚めた時、俺は他みたいに落胆しなかった…寧ろバカみたいに喜んでやりたい放題だった」

淡々と語る正人の話は、典型的なタイプの能力者の始まり。
能力は突然生まれる。

能力が生まれる際に人が思う事はどちらか。

喜ぶか。

悲しむか。

片方は力を手に入れた、と、片方は自らが差別の対象に変貌した、と。

正人は前者のようで、この系統のタイプは少なくなく、そのタイプのせいで能力者の肩身は更に狭くなる。

それを能力者の自分に話す正人はどういふつもりなのか、和也は解らなかった。

だが、眠気に耐え、最後まで聞くことにした、それが、生涯で最後に聞く声かもしれないから。

「その能力で結構人を傷つけてたと思う…俺は元の能力のレベルが高かったから、自在に操れると思ひ込んでいた…でも違った」
そこで正人はギュツと唇を結んだ。

「力が暴走してさ…辺りはそりややべー事になってた」
力の暴走による災害。

その『やべー』と言った言葉が理解出来た。
これが能力者の嫌われる理由の一つ。

「その時…友達を殺した」
声色が変わった気がした。

「この手で…暴走自の時の記憶は無いが、その記憶だけは今でもハッキリと覚えてる」

声が震えている。

「何で、そんな記憶は…残ってん…だろオナ」

震える声は今に泣き出しそうになっていた。

正人は震える右腕を顔に被せて、震える声で言った。

「良かった…本当に良かった…」

誰にでも解る様に嗚咽と震える声を出していた。

「また…『友達』を殺さずにすんで…」

その、言葉で、和也は鼓動が止まった気がした。

「まだ、俺を友と言ってくれるのか…？」

和也の声は驚きで少し震えていた。

「当たり前、前、だろ？」

何度も小さく息を切りながら言葉を言った。

「ッ！…！」

弱弱い声だが、和也には力強く聞こえた。

「だ、だが…」

和也の声は自然と大きくなる。

「俺は、お前を刀で斬ったんだぞ？傷付ける為の武器を向けたんだぞ！？」

見透かすように、正人が笑った気がした。

だが、声は震えている。

「俺も和也を斬った、ダチどーしの喧嘩だろ？」

正人はそれで済まそうとしていた。

そうしたかった、正人も、和也と同じ思いだから。

「ありがとう…」

自然と、そう言っていた。

正人の様な人間が多く存在するこの学校が。

やはり好きだと

思えた。

「…おいおい、お礼を言ってるのは俺だぜ？」

そう震える声で言いながら、正人はまた、笑った気がした。

「お礼を言うのは…俺だ」

そう言って和也も笑った。

「何だよそれ。へへへッ…」

「ッフ…ハハッ…」

血だらけの二人は小さな声で、お互い弱弱しく笑った。

か細い2つの笑い声は、

片方が途切れた。

「正人…？」

「…」

和也の声に正人は反応しない。

「正人？正人！！」

反応は無い。

寒気が走った。脳裏に最も嫌な状況が思い浮かぶ。

「正人！！正人オ！！」

呼び起こすように何度も正人を呼ぶ。

しかし、返事は無い。

嫌だ！！

壁に手を付き、震える足で立ち上がると必死で正人に駆け寄った。

眠気も痛みも、全てが正人に駆け寄ろうとする自分を妨げる障害に
思え、苛立ちが先走る。

「！！」

駆け寄った際に、見えなかった部分が『見えてしまった。』

焼けただれた斜め直線の跡。

皮膚が焼けて血が止まる筈の予定だった傷は思った以上に傷を付けていた。

それは当然の事だったのかもしれない。力のみに特化した技は殺す
為の技。

それをしたのは、和也自身だ。

3%しか無い可能性は、可能性でしか無い。

「そんな……！そんな！！」

「当然ダ」

いつ居たのか、黒猫が和也の隣にいた。

その言葉の意味が解ら無い。だが、黒猫の方を見る余裕は無かった。

黒猫は勝手に喋りだす。

「アレ程ノ威力ヲマトモニ食ラツテ生キテイラレルワケガナイダロウ」

「……！」

そこで初めて黒猫の方を見た。

「どういう事だ……？　どういう事だ……！」

怒鳴る様に黒猫に叫び声が向けられる。

「ソウイウ事ダ、3%ノ可能性？　ソレ以前ノ問題ダ」

「つまり……嘘だつて事か……！」

「否定スル気ハ無い、ダガコノ能力者ヲ行動不能ニシタ事デ残リノ操ラレテイナイ者達ガ攻撃サレル事ハナイ」

「黙れエ……！」

既に黒猫の方を和也は見えていない。

冷たくなつていく正人の傷口を必死に防ぐ。

自分の傷を塞いでいた上着を取ると正人の傷口に当ててその上から両手で抑える。

溢れる温かい血から、弱弱しい鼓動が伝わる。血が止まらない。

「和……也……」

か細い声に和也が反応した。

意識はまだ少し有る。

だが、元の黒眼に戻った瞳は何処を見ているのか解らないの様に虚ろだ。

虚ろな瞳を見て、和也の背筋に寒気が走る。

（目が！見えていない！？）

暴走した能力は予想以上に代償を払っていた。

「もう…良いよ…和…也」

「何も喋るな！！」

（意識はまだ有る！だが血が止まらない！！能力の使い過ぎで体が極端に衰弱している！！…！？）

和也の頭がガクツと落ちた。

限界が来ていた。

（まだ…だ！！このままじゃ正人が死ぬ！！）

「無駄ダ」

黒猫の冷たい声が放たれても和也はそれを気にしない。

「黙…れえ！！」

既に、声に力は入らない。

血を止めようとしている和也からも大量の血が流れている。

人間は3分の一の血液を流せば生命の危険を要する。

つまり、自らの血の量が2分の一になれば失血死をして、死亡する。

和也は既に3分の1以上の血を流し、本来なら体を動かすこと自体が不可能な状態だった。

黒猫の言っていた10分は既に過ぎている。

眼が無意識に閉じようとする。その度に首を振った。

血を止めようとする和也の手から力が抜けていく。

「ありが…と」

必死になっている和也の耳に声は聞こえているかは解らない。そう言った正人は小さく微笑んだ。

ゆっくりと意識が無くなっていく。

その瞬間、弱弱しく伝わっていた鼓動が、

止った。

「ッ！！！！」

息が止まった。絶望的な震えが和也の体中を伝わった。

「ウアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

絶望の叫び声と共に、抑えていた手に力が入ると共に、両手を重ねる。

同時に思いっきり両手で胸を押す。

それを何度も繰り返し、必死に正人を呼び覚まそうとした。

血を流しながら心臓マッサージを繰り返す、和也の顔は辛そうに歪めていた。

「いつもの冗談だろ！？早く起きろよ！！」

和也の声も聞こえず自己迷惑は意識を呼び覚まさない。

「起きろ！！起きろお！！」

感情的になっている事に和也は気づいていない。

悲しみに和也の顔は歪む。

強烈な眠気に、力は奪われていく。

震える手でそれでも、和也の胸を思いっきり押し続ける。

普段以下の力になっても必死で心臓マッサージを繰り返す。

正人を押す力は既に心臓マッサージとしての意味を持っていなかった。

それでも和也は続ける。

「俺…を」

震える声色で呟く声は、既に意識の無い正人に向けられる。

「友達…だって…言ってくれた…のに」

和也の意識も遠のいていく、歯を食い縛っても、血が出る程唇を噛んでも、遠のく意識は止まらない。

「クソ…クソオ…」

悔しさの声と共に、

和也は正人に覆い被さる様に、

倒れた。

血は今も流れ続ける。

それを眺め続けている黒猫が居た。

「…死ナセナイ」

和也の行動を否定した黒猫は、誰に言うでも無く呟いた。

「コレ（自分）ヲ助ケタアナタモ、ソノ友モ、ダガコレニ…現状況

ノ彼ヲヲ助ケル力ハ無イ^{ちから}」

黒猫は暗く続く廊下の方を向いた。

「ダガ唯一助ケラレル者ガ居ル、ソシテ：ソレハコチラニ向カッテイル」

暗い廊下の先に希望を向ける眼差しを向ける。

暗い廊下の中から、人のシルエットが浮かび上がってきた。

その人のシルエットは走っているのか、荒い息を吐きながら近づいてくる。

元々黒猫が和也の所に来た理由は二つ有る、

黒猫の中には学校の状況内が解る様に設計図がそのまま入っている。そして、学校に登録されている全ての生徒の位置が把握出来る様になっている。

それは生徒が持ち歩くように言われている学校提供の携帯からの電波を掴み取れる為。

その中で、『最初から洗脳に掛からない』生徒を割り出したのだ。

その結果、現在一人の最も危険な和也の所に向かった。

それが理由の一つ目。

もう一つは、『もう一人の操られていない生徒』が一人で和也の所に向かつて居たからだ。

和也、水音、今井以外の4人目が和也の所に向かっていた。

第22話 友（後書き）

和也の戦闘、やっと終わった…

駄目だ…後何回戦闘すりゃいいんでしょか…

解った事が有ります、連続の戦闘は漫画だから出来る事であって、小説で書いて良い戦闘は一回のストーリーで2、3回が限度な気がしてきました。

参考になる戦闘描写の素晴らしい小説ないかなあ…

やっと出したいキャラが出てきそうです。

それではまた、次回でお会い致しましょう

第23話 ハートのキング（前書き）

暗がりの部屋、2人の人間。

2人の人間は首謀者。

そして生徒達を操っている人間。

片方は3人の少年少女。

一人の少女は、大切な者を守るため決意する。
決意は怒りへ、平穏を奪った首謀者達へ。

第23話 ハートのキング

「イヤアアア!!」

大声と共に、仰向けで倒れている女が起き上がった。

その声に多少驚いたのか、薄暗い中でも魔方阵の上に座る人間が振り向いた。

女は顔を青ざめ、その美しい顔立ちは恐怖で埋め尽くしていた。顔からドツ！汗が流れ、化粧も崩れている。

何故こうなったか、暗闇の人間は解っていた。

女はこの学校の生徒同士の戦いを見る為に、自分が操っている男に乗り移ったのだ。

人間も最後まで見ていたが、確かに目の前であのような巨大な炎の刀が自分に振り翳されれば恐怖は植え付けられるだろう。

しかも、それは戦闘要員でない女にとっては尚更恐ろしいものだったのだ。

「興味本位で行くからそうなる」

暗い中、ハッキリと人間は言った。

その美しい声には侮辱が含まれている。

未だ恐怖で動かない女に向かってバカにしたように続けた。

「『殺し合い』を観客気分で見っていたのだ、貴様があの男を甘く見た結果だ」

人間の声は女には届いていなかった。

だが、女はようやく動き出すと、床に転がっている細長い四角い者を手に取った。

連絡用のトランシーバー。

震える手でそれを掴むと、全員に通達するようにボタンを押した。

「作戦の変更よ……」

震える声は続ける。

「操られて居ない者達を探し出し、殺しなさい。これはハートのK^{キング}としての命令よ……命令に応じない者は、殺すわ」

そう言い切ると、トランシーバーは手から離され、床に落ちる。

バキッ！という音と共にトランシーバーは硬いコンクリートに打ち付けられ、暫くバチバチと音を立てるもそのまま煙を上げる。

確実に壊れた。もう命令を変えることは出来ない。

「いいのか……？」

人間は指して気にもとめない。

「元々の命令はこの学校に存在する『ある物』を手に入れる為の作戦：我らの同胞である0能力者達に危害を加えない予定では無かったか」

「……知らないわよ」

自らをハートのK^{キング}と名乗った女は暗闇の人間の言葉を無視する。

「あんたは仮にもハートのQ^{クイーン}……私に従いなさい」

その声は恐怖で震えながらも怒りが見える。

暗闇の人間、基^{もと}、Qは何も言わず、監視カメラの画面に向き直った。ハートのK^{キング}は、そんな自らの部下の筈のQ^{クイーン}に殺意を込めた視線を投げると暗闇の部屋のドアを開けた。

「あのガキは殺す……。そしてあんたもこの作戦中に殺すわ」
そう言うと、化粧の崩れた顔のまま、不気味な笑みを向ける。
「偶然死んだら仕方ないもの……。あんたも、あのガキも!!」
その言葉を聞いてもQは微動だにしない。

だが、一言だけ言葉を漏らした。
「『アレ』を使うのか？」

「ええ！」

Kはそう言いながらゾツとする笑みを浮かべた。
「最強を使う！唯のガキじゃ一瞬で殺されるでしょうね!!」

最後に「あんたもね」と、憎憎しげに言うと、ドアを閉めた。
暗がりの中、Qはポツリと零す。

「唯のガキだったらな……」
その言葉に深い意味を込めて。

所々から血を流しながらも美奈はいつもの笑みを向けていた。

「な、何で？」

今井は困惑の表情で美奈を見つめた。

「あたしにも解んないけどさ、自分が何をしたかは解ってるよ」
そう言うと悲しそうな笑みを浮かべた。

赤い瞳から、元の黒い瞳に戻っているが、その目を辛そうに歪める。
「謝らないとね…今井にも、水音にも…」
その辛そうな声と、困ったように向ける笑みに、本当にマインドが

解けたのがわかった気がした。

「水音ちゃんは…痛ッ…！」

直ぐに飛ばされた水音のことを思い出した今井は慌てて立ち上がる
うとするも、アバラの痛みが体中に響いた。

（そうだ…俺、アバラが…）

それを見た美奈は、今井に近づくとしゃがみ込んだ。

（…？）

疑問に思う今井を無視して美奈は右手を今井の折れているアバラの
所を触った。

「！？、いつて！」

「アッハッハ！ジツとしてくれない？」

「おい、今の何処に笑う所があつたんだよ！」

今井の激怒の声に美奈は笑顔で対応する。

「あんたの男としての無さによ」

「…お前謝る気、無…^なおごお！？」

言い切る前に、美奈は思いつきり折れている部分を押した。

「よっし！折れてる部分を（むりやり）元の位置に戻したから暫
くはいけるはず！」

「ちょ…おまつ…」

痛みに悶える今井を無視して美奈は水音の所まで歩き出す。
倒れている水音をソツと起き上がらせて、水音の顔を見つめる。

小さく、小さく、しかし、力いっぱい悲しみを込めた声を出す。

「ごめんね…ごめんねエ…」

「・・・」

今井からは美奈の後姿から見えず、表情は見えないまでも、その声に先程までのお茶らけた様子は無いと思えた。

（俺にもあれぐらいしてくれてもいいんじゃない・・・）
等と思ったが口には出さないことにした。

美奈は突然、ツバ！と顔を挙げた。

水音を優しく、寝かせると直ぐに立ち上がった。

何事か理解出来ない今井の方に向いた表情は、笑顔では無く真剣な面持ち。

「今井！立てる！？」

「え？あ！ああ！痛みは引いたと思う！」

お前のせいだな、という言葉は伏せて置くことにした。

「水音を連れて逃げて！！早く！！」

わけもわからないままも、今井は言われた通りにすることにした。

美奈の慌てようが尋常では無かったからだ。

今井の行動を確認した美奈は壁に耳を付けた。

（振動がこつちに向かつてる…！幾つかの足音もする。何人かの人数がこつちに向かつてる…？操られてる時の記憶はハッキリしてる！状況は大体掴めてる！問題は、この状況で沢山の通路の中何で八

ツキリとココに向かつてる…！？）

美奈の考えは瞬間的に答えをだした。

（間違いない！向かつているのは、この状況を作り出した本人達！目的は、水音や今井と考えていい！）

「おい、一体何なんだ？」

眠っている水音を肩で持ち上げながら今井は困惑した表情を向けた。

ギン！と突然美奈の視線が陰しくなった。

「へいへい！今井！！美奈に手エ出したら殺すからね！！」

今井が水音に肩を貸している状態で、奇しくもベツタリとくっ付いた状態が気に入らなかったのか、美奈の声に殺意が沸いていた。

飛んできた美奈の膝が先程のアバラに減り込む。

メキヨツという小気味の良い音。

「ごほあ！？」

強烈な痛みが今井を襲うが、水音に肩を貸している状態で倒れるに倒れることが出来ない。

「お…ま…またアバラいったぞコレ」

泣きそうな声を出している今井に向かつて美奈は満面の笑みを向ける。

「アツハツハ！じゃあまた戻せばいいじゃん」

そう言つて当り前のようにアバラに手をやると思いつきり押した。

「ぼほあ！？」

今井等気にせず、よっし！と呟いていた。

「敵がこっちに向かつてる」

「え？いきなり？俺に対する何かは無いの？」

今井の突っ込みを無視して話を進める。

「多分3人以上はいると思う。」

「おい無視かコラ、今シリアスカネタかどっちだ」

「アツハツハ！黙って話し聞け。またアバラやるわよ」

笑顔だがその表情に今井は確かに殺意を感じた。

（大人しく聞くことにしよう・・・）

「ここはあたしが食い止めるから水音を連れて逃げて」

「...？」

今井には言葉の意味が解らなかった。

「何でだよ？敵が来てるなら一緒に来た方がいい！それに和也も心配だ！美奈ちゃんが来れば和也を助け出せる！」

美奈の実力は目の前で見ていた。彼女が居れば、今倒れているかもしれない和也を助け出せる。

それほどの実力が美奈にはあった。

「ごめん」

そう言うと、美奈は今井に背を向ける。

そこで今井は気づいた。

美奈の肩から流れる血が止まらないのだ。

つい、目を背けた。^{そむ}

逃げる体力すらすでに無いのだ。

「・・・この先にコンピュータの部屋があつたよね？」

背を向けながら了承の意を向ける美奈に、慌てて今井は短く「ああ」と、答えた。

「そこから外に連絡出来るかもしれない」

今はそこで、その言葉の意図が読めた。

この一方通行しかない廊下で、しかも最も助かる可能性。携帯も繋がらない、何故か窓も割れない、誰と出会うか解らない学校内をうろつくよりも遥かに可能性は在る。

しかも今井はその系統のエキスパートだ。可能性はツグ！と上がる。

（そうか！それだったら時間稼ぎをしてくれる美奈にだって助かる可能性もある！！）

「解った？」

そう言つて、満面の笑みで美奈は振り向いた。

「…死なないよな？」

そう聞かずにいられなかった、その表情がいつもと違った気がしたから。

「死ぬ気は無いよ！私は絶対に死なない！！」
そう言ってくれた。

「・・・行つて」

そう言つた美奈は視線を前に向け、再び背を見せた。

「解った」

今井も決意を決める。

自分の出来ることとおするしかないのだから。

水音を肩に担ぎ直すと、出来るだけ急ぐように早歩きで急いだ。

美奈は、今井達が見えなくなる所まで行くと、少しだけ後ろを向いた。

すでにいないのは解っていたが、少し、寂しく感じていた。

「アッハッハ・・・弱くなったもんだ」
そう悲しそうに零すと、パン！パン！と顔を弾いた。
手の振るえが止まる。

「あたしは死なない・・・あたしは死なない！！」
声を上げて自らを奮い立たせる。

そうでもしないと折れそうに、心はボロボロだった。

すでに大切な友を傷つけた時点で、美奈は打ちひしがれているのだ。

表情はしっかりと廊下の先を見る。

薄暗い廊下の中、数人の人数がハッキリと見える。

足元は自らの血で小さな水溜りを作っている。

「水音・・・昔からずっと一緒だった・・・」

今井には悪いが、水音のことが心配で仕方が無かった。

だからこそ、ずっと守ると、自分が、

それを傷つけてしまった。

感情は怒りへと変わる。

お前らが・・・

笑顔は崩れ、ギラつく視線は、こちらに向かう敵へ。

お前らが！！

始めてみせる怒りの表情は、殺意を込めて。

「この平穩を崩したお前らは・・・」

もう震え等存在しない。自らが死ぬことすら頭にはもう無い。
頭にあるのは直線的な、憤怒。

「潰す！」

その声と共に走り出した美奈の表情に、笑みは無い。
獲物を狩る獣のように目を光らせ、獣の上下の顎のように力強い拳
を握り締める。

デストロイヤー（破壊で示す者）は自らの意思で壊す。

大切な友の為に。

これ以上傷つけさせない大切な者の為に。

第23話 ハートのキング（後書き）

久々の更新です。

もう一つの話を更新していると何だか楽しくなってきたとい
い、アツチの方を優先してしまいます・・・

最早もう片方をこのペースで終わらしたほうが無難な気だしてきま
したよ。

アウトサイダーは私の予想じゃメツチャ！長くなりますが、更新を
出来るだけ早くしたいです、

無謀にもランキングなるものに挑戦してみました！面白ければ押し
てやってください！

それではまた次回でお会いしましょう！

第24話 覚醒の水音 最強の武器王女（前書き）

美奈は水音達の為に戦う。

水音を連れて逃げる今井は、あつてはならない存在に出会う。
最強が命を狙う。

そして、水音が変わる。

能力制御を無くした水音は、爆発的に目覚める。

覚醒。

第24話 覚醒の水音 最強の武器王女

ドオン！という音に今井は足を止めた。

激しい爆音がその後、何度か続いた。

今井の表情に不安が見える。

（美奈ちゃん・・・大丈夫・・・だろうか）

その音は確実に美奈が居る筈の後ろの廊下から聞こえた。

（今は歩くしかない・・・）

自分に言い聞かせて肩を貸している水音を引き摺る。

出来るだけ急いでいるのだが、人、一人分を運ぶのはどうしても遅くなる。

今も目を覚まさない水音が心配に思えた。

そして、和也が脳内を過ぎる。

下手をすれば死んでいる可能性だって決して少ないわけでは無い。

そう思うと、背筋に寒気が走った。

（・・・駄目だ！最悪の状況ばかり考えても！）

そう自分に言い聞かせるも、顔の不安は拭えない。

しかし、廊下の先にある表札が見えた。

（希望が・・・！）

見えた。

だが、そこで足を止める。

表札に書いてあったのは、情報探索室。

それは朝に放送で流れた近づくな、と言われた部屋だった。

少し考えた後、足を進める。

（・・・ドアが開いてる。）

妙だった。おかしい。

聞き覚えの無いその表札の名は、専門用の教室であって不断からドアが開いている可能性はあまりにも少ない。

ましてやこの非常時にこのドアが偶然開いていることは考え難い。

ドアに近づくと恐る恐るドアの中を覗き込む。

暗い部屋は薄暗く何も見えないが、声が聞こえる。

誰かが居るらしい。

（誰が・・・？）

この非常時に、何故、情報探索室に居るかは解らない。

「ツチ・・・、やっぱりデータの中には情報はないわねエ」

女の声、誰に言っているのかは解らないが、カタカタという聞き覚えの在るキーボードを押す音で何をしているかは解る。

そして、女が誰かは解らないまでも何者かは解る。

現在こんな所にいるのは、首謀者のみ。

つまり、敵。

（クソ！どうする！？ここ以外にパソコンが近い所は在るのか！？嫌・・・今はそれよりもここから逃げることを優先した方がいい！）慌て踵を返そうとした。

だが慌てすぎた。

肩を預けている水音が、踵を返した瞬間ふらついている足がドアに当たった。

「！！！！」

ガン！と言う音に寒気が走った。

「あらあ？」

女の声が部屋から聞こえる。

（気づかれた・・・！？）

必死で息を殺す。ばれていないことを祈るしかない。

今の状況で水音を担いで逃げれるとは思えない。

（頼む……！！ここまで来て……美奈ちゃんの思いが無駄になる……！！）
目を強く瞑り、祈る。

「……」

女の声の後、それ以上の声は聞こえない。

（気づいて無い……？）

そこでホッとした。

（今はここから離れることが優先……か）

水音を再び担ぎなおそうとした。

…瞬間、

「伏せて……！」

大声と共に気絶していた筈の水音が今井に体当たりをかました。
飛び付いた水音に反応出来ず、そのまま床を転がる。

「な！何だ……！」

と、今井の驚愕の声と同時に今井が先程までもたれていた壁が爆破した。

「……！」

ドオオン！という大きな音が響き渡る。

「あらあ……？よけられたわねエ？」

再び先程の女の声。

その先に目を向けると、長い髪の女性が立っていた。

グラマラスな体を持つ女性だが、顔の化粧が薄らと剥がれていて不気味な表情を帯びていた。

その女性は、学校内でも有名な美人教師であり、今井は何となく話

には聞いたことが在った。

だが、状況から察するに、学校の教師として見ることは出来ない。先程の爆発が、その女教師がした物ならば、今井達を狙った確実な敵。

だが、それと同じように水音に驚いていた。何故、解ったのか。

「水音ちゃん！？大丈夫なのか！？」

「誰かさんが足ぶつけたせいで起きたんだよ！！メチャクチャ足痛いよ！！」

そう言いながらも水音は今井を見ずに女教師を睨んでいた。

水音も教師が敵だということに気づいている。

つまり、この教師はスパイ、裏切り者。

背を見せて顔は見えないが、戦闘が専門でない今井としては頼もしい限りだ。

「う…それは悪かった…」

顔を合わせない水音の背中に向けて弱弱しく謝る。

「ねえあなた達？」

女教師は水音達に向けて笑みを向ける。

だが、目は笑っていない。

「一応聞くけど…この学校の宝って知ってる？」

女の声に水音が眉を寄せる。

「…宝？」

そんな水音の様子に、知らないことを察したのか、表情の笑みが消え去った。

「そう…一般生徒はやはり知らないみたいね、じゃあ、あんた達に用は無いわ」

そう言つて、暗がりの部屋に戻っていく。

（見逃してくれたのか…？）

そう、今井が思ったが、その思いは違つていた。

「自分たちから来るんですもの、殺されに…」

暗がりから女の声が聞こえた瞬間、

爆音が鳴り響いた。

ドオン！という銃声音と共に水音は飛び退いた。

飛びのいた水音と今井の間を何かが通り抜けていく。

暗がりから、女教師と入れ替わりに出てきたのは、

別の女教師。

右手に煙を上げる銃を持ち、綺麗な黒髪を持ち主。瞳は燃えるように赤く染まっていた。

その女教師は今井も水音も良く知っている人間だ。

「……きよ先生！？」

今井の担任であり、水音の所でも授業を担当しているその人は、マインドの証の赤い瞳を携え、その表情にいつもの笑っている笑顔は無く、ただただ、無表情が展開されていた。

「！？」

無表情のまま銃口が今井を向く。

つい、ペタンつと座りこんでいた。

「水の柱ア！！」

叫び声のワンテンポ後に引き金が引かれる。

今井の目の前に氷の壁が出来るのと同時に短い銃声音が響く。

バキーン！！という氷に突き刺さる鉛玉は今井の目の前で止った。

「・・・！」

水音の行動が遅ければ氷では無く、自分の頭に鉛玉が突き刺さっていたと思うとゾツとする。

「きよ先生…マジかよ…」

慕っている担任が目の前でガチリツという弾の装填の音と共に引き金に指を掛ける。

その動作を今井は呆然と見てのことしか出来なかった。

バチン！という音と共に教師の手から銃が弾き飛んだ。

横から何かが飛び出したのだ。

慌てて飛び込んできた先を見ると、弓を手に持つ水音が立っていた。

「ぼうつとしてないで！！」

水音の言葉に弾かれるように立ち上る。

水音は間髪入れずに弓を引く。

同時に創り出されるのは氷の矢。

弦を離すと同時に一直線に矢は教師へと走る。

女教師はそれを気になけず首を傾げるだけでその矢を簡単に避けた。

その間に今井は慌てて水音の方に走った。

水音はその後何度も矢を放ち、教師を足止めする。

今井が来ると同時に水音も今井に合わせて踵を返す。

走り出すと同時に水音の手から弓が薄い煙となって消える。

それを一瞬いぶかしそうに見るも、今井は直ぐに走る事に集中することにした。

走って向かっている所は一直線の廊下で有り、必然的に美奈の方に向かっている事になる。

「美奈は!?!」

走りながら水音は今井に大声を放つ。

一瞬、言葉を詰まらせた表情をするが、今井は直ぐに大声を返す。

「もうマインドは解けている!俺達の足止めをしてきている!」

「だから美奈は今戦ってるの!?!」

(…だから?)

まるで美奈が戦っているのを見たかのような言い方に今井は疑問に思った。

「このまま美奈を助けに行こう!!」

そう叫んだ美奈に直ぐ様に叫び返す。

「駄目だ!!」

その言葉に水音は眼を丸くした。

「どうして!?!」

「このまま、きよ先生を連れていけば美奈ちゃんは絶対に死ぬ!!」

「死・・・!?!」

その言葉に水音の表情が一気に青ざめた。

今の美奈は見た目よりかなり重症で、本来戦っていい状態程ではない。

「美奈は重症だ!あの状態で、きよ先生を連れていけば確実に!死ぬ!!」

今井はきよ先生の实力を知っているから今、操られているきよ先生を美奈の所まで連れていけば確実に殺されることが解るのだ。

「だが…」

一直線しか無い廊下はどうしても、必然的に向かう事になる

「じゃあ！コッチ！」

そう言つて廊下の間の部屋へ入る、

今井も釣られて部屋に飛び込むが、その後冷静になる。

「何でだよ！！部屋に入ったら！それこそきよ先生にやられるだろ！！！」

一つの教室に入ればそれこそ逃げ道は無い。

その部屋は今井は見覚えがない。

大きな学校のソレは知らない教室も多く存在する。

「コッチ！」

そう言つて水音は先に進む。

その進み方に迷い素振りは全く無い。

更に今井は困惑した。

（何でこんなハッキリと判断出来るんだ！？行き止まりになれば俺達は終わりだぞ！！）

廊下の奥の倉庫のような物に入る。

「水音ちゃん！もしかし隠れるつもりか！？それこそ無茶…」

そう言いきる前に、水音は倉庫の床に不自然にあつた金属で出来たとつてに手を掛けていた。

暫く使われていないのか、開けた瞬間、埃が待った。

その先にあつたのは暗がりの続く梯子の道。

「こつから下の階に行ける！！」

そう言つとサッサと梯子から降りようとしていた。

「!？」

(何で知ってるんだ!?)

情報人である今井ですら把握できない量の教室から、明らかに隠し道と思われる道を一直線に向かったのだ。

「水音ちゃん…知ってたの？」

そう聞くと、既に体の半分が見えない程に降りていた。慌てて今井も追う。

「うつん、」と今井に向けて短い否定の声を発する。

(オカシイ…!さっきから水音ちゃんの行動がオカシイ!)

最初に目覚めた時も、瞬間的に見えない筈の壁からの攻撃を察知し、その後にも操られた時の混乱で作ったと思っていた弓を作り、美奈の様子を見た様な事を言い。

知らない筈の道を当たり前のよう知っている。

「…の」

(え?)

今井は水音の声を逃していた、先ほどの否定の声から言葉は続いていたらしい。

「え?何て？」

水音は少し黙った後、続ける。

『解るの』

梯子を降りながら水音はポツポツと小さく話し出した。

「この学校の見取り図が頭の中に出来てて、誰が何処にいるのかまで解る…偶に神経が過敏になって人の行動が読めたりすることはあったんだけど…今はそんなじゃない。本気を出せば…人の心まで読める気がする」

（人の…心まで！？）

水音の髪は今もストレートのままだ。

つまり能力制御装置の髪留めを付けていない状態なのだ。

本来なら暴走する筈の莫大な力を、水音は操っているのだ。

今井にはそれしか、水音の突然の異常な感知能力を説明するのが思いつかなかった。

「そして・・・今なら誰にも負けないと思う」

あまり強気に出ることのない水音からそんな言葉が出るとは思わなかった。

梯子から降りると、小さな部屋であって教室では無い。

「教師達専用の休憩室か？」

薄暗く、胸糞が悪くなるほどの煙草の臭いに今井は眉を顰める。

あまり綺麗な部屋では無い。

ここは教員達の喫煙所の様だ。

学び舎である学校内ではこういった場所は存在する。

「今井君、あれ」

そう言つて水音が指さした先に、古びた机に置いてあるノート型のパソコンがあった。

今井は、取り合えずパソコンのスイッチを押す。

だが、ランプが点灯することは無かった。

「やっぱり、パソコンも駄目なんだ？」

そんな落胆した表情を見せる水音に今井は首を横に振る。

「嫌、接続の問題だと思う……ちよつと時間かかるけど機能させることは可能だ」

今井はその古臭いパソコンを隅々まで調べ始める。

だが、そんな今井を見て水音は不安な表情を見せる。

そんな水音を気にしつつ、今井は口を開く。

「水音ちゃん、今の水音ちゃんは多分、能力制御装置の髪飾りが無くなって『能力が暴走』している状態なんだよ」

今井はパソコンを弄りながら、自分の知っている全ての知識で水音の状態を教えようとした。

「でも……？私、能力が使えるよ？」

そう、水音は能力が暴走しているにも関わらず、力のコントロールが出来ているだけで無くいつも以上の力を身に付けている。

それが今井には解らなかった。目が真っ赤になった瞬間、今井には無く、美奈に襲い掛かっていた時点で今井には訳が解らないでいた。

「それが……解らない、突然な莫大な力は絶対に『能力の暴走』の筈なんだが……水音ちゃんは解る事は無いのか？」

今井の言葉に水音は困惑の表情を見せる。

「私も解らない、あんな弓を出したのは初めてだし……ここまでハッキリと『解る』ことも無かったから……ただ」
そこで一回言葉を嚥む。

「私の目は元々『赤い』から、関係があるのかな？」

「！？」

その言葉に今井は驚愕の表情で振り向いた。
今井は情報人という仕事をしている分、知らないことは少ない。
だが、それは初めて聞いた。

「初耳だ…」

「そうだっけ？」

能天気にも首を傾げる水音の瞳は淡い黒色。

（関係あるのか・・・？嫌、目の色でそこまで意味があるなんて思
い難いな…）

困惑の表情を見せるも今井は直ぐにパソコンに向き直る。

「・・・」

「・・・」

少しの間が空いた。

先に口を開いたのは水音。

「今井君、どう？」

その声は何故か鋭い。

そんな鋭い声に違和感を持ちながらも答える。

「ああ、大丈夫だ、パソコンは行ける！後は壊れている部分を修復
すれば外と連絡が取れる！！」

「それ…どれくらいかかる・・・？」

何故か声が暗い。

「30分…いや、20分あれば何とか」

「…解った」

そう言うと一緒に廊下に出るドアに歩きだした。

「…？」

「こちらにグループの一人が向かってる」

水音は背を向けながらそう零す。

「！？」

今井には解らないが、水音には確かに見えるのだろう。

「大丈夫…私が守る」

水音にしては強気に出た言葉が零れる。

だが、それでも今井は心配だった。

「逃げた方がいいんじゃないか…？」

今井の弱気な発言に、水音は振り返ると小さく微笑んだ。

ドアを開けると共に暗い部屋に光が入る。

「大丈夫」

ハッキリとした言葉、何故そこまで言い切れるのか今井には解らない。

「言ったでしょ？今の私なら負ける気がしない…！」

「!？」

そう言った瞬間、水音の淡い黒い瞳が一瞬だけ、赤く染まった。

「水音ちゃ…!!」

呼びとめようとするも、水音は既に廊下に出ると同時にドアを閉めた。

確信に満ちた、赤い瞳は、狂喜を含む。

ドアをブチ破ると同時に、

きよ先生は一つの教室に入った。

赤い瞳で、キョロキョロと辺りを見渡す。

無表情のまま、教室の奥へ行くと、一直線に水音達が入った床の所まで来ると躊躇いなく床の金具を引っ張った。

空いた先に、梯子が続く空洞。

きよ先生は表情を変えること無く、ゆっくりと梯子を降り始めた。

過去に請負人、Sランクの称号を手にした武器王女は、ウェポンプリンセス大切な生徒の筈の水音達を殺すべく、梯子を降りる。
その瞳に赤い凶器の瞳がギラつく。

第24話 覚醒の水音 最強の武器王女（後書き）

アウトサイダー更新んんん！！

やたーい！更新出来たーい！

やはり、アウトサイダーは文字多めの方がいいのかな。

いえ、もう一つの作品は文字少なめですが、更新速度を出来るだけ早く！

こっちは丁寧に、文字多めに、だから更新遅く。

みたいな感じですが。まずいです、アウトサイダーが終わる気がしない！！

後、5年にかかるんじゃない？とちょっとびびってます

いえ、どうでもいいんですが・・・

それでは、また次回でお会いしましょう！

失礼しました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6264a/>

アウトサイダー（an outsider）

2010年10月9日18時21分発行